日本語用論学会

(The Pragmatics Society of Japan)

第5回(2002年度)大会

PROGRAMS & ABSTRACTS

日時: ２００２年12月７日(土)
会場: 関西外国語大学（中宮キャンパス）

日本語用論学会事務局:
〒573-1001
大阪府枚方市中宮東之町16番1号
関西外国語大学外国語学部
澤田治美　研究室内
Tel: 072-805-2801
Fax: 072-805-2890

日本語用論学会

(The Pragmatics Society of Japan)

第5回(2002年度)大会

PROGRAMS & ABSTRACTS

日時: ２００２年12月７日(土)
会場: 関西外国語大学（中宮キャンパス）

日本語用論学会事務局:
〒573-1001
大阪府枚方市中宮東之町16番1号
関西外国語大学外国語学部
澤田治美　研究室内
Tel: 072-805-2801
Fax: 072-805-2890

プログラム（アブストラクト目次）

大会受付 9:00~［教室棟１号館１階入り口］

ワークショップ （10:00~11:40）A室、B室、C室、D室

A室［教室棟1号館1階1106教室］　テーマ「構文研究：語用論からの提言」

司会　杉本 孝司（大阪外国語大学）

1.「wear＋色彩目的語＋to＋出来事名詞」の解釈　吉田 幸治（近畿大学）・・・・・・・・・・・・・・　1
2. 条件節と過去時制の共起関係　新井 永修（仁愛高等学校）・・・・・・・・・・・・　5
3. 定性表現の談話機能―存在文の定性制限に着目して―　大川 裕也（大阪大学大学院）・・・・・・・・・・　9
4. テモ文とその理解　堀内 夕子（関西外国語大学大学院）・・・・・・　13

B室[教室棟１号館1階1104教室]　テーマ「言語使用に見られる意味分析と解釈原理」

司会　東森 勲（龍谷大学）

1. 接続詞asの非従属化現象について　田中 美和子（関西外国語大学大学院）・・・・　17
2. be possible that 節に見られる法助動詞の主観性と客観性―視点とモダリティーを中心に―　岡本 芳和（大阪産業大学非常勤講師）・・・・　21
3. 関連性理論による人称代名詞の一考察　松崎由貴　（学習院大学大学院）・・・・・・・　25
4. 日本語の引用―時間ダイクシスを中心に―　高橋 真弓（関西外国語大学大学院）・・・・・・　29

C室[教室棟１号館1階1103教室]　テーマ「談話における言語の意味と機能をめぐって」

司会　林 宅男（桃山学院大学）

1. William Faulkner の短編小説における understatement の効果―関連性理論を用いた文体論の試み　松岡 信哉（龍谷大学）・・・・・・・・・・・・・・　33
2. タイ人の日本語学習者による終助詞「けど」の使用について　夫 明美（東北大学助手）／セナ・クワンチラー（東北大学大学院）・・・・　37
3. 談話標識―読解過程の観点から―　小谷 克則（関西外国語大学大学院／（独立行政法人通信総合研究所けいはんな情報通信融合研究センター特別研究員）・・・・　41
4. Natural Semantic Metalanguage Theory and Some Italian Speech Act Verbs　Brigid Maher (Australian National University)・・・・・・　45

D室[教室棟１号館1階1102教室]　テーマ「コミュニケーションにおける効果的な言語使用の解明をめざして」

司会　林 礼子（甲南女子大学）

1. 新聞コーパスにおける判断文に対する根拠の提示について　竹内 和広（独立行政法人通信総合研究所けいはんな情報通信融合研究センター専攻研究員）・・　49
2. Linguistic Marketing の研究―ファッション販売の対話分析―　坂本 和子（横浜国立大学大学院／NEC）・・　53
3. アメリカ大統領就任演説のレトリック―文脈想定と文脈効果の観点から―　中村 秩祥子（龍谷大学大学院）・・・・・・・・・　57
4. 日本人の意見表明について―新聞のインタビュー記事から―　井波 真弓（拓殖大学非常勤講師）・・・・・・・　61

総会 (12:30～12:50) [教室棟１号館1階1105教室]　司会 田中廣明(関西外国語大学)

1. 会長挨拶 小泉　保　(関西外国語大学)
2. 事務局長報告 澤田　治美 (関西外国語大学)
3. 編集委員会報告 高原　脩　(関西外国語大学)
4. 会計報告 田中　廣明 (関西外国語大学)
5. その他

研究発表 (13:00～15:30) A室、B室、C室、D室

(1. 13:00～13: 35　2. 13:35～14: 10　3. 14: 20～14:55　4. 14: 55～15:30)

A室 [教室棟１号館1階1106教室]　司会　田中 廣明 (関西外国語大学)

1. if節中のshouldとmust について　長友 俊一郎 (関西外国語大学大学院) ・・・・・ 65
2. Missing complement に関する一考察　井上 徹 (常盤大学)・・・・・・・・・・・・・・・・ 72

(10分休憩)

司会　加藤 克美　(関西外国語大学)

3. If not構文に関する一考察―多義性と文脈的既知性の関係をめぐって―　澤田 治 (早稲田大学大学院)・・・・・・・・・・ 80
4. 'I dont believe/think' に後続する補文標識 that の顕現と省略について　森 貞 (福井工業高等専門学校) ・・・・・・・・ 88

B室[教室棟１号館1階1104教室]　司会　山崎 英一 (四天王寺国際仏教大学)

1. 同時通訳における動詞をめぐる語順差―関連性の視点からの一考察―　南津 佳広 (大阪府立大学大学院)・・・・・・・ 96
2. 直喩における類似性の創造による彩　黒川 尚彦 (大阪大学大学院) ・・・・・・・・・ 104

(10分休憩)

司会　加藤 雅啓　(上越教育大学)

3. Tautology の考察―ad hoc 概念を使って　西川 眞由美 (奈良女子大学大学院) ・・・・・ 112
4. 「やはり」/「やっぱり」と関連性　武内 道子 (神奈川大学) ・・・・・・・・・・・ 120

C室[教室棟１号館1階1103教室]　司会　伊藤 克敏 (神奈川大学)

1. 一貫性と談話の適確性　海寶 康臣 (立命館大学研究生) ・・・・・・・・ 125
2. 描写構文についての一考察　松本 知子 (同志社女子大学非常勤講師)・・・ 133

(10分休憩)

司会　菅山 謙正 (神戸市外国語大学)

3. アイロニーの暗黙的提示理論とその優位性について　内海 彰 (電気通信大学) ・・・・・・・・・・・・ 141
4. 尺度の推意をめぐって　山本英一 (関西大学) ・・・・・・・・・・・・・・ 149

D室[教室棟１号館1階1102教室]　司会　井上 逸兵　（慶應義塾大学）
1.　コミュニケーションギャップの実証的研究―謙遜表現を中心として―　寺田 千恵（神戸大学大学院）・・・・・・・・・・・・ 155
2.　痛感覚表現の日英比較：類似と差異　堀 素子（関西外国語大学）・・・・・・・・・・・・ 163
（10分休憩）
司会　余 維（関西外国語大学）
3.　使役受身文の一考察　趙 順文（台湾大学日本語文学系教授）・・・・・ 171
4.　日本語の主題文について―その形成原理と構造を中心に―　陳 訪澤（広東外語外貿大学教授/神戸女学院大学研究員）・・・・・・・・・・・・・・・ 179

シンポジウム　(15:45～18:10)　[教室棟１号館1階1105教室]

<< 語用論からの提言>>「語用論から何が提言できるか」

司会　高原　脩（関西外国語大学）・・・・・・ 187
1.　意味論と認知言語学をめぐって―ジャッケンドフの概念意味論とラネカーの認知の伝達に関して―　講師　小泉　保（関西外国語大学）・・・・・・・・ 189
2.　GCI(Generalized Conversational Implicature)をめぐって―新グライス学派と関連性理論の比較―　講師　児玉　徳美（立命館大学）・・・・・・・・・ 193
3.　モダリティーをめぐって―多義性か単義性か―　講師　澤田　治美（関西外国語大学）・・・・・ 201
コメンテーター　東森 勲（龍谷大学）

閉会の辞　小泉　保（関西外国語大学）

懇親会（18:30～）（会費　3,000円）（会場：厚生北館2階学生食堂）

ワークショップ

「wear+色彩目的語+to+出来事名詞」の解釈

吉田幸治
近畿大学
k_yoshida@msa.kindai.ac.jp

1. 序

(1) She wore white to her wedding.

(2) a. 白い服を着て結婚式に行った。(goal)
b. 結婚式のために白い服を着て行った。(purpose)
c. 結婚式があったので白い服を着て行った。(reason)

Color Term Object Construction (CTOC)

本発表の目的： 使用される色彩語彙と後続する出来事名詞との因果関係の捉え方が反映された語用論的現象であることを示すと同時にどのような認識作用が働いているのかを考察する。

2. 事実観察[1]

- 色彩を表す語彙なら全て目的語として現れることが可能。

(3) a. The Egyptians wore white to their funerals.
b. Immigrants wore black to a local conference.
c. You wore blue to the prom.
d. I wore yellow to the recital.
e. I wore pink to my daughter-in-law's bridal shower.
f. Lucy wore red to her and Dr. Alan Quartermaine's wedding ceremony.
g. Tony even wore purple to the "Purple Rain Tour" show he went to.

- (1)の解釈に関して 15 名（アメリカ人 10 名、イギリス人 3 名、オーストラリア人 2 名）のインフォーマント調査を行った結果、goal と答えたものが 3 名、purpose と答えたものが 4 名、reason と答えたものが 3 名、文脈次第でいずれも可能とするものが 5 名であった。

- 色彩語彙の後に名詞句が続くものよりも to 不定詞が続く場合が多く、不定詞として現れる動詞には illustrate, signify, show などが用いられる[2]。

---

[1] 以下出典を明記していない例文はインターネットの検索エンジン *Google* を利用して採集したものである。
[2] 特に Levine (1993)で Verbs of Communication と分類されている動詞の頻度が高い。

2. 成立背景

英語の基本統語枠

(4) NP V XP YP

(5) a. John was kicked by Mary.
b. Your name is familiar to me.
c. This book is easy to read.

(6) a. John gave Mary a book.
b. Fred worked himself to death.
c. Bill sprayed paint on the wall.
d. Bob belched his way out of the restaurant.

構文文法の主張

A. construction は特定の意味と形式から成るもので、言語の基本単位をなす。
B. 核心文法に含まれると考えられる中心的な construction だけではなく、周辺的なものも含めてそれらを考慮し特徴づける。
C. lexicon も syntax も形式と意味が対になった data structure であり、両者の間に厳密な意味での区別は存在しない。
D. construction が適切に使用される条件を導き出すためには意味・語用論的要因がもたらす微妙な影響も考慮しなくてはならない。
E. 意味には話者の construal が重要となる。

(7) a. I can't believe she wore white to her wedding!
b. Some students wore white to acknowledge Shepard's death.
c. She wore white to signify her feelings after her husband's death.
d. The ancient Greeks wore white to bed to ensure pleasant dreams.
e. The white wedding dress as we recognize it today is actually a tradition started by Queen Victoria who wore white to her own wedding.

(*BNC Sampler*)

(8) a. Widows always wore black to show they were widowed.
b. Members wore black to represent the number of people who die of tobacco-related causes each day.
c. Most of those in attendance wore black to mark their mourning period.
d. Many of the demonstrators wore black to symbolize the fact that Indian Independence Day is a black day for the Sikhs.
e. I wore black to pay my respect.

3. 解釈様式

Principle of Compositionality

(9) $\alpha + \beta = (\alpha + \beta)$

Gestalt Factors

Semantic Conflation

(10) The bottle floated on the river.

(11) a. She wore [white to her wedding].
b. She [wore white to her wedding].
c. She [wore white][to her wedding].

XP to YP

(12) a. the key to the door
b. the lid to the jar

(13) They sang a song to the guitar.

Cf. and

Encyclopedic Knowledge

Frame, Schema

Cause and Effect

Prototypical Event

NP+V+Color Term+to 不定詞→NP+V+Color Term+to+出来事名詞

4. 結語

Adjacency
Linearity
Directionality
"Say something" requirement
Inference
Core vs. Periphery

主要参考文献

Croft, William A. 1991. *Syntactic Categories and Grammatical Relations*. University of Chicago Press.

Fillmore, Charles J., Paul Kay, and Mary Catherine O'Connor. 1988. "Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of *Let Alone*," *Language* 64. 501-538.

Goldberg, Adele E. 1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.

Jackendoff, Ray. 1990. *Semantic Structures*. MIT Press.

影山太郎(編). 2001.『日英対照　動詞の意味と構文』.大修館書店.

Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, vol.1: Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.

Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar, vol.2: Descriptive Application*. Stanford University Press.

Levine, Beth. 1993. *English Verb Classes and Alternations: A Preliminary Investigation*. University of Chicago Press.

Levinson, Stephen. 2000. *Presumptive Meanings*. MIT Press.

Sperber, Dan and Deirdre Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Second Edition. Blackwell.

Talmy, Leonard 1985. "Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms," In *Language Typology and Syntactic Description* (vol. 3): *Grammatical Categories and the Lexicon*, edited by Timothy Shopen.57-149. Cambridge University Press.

Yoneyama, Mitsuaki. 1986. "Motion Verbs in Conceptual Semantics," *Bulletin of Faculty of Humanities, Seikei University* 22. 1-15.

条件節と過去時制との共起関係
ー 事実性の程度との関連ー

新井永修
仁愛女子高等高校・福井県

1.　はじめに

過去時制は聞き手を過去の世界に引きずり込む。条件節に過去時制が入り込むと、話し手の想念と聞き手の理解はうまくなされるのだろうか。単なる条件であろうと、仮定法過去の仮定であろうと、話し手は仮想の世界を言葉で想定するのであるから、複雑になる。聞き手はいろんな手段を使い、話し手の仮想の世界を認知し、共有しなければならない。

小泉（1990）は以下のように述べている。

（1）しかし、こうした時制分析は、あまりにも、哲学的、論理的手法に傾いているように思える。言語宇宙における時間の把握は、もっと主観的で心理的である。話し手にとって、発話の現在時の世界だけが現実であり、過去は記憶の中にのみ納められていて、必要に応じて思い出すものであり、未来はただ予測するしかない。

・・・

また、英語の仮定法が、現在の事実［＋現実］に反する仮定には過去形［ー現実］、過去の事実［＋現実］とは逆を想定をするときには時制を一段先送りにして過去完了［ー現実］とし、過去をさらに過去に移す操作も理解できる。

「仮定法過去は、意味的には、主として現在の事実に反する仮定、あるいは現在および未来の事柄に対する仮定を表す。」と多くの文法書は説明し、我々は「事実に反する」と説明することで片付けてしまう。小泉が記述する［＋現実］vs［ー現実］という２項対立の明確な、否、単純な物差しで良いのだろうか。'real' vs 'unreal' の対立として多くは記述されているが、小泉は現実的（real）世界と非現実的（irreal）世界の対比の存在を指摘し、知覚する話し手にとって、自己の発話が行われる環境以外は、非現実的世界であるとしている。

すなわち、過去形はすべて、非現実的世界、仮想的世界であり、話し手にとっても、ましてや、聞き手にとっても、事実は明確には存在しないのである。それゆえに、過去時制を含む条件節は話し手と聞き手との事実性の探り合いが飛び交い、事実性の程度を互いに計るのである。

安井(1982)は次のように述べている。

（2）法（Mood）というのは、文の内容にたいし、話者がとる心的態度、たとえば、それが確実であるとか、不可能ではないかとか、疑わしい等々のような事柄を示す動詞の語形変化をいう。・・・仮定法はいうまでもなく、ある事柄を述べるのに、事実としてではなく、想像・仮定・願望など、話者の心のうちで考えられるものとして述べる方法である。

2.　発表の始点

本発表のきっかけは、筆者が仮定法を高校生に、「〈 'if'＋過去時制 〉は仮定法過去と断

定できる。なぜならば、事実として認識している過去を条件化するのは矛盾しているから。」と説明してきているにもかかわらず、（３）の明治学院大学の英語入試問題に遭遇したからである。

（３）When I told my family that I was thinking of taking a cooking job, the roars of laughter were rather discouraging. No one believed that I could cook at all, as I had never had a chance to practice at home. ・・・

<u>If the family weren't going to be helpful I would look for a job all by myself and not tell them about it till I'd gotten one.</u>

（４） 私がコックになろうと思っていると家族に言ったとき、どっと笑われたのでかなりがっかりした。私にはそれまで家で料理をする機会がなかったので、私に料理ができるなどと誰も少しも信じなっかた。

もし家族が手助けをしてくれないのなら、私は一人で職探しをして、職を得るまでは誰にも話さないでおこうと思った。

（５）Since the family were not going to be helpful I would look for a job all by myself and not tell them about it till I'd gotten one.

家族は全く協力的ではないのは明白である。（３）の下線部は（５）のように表現されるべきであろう。しかし、'if' を使った主人公の心の内を正確に知る由もない。この点において重要なのは、話し手と聞き手の「事実性の度合い」の認識ではないだろうか。すなわち、'since' は事実性を高めることになるが、'if' を使用すれば、事実性が宙に浮くことになる。この曖昧な点に 'if' の有用性があるのではないだろうか。

次の例文を検討しよう。

（６）If he knew her address, he would write to her.

（７）If he knew her address, he wrote to her.

（８）Since he knew her address, he wrote to her.

（６）は学校文法で教えるところの仮定法過去であり、条件節には過去時制の 'knew' が存在し、帰結節には仮定法過去特有の助動詞 'would' がある。（７）にはその 'would' が不在である。両者にはどのような違いがあるのか。（７）の帰結節を事実として認識していたならば、彼は彼女の住所を知っていたことになり、（８）に書き換えられなければならない。（７）の 'if' の使用が問題になる。

Palmer(1974:153)は（９）(10) においては、語用論的説明が必要であり、それぞれ、(11) (12) のように述べている。

（９）If John comes, Mary leaves.

If it rained, I went by car.

(10) If John came, Mary left.

If John comes tomorrow, Mary left yesterday.

(10) ' John came. Mary left.

(11) *If* seems to have the sense of 'whenever' in (9).

This interpretation is possible, of course, only because the simple forms of the verbs are treated as habitual; the 'whenever' sense is not, then, strictly a feature of 'if,' but of the verb.

These can be seen, however, as real conditionals with a causal implication, and, if so, provide examples of real conditionals in the past. But they are restricted to habitual actions, and, provided there is no modal in the apodosis, distinct from unreal future conditionals.

(12) There is no causal connection in (10).

Indeed, a causal connection is impossible in the second example, because the events referred to in the protasis are subsequent to those referred to in the apodosis. In both cases the interpretation is in terms of speaker's inference. He infers that the one event took place because of the evidence of the other. But although there can be no causal connection between the events, the two propositions are conditionally linked, the truth of one implying the truth of the other.

心は過去の事実性を意識している。しかし、これを正確に意識しているのではなく、曖昧に、すなはち、心の中で、その度合いを測っているのである。その度合いによって表現方法が決定する。心の有り体である。気まぐれである。聞き手は理解する。接続詞 'if' の本来の形式機能が、語用論的なコンテキストの中では、文法的機能と意味的機能を、まぜこぜにし、語用論的力 "COGNITIVE POWER"でにじみ出させるのであろう。(10) を (10)' に言い換えると、因果関係が消滅していまう。'John came.' と 'Mary left.' を何らかの手管を使い認識的に繋がせている。当然、話し手にとっての 'John' と'Mary' は聞き手にとっての二人と語用論的背景を共有しているはずであり、恋人同士ではあるが、現在はけんか中であるとか、共通の言語認知の世界を共有している。

3　英和辞典より

興味の対象である条件節と帰結節の両者に単純過去形が存在している例は、残念ながら、高校教科書には一つもない。一般的にも見かけないようである。しかし、英和辞書にはほとんどと言っていいぐらい引用されている。英和辞典『*Active*』では、因果関係の項目を設け、「する時はいつも・すると」の意味を与え、「通例 if 節には直説法動詞を用いる。帰結節には will, would などを用いない。」と解説をしている。

英和辞典からの例文 (13)－(17) と澤田 (2000) からの例文 (18) (19) も「事実性」の観点から検討してみたい。

(13) If it was raining, why didn't you take a taxi?

雨が降っていたのならどうしてタクシーに乗らなかったのか。

(14) If that was John, why didn't he say hello?

もしあれがジョンらば、なぜ彼はあいさつしなかったんだろう。

(15) If you knew he needed the book, why didn't you lend it to him?

彼がその本が必要なことを知っていたのなら、貸してやっていたらよかっただろう。

(16) If he was there, Bill probably saw the accident.

もしそこにビルがいたのら多分事故を見ただろう。

(17) If I got too lonely, I called her up.

寂しさがつのるとおつも彼女に電話をした。

(18) If you went to the party, was John there?

もしパーティにでたのなら、ジョンはいましたか。

(19) If you went to the party, did you see John?

パーティにでたというんだったら、ジョンに会いましたか。

いずれも仮定法過去の形式は整っていない。しかし、訳例から判断するならば紛れもなく仮定法過去完了的意味に思われるのではないか。

4 展望

高校英語教育においては、Kiparsky が主張した「事実性」 'factivity' は文法性を決定づける 重要な位置を占めている。本発表で述べる条件節の中の過去時制から推意される事実性の程度 'degree of reality' も話し手の心の中、心的態度を知る上で不可欠なものである。さらには、話し手と聞き手との共通言語領域において相互理解のための "COGNITIVE FACTOR" も必要である。

IF の宇宙には興味ある現象が多くあるように思える。ほんの一部だけではあるが、取り出して発表したい。

参考文献

安藤貞雄. 1983. 『英語教師の文法研究』東京：大修館書店.

荒木一雄他. 1977. 『現代の英文法 助動詞』東京：研究社.

Kiparsky, P. and C. Kiparsky. 1970. "Fact." In Bierwisch & Heidolph (eds.). 1970. *Progress in Linguistics.* The Hague: Mouton.

小泉 保. 1990. 『言外の言語学ー日本語語用論ー』東京：三省堂.

――――編. 2001. 『入門 語用論研究ー理論と応用ー』東京：研究社.

中島平三編. 2001. 『最新英語構文事典』東京： 大修館書店.

Palmer, F. R. 1974. *The English Verb.* London: Longman.

澤田治美訳. 1992. 『英語法助動詞の意味論』東京：研究社.

――――訳. 2000. 『認知意味論の展開ー語源学から語用論までー』東京：研究社.

――――. 2002. 「時制と仮定法は別物ー仮定的条件文を中心としてー」『英語教育』(9月号) 24-27. 東京：大修館.

安井稔. 1982. 『英文法総覧』東京：開拓社.

英和辞典 *Random House.* 1973. 東京：小学館.

The New Global. 1983. 東京：三省堂.

The Vista.. 1997. 東京：三省堂.

Active. 1999. 東京：大修館.

高校英語教科書

New Horizon English Course I・II. 1999. 東京：東京書籍.

定性表現の談話機能－存在文の定性制限に着目して－

大　川　裕　也
essay88@let.osaka-u.ac.jp
大阪大学大学院

0．はじめに

存在文(*there* 構文)中の NP は、不定名詞句に限られる(定性制限)と一般には言われている。しかし、存在文中の NP として、定性表現(定名詞句と固有名詞)が生じることもある。本発表では、存在文やそれに類似する構文の談話機能を明示し、存在文中の定性表現を「新情報／旧情報」という観点から再検討する。

1．定性制限（Milsark 1974; Belletti 1988）

(1) a. There is a man in the room. (Milsark 1974: 166)
b. *There is the man in the room. (*ibid.*: 208)
c. There arose a storm here. (Belletti 1988: 4)
d. *There arose the storm here. (*ibid.*)

2．「は」と「が」の談話機能（Hinds 1986; 野田 1996）

－主格名詞が旧情報[*1] ⇒「は」(topic marker)
－主格名詞が新情報[*2] ⇒「が」(subject marker)

(2) a. その疑いは、男がサラダを手につけ始めた時からすでに生じていた。 (野田 1996: 159)
b. むかし、あるところに話売りがいた。 (*ibid.*: 160)

3．不定限定詞[*3]と「が」

英語の存在文中の NP は、日本語では「が」を伴って訳出される。

(1') a. 部屋に一人の男性がいる。
c. 嵐がここを襲った。

---

*1 聞き手にとって、既によく知られているか、予測可能な情報のこと。
*2 聞き手にとって未知の、予測できない情報のこと。
*3 不定冠詞や、不定の数を示す数量詞(all, few, many, etc.)のこと。

－「が」は新情報を表すので、(1a)と(1c)の *there+V* はその後の NP が新情報であることを表す談話機能を持つといえる。
－存在文中の NP は、*a/many/ φ*[*4]*+NP* などのような形で生起するので、不定限定詞も直後の NP が新情報であることを表す談話機能を持つといえる。

4．倒置文 *Here comes ～./There goes ～*[*5]*.*と定性制限

(3) a. Here comes our teacher.
b. There goes the train.

(3)では、*our* や *the* のような定限定詞[*6] が生起していることから、定性制限が課せられず、NP は旧情報として提示されているように思われる。しかし、実際は新情報とみなされる[*7]。さらに、日本語でも「先生が来るぞ」、「電車が行ってしまう」のように、NP は新情報を表す「が」を伴って訳出される。

◎**問題**：定限定詞も新情報を提示することができるのか？

5．存在文と倒置文の談話機能

◎**提案**：－定限定詞に続く NP が新情報であると解釈されるため、存在文と倒置文は新情報を提示する談話機能を持つ。
－存在文と倒置文は、文中の NP が不定名詞句であろうと、定名詞句であろうと、NP が新情報であることを示す marker である。

5．1．倒置文

(4) Here comes the bus.

(4)によって、「(両者の目前には存在していなかった) バスが来た」という情報が伝達され、聞き手に *the bus* という定名詞句が初めて提示される。よって、 *the bus* は新情報である。しかし、新情報を提示するのであれば、*the bus* ではなく、*a bus* とするのが適切だと思われる。定名詞句を用いて新情報を伝達する理由は、(4)の *the* は言語外照応的で、聞き手は *the bus* が(4)で伝達された「(目前に現れた) バス」のことであると判断できるからである。
⇒ *Here comes* という marker によって、 *the bus* は新情報となる。

---

*4 不特定の不可算名詞、複数名詞には冠詞を必要としない。
*5 NP が代名詞の場合、倒置は起こらない(e.g., *Here comes he.)が、以降、*Here comes ～./There goes ～.* を倒置文と称する。
*6 指示対象を限定する機能を持つ限定詞のこと。定冠詞、所有代名詞、指示代名詞などが含まれる。
*7 インフォーマント・チェックによる。

5．2．存在文

(5) Nobody around here is worth talking to... well, there is John the salesman. (Belletti 1988: 15)

(6) The most striking thing about the meaning of a sentence like [5] is the feeling they have of naming parts of a list. The NP *John* seems to be introduced as an item of a larger list of entities, even if one does not go on naming the rest of them. (Milsark, 1974: 209)

(5)は固有名詞が存在文の NP として現れた文で、リスト文（Milsark 1974; Belletti 1988）と解釈される。(6)に記されている通り、リスト文中の NP は不定名詞句と同様に「リストの中の任意のもの」として扱われるが、実際は定性表現として解釈される[*8]。

リスト文中の NP が定性表現として解釈され、かつ新情報として提示されるには、(4)の倒置文と同様の過程を辿ることになる。つまり、(5)の *John* は新情報として提示されるが、固有名詞であるため、指示対象が明確化される。

⇒ *there is* という marker によって、*John* は新情報となる。

6．新情報

6．1．不定名詞句による新情報

不定名詞句（NP の指示対象が不特定のもの）が新情報として現れるため、NP の後に付加的な情報が加えられる。

(7) There was a certain young man named Yu who was fond of boxing... (Quirk 1986: 30)

6．2．定性表現による新情報

定性表現（NP の指示対象が特定されているもの）が、何らかの形で新情報として提示されるため、NP の後に付加的な情報が加えられることはない。

(8) There goes the bell.

---

*8 インフォーマント・チェックによる。

7．結語

これまで旧情報とみなされる傾向があった定性表現は、*there+V* や *Here comes*、*There goes* のような新情報を提示する機能を持った marker により、新情報と解釈されることができる。つまり、不定名詞句も定性表現も新情報として提示され得ることになる。しかし、不定名詞句には付加的な情報が加えられ、定性表現には付加的な情報が加えられない。その点では、新情報となり得る不定名詞句と定性表現は区別される。

References

荒木一雄(編) 1999. 『英語学用語辞典』東京：三省堂.

荒木一雄・安井稔(編) 1992. 『現代英文法辞典』東京：三省堂.

Belletti, A. 1988. "The Case of Unaccusatives." *Linguistic Inquiry* 19, 1-34.

Hinds, J. 1987. "Reader Versus Writer Responsibility: A New Typology." In U. Connor and R. B. Kaplan eds. *Writing across Languages: Analysis of L2 Text*, 141-152. Reading, MA: Addison-Wesley Publishing Company.

三上章 1963. 『日本語の論理』東京：くろしお出版.

Milsark, G. L. 1974. *Existential Sentences in English.* Ph. D. dissertation, MIT: Garland.

中島平三(編) 2001. 『最新　英語構文事典』東京：大修館書店.

野田尚史 1996. 『「は」と「が」』 仁田義雄・益岡隆志・田窪行則(編) 新日本語文法選書１ 東京：くろしお出版.

Quirk , R. 1986. *Words at Work: Lectures on Textual Structure*. London: Longman.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language.* London: Longman.

Schachter, J. and W. Rutherford 1983. "Discourse Function and Language Transfer." In B. W. Robinett and J. Schachter eds. *Second Language Learning: Contrastive Analysis, Error Analysis, and Related Aspects*, 303-315. An Arbor, MI: The University of Michigan Press.

テモ文とその理解

堀内　夕子
関西外語大学大学院

0.　はじめに

1.　先行研究（坂原 1988）

英語の場合：　'if p, q' は条件文にも譲歩文にも使われる。'even if p, q' は譲歩文の解釈しかない。
日本語の場合：「 p ならば q 」は条件文の解釈しかない。
「 p でも q 」は条件文･譲歩文あいまいになる可能性がある。

条件文として解釈できる場合の特徴
（前提として、これらのパターンは、等置構造におかれた条件文が連続し、第２文以降の「でも」を「ならば」に変えても意味が変わらないこと）。

パターン１　「 p_1ならば q_0。p_2でも q_0。」のように、同一の後件を持つ条件文が連続する場合。

パターン２　「 p_1ならば q_{10}。p_2でも q_{20}。」のように、全く同一の後件を持たなくても q_2 から q_1 を導くことができる場合。

パターン３　「 p_1ならば q_{10}。p_2でも q_{20}。」のように、p_1 と p_2 の直接の結論は反対であっても q_1 と q_2 が同じ結論を導く場合。

パターン１

（1）停電であれば、電気はつかない。電球がきれていなくても、電気はつかない。
（2）停電であれば、電気はつかない。電球がきれていても、電気はつかない。

（1'）停電であれば、電気はつかない。 * 電球がきれていなければ、電気はつかない。

（2'）停電であれば、電気はつかない。 電球がきれていれば、電気はつかない。

（坂原 1988）

パターン２

（3）銀行にバイト代が振り込まれていれば、家賃は払える。仕送りが届いていても、それくらいの金が手に入る。　（坂原 1988）

パターン３

（4）　'Well, I'll eat it,' said Alice, 'and if it makes me grow larger, I can reach the key; and if it makes me grow smaller, I can creep under the door; so either way I'll get into the garden, and I don't care which happens!'

(Lewis Carroll: 'Alice's Adventure in Wonderland. Through the Looking Glass' Puffin Books,)

「もしこれで大きくなれば鍵に手が届くし、又小さくなれば扉の下をくぐれるし、(…)」
岩崎民平（角川文庫、p 14）

（5）大きくなれば、鍵に手が届く。小さくなっても、ドアの下をくぐり抜けられる。

2. 坂原（1988）のパターンを考察

2.1. パターン１の考察

（6）　TOEFL の点が十分でなければ、留学は出来ない。お金がなくても留学出来ない。
（6'）　TOEFL の点が十分でなければ、留学は出来ない。お金がないならば留学出来ない。
（7）　連休に、ＵＳＪに行けば疲れる。ディズニーランドに行っても疲れる。

条件文と解釈してはならない例

（8）見知らぬ人が近づくと、クロは噛み付く。飼い主が近づいても、噛み付く。

（8'）飼い主が近づけば、クロは噛み付く。見知らぬ人が近づいても、噛み付く。

曖昧な例

（9）もし、浩子が来たら、由美子は帰るよ。由伸が来ても由美子は帰るよ。

（9-a）譲歩文：もし、浩子が来たら、由美子は帰るよ。
たとえ由伸が来たとしても、由美子は帰るよ。

（9'）もし、浩子が来たら、由美子は帰るよ。由伸が来たならば、由美子は帰るよ。

（9-b）条件文：もし、浩子が来たら、由美子は帰るよ。また、由伸が来ても
由美子は帰るよ。

（10）（猫のみーちゃんは、家族の顔色を覗う習性があり、お父さんの事を特に怖がっている場合は条件文、逆にお父さんの事だけは大好きな場合は、譲歩文）
怒った声で呼んだら、みーちゃんは帰って来ないよ。お父さんが呼んでも、帰ってこないよ。

2.2. パターン２の考察

(11) 合鍵を持っていれば、中に入れる。暗証番号を押してもこの扉は開く。

(12) 自分の部屋なら、集中できる。図書館でも、環境は整っている。

2.3. パターン３の考察

(13)（友達から「明日遊ばない？」と誘いを受けての返事：）
「明日、晴れなら、試合なんだ。雨でも、室内練習場で練習だよ。」

3. 「ても」文の位置づけ

（a）「条件の否定」説

（b）「条件の取り立て」説

3.1. 「条件の否定」説

「条件の否定」説の問題点 （前田 1993）

① テモ文は条件説を複数取って、テモを反復させることができるが、条件文では不可能である。

ご飯をたべても酒を飲んでも太らない。
* ご飯をたべれば酒を飲んでも太らない。

② テモ文では、従属節に「不定語」が入るが、主文が平叙文の順接条件節には「不定語」は入らない。（沼田 1986b:26）

誰がやっても、多分うまくいくでしょう。
* 誰がやったら、多分うまくいくでしょう。

③ テモ文を用いても順接の条件文でも、かなり近い意味を表す場合がある。

田中さんに会っても、このことは秘密にしておいて下さい。
田中さんに会ったら、このことは秘密にしておいて下さい。

(Yamaguchi 1989)

3.2.「条件の取り立て」説

「モ」の意味・用法の分類（沼田 1986 a, 1986 b）

①「単純他者否定」の「モ」

ディックに刑を宣告すれば、スーザンの心は傷つくし、また、もし、スーザン自身を責めても彼女の心は傷つくだろう。

②「意外」の「も」

（ほめられると怒る人はいないはずだが）太郎はほめられても怒る。

③「柔らげ」の「も」

奥さんも御主人といらしても、よろしいのに。

4.「テモ」の用法

テモ文の意味・用法（前田 1993）

4 種のテモ
1. テ形の並列・取り立て
2. 並列条件 → 「単純他者否定」のモ
3. 並列・逆条件
4. 逆条件 → 「意外」のモ

4.1. テ形の並列・取り立て

「テモ」という、従属節接辞として扱うだけの結び付きの強さと独立性は持っていないため、この「モ」を取り外すことも可能である（田野村 1991）。

(14) どこかの街でふと出会うことが会ったら近況をたずねてもやろうし困ってれば助けてもやりたいと思っていた感情はこのとき以来さっぱりとすて去ることができた。（結婚の生態）

4.2. 並列条件

新たな条件が起こった場合に、先行する条件と帰結が変わらないことを示す場合の用法。

例文（1）（2）

4.3. 並列・逆条件

両方の含みを持つ場合は、並列条件において並べられる新たな条件・状況が、一般的には主節の出来事の成立を阻害する事象である（前田 1993）。

(15)「いいじゃないですか、シャガールは。こういうのを見ると欲しくなる。あなたが勧めなくても、こっちの方で欲しくなってくる。」（崖）

(16) 3を自乗すると9になるし、－3を自乗しても9になる。

3を自乗すると9になる。 ＋ －3を自乗すると9になる。

↓

3を自乗すると（しても）9になるし、
－3を自乗しても9になる。

（前田 1993）

(15') こういうのを見ると欲しくなる。

＋

あなたが勧めなくても、こっちの方で欲しくなってくる。

↓

* こういうのを見ると（ても）欲しくなるし、あなたが勧めなくても、こっちの方で欲しくなってくる。

(16) 震災の被害者であれば、学校から奨学金が給付される。優秀な成績でなくても、構わない。

4.4. 逆条件・「意外」のモ

通常はその帰結を引き起こさない条件･状況が、その条件関係を成立させる場合

(17) 普通の時計は水に濡れると壊れる。防水時計は水に濡れても壊れない。

5. 3種のテモ

① 条件と解釈する場合

- 「テモ」を「ナラバ」に換言可能。
- 前件から後件を導く際、後件の事態が、常識的（その人の想定や価値観）に予想通り。
- 英語ではalsoと言い換えられる。従って、この用法は、条件の追加と考えられ、「…も、…も、」「更に次のようなことを考えてみると、」と付け加えても問題はない。

② 譲歩と解釈する場合

- 「テモ」を「ナラバ」に換言不可能。
- 仮定的な逆条件の場合、副詞「タトエ」と共起可能。
- 前件から後件を導く際、後件の事態が、常識的（その人の想定や価値観）に予想通りでない場合。

③ 両方に解釈出来る場合

6. まとめと今後の課題

even if	ても	逆接・仮定的
even though		逆接・確定的
also		恒常的条件

引用文献

庵 功雄. 2001.『新しい日本語学入門』東京：スリーエーネットワーク.

小泉 保. 1987.「譲歩文について」『言語研究』91.

坂原 茂. 1993.「条件文の語用論」『日本語の条件表現』東京：くろしお出版.

――― 1985.『日常言語の推論』東京大学出版会（認知科学選書２）.

鈴木 重幸 1972.『日本語文法・形態論』むぎ書房.

田野村 忠温 1991.「「も」の一用法についての覚書－「君もしつこいな」という言い方の位置づけ－」『日本語学』9月号VOL. 10.

沼田 善子 1986a『いわゆる日本語助詞の研究』東京：凡人社.

――― 1986b「副詞句のとりたて－「と」「ば」「たら」「なら」と「も」－」『都大研究』23号.

前田 直子 1993.「逆説条件文「～テモ」をめぐって」『日本語の条件表現』東京：くろしお出版.

Yamaguchi, Seiko Fujii. 1989 'Concessive Conditionals in Japanese: A Pragmatic Analysis of the S1-TEMO S2 Construction' BLS 15.

接続詞 as の非従属化現象について

田中美和子
関西外国語大学 大学院

0．はじめに

接続詞 as の用法に、and then に置き換えて意味が変わらないとされているものがある。但し、この用法はレジスターが限られており（梅咲 1999;2000, 藤枝 2001.を参照）、一般に広く用いられてはいない。等位接続詞 and を用いた文（以下、and 文）と置き換え可能であることから、例文（1）の as を用いた文（以下、as 文）は等位文に近い性質を持っていると言える。

（1） Tani blasted a two-run homer *as* the Orix BlueWave won their sixth straight game and took the Pacific League lead by defeating the Kintetsu Buffaloes 5-1 on Monday night at Green Stadium Kobe. (The Japan Times, 6 ,5, 2001.))

（1）' Tani blasted a two-run homer *and then* the Orix BlueWave won their sixth straight game.

副詞節を作る従属接続詞なら、文尾だけではなく文頭にも表れることができる（Celce-Murcia, M. and Larsen-Freeman, D. 1999:520)。ところが、この as 文では、意味を変えずに as 節を文頭に出すことができない。

（1）" ?*As* the Orix BlueWave won their sixth straight game, Tani blasted a two-run homer.

（2） A clause beginning with it [a coordinator] sequentially fixed in relation to the previous clause, and hence cannot be moved to a position in front of that clause.

(Quirk, et. al. 1972:559, 1985:927)

以上の観察から、この as は 等位接続詞のもつ性質を所有していると言える。従って、従来の as の用法とは異なり、この as 文における as は従位接続から等位接続へ変化する特別な用法であるとし、本稿ではこれを as の非従属現象とよび、この現象を説明することを試みる。

1．先行研究

1．1． 梅咲（1999; 2000）

（3）「同時情報たたみかけの as」は報道記事というレジスターに見られた用法で、その他のレジスターで使用されることが例証されていない。(2000:79)

（4） C（時＆因果関係）：P 1 （原因） ＝ P2 （結果）[同時] (2000: 75)

（5）同時発生の出来事を表し、因果関係が従来と逆である。(2000:75-9)

（6）因果関係が従来とは逆である（A as B: Because A, B）

（7） The marriage of the Prince and Princess of Wales ended with the granting of a decree absolute yesterday *as* the Prime Minister said there was no immediate prospect of the Prince

marring again. (The Times 29/08/96., in 梅咲 1999; 2000:67-8)

梅咲(2000)は、この他、この用法が「as 本来の意味・用法である同時性を明確にあらわす必要があるという理由で、他の語でなく as が選択」され、「報道記事であれば事件が起こった順序を明確にあらわす必要がなければ冗長に出来事を並べるよりも臨場感を出すために同時性を示す方が選択された(78)」と述べている。

1．2．藤枝（2001）

藤枝(2001)は、映画脚本のト書きに従来の説明では説明することのできない次のような as の用法があると述べられ、この用法に関しては辞書にまだ妥当な記述がなされていない用法である、と報告された。

（8） The limousine stops at a traffic island *as* Tess gets out. (Working Girl)

2．分析

非従属を表す as は、以上の研究においてその用法が記述されつつあるが、このような用法をなぜ as が持つに至ったのかについてはまだ妥当な説明が与えられているとは言えない。これについて、相関的時間関係と因果関係の二つの観点から、それぞれ分析することを試みる。

2．1 相関的時間関係（la sécution）

Tesnière (1982)は英語を含む複数の言語に関して状況命題（propositions sirconstansielles: 副詞節）を細かく分析をしている。時間的状況命題(circonstancielles de temps :時間節)に関しては、多くの言語で次の下位カテゴリーを区別しているとした。

（9）(i) アスペクト（l'aspect）――起動相、終結相
(ii) 相関的時間関係（la sécution）-- 継時性、同時性 （Tesnière 1982）

l'aspect は時間節のサブカテゴリーとしてのアスペクトである。二つの出来事の中で、もう一つの行為と関係して時間的にとらえられる行為のアスペクトであり、英語では until, since, while 等の接続詞で表される。一方、l'aspect と異なり、la sécution は相関的な時間のカテゴリーである。すなわち、もう一つの時間と関係して決定される時間だと言える。具体的には、継時性（前、後）を表すのに before, after また同時性を表すのに when, as が考えられる。

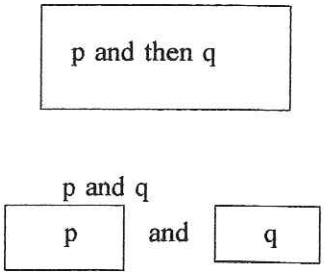
こうしてみると、従属接続詞でありながら非従属的な用法をもつ as と when は、共通して相関的時間関係を表す接続詞であることがわかる。そしておそらくこの《同時性》から何らかの形で通常とは逆の《継時性》を持つ用法を拡張していったものと思われる。

（１０）《同時性》→《一群の出来事連鎖》

報道記事や脚本において或る事件や行為がどのような順で起こったか、また行われたかは大変重要な情報である。事件発生の流れ、また俳優の動作の手順といったもの、またカメラが画面に対象を捉えていく順番は重要である。しかし、as はこれらの出来事を別個のものと捉えるのではなく、連鎖と表現しているのではないだろうか。非従属の as は《同時性》から発展して《出来事連鎖》を表す用法に拡張されていると説明したい。これは、同時に情報をたたみかけるというよりも、一つ一つを切り取ることの出来ない連鎖した出来事であると捉える言語表現だと思われるのだ。

そして、前の出来事が後の出来事よりも大切である、すなわち従来の複文のように主節が重要な情報を担っているわけではなく、また when 節の主節現象のように主節と従属節が逆転して、as 節の出来事が前の出来事よりも大切になるというわけでもない。ただ非従属の as 文では、とりあげられた事件は二つではなく一つとしてとらえられ、文法上の主節および as 節には一塊の事件の前におきた出来事とそれに続いて後に起きた出来事が表現されている。

（１１）p as q



２．因果関係

２．１．時間的連続性と因果関係

非従属の as には因果関係を含む表現があることが既に指摘された（梅咲 1999;2000 を参照）。Grice の様態の公理に従って、次のことが言える。

（１２）時間的に生起した順序が言語表現に直接反映する。

（Harnish 1976, Levinson. 1983, 小泉 1990, Sweetser. 1990）

因果関係は時間的連続性と一致している。（前の出来事→後の出来事）
このとき、また次のような含意があると言うことができる。

（１３） p as q
p and then q
p and therefore q
p is the cause of q

（１４） Given *p and q*, try interpreting it as:
(i) ' *p* and then *q*'; if successful try:
(ii) ' *p* and therefore *q*'; if successful try also
(iii) ' *p*, and *p* is the cause of *q*' (Levinson. 1983;146)

（１５） Alfred went to the store and bought the whisky. (Levinson, 1883:108)

（１６） What happened to Mary?
Answer: She got MA in basktweaving and she joined a religious cult.
(. . . so she left the math department.) (Sweetser, 1990:87)

（１７） They had a child and (they) got married. (小泉, 1990:179)

３．まとめ

《参考文献》

Biber, D., Johansson, S., Leech, G., Conrad, S. and Finegan, E. 1999. *Grammar of Spoken and Written English*, London;. Longman.

Celce-Murcia, M. and Larsen-Freeman, D. 1999. *Grammar Book: an ESL/EFL Teacher's Course*. Boston: Heinle & Heinle.

藤枝　善之. 2001.「ト書きの効用-時・場面を表す as」メビウス月例研究会第九十一回例会ハンドアウト(2001/12/08、於：京都外国語大学)

Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Harnish, R. M. 1976. Logical form and implicature. in T. Bever, J. Katz, & T. Langendoen(eds) *An integrated Theory of Linguistic Ability*. New York: Crowell, pp.464-79.

小泉　保. 1990.『言外の言語学―日本語語用論―』東京：三省堂.

Levinson, S. C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Tesnière, Lucien 1982(1959) *Ēlēments de Syntaxe Structurale*. Paris: Editions Klincksieck.

梅咲　敦子. 1999.「報道記事にみられる接続詞 as の用法」JACET 辞書研究会ワークショップ ハンドアウト(1999/11/23, 於：園田女子大学)

-------. 2000.「報道記事にみる従属節を導く as の意味拡張」『Hericon』第 24 号, pp.67-81.

be possible that 節に見られる法助動詞の意味特徴
－主観性／客観性の区別と視点－

岡本　芳和
大阪産業大学非常勤

0.　はじめに

引用節の that に関しては様々な議論がなされてきた。その節の中に法助動詞が現われた時、一体どのような意味でどのような解釈が与えられるのかは興味深いテーマである。これまで、that 節中の法助動詞の分析はほとんどみられない。本発表では、Hooper(1975)で分類された５つのタイプの述語をもとに、その節の中に法助動詞が現われた時にどのような意味をもつかを考えてみたい。特に焦点を当てるのは、Hooper の言う非叙実的述語(Nonfactive predicates)で非主張的な類(Nonassertive)にある be possible の述語節である。そこで Verstraete(2001)で、遂行性や話し手が関係した法助動詞の機能(performativity and speaker-related functions of modal auxiliaries)の観点からいわれた「認識的法助動詞は客観的意味をもっていない」という主張に意義を唱えてみたい。また、非主張的な述語類の中に表われる法助動詞の特徴を探ってみたい。

0.1. 本発表の立場とその方法

本発表では、非主張的な述語類と法助動詞の意味との関連に注目する。法助動詞の意味は多義的（根源的・認識的意味）であるという立場に基づき、さらにモダリティの主観性・客観性という区別を想定することによって、分析を進めていく(Lyons 1977, Palmer 1990², Hengeveld 1989, 澤田 1993)。ここでは次のような仮説を提出する。

(1)《仮説》
be possible 節の補文に現われる法助動詞は、根源的用法であれ、認識的用法であれ、客観的な意味をもたなければならない。

これを論証するにあたり、主観的なモダリティと客観的なモダリティの区別を明確に定義し、「法助動詞の主観性・客観性」と「視点」の観点から検証していきたい。

1.　先行研究

1.1.　Hooper (1975)

(2)　Hooper における非叙実的述語(Nonfactive predicates)で非主張的な類(Nonassertive)
nonnegative
be likely, be possible, be probable, be conceivable
negative
be unlikely, be impossible, be improbable, be inconceivable, doubt, deny
Hooper (1975: 92)

※その他の述語節の分類は Hooper (1975: 92)を参照。

Hooper (1975: 113)によると、これらの述語類は、補文の命題の真偽性についてはるかに弱い意見を表現するものである(express a much weaker opinion about the truth of the complement proposition)と述べられている。よって、この類によって導かれる that 節の中には、話し手の主観的な表現を伴った内容は生じないのではないか。

1.2.　モダリティの主観性・客観性の問題

法助動詞が根源的意味と認識的意味をもつという多義性[1]にもとづいて、その法助動詞の主観性と客観性の観点から分析をする。澤田（1993:190)によると、根源的法助動詞（Root Modals）とは、主語・話し手の有する「能力」、「義務」、「必要」、「意志」、「許可」といった意味を持つものである。これに対し、認識的法助動詞（Epistemic Modals)とは、「あるできごとの可能性の度合い」を査定するものであると述べられている[2]。また、主観性と客観性の区別は、話し手が命題内容に対して関与しているかどうかによる。

(3)　法助動詞の多義性と主観的／客観的意味の例

must	「～しなければならない」(R/S)	「～にちがいない」(E/S)
	「～であることが必要だ」(R/O)	「～であることが必然である」(E/O)
may	「～してもよい」(R/S)	「～かもしれない」(E/S)
	※（R/O は can になる）	「～という可能性がある」(E/O)

1.3.　Verstraete(2001)

Verstraete(2001)は、Lyons (1977)や Hengeveld (1989)の立場とは異なって、客観的な意味をもつ認識的法助動詞を認めていない。また、主観的な法助動詞の遂行的な性質を主張している。

(4) The subjective-objective distinction for epistemic, deontic, and dynamic modality

Modality type	Subjective	Objective
Epistemic	+	−
Deontic	+	+
Dynamic	−	+

Verstraete(2001: 1525)

2.　非主張的述語節に見られる法助動詞の意味特徴

2.1. 非主張的述語節と法助動詞

非主張的述語節の特徴から、その that 節に表われる法助動詞は、客観的な意味をもっていると考えられる。

(5) 非主張的述語節＋法助動詞の意味（客観性）

It's possible that he'll come today.

(Thomson and Martinet 1986[4]: 46)

「今日彼が来る可能性がある（今日彼が来るだろう)。」

*「今日彼が来るだろう可能性がある。」

2.2. 視点とモダリティの定義

(6) 視点の定義

「視点」とは、言語行為(Speech Act)において、話し手（あるいは書き手）があるできごとを描写しようとする時に話し手（あるいは書き手）自身がしめている空間的（spatial)，時間的(temporal)，心理的（psychological)な位置といった意味である。

澤田(1993: 303)

(7) モダリティの主観性と客観性

主観的なモダリティ･･･命題内容に対して話し手の心的態度が含まれており、そこに、話し手の視点がある。

客観的なモダリティ･･･命題内容に対して話し手の心的態度は含まれておらず、客観化された命題内容を話し手が受け止めそれを報告する。そこには、話し手の視点もな

い。

(8) モダリティの分類

① Subjective Root modals

You must be back by ten o'clock.

(Leech 1987[2]: 77)

② Objective Root modals

But to reach orbit an object must accelerate to a speed of about 17,500 miles per hour...

Verstraete(2001: 1508)

③ Subjective epistemic modals ④ Objective epistemic modals

Alfred may be unmarried.

(Lyons 1977: 797)

2.3. 例文の検証

(9) that 節の中での法助動詞のパターン→客観的意味をもつ根源的意味の法助動詞、客観的意味をもつ認識的意味の法助動詞、単純未来の will

(10) It is possible that certain mutational forms may be produced such as antibiotic resistant strains.

(Brown2.txt at position 3759073)

(11) The force of his mind and personality had made him many friends at Oxford, and it is possible that I should have met him through Robert Graves, or a Balliol man of great ability named Harris, if I had not been introduced to him by Sidney.

(LOB.txt at position 2463631)

(12) It is possible that I might have placed them upon record before, but a promise of secrecy was made at the time, from which I have only been freed during the last month by the untimely death of the lady to whom the pledge was given.

(C, Doyle, *The Speckled Band*)

(13) But it is possible that we can have, over a period of time, some marginal influence on the pattern of progress.

(LOB.txt at position 2887401)

2.5. 非主張的述語類から主張的述語類への転換とその主観化

非主張的な述語類が念押しの付加疑問文の添加、あるいは、その述語表現自体の疑問化によって、客観的な法助動詞を含む節をもつ非主張的述語類から主観的な法助動詞を含む節をもつ主張的述語類への転換が起こる(Traugott 1989)。

(14) "Yes. It's possible, isn't it, that that might have been an accident?"

(A, Christie, *And Then There Were None*)

(15) "Yes. It's possible, isn't it, that you may have made a mistake? These things do happen once in a while "

(*ibid.*)

(16) Most scholars seem to believe that Tangier is one of the Russell Isles. But I asked myself after studying several old maps and a modern flight chart: Is it possible that Tangier might really be Limbo, and might this explain the Islander's tendency not to mean what they say or say what they mean?

(Patricia Cornwell *Isle of Dogs*)

3. まとめと今後の課題

2.4.で示された例の補文中にある法助動詞含む命題内容は、発話時に話し手が主観的に形成したものではない。特に(10)の認識的法助動詞 may は、Verstraete に従うと、主観的な認識的法助動詞となるが、これは客観的な認識的法助動詞である。また、上の例に見られる節中の法助動詞は、話し手によって判断された主観的な法助動詞ではない。発話時には結びつかない客観化された命題内容を、話し手は自分自身の視点を置かずに、報告している。結論として、それらの法助動詞は主観的なものではなく、むしろ客観的な意味をもつ法助動詞といえる。また、2.5.で示したように、話し手が付加疑問を添加したり、述語表現自体の疑問化を行なうと、非主張的な節が主張的な節へと転換がおこりその節の中に表われる法助動詞も主観的な意味をもつようになる（主観化がおこる）ことを示唆した。

---

[1] このような根源的法助動詞と認識的法助動詞の意味の分類は、その他にも Hofmann (1966), Halliday (1970), Jenkins (1972), Coates (1983), 安藤 (1983), 澤田 (1993)などがある。

[2] Declerck (1991:351-352)にも根源的・認識的法性について定義されている。

参考文献

安藤 貞雄. 1983. 『英語教師の文法研究』. 東京: 大修館書店.

Coates, J. 1983. *The Semantics of the Modal Auxiliaries.* London: Croom Helm.

Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English.* Tokyo: Kaitakusha

Halliday, M. A. K. 1970. "Functional diversity in language as seen from a consideration of modality and mood in English." *Foundations of Language* 6, 322-361.

Hofmann, T. R. 1966. "Past Tense Replacement and the Modal System." NSF 17. Ⅶ, 1-21.

Hengeveld, K. 1989. Layers and operators in Functional Grammar. *Journal of Linguistics* 25, 127-157.

Hooper, B. J. 1975. "On Assertive Predicate." *Syntax and Semantics* 4 (Ed. J. Kimble.). New York: Academic Press.

Jenkins, L. 1972. *Modality in English Syntax.* Ph. D. Dissertation, MIT. Reproduced by the Indiana Linguistic Club.

柏野 健次. 2002. 『英語助動詞の語法』. 東京: 研究社.

Leech, G.N. 1987[2]. *Meaning and English Verb.* London: Longman.

Lyons, J. 1977. *Semantics* (2 volumes). Cambridge: Cambridge University Press.

中野 弘三. 1993. 『英語法助動詞の意味論』. 英潮社.

Nuyts, J. 2001. "Subjectivity as an evidential dimension in epistemic modal expressions." *Journal of Pragmatics* 33 383-400.

Palmer, F. R. 1990[2]. *Modality and the English modals.* London: Longman.

Perkins, M. 1983. *Modal expressions in English.* London: Pinter.

澤田 治美. 1993.『視点と主観性』. 東京: ひつじ書房.

Swan, M. 1995[2]. *Practical English Usage.* Oxford: Oxford University Press.

Trougott, E. 1989. "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Examination of Subjectification in Semantic Change." *Language* 65, 31-55.

Thomson, A, J. & Martinet, A,V. 1986[4]. *A Practical English Grammar.* Oxford: Oxford University Press.

Verstraete, Jean-christophe. 2001. "Subjective and Objective modality: Interpersonal and ideational in the English modal auxiliary system." *Journal of Pragmatics* 33, 1505-1528.

関連性理論による人称代名詞の一考察

松崎由貴
学習院大学大学院

1．はじめに

Powell(1998)はNunberg(1993)が"deferred reference"と呼んだ代名詞の分析を試みたが、ここでは彼の関連性理論的分析に照準を合わせ、一考察をしてみた。その結果として浮上した問題点を取り上げ、改善点を提案してみたい。

2．関連性理論での代名詞の解釈

関連性理論では、それぞれの単語が持つ意味によって、単語を大きく二つに分けている。一つは概念的な意味(conceptual meaning)を伝えるもので、もう一つは手続き的な意味(procedural meaning)を伝えるものである(Blakemore, 1987; Wilson and Sperber, 1993:2)。代名詞は、後者の意味を持つと考えられている。この手続き的な意味はそれ自体は表象を持たず、その意味と共に表れる表象をどのように操作し解釈するのかという方法を表している。

一般的にどのように代名詞が聞き手によって解釈されるのかを関連性理論で簡単に見てみてみると以下のようになろう。発話を解釈する際に、聞き手は主に３つのレベルの意味を得る。コード解読された意味と明意(explicature、表出命題)、それに、暗意(implicature)である。そのうち代名詞が関わる作業は、明意を構築する際に行われるものであるが、その作業は disambiguation, saturation, free constituent enrichment, ad hoc concept construction の４つがあるとされている(Carston, 2000)。これらの作業のうち saturation の際に指示決定(reference resolution)が入ると言われているが、この指示決定こそ、聞き手が代名詞を解釈する際に使われるものである。関連性理論では明意を取り出す際に、コード解読と語用論的推論が働くと考えられており、明意の取り出しの際になされるすべての作業に関連性の原理が影響していると見ている。聞き手は期待する意味を得るまで、Relevance-theoretic comprehension procedure に従って解釈をする。

3．Powell による deferred reference の解釈

Nunberg が deferred reference と名づけた reference は、Powell によると特定の個人を指すことがなく、特定の個人以外のものが表出命題に貢献するという。例えば次のような例である。

(1) President [George Bush] : The Founders invested me with sole responsibility for

appointing Supreme Court justices(Nunberg, 1993:21).

この例の me は George Bush という個人を指したのではなく、George Bush のもつ大統領という特性を指しているという。

Powell の deferred reference と呼ばれる代名詞の解釈は semantic deferral と pragmatic deferral という二つの処理に分けてなされている。前者は Powell が Wilson and Sperber(1993)の考えに沿って提案した procedural meaning に従ってなされた処理である。例えば、代名詞 I は以下のような procedural meaning になるという。

> ...*identify its referent by first identifying the speaker*. In other words, the semantics of *I* takes the hearer as far as the speaker (or in the light of the discussion above, as far as an individual concept of the speaker)(Powell, 1998:15)

Powell が Wilson and Sperber と異なるところは、聞き手が individual concept にアクセスをするという点である。Powell はこの individual concept には個人に関する情報ばかりでなく、個人に関するものでない情報の general concept も含んでいるという。また、Powell はこの semantic deferral は、意味論的に mandatory であると述べている。

ここまでは、一般的な代名詞の処理であるが、deferred reference にはさらにもう一つの処理が必要となる。pragmatic deferral と呼ばれるものがそれである。この処理は、semantic deferral からの出力を、Fauconnier の用語である trigger とし、関連性の原理の制約の下に target を探す。この semantic deferral から pragmatic deferral に行くには、二つの条件が必要となる。それは、trigger が最適の関連性を満たしていないことと、話し手が生み出すであろう、より関連性のある刺激が、もっとほかに存在することであるとされる。

4. Powell の説明における問題点

Powell によるこの説明には問題点がある。まず、一つに semantic deferral には関連性の原理が働かないということである。仮に、semantic deferral に関連性の原理が影響しないのだとすれば、どのように代名詞は指示対象を探すのであろうか。一見して、代名詞の procedural meaning にしたがっているだけの指示決定にも、実は関連性の原理が働いているはずである。

また、deferred reference の最終的な指示対象となるものは、表出命題にではなく、implicature に貢献するのではないのだろうか。例えば、（1）の例で Powell のいうように、semantic deferral と pragmatic deferral の処理過程を経て the president が命題に貢献するのであるとすれば、George Bush という個人は表出命題にも、explicature にもなく、どこにも残らなくなってしまう。話し手である、George Bush は全く自分自身を意図

していなかったのかという疑問が起ってくる。また、聞き手も大統領のみではなく、大統領である George Bush も思いおこしたはずであろう。Powell のいう trigger がどこにも表れないというのは不都合が生じると考えられる。

5．Powell の説明の改善点

改善がなされるべき点の一つは、Powell のいう semantic deferral にも関連性の原理が働いているということを認めることである。もう一点は、この semantic deferral と pragmatic deferral は semantic deferral が explicature に貢献し、pragmatic deferral は現行のままの implicature を聞き手が取り出す方法で説明がつくという点に気づくことである。従って（1）の例は以下のようになると考えられる。

(2) Explicature: The Founders invested George Bush with sole responsibility for appointing Supreme Court justices
Implicated premise: George Bush is the president.
Implicated conclusion: The Founders invested the president with sole responsibility for appointing Supreme Court justices.

ここでは、Powell のいう trigger と target は使わなくても implicated premise が代役を果たしている。

また、これが implicature と考えられるのは、Carston(2001)の主張から明らかであると思われる。

(3) A: Have you invited any men to the dinner?
B: I've invited my father.
Implicature: B HAS INVITED AT LEAST ONE MAN. (Carston, 2001:17)

この上の implicature を得る際に、聞き手はコード解釈で単語 father から概念上のアドレス FATHER に写像をし、そこから、MAN へと導く推論を指示する logical entry へとアクセスする。この推論は論理的ではあるが、implicated conclusion を引き出す際のそれと同じものであると Carston は主張する(2001:18)。(1)の例でも同じことが言えるのではなかろうか、すなわち、聞き手は(1)の me から George Bush を指示し、George Bush の individual concept に含まれる general concept 、"the president"に最終的にアクセスするのである。ここでは、論理的推論ともならないし、father と George Bush では概念の種類が異なるが、一つの概念からその中にある特質を取り出すという作業は同じであるといえよう。

6．おわりに

Powell は、referent resolution の際、deferred reference には現行の作業に加えて特殊な作業が必要であると述べている。その作業とは pragmatic deferral のことであるのだが、実際、それは referent resolution には含まれないと考えられる。なぜなら、deferred reference は一見、表出命題に貢献するようにみえるが、implicature に貢献するものだと思われるからである。もしそうであれば、現行のままに saturation の作業を行なえばよいのであって、deferred reference には特殊な作業が必要なくなることになる。また、このことは、理論の一貫性にも通ずることである。

＜参考文献＞

Blakemore, D. 1987. Semantic Constraints on Relevance. Oxford:Blackwell.

Carston, R. 2000. "Explicature and semantics." UCL Working Papers in Linguistics12, 1-43.

Carston, R. 2001. "Relevance Theory and the saying/implicating distinction." UCL Working Papers in Linguistics 13, 1-34.

Fauconnier, G. 1994. Mental Spaces. Cambridge: Cambridge University Press.

今井邦彦. 2001. 『語用論への招待』東京：大修館.

Kaplan, D. 1977. "Demonstratives." In J. Almog, J. Perry and H. Wettstein (eds.) Themes from Kaplan, 481-563. New York: Oxford University Press.

Kaplan, D. 1989. "Afterthoughts." In J. Almog, J. Perry and H. Wettstein (eds.) Themes from Kaplan, 565-614. New York: Oxford University Press.

Nunberg, G. 1993. "Indexicality and deixis." Linguistics and Philosophy 16, 1-43.

Nunberg, G. 1995. "Transfers of meaning." Journal of Semantics 12, 109-132.

Powell, G. 1998. "The deferred interpretation of indexicals and proper names." UCL Working Papers in Linguistics 10. 1-32.

Recanati, F. 1993. Direct reference: from language to thought. Oxford: Blackwell.

Sperber, D. & D. Wilson. 1995. Relevance: Communication and Cognition. Second ed. Oxford: Blackwell.

内田聖二. 2000. 「ダイクシス――関連性理論からの視点――」『英語青年』(10 月号) 431-432. 東京：研究社.

Wilson, D. 1999. Semantic Theory. (PLIN M201) 1998-9, Dept. File, UCL.

Wilson, D. 2002. "Relevance Theory: From the Basics to the Cutting Edge." Paper presented in ICU, Tokyo, from March 26 to March 29, 2002 .

Wilson, D. and D. Sperber. 1993. "Linguistic form and Relevance." Lingua 90. 1-25.

日本語の引用 ー時間ダイクシスを中心にー

高橋真弓（関西外国語大学大学院）

1. はじめに

本稿の目的は、日本語の引用における時間ダイクシスを考察してその解釈の曖昧性を提示し、その曖昧性がどのようにして生じているかを見ていくことである。次の例を見てみよう。

(1) 昨日　太郎が　明日　ドイツ語を勉強する　と言ってたよ。

(1)における「明日」は、通例、「発話時から見た次の日」と捉えられるが、この「明日」は、「発話時から見た次の日」つまり「明日」の解釈と、「元発話から見た次の日」つまり「今日」の解釈の2通りに曖昧になると考えられる。引用におけるこの解釈の曖昧性は、ほかのダイクシス[1]（人称・場所・ディスコース・ソーシャル）には見られない。なぜ、時間のダイクシスだけにこのような曖昧性が現れるのだろうか。

このような曖昧性は、これまでの日本語の「引用」研究においては説明されてこなかった。「引用」の定義ひとつをとってみても、「文中引用句「～と」とそれが係っていく述部との結びつきとしてセンテンスに成り立つ統語現象、もしくは、その相関の構造をいうもの」(藤田 1988:30) や「P_1 が P_2 に「S」と言った」という形に限定して研究をするもの(遠藤 1982:86)、「～と」「～ということ」をその対象とするもの(砂川 1988)、さらに解釈を広げ、「ある発話・思考の場で成立した(あるいは、成立するであろう)発話・思考を新たな発話・思考の場に取り込む行為」(鎌田 2000:17) など、さまざまである。しかし、本稿は「引用」そのものには議論を掘り下げず、引用句の中に見られる時間ダイクシスに焦点をしぼる。また、ここでは標準的な形「～と」によって導かれるものを「引用」と考え、議論を進めていく。

2. 間接引用と直接引用[2]

話し手が、ほかの人が述べたことをさらに別の人に伝える方法には、大きく分けて2つあるといわれている。ひとつは、元発話をそのまま忠実に伝えようとする「直接話法」で、もう一つは元発話の内容を伝達者の立場から伝えようとする「間接話法」である[3]。英語では、基本的にはその違いが形に現れるため比較的わかりやすいが、日本語ではその区別が困難である。

(1) a 太郎は「明日映画に行く」といった。
　　b 太郎は明日映画に行くといった。

(2) a Taro said, "I will go to the movie tomorrow."
　　b Taro said that he would go to the movie the following day.

本節では、「直接引用」と「間接引用」についてのさまざまな捉え方を概観し、次節で、時間ダイクシスとの関係から、その問題点を指摘する。

奥津(1970)は変形文法の観点から引用構造を分析し、直接引用を「その発話をそのままに地の文にはめこんだもの」、間接引用文を「直接引用文の内容を地の文の話し手の立場に翻訳した文」と定義づけ、その過程を「間接化」と呼んでいる(奥津 1970:4)。この「間接化」は、直接引用文の発話の場を一次元引き下げ、地の文の場に同化する作業であり、英語の話法転換と似た概念であるといえる。

---

1 ここでいう「ダイクシス」は(Fillmore 1997)の定義に従う。

Deixis is the name given to those formal properties of utterances which are determined by, and which are interpreted by knowing, certain aspects of the communication act in which the utterances in question can play a role.

1. person deixis: the identity of the interlocutors in a communication situation
2. place deixis: the place or places in which these individuals are located
3. time deixis: the time at which the communication act take place
4. discourse deixis: the matrix of linguistic material within which the utterance has a role, that is, the preceding and following parts of the discourse
5. social deixis: the social relationships on the part of the participants in the conversation, that determine, for example, the choice of honorific or polite or intimate or insulting speech levels, etc.

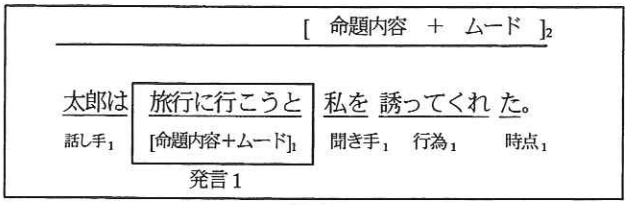
(Fillmore 1997:61)

2 「引用」とはある発話・思考の場で成立した(あるいは、成立するであろう)発話・思考を新たな発話・思考の場に取り込む行為であり、「話法」とはその行為を表現する言語的方法のことである。(鎌田 2000:17)

3 鎌田(1983)，藤田(1988)。

砂川(1989)は、引用文がある発言が別の発言を取り込むという二重構造を成していると考え、「場の二重性」という概念を提示している。つまり、元発話の場と伝達の場の関係から直接引用と間接引用の違いを説明するものである。直接引用は、「文の意味内容だけでなく表層的な形式を、またある場合には内容を伴わない形式だけをも再現させ、元の発言や思考の場をかなり忠実に復元したもの」であり、間接引用は「表層の形式を再現させる機能はなく、元の発話や思考の内容を再現させる機能であり、多かれ少なかれ、もとの発言や思考の場が引用を行う発言の場に引き寄せられた形に調整されたもの」となる(砂川 1989:15)。

(3)



発言2

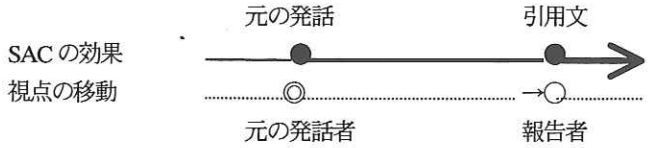
話し手$_2$　聞き手$_2$　行為$_2$　時点$_2$　　(砂川 1988:17)

中園(1994)は直接引用句と間接引用句に見られるダイクシス転換と発語内行為との関係を考察している。中園の言う直接話法とは「引用句の中に元発話をそのままの形で代入する伝達形式で、報告者の言葉と元の発話者の言葉が、主節と従属節に分化して存在する形式」であり、間接話法は「報告者が元の発話をどう解釈したのかが引用文のなかに反映される伝達形式で、報告者が引用文を自分の言葉で統一して表現する方法」である。

中園は「間接化」のプロセスには「引用動詞の選択」、「補文標識の選択」そして「ダイクシスの調整」の3つのプロセスが関わっていると考え、さらに、「ダイクシスの調整」(視点の移動)を許す発話行為と許さない発話行為に分けた。前者が「持続的な効果をもつ発話行為[4] (Speech Acts with Continuous Effect (SAC))」で、依頼、主張、命令、勧告、警告などの行為がそれにあたり、後者が「一時的な効果をもつ発話行為 (Speech Acts with Temporary Effects (SAT))」で、呼びかけ、質問、感嘆、罵りなどの行為がそれにあたる。

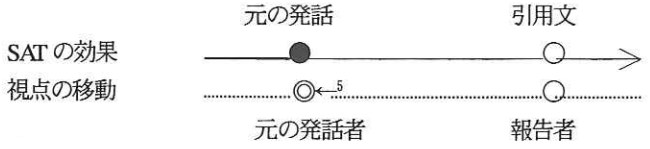
(4) a 「君と結婚する」
b 太郎$_t$は私$_i$と結婚すると約束した
c 太郎$_t$は私$_i$と結婚すると言った。

(5)



(6) a 「君は誰か」
b 太郎$_t$は私$_i$は誰かと聞いた
c ?太郎$_t$は私$_t$は誰かと言った

(7)



この分析によると、(4)は SAC に属する発話行為を遂行しているため「視点移動の制約」を受けず、遂行動詞を使っても「言った」を使ってもダイクシスの調整が可能であるが、(6)の場合は SAT に属する発話行為を表しているため、「言った」を使うとダイクシスの調整が不可能となる。

---

4 ここでいう「持続的な効果」というのは、発話者が発話することによって負った行為遂行の義務が、発話消滅後でも残っているもののことを言う。たとえば「約束」の場合、「その約束は今でも有効だ」と言えることから、この効果は持続的と考える。(中園 1994:103-104)

5 図中の "◎←" は、引用文の中でダイクシスの視点がそこに制限されることを示している。(中園 1994:95)

3. 問題点

前節で日本語の引用に関する主な節を概観してきたが、本節では、実際に例をあげてそれぞれの説を考察していく。そして、上記の説では、時間ダイクシスの曖昧性がうまく説明できないことを提示する。

(8) a 太郎は 「これが 僕の 犬だ」と言った。
　　b 太郎は それが 彼の(*僕の) 犬だ と言った。

(9) a 太郎は 「この町 で生まれ育ったんだ」と言った。
　　b 太郎は その町 で生まれ育った と言った。
　　c 太郎は 「その町 で生まれ育ったんだ」と言った。
　　d 太郎は その町 で生まれ育った と言った。
　　e 太郎は 「あの町 で生まれ育ったんだ」と言った。
　　f 太郎は あの町 で生まれ育った と言った。

(10) a 花子は 先生に 「この本をお借りします」と言った。
　　b 花子は 先生に その本を貸してほしい と言った。

(11) a 昨日 太郎は 「明日 あなたに 電話します」 と言った。
　　b 昨日 太郎は 明日／今日 私に 電話をする と言った。

3.1 奥津(1970), 遠藤(1982)

奥津(1970)に従うと、時間のダイクシスと引用との関係は、引用文と枠文とで加算操作(Time Adjustment)をして変換することになる。キノウ・キョウ・アシタの類は発話時を基準とする概念であり、以下のような計算がなされる。

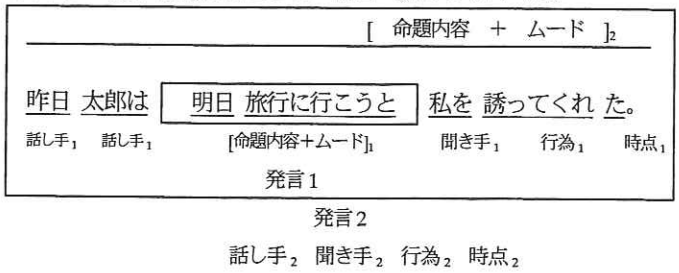
(12) a『アシタの試合は取りやめになりました。』
　　b「キョウの試合は取りやめになった」と（キノウ）言われた。
　　(現在を零、未来をプラス、過去をマイナスとすると、この場合単位は「日」で、(+1)+(-1)=0 となり、「キョウ」に変える。)
　　(遠藤 1982:91)

3.2 砂川(1988, 1989)

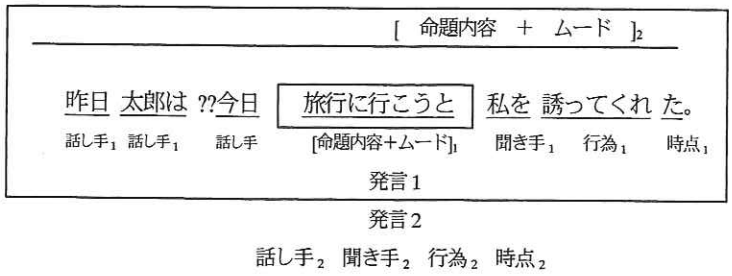
砂川(1989)に従うと、間接引用の場合、時の副詞は場の調整を受けることになる。すると、(13a)の「明日」は発言$_2$の場で「今日」に調整されることになるのであろうが、明らかに(13b)の図式は矛盾している。また、どちらかの場に調整されることになると、時間ダイクシスの解釈に曖昧性は生じないことになる。

(13) a 昨日 太郎は 明日 旅行に行こうと 私を 誘ってくれ た。

b



c (*)



3.3　中園(1994)

中園(1994)に従うと、(14a)の「約束」は視点の移動を許すため、時間ダイクシスの解釈の曖昧性を説明できるかもしれないが、(15a)は質問(SAT)であり視点の移動を許さないため、元発話者に視点が残ることになる。よって、元発話の「明日」は間接話法にすると「今日」にしか解釈できない。

(14) a 「明日本を買う」
　　b 昨日　太郎は　明日/今日　本を買うと　約束した
　　c 昨日　太郎は　明日/今日　本を買うと　言った

(15) a「明日本を買う？」
　　b 昨日　太郎は　明日/今日　本を買うかと　聞いた
　　c ?昨日　太郎は　明日/今日　本を買うかと　言った

3.4　時間ダイクシスの解釈の曖昧性が生じないケース

(16) 昨日　太郎は　明日　本を買いたがっていた　らしい。

(17) a 昨日　太郎が　明日　本を買います　と言った。
　　b 昨日　花子が　あさって　本を買うわ　と言った。　　(衣掛けのモダリティ[6](鎌田 2000))

4. 結論

本稿では、日本語の引用における時間ダイクシスの解釈を考察し、時間のダイクシスだけが他のダイクシスと違った振る舞いをすることをみた。

【参考文献】

Austin, J.L. 1962. *How to do things with words*. Cambridge: Harvard University Press.

Clark, H.H. and Gerrig, R.J. "Quotations as Demonstrations." Language vol.66, No.4　764-805.

Coulmas, F. ed. 1986. *Direct and Indirect Speech*. The Hague: Mouton de Gruyter.

遠藤裕子. 1982.「日本語の話法」『言語』11.3: 86-94.

Fillmore, C. 1997. *Lectures on Deixis*. Stanford. CA:CSLI

藤田保幸. 1988.「「引用」論の視界」『日本語学』7.9: 30-45.

藤田保幸. 1999.「引用構文の構造」『国語学』198: 1-15.

Hirose, Y. 1995. "Direct and indirect speech as quotations of public and private expression." Lingua 95:223-238.

廣瀬幸生. 1988.「言語表現のレベルと話法」『日本語学』7.9: 4-13.

井上和子. 1983.「日本語の伝聞表現とその談話機能」『言語』12.11: 113-121.

鎌田　修. 1983.「日本語の間接話法」『言語』129: 108-117.

鎌田　修. 1988.「日本語の伝達表現」『日本語学』7.9: 59-72.

鎌田　修. 2000.『日本語の引用』　東京：ひつじ書房

工藤真由美. 1995.『アスペクト・テンス体系とテクストー現代日本語の時間の表現ー』東京：ひつじ書房

南不二男. 1974.『現代日本語の構造』　東京：大修館書店

中園篤典. 1994.「引用文のダイクシスー発話行為論からの分析—」『言語研究』105: 87-109.

仁田義雄. 1991.『日本語のモダリティと人称』　東京：ひつじ書房

奥津敬一郎. 1970.「引用構造とその転形」『言語研究』56: 1-25.

澤田治美. 1993.『視点と主観性』　東京：ひつじ書房

砂川有里子. 1988.「引用文における場の二重性について」『日本語学』

砂川有里子. 1989.「引用と話法」『講座日本語と日本語教育 4』　明治書院

6「衣掛けのモダリティ」とは、「発話」の志向性に関わるものではなく、それらを含有する文全体に対し、それを発する話者がそれが自分の発話であるという念を押すような役目を持つモダリティである。(鎌田 2000:164)

William Faulkner の短編小説における understatement の効果—関連性理論を用いた文体論の試み—

松岡　信哉　（ 龍谷大学 (特定任用教員)）

1. 関連性理論の文学作品解釈への援用

スペルベルとウィルソンによって提唱された関連性理論では、発話行為を文字通りの意味を伝達する行為としてよりも、むしろ解釈的類似性に基づく意味伝達行為であるととらえる。発話の意味が明示された命題形式のみを通して聞き手に伝達されるケースは例外的なのであって、聞き手は提示された言語形式から命題形式を復元し、それを自分の頭の中にあるもろもろの既存想定との間で瞬時に演算処理することによって、場面の文脈の中で最も関連性のある解釈に到達するというのだ。この場合原則的には、聞き手は可能な解釈のうちで最も処理労力がかからず、また高い文脈効果が得られる解釈を最適な関連性のある解釈と見なすという。

このような立場をとると、従来の修辞学でさまざまに下位区分されていた文彩(トロープ)を統一的な認知的原理から説明することが可能であるように思われる。ゆえに多様な領域における言語活動の分析に関連性理論が応用されてしかるべきなのであるが、文学作品の解釈に対してこれが行われた例は、関連性理論に基づく研究活動全体の中で見た場合、必ずしも多いとは言えないようである。本論では関連性理論のなかで提唱されているいくつかの概念を使って文学テキストを分析することを試みるが、こと対象を文学テキストに絞った場合には、そのことに特有の困難が生じてくる。これは関連性理論が発話行為における、対話参与者の認知プロセスの分析として展開してきたことと関係がある。

2.1. メタ発話行為としての文学テキスト

関連性理論はすべての発話行為を意図明示的伝達行為であるととらえ、ある発話はつねに聞き手に対して最適な関連性の見込みを伝えるという。聞き手は発話の明示的内容における語彙項目を手がかりとして自分の頭のなかの百科事典的な知識の束にアクセスしたり、発話の文脈や相手側の発話者に対する予備知識などをもとに蓋然性のある推論を行ったりしながら、最適な関連性がある、唯一絶対の解釈に到達することができるとされる。

文学作品を書くことによって作者が読者に対して行う行為もまた、広い意味での意味伝達行為であることはもちろんである。しかし問題は、まず一点目に受け手側にはつねに複数の読者が存在すると予想されることである。このことによって発話者側と聴者側の認知環境の界面上で見出される最適な関連性は、読者の数だけ多様になる理屈となる。しかし一般的に想定される平均的な読者の反応はある程度予測できるものであるから、このような問題は包括的で説得力のある説明を提示することである程度克服できよう。より大きな問題は、文学作品が登場人物間の、対話をもその一部として含むより広汎なコミュニケーション活動を、ストーリーとして描くものであるということだ。つまり実際の発話者である作者は、フィクションの形で作品内に発話による意味伝達行為を描き出すことによって、間接的に読者へとより高次の自分に属するメッセージを伝達しようとしているのだ。つまり通常の分析が対象にする発話行為よりも一つ高い階層での意味伝達が行われている。しかも人工的に作り出された登場人物たちの意味伝達活動を通して、作家は読者に自らが意図する意味伝達を行おうとしている。

このような事柄に対してあまりにも複雑な図式を作り出して分析に当たるのは非生産的な試みとなる恐れがある。そこでここではやや単純化を行って、小説中の対話部分を通常の関連性理論の手立てで取り扱い、いわゆる地の文は対話参与者の認知環境における既存想定の集合を形作っていると見なそう。読者は地の文における登場人物の人柄や境遇についての情報を手掛かりにして彼らの認知環境＝心情に同化する。そしていわば登場人物の肩越しに、フィクション中の意味伝達行為に参加するのだ。

そうすると作者は地の文中に示す情報をコントロールすることによって、発話の意味解釈の前提になる想定の集合を変えることができることになる。そのことによって作者は物語中の発話行為に同化している読者の意味解釈過程を誘導することになるのである。

2.2. フォークナー作品におけるアンダーステイトメント

本論で取り扱う文学作品はアメリカの作家ウィリアム・フォークナーの 1930 年前後の短編２作である。彼が創作活動を行った時期は大衆消費社会の揺籃期であり、作家はつねにマーケットとしての一般大衆を意識して作品を執筆していた。またそれと呼応して文学作品に対する強制的、または自主的な検閲は厳しく、創作活動に際してはタブーとされる主題が数多く存在していた。特に性や暴力などに関する描写にはさまざまな社会的な規制が伴っていた。

文学作品において用いられる技巧の一つに understatement というものがある。これはある事柄、特にある場面の状況について述べる際に、それをはっきりとした仕方で示すのではなく、ぼんやりとほのめかすように提示するという技法である。この技法が読者に対してもたらす効果は幾つか考えられるが、一つは漠然と描き出すことによって個々の読み手の想像力が自由に介入する余地が生まれ、そのことによって多様な詩的効果が生み出されるということがあると思われる。またさまざまな制約から明示的に描き出すことを避けなければならないような場合に、それを暗示的に示すことで一種の妥協をはかるというケースが考えられる。understatement をこのような文脈においてとらえると、ある作家がタブーと見なされる主題を描こうとする際に、いわば表意を生じさせず推意のみが伝達される可能性がある言語表現を採用するというケースが考えられる。以下では特に homosexuality を示唆するような状況を作家が understatement によって表現する仕方を関連性理論の概念を使って分析してゆく。

3. ルース・トーク

関連性理論の枠組みでは発話の意図された意味と発話の明示的な命題形式は literal に対応しているものではないとされる。したがって大部分の発話は伝達の中で意図されている意味と近似的な言語形式を持っているのだ、ということになる。それはおおまかな意味で、発話の意図された意味と類似した内容を指示する明示的な形式を持つに過ぎず、聞き手が最適な関連性に基づく意味解釈を行うことで初めて、発話の意図された意味と解釈的な類似性を持つある解釈に到達することができる。関連性理論ではこのような発話行動の基本的な構造をルース・トークと名付けている。解釈者は発話された言語形式をもとに復元した命題形式をもとにして、その命題中に含まれた語彙が指示する概念を発話の関連性に沿って広げたり(loosening)、狭めたり(narrowing)することによって、最適な

解釈へと進んでゆく。

3.1. 概念のルース化

概念のルース化の例としてフォークナーの "Divorce in Naples"という短編を見てみよう。作品を読み進めてゆけば分かるのだが、ここでの登場人物は同性愛のカップルである。つまりタイトルの "divorce"の語がそもそもルースに拡張された意味で使われていることが徐々に分かってくるようになっている。冒頭の場面では男５人と女３人がバーで酒を飲んでいる。その時ある男が別の男に向かって次のように言う。

(1) "I sure wouldn't bring my *wife* to a place like this." (Faulkner, *Collected Stories of William Faulkner*. 以下 *CS* 877)

読者はこの男女の中の二人が夫婦だと思うかも知れない。ところがしばらく後に同じ男はもう一度同じ相手に対してこう言うのである。

(2) "I sure wouldn't bring my *girl* to a dive like this, even if *he* did wear pants." (*CS* 878)

ここでは部分的にエコーされた表現が "wife" の"girl"への言い換えに読者の注意を喚起する。また後続する if 節中の "he"の語の出現によって読者の想定は覆され、ここで話しかけられている男の恋人もまた男であると分かるのである。つまりここでは "wife" や"girl" が通常の意味範囲をこえて同性の男を指すのに使われている。これは概念のルース化の過程が情報の段階的開示と重なって劇的な効果を生み出している例である。

3.2. 概念の狭め(narrowing)

これとは逆に概念の狭めが対話が進行してゆく中で起こり、情報の段階的開示によってサスペンスが発生している例を示そう。先に述べた男性はジョージと言い、その愛人がカールという男性なのであるが、ここナポリでは女性からの誘惑が多く、若いカールにとっては心移りするような機会が多いかもしれないとジョージは懸念している。ジョージがことさらにカールの周りの女性に対して神経質であるさまが描かれるのだが、その苛立ちの真の原因は最初読者にはきちんと伝わってこない。だがこれは作中に現われる最初のうちは意味解釈が困難な会話の意味が、徐々に概念の狭めによって明らかになってゆくにつれて、読者にも納得されてくる。

(3) "*Einnocente*," one said; again they murmured, contemplating Carl with musing, secret looks. (*CS* 878)

斜体で示されているので（強調原文通り）英語以外の言語であろうと一般的な読者は推測をつけ、形態的な類似から "innocent"を思い浮かべるであろうが、この段階ではいまだ可能な複数の解釈を思い描いているのではないだろうか。

(4) "Are you still pure?" George said. "I mean, sho enough." (*CS* 878)

"pure" の語の登場で読者は先ほどの"innocent"の解釈の妥当性を確認するかも知れない。だがその語の幅広い意味の範疇が一体どんな領域を指し示しているのかについてはまだ確信がもてないのではないだろうか。そうすると最後に決定的な概念の狭めが起こり、

(5) "He's a virgin, see? Do you know what that means?" (*CS* 881)

とカールに性的な経験がまだ無いことが明示され、ジョージはカールの貞操の危機について危機感を抱いていることがついに露見するのである。ここでは概念の狭めが、先ほどの概念のルース化と同じ効果を生み出していることが分かる。

4. 弱い推意

ある聞き手は実際に発話された言語形式に指示付与と命題復元の処理を行い、このことによって発話の命題形式をうる。このレベルで獲得される意味は発話の表意と呼ばれる。ところが発話の意味がルースに命題化されている場合、聞き手は既存の想定の中から関連性のあるものを選び出してそれを命題形式と演算処理する。このような処理を経由して出てくる意味は推意と呼ばれる。

さてこのような推論過程で用いられる想定であるが、その想定が確かに発話者が発話に際して正しい意味解釈の決定項として念頭においていた想定であると見なされ、発話者が聞き手側において獲得された推意について一定の責任を負うことを強制するようなものである場合、ここで生じる推意は強い推意と呼ばれる。

これとは逆に、聞き手が発話解釈において利用した想定が、発話者が念頭においていた想定であると必ずしも断定できない場合がある。そのような解釈も可能であるかも知れないが、あるいは別の解釈が最適なものとして選ばれうるかも知れない。このような性質を持つ推意は弱い推意と呼ばれる。

4.1. 弱い推意によるほのめかし

このような推意は understatement という表現形式によるほのめかしの効果に適したものと思われる。聞き手はさまざまな解釈の可能性を作品に対して許容し、しかも明示的に描かないことによって発生を誘導した弱い推意に対して責任を負わずに済むことになるからだ。しかし作者は、先行する発話や地の文において読者に与える情報をコントロールすることで、ある発話に対する読者の推論過程に関与する想定の集合を作り出すことができる。そのことによって作者は自分が期待する弱い推意の発生を促しているように思われるのだ。このことをフォークナーの「星までも」("Ad Astra")という短編で見てみたい。

この作品は第一次世界大戦が休戦を迎えた日の、戦闘機のパイロットたちの虚脱感を主題にしている。彼らは酒を飲んで管をまき、飲みに入ったバーでは乱闘騒ぎを起こす。またモナガンという兵士はドイツ兵を個人的に捕虜にし、アメリカに連れて帰るという。同性愛の暗示はこのドイツ兵の周囲に現われるが、非常に微妙なほのめかしであるため、まったくそれとは気づかない読者もいる。ところが作品批評の基調は同性愛に基づいた解釈を支持しており、一度そのような解釈を知ると、それ以外の解釈は考えにくいほど説得力がある。どうしてこのようなことが起こるのかを、関連性理論の枠組みで考えてみたい。

4.2. 二重の指示付与

この作品中では登場人物同士の会話がかみあわないことが多く、それは人物間の意思疎通の齟齬の表示となっている。そのような全体的な構造があるため、読者は対話のつながりに違和感があってもそれに引っかからずに通り過ごしてしまう。例えば次のくだりを見てみよう。

(6) "I'll fight you," Comyn told Monaghan. "I'll give you the shilling."
"All right," Monaghan said. He drank again.
"We are all brothers," the subador said. (*CS* 410)

奇妙なやりとりであるが、けんかをふっかけている相手に硬貨をやるというのも、イギリスでは募兵者に一シリングが供与されたという背景知識があれば納得できないことはない。しかしここでは "fight"や"brothers"は二重の意味付与を与えられ、裏面の意味を持つように思われるのである。このけんかを吹っかけている男コミンは、今度はモナガンが連れているドイツ兵に向かってこう言う。

(7) "I'll fight him," Comyn said.
"I'll be damned if you will," Monaghan said. "He's mine." ((*CS* 411)

モナガンはドイツ兵が自分のものだから、コミンが彼を痛い目に合わすのは駄目だと言っているのだろうか。モナガンは彼に暴行を加えるつもりはなく、アメリカに連れて帰りたいと思っている。また"I'll make a man of you. Drink." (412)とこのドイツ兵に酒を飲ませて、一人前の男にしてやると言い張っている。確かにあとで自分がさんざん痛めつけるため、他の男に手を出させないという解釈も可能だが、やはり何か妙である。さらにモナガンは

(8) "I like fighting," he said . . . "I even like being whipped." (*CS* 426)

とけんかは好きだが、逆に痛めつけられるのだって嫌いではないと言う。この辺りで読者はいわば "fight"という語が何かルースに使用されているのに気づくはずだと思われる。結論から言うとここでは "fight"は同性愛的な性行動を暗示している。この作品中には状況全般に対して達観していて、つねに冷静で哲学的なコメントをするインド人中隊長が登場するが、彼の台詞が一連の発話の弱い推意の解釈にヒントを与えるような前提を作り出している。

(9) "What fool would rather fight than fush? All men are brothers . . ." (*CS* 426)

女を口説くより男同士で"fight"するのが良いなどというのは愚かだと彼は言う。 "All men are brothers"という表現は、時には仲間のけんかをいさめるという状況に関係なく発話されることもあり、例えば「けんかをやめなさい」と言った強い推意以外の意味の存在を示唆しているように読めるのである。しかしこれらの用例では、同性愛の示唆という弱い推意は、より強い別の推意を排除することはない。

4.3. とっさの名付け(spontaneous dubbing)

さて作中には他の登場人物としてアメリカ南部出身のブランドという男がいて、モナガンがドイツ兵を連れて行きたいと言い張ることの裏の意味に、つねに読者の興味を喚起する役目を果たしている。

(10) "What do you want with him?"
"Because he belongs to me," Monaghan said. (*CS* 412)
(11) "But why do you want to take him back with you?" (*CS* 416)
(12) "You going to take him with you?" (*CS* 426)

このような表面的には同一の意味表示を持つと思われる発話の執拗な反復によって、読者は他の可能な推意の解釈へと誘われてゆく。これは4.2.のインド人中隊長の"All men are brothers."という発話の執拗な反復と同様である。そこに確かに何かあると意識し始める読者は、コミンとモナガンがドイツ兵を連れて暗がりへと入ってゆくときにブランドが口にする台詞から同性愛への暗示を読み取ることができる。多くの批評が同性愛の存在の明示的典拠とするのは次のくだりである。

(13) "What will they do with him?" Bland said. "Prop him in the corner and turn the light off? Or do French Brothels have *he-beds* too?" (*CS* 427)

この箇所は「フランスの売春宿には男用ベッドもあるのだろうか？」の意と解されているが、"he-beds"というとっさの名付けによる

造語がそのような推意を必ず生じるかどうかは微妙であり、弱い推意の例と言えよう。だがここで "or"が導く節は通常あまり可能ではないと思われるような事態を示すと考え、brothel の百科事典的情報へのアクセスが娼婦が金銭で体を売る場所という想定をもたらすならば、普通の brothel が指示する意味範疇の反対方向へと向かう分析的解釈によって、上述の「男用のベッド」という解釈がアド・ホックに形成されると考えることにさほどの無理はなかろう。

4.4. 読者の既存想定の操作と遡及的な弱い推意の発生
上述の三人が物陰に入っていった後の記述が(14)である。

(14) From far away came *the shouting*, on that sustained note, feminine and childlike all at once, and then the band again, brassy, thudding, like the voices . . . . (*CS* 428)

"fight"の語の頻繁な使用の記憶が頭にある読者は、 "shouting"の原因を何らかの肉体的な接触、暴力的であれ、性的なものであれ、と感じるだろう。また声の主はドイツ兵だと推量すると、 "feminine and childlike"とあることから彼が何らかの男性として屈辱的な仕打ちを受けていると考える。またこの推論を補助する既存想定が先行する発話によって刷り込まれている。

(15) "In your music a few of you have felt, tasted, lived, the true brotherhood . . . . " (*CS* 413)

これは先のインド人中隊長の台詞であるが、ここでは音楽と "brotherhood"の近接性が示唆されている。また他の箇所でも同性愛の暗示と音楽への言及、または音楽の出現、は隣り合わせる形になっており、この連想関係を固定するのに役立っている。

さてこのような形で発話解釈を導く想定の集合への操作がさまざまになされてきた後に、作品の最後になって(13)、(14)の発話が登場する。そしてこれらの発話は、もし同性愛を示唆する弱い推意が生じうるとするならば、そのような解釈が妥当だとされうる一番の典拠になりうる箇所と見なされる。そして一度そのような弱い推意が獲得されれば、それに先行していた幾つかの意味が曖昧だった発話も、遡及的に一挙に同性愛的な弱い推意を生じる発話として理解されうるような構造になっているのである。

5. まとめ

本論では文学批評の領域ではすでに自明とされている同性愛の観点からの作品解釈を、関連性理論のタームで説明しなおすことを試みてきた。しかし特に弱い推意が対象となると、それが多様な解釈が可能であるような推意であるということもあって、分析の手続きはどうしても主観的に見えてくる。さらに分析の説得性を高めるためには、弱い推意の発生を、その発話解釈の場面に存在すると思われる諸想定と命題形式の演算過程の形式化によって明示的に示すことが不可欠であろう。しかし文学作品を対象にこの作業を行うと、簡単な場面における発話行為を分析するにもかなり複雑で紙幅をとる形式化が必要になり、そのことが関連性理論が文学テキストを考察対象にしづらいことの一因かとも思われる。

参考文献

Blakemore, Diane (1992) *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*, Blackwell, Oxford.
Carston, Robyn (2000) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Verbal Communication*, Blackwell, Oxford.
Carston, Robyn (2001) "Relevance Theory and the Saying/Implicating Distinction," *UCL Working Papers in Linguistics* 13, 1-34.
Faulkner, William. (1995, 1950) *Collected Stories of William Faulkner*. Random House, New York.
Green, Keith (2000) "Creative Writing, Language and Evaluation," Sheffield Hallam Working Papers on the Web 2, 2000.
東森勲(1996)「メトニミー理解と関連性理論」龍谷大学社会科学研究所『社会科学研究年報』26, 61-86.
東森勲(1997)「メトニミーによる意味変化と関連性」『神戸女学院大学論集』 44(2), 1-42.
東森勲(1998a)「談話と関連性」『神戸女学院大学論集』44(3)41-67.
東森勲(1998b)「借用語と関連性理論」『神戸女学院大学論集』45(1),1-28.
東森勲(1999)「In other words と認知語用論」『神戸女学院大学論集』 46(1), 1-27.
東森勲(2000)「シェークスピアの作品における談話のつなぎ語の意味と文法化」『神戸学院大学論集』47(2), 66-89.
Higashimori, Isao and Deirdre Wilson (1996) "Questions on Relevance," *UCL Working Papers in Linguistics* 8, 111-124.
Noh, Eun-Ju (2000) *Metarepresentation: A Relevance-Theory Approach*. John Benjamins, Amsterdam.
Pilkington, Adrian (2000) *Poetic Effects*, John Benjamins, Amsterdam.
Quirk, Randolf et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
Reboul, Anne (1989)"Relevance and Argumentation: How Bald Can You Get," *Argumentation* 3, 285-302.
塩田英子 (2001)「文字テロップと推論モデル」『表現研究』74, 47-56.
Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1985/1986) "Loose Talk," The Aristotelian Society, *The Proceedings New Series* Vol.LXXXVI, 153-171.
Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986, 1995) *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.
山梨正明 (2000b)「関連性理論のアプローチの批判的検討」『英語青年』第146 巻.第7号, 427-430.

タイ人日本語学習者の終助詞「けど」使用について

夫　明美、セナ　クワンチラー
東北大学

1. 研究の目的

第二言語として日本語を学習するタイ人による終助詞「けど」の使用を学習レベルと関連付けて考察する。

2. 背景

a. モダリティの形式と機能

・話者が命題に対して持つ心的態度（益岡・田窪 1992）、opinions and attitudes（Lyons, 1977）

・モダリティのもつ「polypragmatic function」(Coates,1987)

b.中間言語語用論（Interlanguage Pragmatics:ILP）の先行研究：発話行為中心（Ellis, 1994; Kasper & Schmidt, 1996）

3. 先行研究

3. 1.第二言語学習者のモダリティ習得（Bardovi-Harlig & Hartford, 1993; Hyland, 1994; Kärkkäinen, 1992; Salsbury & Bardovi-Harlig, 2000; Sawyer, 1992）

① 母語話者と学習者は異なったモダリティ形式を使用する

② 学習者のレベルが向上すると母語話者とモダリティ使用のパターンが類似するが、母語話者レベルには達しない

③ 文法的な制約が少ないモダリティ形式は（I think, maybe）は制約がより多い形式よりも（法助動詞）早期に習得される

3. 2. 日本語終助詞「けど」のもつ語用論的機能

a. 情報提供

- 佐藤（1993：46）「情報の提供を暗に求めるサイン」
- 白川(1996：16)「条件の提示」
- 内田(2001：43)「要求発話の前置き情報提供」

b. 意見伺い

- 三原(1995):「～と思うけど。」は自分の考え・意見を表出する。
- 内田(2001):「自分はこれこれと思う。それに対して聞き手はどう思うか」
- 佐藤(1993): いきなり直接的な言語行動をとることをせずに、相手の反応を伺い、それに応じてより効果的な情報提示の仕方を模索する→「意向伺いの言いさし」

c. やわらげ

- 尾崎(1981：47):円滑なコミュニケーションのために、音調、終助詞、文末でのぼかした表現が用いられる→「やわらげ技術」

＊　このように「やわらげ」のニュアンスが含まれているので、日本語学習者は敬語としてフォーマルな形を多用していることが指摘されている。

- 水谷(1985：97): 文を「全部言ってしまわずに相手が参加する余地を残すほうが、遠慮深く謙虚」としている。→「遠慮表現」

- Nakayama, Ichihashi-Nakayama（1997):「けど」の機能は文法的に譲歩接続詞（Concessive）→ 背景的情報(Background）→ やわらげ(Softening)という順序で発展して来たと指摘している。

4. リサーチクエスチョン

1. 日本語の会話で中•上級レベルのタイ人日本語学習者は様々な語用論的機能を持つ「けど」をどのように使用しているのか？その際、その使用が先行研究で指摘されている「けど」とどのような類似点•相違点をもつのか？
2. 学習者のレベルによって「けど」の使用が質的にも量的にも異なるのか？

5. 研究方法

5.1 被験者

①タイ人日本語学習者(20 代)：中・上級レベル 4 名（男性 2 名(TM1, TM2)、女性 2 名(TF1, TF2))
②日本語母語話者(20-30 代)：男性 4 名(JM1, JM6, JM7, JM11)、女性 4 名（JF2, JF3, JF8, JF10)

5.2 データ収集方法

日本語母語話者との雑談を 30 分間録音し、文字化した。学習者 1 名につき会話を 3 回とり、（初対面 2 回、友人関係 1 回）、合計 12 組、360 分の会話を分析した。

6. 結果および考察

6.1 タイ人日本語学習者の文末の「けど」の使用

【表 1　タイ人日本語学習者による「けど」の使用回数】

文末の「けど」の機能	TM1（超上）	TF1（上）	TF2（上）	TM2（中）
情報提供（話題の提示「わからないけど」）	42（8）	32（5）	14（1）	5（1）
意見を述べ、聞き手の意見を問う	13	20	4	-
やわらげ	13	5	2	-
発話の役割交代	6	3	1	-
その他	-	4	1	1
合計	74	64	22	6

6.2 文末の「けど」の各機能

6.2.1. 情報提供

(1)

TF2: うん、うん。チケットなんか高い？
JF8: そうでもないよ。行き帰りで 8 万ぐらい、8 万 9 万ぐらい、往復で。ニュージーランドね。
TF2: はい。んん。いいね。なんか、あそこには、日本人が結構多いと聞いたことある**けど**。
JF8: うん うん。オストラリアとね。ニュージーランドが。

A. 不確かな情報を提供し、その真偽を問う
B. 事実情報の提供
C. 話題の提示

D. 情報の挿入

E. 話の途中に挿入

6.2.2 意見伺い

(2)

TF2: でも、構想発表はすごい心配するよ、私。
JF8: 私、なんかになるとかもっとだめのかなあ、それじゃ
TF2: 日本人の場合は大丈夫と思う**けど**。
JF8: いや、そういう関係ないと思うよ。でも

6.2.3 やわらげ

(3)

JF2: 名古屋大学？
TM1: や、違います**けど**。
JF2: んー
TM1: まあ、東京、東大。
JF2: すごーい。そうなんだ。あああ

6.2.4 発話の役割交代（turn-taking）

(4)

TM1:なんとというかなあ。夏が、うん、梅雨もないし、今年(梅雨がない？)や、今年、ない、ないじゃないですか。まあ
JM1: 雨が少なかったり？
TM1: ですよね。で、なんか、んん、まあ、よくわかんない**けど**。
JM1: 生活しにくいですか？

6.2.5 話し手の謙遜

(5)

TF2: じゃ、上手そうですね。
JF2: あ、そうに見えますか？
TF2: うん
JF2: 実は、実は、下手くそなの。
TF2: 私はすごい苦手だ**けどー**。
JF2: ええ、そうなの？
TF2: あまりできない。

6.2.6 話のトピックを変える

(6)

JM11: 毎年
TM2: まいとち そう そう 毎年
（他の人：タイの人「さ し す せ そ」言えるんですか？）
TM2: じゃ、言えないよ。
JM11: たぶん 僕は 言えると思ってる。
TM2: 私だけです**けど**。
ね うん それで、あのう、小さい町と なんか 何 記念の町みたいな 記念
JM11: それ 長崎 広島 ですか？

7. まとめ

- タイ人日本語学習者は、情報提供、意見伺い、やわらげ、発話の役割交代、話し手の謙遜、話のトピックを変えるという機能で、「けど」を用いていることがわかった。
- 先行研究でよく指摘されている文末の「けど」の機能、すなわち、①情報提供、②意見伺い、③やわらげという機能のほかに、タイ人日本語学習者は発話の役割交代、話し手の謙遜、話のトピックを変えるという機能なども使用している。

- 学習者の日本語のレベルによって、「けど」の使用回数の序列的な変化、すなわち、学習者の日本語レベルが高くなると「けど」の使用が増加していくという傾向がある。
- 学習者のレベルと「けど」使用の質・量的な増加傾向の関係は、ILP の先行研究の「学習がすすむほどモダリティ使用が質・量的に向上する」という報告と一致する。
- 「けど」の使用例を分析すると、すべての学習者が情報提供の「けど」を用いているので、この機能は学習しやすいものと考えられる。超上級と上級の学習者と比べると、中級の学習者にとっては意見伺い、やわらげ、発話の役割交代という「けど」の機能が身についていないと思われる。

8. 今後の課題

- タイ人日本語学習者の「けど」の習得過程を考察する必要性 → 縦断的観察による追従研究
- 日本人母語話者からベースラインデータを収集し、学習者のふるまいと比較する必要性

【参考文献】

Bardovi-Harlig, K., & Hartford, B. 1993.Learning the Rules of Academic Talk: A longitudinal Study of Pragmatic Development. *Studies in Second Language Acquisition, 15*, 279-304.

Coates, J. 1987. Epistemc Modality and Spoken Discourse. *Transactions of the Philological Society, 85,* 100-131.

Ellis,R.1994.The Study of Second Language Acquisition,Oxford :Oxford University Press.

Hyland, K. 1994. Hedging in Academic Writing and EAP Textbooks. *English for Specific Purposes, 13,* 239-256.

Kärkkäinen, E. 1992. Modality as a Strategy in Interaction: Epistemic Modality in the Language of Native and Non-native Speakers of English. In L. Bouton & Y. Kachru Eds., *Pragmatics and Language Learning, Monograph 3,* 197-216. University of Illinois, Urbana-Champaign: Division of English as an International Language.

Kasper, G. & Schmidt, R. 1996. Developmental Issues in Interlanguage Pragmatics. *Studies in Second Language Acquisition, 18,* 149-169.

国立国語研究所. 1951. 『現代語の助詞・助動詞－用法と実例－』秀英出版

益岡隆志・田窪行則. 1992. 『基礎日本語文法－改訂版－』くろしお

三原嘉子. 1995.「接続助詞ケレドモの終助詞的用法に関する一考察」『横浜国立大学留学生センター紀要』第 2 号, 79-89

水谷信子. 1985. 『日英比較　話ことばの文法』くろしお出版

Nakayama,T and Nakayama,K.1997.Japanese Kedo: Discourse Genre and Grammaticization. *Japanese/Korean Linguistics*.Vol6, Ed. by Ho-min Sohn and John Haig,607-18.Stanford,California:CSLI Publications.

尾崎明人. 1981.「外国人の日本語の実態―上級日本語学習者の伝達能力について―」『日本語教育』45 号, 41-52

――― .1996.「追跡調査にみられる終助詞「ね」の使用状況と変化」『日本語研修コース修了生―追跡調査報告書 2』名古屋大学留学生センター, 151-160

Salsbury, T., & Bardovi-Harlig, K. 2000. Oppositional talk and the acquisition of modality in L2 English. In B. Swierzbin, F. Morris, M. Anderson, C. A. Klee & E. Tarone Eds., *Social and cognitive factors in second language acquisition* .pp.56-76. Somerville, MA: Cascadilla Press.

佐藤勢紀子. 1993.「言いさし「....が/けど」の機能―ビデオ教材の分析を通じて―」『東北大学留学生センター紀要』第 1 号, 39-48

佐藤勢紀子. 1994.「中上級日本語教育における中断文「....が/けど」の扱い方」『東北大学留学生センター紀要』第 2 号, 17-28

Sawyer,M.1992. The development of pragmatics in Japanese as a second language :the sentence-final particle NE. In G.Kasper Ed., *Pragmatics of Japanese as Native and Target Language*. Second Language Teaching & Curriculum Center , University of Hawai I at Manoa, 85-125

白川博之. 1996.「「ケド」で言い終わる文」『広島大学日本語教育学科紀要』6 号, 9-17

内田安伊子. 2001.「「けど」で終わる文についての一考察　―談話機能の視点から―」『日本語教育』109 号, 40-49

談話標識－読解過程における考察－*

小谷克則
通信総合研究所/関西外国語大学大学院
kat@khn.crl.go.jp

吉見毅彦
シャープ(株)
yoshi@isl.nara.sharp.co.jp

井佐原均
通信総合研究所
isahara@crl.go.jp

0. はじめに

本稿は、談話標識(Discourse Marker)の読解過程(Reading Process)における効果を考察する。特に談話標識が読解過程においてどのような文処理の効果をもたらすかに焦点をしぼる。談話標識の読解過程における文処理効果に関して実験を行った研究の一つに、Chaudron & Richards (1986)があげられる[1]。本稿は、Chaudron & Richards (1986)を概観し、そこでの談話標識の分類を再考する。

本稿では、まず1節において、談話標識に関する先行研究を概観する。そして、Chaudron & Richards (1986)で提示された談話標識の分類を再検討し、再分類の必要性を提案する。2節においては、言語理解・解釈に必要な言語処理過程の一つとして、読解過程を位置付ける研究を概観する。そして、読解過程における談話標識の効果を検証する実験の必要性を検討する。

1. 談話標識

本節は、談話標識に関する先行研究の概観を概観する。この概観にもとづき、Chaudron & Richards (1986)の談話標識の分類を再考する。さらに、談話標識を単独発話として生起されるかどうかということにもとづいて再分類する。

談話標識を扱う研究には、文法的特徴にもとづくアプローチ(Zwicky 1985)、関連性理論(Sperber & Wilson 1986)にもとづくアプローチ(Blakemore 1987/1988)や結束性にもとづくアプローチ(Schiffrin 1987)など、さまざまなアプローチによる幅広い研究があげられる[2]。これらの先行研究が示唆する談話標識の特徴として、(i)連結性(Connectivity)、(ii)選択性(Optionality)、(iii)非真理意味条件性(Non-truth-conditionlity)があげられる(Schiffrin 1987、Maschler 1994、Fraser 1990/1996)[3]。

しかし、Schourup (1999)が提示するように、談話標識の「定義づけ」や「機能」は、いまだ包括的な統一見解に至っていないと考えられる[4]。たとえば、「連結性」と呼ばれる特徴は(1a)の例で示されるような談話発動の初期段階に用いられる談話標識には認められない。「選択性」に関する特徴も、(1b-c)が示すように、談話標識の有無によって解釈が異なる場合、認められない。また、「非真理意味条件性」に関する特徴も、(1d)に示される副詞として機能するWELLには認められない。

(1) a. *Well, …*
b. *Well, y'know…*
c *Y'know…* (2b≠2c)
d. She did *well* on her bar exams.

本稿で考察対象とする談話標識は、Chaudron & Richards (1986)の実験において用いられた要素に限定する。Chaudron & Richards (1986)はMeyer et al. (1980)の研究をもとに、談話標識をMicro-markerとMacro-markerの二種類に分類した。この分類は、談話標識の認知処理過程における機能の違いによるものであった[5]。

(2) a. Micro-Markers
well, OK, now, and, right, all right, at that time, after this, for the moment, eventually, so, then, because, both, but, only, on the other hand, of course, you can see, you see, actually, obviously, unbelievably, as you know, in fact, naturally

---

* 本稿の作成にあたり、貴重な意見や助言を頂いた橋本喜代太先生、Schourup, Lawrence先生、竹内和広氏、仲本康一氏、谷村緑氏他、大勢の方々にお礼を申し上げます。本稿における不備や誤りは、もちろん、筆者の責任である。

[1] 談話標識の処理労力軽減は、読解時間(Haberlandt 1982, Mills & Just 1994)、記憶容量(Caron et al. 1988)、理解度と質疑応答時間(Mills & Just 1994)などによる実験によって認められる。一方、処理労力軽減とは対照的に読解時間を増加させるなどの報告もある(Murray 1995, 伊藤・阿部 1988)。この対照的なふるまいに関する統一的な説明を試みた研究に甲田 (2001)があげられる。甲田 (2001)は接続表現によってもたらされる理解の方向性と読み手の経験的基盤をもとに保有する理解の方向性との相関を考察する。

[2] これまでの談話標識研究の概観としてSchourup (1999)があげられる。

[3] この他の特徴として、(i)節と弱い結合性をもつ(Weak Clause Association)、(ii)談話の開始に現れる(Initiality)、(iii)口語に用いられる(Orality)、(iv)統語的カテゴリーが多様である(Multi-categoricity)などがあげられる。

[4] また、Schourup (2000)では談話標識研究を困難にしていると考えられる特徴があげられている。その特徴には(i)Opacity、(ii)Co(n)textual inference、(iii)Reduction、(iv)Accommodationの四点があげられる。

[5] 概略、Micro-Markerはボトム・アップ過程において機能し、Macro-Markerはトップ・ダウン過程において機能すると考えられる(Meyer et al. 1980)。読解過程については次節において立ち返る。

b. Macro-Markers

what I'm going to talk about today is something, you probably know something about already, what [had] happened [then/after that] was [that], that/this is why, to begin with, the problem [here] was that, this/that was how, the next thing was, this meant that, one of the problems was, here was a big problem, what we've come to by now was that, another interesting development was, you probably know that, the surprising thing is, as you may have heard, now where are we, this is how it came about, you can imagine what happened next, in this way, it's really very interesting that, this is not the end of the story, our story doesn't finish there, and that's all we'll talk about today

認知過程における分類にもとづくと、同一範疇であれば同様の効果が認知過程において認められると予測される。しかし、同じ範疇とされる Micro-marker であっても、認知過程におよぼす効果は一様でないとの報告がある。たとえば、甲田 (2001)は AND と BUT の文処理における違いを提示している。このように、談話標識が認知過程の文処理においてみられる効果により分類することは妥当ではないと考えられる。そこで、Chaudron & Richards (1986)における談話標識の分類の再検討を試みる。

まず再検討するにあたり、談話標識として認定する要素やその分類の必要性を考える。本稿は、Chaudron & Richards (1986)の分類を基本的には妥当なものであると考える。したがって、考察対象である談話標識は、Chaudron & Richards (1986)が実験に用いた要素を談話標識として想定する[6]。また、分類の必要性は、Chaudron & Richards (1986)の実験結果において観察される事実にもとづく。しかし、談話標識を、Chaudron & Richard (1986)のいう読解過程における機能により分類したのでは、同一範疇内の談話標識の異なる文処理効果が説明できないという問題がのこる。そこで、本稿は、談話標識の一つの分類基準として、単独発話の可能性を提案する。

Lawrence Schourup (個人談話)は、談話標識が関連性理論における表出命題内容を構成しないことより、話者の心的状態を表出する「ジェスチャー」として考える[7]。本稿が提案する単独発話の可能性による分類は、この「ジェスチャー」としての談話標識の考えにもとづくものである。「ジェスチャー」によって示される「身振り」は、言語への依存性によって大きく 2 種類に分類される。たとえば、両手の平を上に向け肩をすぼめるジェスチャーは、何の発話もともなわず、無言での使用が可能であるのに対し、道順を示す場合に用いられる指差しなどは、無言で用いられると、本来の「指差し」の機能が失われていると考えられる。本稿では、このジェスチャーの用法の違いを、言語に対する依存性としてとらえる。さらに、このような非言語的ジェスチャーにみられる言語への依存性が、言語的ジェスチャーである談話標識にも反映されると考える。

談話標識 WELL は、単独で発話を構成することが(3a)に観察される。その一方で(3b)が示すように、Macro-marker は単独発話の構成は困難であると考えられる。この区別にもとづくと、(2)に示される要素は、(4)にみられるように区分される[8,9]。

(3) a. Well/Whell!

b. *That's why!

(4) a. Revised Micro-Markers

well, OK, now, and, right, all right, after this, for the moment, eventually, so, then, both, but, of course, you can see, you see, actually, obviously, unbelievably, as you know, in fact, naturally

b. Revised Macro-Markers

at that time, because, only, on the other hand, what I'm going to talk about today is something, you probably know something about already, what [had] happened [then/after that] was [that], that/this is why, to begin with, the problem [here] was that, this/that was how, the next thing was, this meant that, one of the problems was, here was a big problem, what we've come to by now was that, another interesting development was, you probably know that, the surprising thing is, as you may have heard, now where are we, this is how it came about, you can imagine what happened next, in this way, it's really very interesting that, this is not the end of the story, our story doesn't finish there, and that's all we'll talk about today

2. 読解過程における談話標識

本節では、談話標識が読解過程におよぼす影響を考察する。人間の言語理解を一つの認知過程ととらえる研究において想定される過程には、ボトム・アップ過程(LaBerge & Samuels 1974)とトップ・ダウン過程(Goodman 1967/1968, Smith

---

[6] Chaudron & Richards (1986)が談話標識と考える要素には一般に「談話標識」として認められない要素も認められる(Lawrence Schourup 個人談話)。

[7] ここでいう「ジェスチャー」とは一般的な用語として用いる。

[8] これ以外の分類方法として標識の組み合わせ可能性があげられる。Macro-Marker に分類される標識は、(i)に示されるように基本的に共起しないと考えられる。しかし、この一般化のみでは必ずしも(ii)が示すように分類されない。

(i) **To begin with*$_{DM1}$ *that's why*$_{DM2}$

(ii) *To begin with*$_{DM1}$ *the surprising thing is*$_{DM2}$ …

[9] 談話標識が単独発話において用いられるかどうかには統語的、意味的要因によるものも考えられる(Lawrence Schourup 個人談話)。

1971/1978)があげられる[10]。ボトム・アップ過程は、文字認識から始まり、語彙情報や統語情報などを構成的に処理していくことにより、テキスト理解にいたる過程をさす。また、トップ・ダウン過程は、背景的知識から推論を行い、スキーマ活性化によりテキスト理解にいたる過程をさす(van Dijk 1977, Rumelhart 1977, Meyer 1984, Carrell & Eisterhold 1983, Carrell 1984)。また、これらの過程は並列的に行われると考える立場もある(Adams & Collins 1979)。

Chaudron & Richards (1986)は、ボトム・アップ過程とトップ・ダウン過程が同時に生じるモデルを採用し、認知過程における談話標識の効果に関する実験を、第二言語として英語を学習する学習者対象に行った。Chaudron & Richards (1986)は、Meyer et al. (1980)の示唆にもとづき、談話標識をトップ・ダウン過程にかかわる Macro-marker とボトム・アップ過程にかかわる Micro-marker の二種類を想定する。この二種類の談話標識が認知過程に及ぼす影響に関して、Chaudron & Richards (1986)は次の仮説を提出し、その検証実験を行った。

(1) a. Micro ver.: 何の談話標識も存在しない場合より、Micro-marker だけの場合、理解は深まる。
b. Macro ver.: Micro-marker だけの場合より、Macro-marker だけの場合、理解は深まる。
c. Micro-Macro ver.: (1a-b)の場合より、Micro-marker と Macro-marker の両方の場合、理解は深まる。

(1)の検証に用いられたのは、(1a-c)の仮説にもとづき加工を施されたテキスト(2)であった。被験者には、それぞれのタイプのテキストが割り当てられた。そして、被験者のテキスト理解度の評価はクローズテストの再現率により行われた。この実験を通じて得られた結果より、Chaudron & Richards (1986)は、談話標識の認知処理過程における処理労力の軽減が Macro-marker には認められるが、Micro-marker には認められないと結論づけた。

(2) a. *Baseline* ver.: The United States came into existence officially in 1783 after eight years of war…
b. *Micro* ver.: Well, the United States came into existence officially in 1783 after eight years of war…
c. *Macro* ver.: To begin with, the United States came into existence officially in 1783 after eight years of war…
d. *Micro-Macro* ver.: Well, to begin with, the United States came into existence officially in 1783 after eight years of war…

Chaudron & Richards (1986)の実験により、談話標識が読解過程において処理労力の軽減をになう場合とそうでない場合があるという結果が示された。Chaudron & Richards (1986)は、この違いを談話標識がボトム・アップ過程、あるいはトップ・ダウン過程のどちらにおいて機能するかということによって分析している。しかし、この分析では同一種類の談話標識が文処理において異なる効果をもたらすことがうまく説明されない。本稿の提案する分析においては、Micro-marker と Macro-marker の分類は、談話標識の言語への依存性により行われるため、文処理にみられる効果は独立した問題としてとらえることができる。同一範疇の談話標識にみられる文処理効果の違いは、個々の談話標識の文処理にかかわる効果を調べることによって説明されると考えられる。

3. 今後の課題

本節では、本稿に残された課題を述べる。まず Chaudron & Richards (1986)らの研究は、第二言語学習者の認知過程における談話標識の機能に関するものである。このような第二言語学習においては、母語からの干渉の有無が検討材料としてあげられる。たとえば、尾崎 (2002)が示唆するように、文字認識の過程自体には言語差はないと考えられる(Perfetti, Zhang & Berent 1992, Perfeti & Zhang 1995, Wydell, Patterson & Humhreys 1993)。しかし、文字認識過程において、母語による干渉が認められる場合があることが報告されている(Harada 1988)。仮に、談話標識の効果にも母語における談話標識の機能にみられる差が反映するとした場合、言語間にみられる談話標識の機能を比較する必要がある。

また、実験の検証方法も考慮する余地がある。Chaudron & Richards (1986)は、認知過程の測定にクローズテストの再現率を用いることによって被験者の内省を検証した。最近では、計測機器の進歩により、客観的に認知過程を測定することが可能になってきた。たとえば、コンピュータによる認知時間の計測をはじめ、眼球運動や脳波などを測定することによって認知過程が検証される(成田・井佐原 2002, 鈴木 2002, 荻原 2002)[11]。

---

[10] 言語理解・解釈には言語に関する認知処理だけではなく、テキストの構成(山本 2001)やテキスト・タイプ(宮浦 2002)などさまざまな要因が関与すると考えられる。本稿では言語に関する認知過程に焦点をしぼる。

[11] 推論を客観的に判断することは田近 (2002)が示唆するように困難であると考えられる。推論過程の判断テストの一つとして、たとえばテクストの「オチ」を解釈できたかどうかを被験者の表情によって判断する方法がある(宮浦国江 個人談話)。

参考文献

Adams, M. J. & A. Collins 1979. "A schema-theoretic view of reading," in R. Freedle (ed.) *Advances in Discourse Processes, Vol. II: New Directions in Discourse Processing*, Norwood, N.J.: Ablex.

Blakemore, D. 1987. *Semantic Constraints on Relevance*, Oxford: Blackwell.

Blakemore, D. 1988. "*So* as a constraint on relevance," in R. Kempson (ed.) *Mental Representation: The Interface between Language and Reality*, Cambridge: Cambridge UP.

Caron, J., H. C. Micko & M. Thuring 1988. "Conjunctions and the recall of composite sentences," *Journal of Memory & Language* 27: 309-323.

Carrell, P. L. 1984. "Evidence of a formal schema in second language comprehension," *Language Learning* 34-1: 87-112.

Carrell, P. L. & J. C. Eisterhold 1983. "Schema theory and ESL reading pedagogy," *TESOL Quarterly* 17-4: 553-573.

Chaudron, C. & J. C. Richards 1986. "The effect of discourse markers on the comprehension of lectures," *Applied Linguistics* 7-2: 113-127.

van Dijk, T. 1977. "Semantic macro structures and knowledge frames in discourse comprehension," in P. Carpenter & M. Just (eds.) *Cognitive Processes in Comprehension*, London: The British Council.

Fraser, B. 1990. "An approach to discourse markers," *Journal of Pragmatics* 14: 383-395.

Fraser, B. 1996. "Pragmatic markers," *Pragmatics* 6: 167-190.

Haberlandt, K. 1982. "Reader expectations in text comprehension," in J. Le Ny & W. Kintch (eds.) *Language and Comprehension*, Amsterdam: North-Holland.

Kamiya-Harada, F. 1988. *The Effect of Three Different Orthographic Presentations of a Text upon the Reading Behaviours of Native and Non-Native Readers of Japanese: An Eye-Tracking Study*, Ph.D. diss., The Ohio State University.

伊藤俊一・阿部純一 1988.「文章理解における接続詞の働き」,『心理学研究』 59－4: 241－247.

甲田直美 2001. 『談話・テクストの展開メカニズムー接続表現と談話標識の認知的考察ー, 東京: 風間書房.

LaBerge, P. & S. J. Samuels 1974. "Toward a theory of automatic information processing in reading," *Cognitive Psychology* 6: 293-323.

Maschler, Y. 1994. "Metalanguageing and discourse markers in bilingual conversation," *Language in Society* 23: 325-366.

Meyer, B. J. F. 1984. "Text dimensions and cognitive processing," in H. Mandl, N. L. Stein & T. Trabasso (eds.) *Learning and Comprehension of Text*, Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum.

Meyer, B.J.F., D. M. Brandt, & G. J. Bluth 1980. "Use of the top-level structure in text: key to reading comprehension of ninth-grade students," *Reading Research Quarterly* 16-1: 72-103.

Mills, K. K. & M. A. Just 1994. "The influence of connectives on sentence comprehension," *Journal of Memory and Language* 33: 128-147.

宮浦国江 2002.「テクストタイプ」, 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編)『英文読解のプロセスと指導』, 東京: 大修館書店.

Murray, J. D. 1995. "Logical connectives and local coherence," in R. F. Lorch & E. J. O'Brien (eds.) *Sources of Cohesion in Text Comprehension*, Hillsade N.J.: Lawrence Erlbaum.

成田真澄・井佐原均 2002.「コンピュータによる支援」, 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編)『英文読解のプロセスと指導』, 東京: 大修館書店.

荻原裕子 2002.「脳波研究の利用」, ネウストプニー, J. V.・宮崎里司(編)『言語研究の方法』, 東京: くろしお出版.

尾崎恵子 2002.「文字」, 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編)『英文読解のプロセスと指導』, 東京: 大修館書店.

Perfeti, C. A. & S. Zhang 1995. "Very early phonological activation in Chinese reading," *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition* 21: 24-33.

Perfetti, C. A., S. Zhang & I. Berent 1992. "Reading in English and Chinese: Evidence for a "universal" phonological principle," in R. Frost & L. Katz (eds.) *Orthography, phonology, morphology, and meaning*, Amsterdam: North-Holland.

Rumelhart, D. E. 1977. "Toward an interactive model of reading" in S. Dornic (ed.) *Attention and Performance VI*, Hillsdale, N.J.: Lawrence Erlbaum.

Schiffrin, D. 1987. *Discourse Markers*, Cambridge, Cambridge UP.

Schorup, L. 1999. "Discourse markers," *Lingua* 107: 227-265.

Schourup, L. 2000. "Homing in on discourse marker meaning," *Eigo Gohoo Kenkyuu* 7: 1-19.

Sperber, D. & D. Wilson 1986. *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell.

鈴木美加 2002.「アイカメラによる記録の使い方」,, ネウストプニー, J. V.・宮崎里司(編)『言語研究の方法』, 東京: くろしお出版.

田近裕子 2002.「推論」, 津田塾大学言語文化研究所読解研究グループ(編)『英文読解のプロセスと指導』, 東京: 大修館書店.

Wydell, T. N., K. E. Patterson & G. W. Humhreys 1993. "Phonologically mediated access to meaning for Kanji: Is a row still a rose in Japanese Kanji?," *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition* 19: 491-514.

山本博樹 2001. 『構成標識と理解支援メカニズム』, 東京: 風間書房.

Zwicky, A. M. 1985. "Clitics and particles," *Language* 61: 283-305.

Natural Semantic Metalanguage Theory and Some Italian Speech Act Verbs

Brigid Maher

Australian National University

The Table of Conceptual Primes – English version

Substantives:	I, YOU, SOMEONE(PERSON), SOMETHING(THING), PEOPLE, BODY
Determiners:	THIS, THE SAME, OTHER
Quantifiers:	ONE, TWO, SOME, MANY/MUCH, ALL
Attributes:	GOOD, BAD, BIG, SMALL
Mental predicates:	THINK, KNOW, WANT, FEEL, SEE, HEAR
Speech:	SAY, WORDS, TRUE
Actions, events, movements:	DO, HAPPEN, MOVE
Existence, and possession:	THERE IS, HAVE
Life and death:	LIVE, DIE
Logical concepts:	NOT, MAYBE, CAN, BECAUSE, IF
Time:	WHEN(TIME), NOW, AFTER, BEFORE, A LONG TIME, A SHORT TIME, FOR SOME TIME
Space:	WHERE(PLACE), HERE, ABOVE, BELOW, FAR, NEAR, SIDE, INSIDE, TOUCHING (CONTACT)
Intensifier, augmentor:	VERY, MORE
Taxonomy, partonomy:	KIND OF, PART OF
Similarity:	LIKE (HOW, AS)

(Cf. e.g., Wierzbicka 1996; Goddard ed. 1997; Goddard and Wierzbicka eds 1994 and 2002.)

salutare 'greet', 'farewell', 'say hello to', 'say goodbye to' – examples of use

1) *Settimio salutava e scortava alle poltrone chiunque entrasse.* (De Carlo 1997: 155)
'Settimio greeted everyone who came in and escorted them to the armchairs.'

2) *[Era] mille volte piú rock... di quando l'avevo salutata la notte della sua festa di matrimonio.* (De Carlo 1997: 209)
'[She was] a thousand times more "rock" ... than when I'd said goodbye to her / farewelled her on the night of her wedding reception.'

3) *Misia ha telefonato per salutare suo figlio.* (De Carlo 1997: 296)
'Misia phoned to say hello to her son.'

4) [at the end of a letter] *Adesso ti saluto se no perdo l'aereo.* (De Carlo 1997: 360)
'I have to say goodbye now, otherwise I'll miss the plane.'

5) *Salutami Angelo / la tua mamma / tutta la famiglia...*

'Say hello from me to Angelo / your mum / the whole family'

An explication of *salutare*

(a) I want to say something to you now
(b) I think that it will be good if I say it
(c) I know I can't say things like this to you at all times
(d) I can say it now
(e) I say: I'm thinking about you now
because of this I feel something good
(f) I think that if you can you will say something like this to me at the same time

***raccomandare* – examples of use**

7) *Francesco Crispi [...] vorrebbe, recandosi in Jersey, far la vostra conoscenza e per mezzo vostro quella di qualch'altro buono. Io ve lo raccomando caldamente.*
'Francesco Crispi [...] would like, in going to Jersey, to make your acquaintance and through you, to meet some other good men. I warmly recommend/entrust him to you.'

8) *...dovette ricevere nel suo ufficio una vecchia donna che gli presentava e raccomandava una fanciulla, la propria figlia.*
'...he had to receive in his office an old woman who introduced and recommended/entrusted to him a girl, her own daughter.'

An explication of *raccomandare*

ti raccomando la persona X – 'I recommend/entrust to you person X'
(a) I say to you:
(b) I know this person (X)
(c) I think that X is a good person
(d) I think that you can do very good things for X
(e) I can't do good things like this for X
(f) I want you to do good things for X
(g) I think that you think good things about me
(h) I think that if you know that I think X is a good person
you will think that X is a good person
(i) I think that because of this you will want to do good things for X

raccomandarsi (mi raccomando)

9) *Stai attenta alla stazione, mi raccomando.*
'Make sure you're very careful at the station.'

[Lit. Be careful at the station, *mi raccomando*.]

10) *Ci muovevamo in un'alternanza assurda di gesti incuranti e gesti cauti, schiocchi e schianti e "Piano, piano" e "Mi raccomando, mi raccomando" e "Certo, certo".* (De Carlo 1997:65)
'We moved in an absurd alternation of careless gestures and cautious gestures, of cracks and crashes and "Keep it down" and "Careful, careful" [*mi raccomando, mi raccomando*] and "Sure, sure".'

11) *Dovete tradurre tutto. Mi raccomando.*
'You have to translate everything. It's very important [*mi raccomando*].'

<u>An explication of *raccomandarsi* (in the form *mi raccomando*)</u>

mi raccomando
(a) I know that something bad can happen
(b) I think that you do not know this
(c) I want you to know this
(d) I think that if you know this, you will do something
(e) I think that if you do this, maybe this bad thing will not happen
(f) because of this I say to you:
    something bad can happen
    you have to think about this
    you have to do something because of this
(g) I can't not say this

REFERENCES

Apte, Mahadev. 1974. "Thank you" and South Asian languages: A comparative sociolinguistic study. *International Journal of the Sociology of Language* 3:67-89.

Barzini, Luigi. 1964. *The Italians*. London: Hamish Hamilton.

De Carlo, Andrea. 1997/1999. *Di noi tre* [About the Three of Us]. Milan: Mondadori.

Gianduzzo, Silvano. 1987. *Curiosità divertenti: Espressioni, modi di dire, proverbi e sentenze italiani, dialettali e latini per tutti i gusti* [Entertaining Curiosities: Italian, dialect and Latin espressions, figures of speech, proverbs and maxims for all tastes]. Torino: Editrice Elle Di Ci.

Ginsborg, Paul. 1990. *A History of Contemporary Italy: Society and politics 1943-1988*. Harmondsworth, UK: Penguin.

Goddard, Cliff. 2000. "Cultural scripts" and communicative style in Malay (Bahasa Melayu). *Anthropological Linguistics* 42(1):81-106.

Goddard, Cliff. 2001. *Sabar, ikhlas, setia – patient, sincere, loyal*? Contrastive semantics of some 'virtues' in Malay and English. *Journal of Pragmatics* 33:653-681.

Goddard, Cliff (ed.). 1997. Studies in the Syntax of Universal Semantic Primitives. Special Issue of *Language Sciences* 19(3).

Goddard, Cliff and Anna Wierzbicka (eds). 1994. *Semantic and Lexical Universals: Theory and empirical findings*. Amsterdam: John Benjamins.

Goddard, Cliff and Anna Wierzbicka (eds). 2002. *Meaning and Universal Grammar: Theory and empirical findings*. Amsterdam: John Benjamins.

Grande dizionario della lingua italiana [Large Dictionary of the Italian Language]. A cura di Salvatore Battaglia et al. 1990. Torino: Unione tipografico-editrice torinese.

Hargraves, Susanne. 1992. *Whitefella Culture*. Revised edition. Darwin: Summer Institute of Linguistics.

Maher, Brigid. 2000. *Le gabbiette* or The Caged Concepts of Human Thought: An Italian version of the Natural Semantic Metalanguage. Unpublished Honours Subthesis, Australian National University.

Mizutani, O. and N. Mizutani. 1989. *Being Polite in Japanese.* Tokyo: Japan Times.

Moretti, Nanni. 1994. *Caro diario* [Dear Diary] (film). Sacher film S.r.l.

Onishi, Masayuki. 1994. Semantic primitives in Japanese. In Goddard and Wierzbicka (eds), 361-385.

Parks, Tim. 1996. *An Italian Education*. London: Minerva.

Richards, Charles. 1994. *The New Italians*. Harmondsworth, UK: Penguin.

Wierzbicka, Anna. 1987. *English Speech Act Verbs: A Semantic Dictionary.* Sydney: Academic Press.

Wierzbicka, Anna. 1991. *Cross-Cultural Pragmatics: The Semantics of Human Interaction.* Berlin: Mouton de Gruyter.

Wierzbicka, Anna. 1996. *Semantics: Primes and Universals.* Oxford: Oxford University Press.

Wierzbicka, Anna. 1997. *Understanding Cultures Through their Key Words: English, Russian, Polish, German, and Japanese*. New York: Oxford University Press.

Wierzbicka, Anna. 1999. *Emotions across Languages and Cultures: Diversity and universals*. Cambridge: Cambridge University Press.

Wierzbicka, Anna. 2001. *What Did Jesus Mean? Explaining the Sermon on the Mount and the parables in simple and universal human concepts*. New York: Oxford University Press.

Wierzbicka, Anna. Forthcoming. *The English Language: Meaning, History, and Culture.*

新聞記事コーパスにおける判断文に対する根拠の提示について

竹内和広* 仲本康一郎* 橋本喜代太** 井佐原均*
*独立行政法人通信総合研究所
**大阪女子大学

1. はじめに

人間が言語情報についてのラベル付けを行ったコーパスが自然言語処理の発展に対して果たす役割は大きい。例えば、コーパス中の文を適当な定義に従って語に分け、それぞれの語がどのような品詞であるかを人手でラベル付けを行ったコーパスが存在しなければ、近年の品詞情報解析器の精度向上はありえなかったであろう。しかし、品詞情報とは違い、語用論研究や文脈処理に役立つコーパスを考えた場合、どのようなラベルを言語データに付与することが研究の共有資源として有益であるのか、また、どのようなラベルならば信頼性の高い安定したラベル付けが可能となるかについては検討が必要となる。

著者らが所属する通信総合研究所は、国立国語研究所、東京工業大学とともに三者協力し、科学技術振興調整費開放的融合研究制度課題「話し言葉工学」の一環として、大規模な話し言葉コーパス(以下 CSJ (Corpus of Spontaneous Japanese))の開発を進めている(Maekawa ら 2000)。CSJ の主要な収録源は学会講演や模擬講演といったモノローグの日本語音声談話で、最終的には約 700 万語、時間にして 650 から 700 時間になる予定である。CSJ プロジェクトでは既に音声データを文字として書き起こす作業が進んでおり、書き起こしたデータのうち数十時間分については、品詞情報、統語情報、談話構造といった様々なレベルの言語情報ラベルを付与する計画である。

本稿の試みは、CSJ に対して談話構造ラベルをどのように設定するべきかを検討するために、既に大量に電子化され、品詞情報もほぼ確実に解析することが可能な新聞記事コーパスの分析するものであり、モノローグの話し言葉と書き言葉の共通点、相違点を議論する上での予備的調査と位置付けている。

2. 意図に基づく談話構造の分析

CSJ の談話構造をラベル付けする枠組みは、Nakatani らの談話構造解析マニュアルを参考にする。Nakatani らのマニュアルに従って談話構造がラベル付けされた音声データは既に談話構造と韻律情報の相関を分析する研究(Hirschberg 1996)など)で既に活用されており、CSJ の談話構造を試験的に分析する出発点としては適当と考えた。

談話構造の研究には、大きく分けて、文章研究に代表される記述言語学的アプローチ、文章理解のための記憶構造の研究に代表される認知心理学的アプローチ、そして、計画認識研究に代表される人工知能的アプローチの三つがある。Nakatani らのマニュアルは、このようなアプローチの中から、第三のアプローチに近い Grosz and Sidner (Grosz ら 1986)の談話構造モデル(以下 GS モデルと呼ぶ)を基本としている。GS モデルは、談話中の部分談話(以下、DS(Discourse Segment : 談話セグメント))を話し手が何故発話したかという意図(目的)を観点に談話構造を分析するモデルである。談話内の DS の関係は、DS が発話順に等位的並置される関係だけではなく、DS 間に上下関係を導入し、ある DS 間の上下関係を一方が他方の大きな談話意図を達成するための条件または手段ととらえることにより、談話全体を大きな発話意図を達成するための部分意図の階層的な組織化として分析する。

CSJ に収録される談話は、Nakatani らがこのマニュアルを適用して構造分析した談話と性質が異なるため、このマニュアルをそのまま CSJ に適用できるわけではない(CSJ の収録談話の方が相対的に談話時間が長く、内容も複雑かつ多様なものが収録されている)。そこで、CSJ の談話構造ラベルの信頼性および有益性をより高いものとするために、CSJ 中のいくつかの談話(1 談話 20 分程度のモノローグ)に対して試験的な談話構造解析を複数の作業者によって行った(高梨,小磯,渡辺 2002)。この作業では、Nakatani のマニュアルを簡略化し、1) DS の境界認定(談話の区切り目をさがす)、2) 各 DS の意図(目的)の記述、3) 隣接する DS 間の関係(上下、等位)の特定、の三つの作業を

行うことにより談話の構造を分析する。DS の最小単位となりえるのは、暫定的に 200ms 以上のポーズで分割した部分談話で、現実的には、この部分談話が複数集まったものが「最小」の意図をもつ DS となり、これが階層的に組織化され談話全体の構造を表現する。

高梨らは、この試験的作業の結果報告として、セグメント間の等位、上下関係（支配関係）の区別に作業者間でゆれの大きい部分（1人の作業者が DS 区切りとしたにもかかわらず、他の作業者はその部分を DS の区切りと必ずしもせず、DS の区切り目が一致しない部分）が存在する問題を指摘している[1]。

CSJ 談話中のゆれの大きい部分は、ゆれの質的な違いから少なくとも2つに分類することができる。1つは約 20 分の談話をいくつかの小談話として話題のまとまりに分割する部分の相違である話題の粒度の決め方に関するゆれであり、他方は、談話を最も小さな単位に分割していく時に、どの程度の長さのものを最小の発話意図をもつ発話単位とし、それをどのように組織化するかの相違である局所的なゆれである。

本稿が貢献の対象とするのは、後者の局所的なゆれである。局所的な談話構造の信頼性を上げる工夫の手がかりとして、試験的談話構造解析において、作業者が「xxx の説明」といった意図を小さな DS の意図として分析している例が多いことが挙げられる。

この問題を解決するために、著者らは、個別には単なる説明としての命題のみを提供しているに過ぎない DS が、他の DS とどのように組み合わされて上位の意図を組織的に表現するかをあらかじめ分析しておくことが、局所的な談話構造を定義する上で重要であると考えた。

3. 本稿で対象とする問題

話し言葉の DS の定義基準を設定する上で、比較対照の候補となりえるデータを用いて説明的モノローグの局所的な談話構造を分析する。我々は、既に大量の電子化データが存在し、品詞情報情報も高い精度で自動同定可能な新聞記事を調査対象に選んだ。

新聞は報道を第一義の役割とするため、新聞記事において書き手側の主観的判断が述べられる場合は、その主観判断にいたる根拠が同時に付け加えられていると考えられる。また、その根拠は、その新聞記事が記された社会での一般的読者にとって常識的にその関連を推論できる形で提示されていることが仮定できるため、説明的モノローグにおいて、主張に関しての説明がどのような DS の組織化をもって主張されるかを分析する上で適当と考えた。

判断文に関して関連する根拠を与えている例を以下に挙げる。判断文 a)の「熱い」に対して、その直後の文 b)の提示する内容を文 a)の判断に関連する根拠として推論することが可能である。

a)今年のプロ野球は熱い。
b)毎年、最下位を定位置としてきた阪神が台風の目となっている。

上の例は判断文の後ろの文を判断の根拠を提供・説明していると推論可能であるが、中心となる判断文を Si とした時に、その前後の文 Si-1, Si+1 のどちらがより適当に Si の判断の根拠として推論が可能かは、DS の構造を決定する上で重要である。そこで、本稿では、判断文を新聞記事から抽出し分析することで、新聞記事での判断に関する DS における根拠説明の戦略を調査することを考えた[2]。このような推論可能性を判断する作業は、ある判断文 Si が DS の中心的意図をもつと仮定し、その前後の文 Si-1,Si+1 のどちらとより密接に組織化されて DS を構成するかという問題と本質的には同じである。

判断文の抽出は、形容詞の使用に基づいて行った。判断を表出する言語表現は形容詞だけに限られたことではないが、より確信高く客観的な統制された判断文抽出をするために、今回は特に文末がイ形終止形の形容詞で終わる文に対象を絞った。資料として用いたのは毎日新聞 2000 年版一年分(CD-ROM 毎日新聞 2000 版)

---

[1] 高梨氏は CSJ の談話タグ付け作業を主導的に行っており、本稿はそのサブワーキンググループの活動ノートである。本稿の作成には高梨氏に多くの有益なコメントをいただいた。

[2] ここで文と表現している対象は、発話命題を表現している意味のまとまりと考えている。書き言葉であれば複文の節など文よりも小さい単位も文としてとらえることが有効な場合も文脈的にはありうる。この判断は現状では著者らの主観判断による。本稿ではこのような発話単位を便宜上、統一的に文と呼ぶ。また、話し言葉においては、文末形式が必ずしも現れるとは限らないため、「文」の定義は必ずしも明確ではない。

表 1・各形容詞文末の示す命題に対する根拠の提示方向と、形式段落内位置

形容詞文末形（例数）	Si に対する根拠の提示文			形式段落／引用内位置		
	Si-1	Si+1	隣接にない	先頭	中間	最後
たのしい。(76)	30	33	13	23	31	22
つまらない。(12)	1	7	4	8	4	0
著しい。(51)	12	28	11	25	19	7
すさまじい。(20)	3	11	6	7	11	2
疑わしい。(21)	9	4	8	5	9	7
計 (180)	55	83	42	68	74	38

から、自動的に品詞情報の付与が可能であった形容詞文を約 3 万文抽出した。

4. 調査と結果

抽出した形容詞文には合計で513の形容詞が用いられていた。この 513 の形容詞のうち最も使用数が多いものは「ない」で、約 3 万文のうち約 7600 文を占める。2 番目に多いものは「多い」で約 2800 文である。上位 5 種類の形容詞「ない、多い、いい、らしい、ほしい」で抽出文数の半数である 15000 文を超える。上位 30 種まで形容詞で約 25000 文となり全体の約 82%を占める。なお、30 番目に使用数が高かった「すごい」で、116 文存在した。このような全体の 80%近くを占める使用頻度の高い形容詞文をみてみると、単独だけではなく、他の語と強く結びついて文末表現となる「ない、いい」といったものや、「多い、少ない、大きい、強い、高い、難しい、悪い、重い」といった属性形容詞の使用が目立ち、単一の形式から含意する意味が多様であるもの、判断文というよりは単に属性を記述する意味合いの強いものが多いと考えられる。そのため、これらをすべて手作業で分析するためには多大なコストがかかることが予想でき、説明の目的を果たす DS のパターンがどのようなものかを予備的な調査をするという本稿の目的に合致しない。また、この 513 種類の形容詞のうち、359 の形容詞が抽出した形容詞文末の 3 万文中、9 以下の事例数しかもたず、分析する事例数としては少なすぎると思われる。そこで、出現数が 10 以上 100 例程度の形容詞中から、以下の観点に合致する度合いが高い形容詞を選び、そのような事例から調査をはじめることにした。

この観点は、話し言葉のモノローグにおいて、発話の動機付けとなり、DS の意図（目的）になりうるという観点から設定した。

i) 語義的に主観的評価が含意されている
ii) 具体的実在ではなく抽象的な度合いが強い

具体的に選んだ形容詞は、「おもしろい」「つまらない」「著しい」「すさまじい」「危ない」「疑わしい」である。

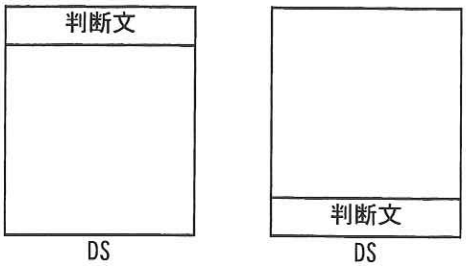
これらの形容詞文末によって書き手の判断が示された文 Si に対し 3 節で定義した観点から、根拠情報が Si-1、Si+1 から説明・提供されるとする推論が可能な場合分けと、Si が新聞記事中の形式段落、もしくは引用括弧によって括られた部分を DS と見た場合の出現位置を分類した結果を表 1 に示す。表 1 の列中、Si に対する根拠の提示文が「隣接にない」と示したものは、Si に隣接する、Si-1,Si+1 のどちらからも Si の根拠情報の説明もしくは提供と推論しがたい例の数である。また、「Si-1」に分類したものの中には、形容詞文末が示す命題に対しての根拠情報を Si が複文・重文構造をとって、Si が属する文内で推論が解決できる事例を含んでいる。

表 1 にまとめた結果を分析する中で、様々な知見が得られたが、そのうち大きな知見と考えられるものを 2 点紹介する。

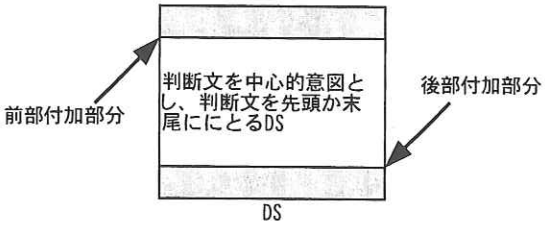
1 点目は、どの形容詞文末を持つ判断文についても、根拠の説明・提供を行う命題が隣接にない例が少ないことがわかる。さらにこの説明の提供が隣接文にない例は理由が特定できることが多い。特に Si が属する記事の最後の文である場合と、先

行する文脈で主題になっている対象に対して係助詞の「も」表現を用いて累加的に判断文を加えている場合が特徴的であった。前者の場合は、Si に対する根拠は隣接する直前の文には記述されておらず、Si は記事全体の内容に対しての著者のまとめ的な評価判断であり、後者の場合は、Si の役割は判断というよりは先行する文脈に対しての強調の役割が強く根拠情報は存在しないことが多い。

２点目は、以下の２つの図のように判断文が形式段落や引用括弧で区切られたセグメントの先頭や最後の位置する場合が相当数あることから、この位置の違いによって DS における説明の戦略が大まかに類型化できるのではないかという知見である。



この直感的な知見に対して、表１では、「形式段落／引用内位置」と書かれた列で最も多いものは中間位置であり、この主張とは必ずしも一致しない。しかし、データを詳細に観察すると、以下の図に示したように、Si を中心的意図とする DS の前後に付加部分がついた例が多い。



付加部分の典型例は、判断文を中心的意図とする DS の前に付加部分がある場合は形式段落の先頭文が主題となる談話要素を提示している場合である。他方、後部に付加部分がある例で多いものは、形式段落の最後に段落の内容をまとめる文や、修辞的効果を狙った文などを形式的に付加したものと判断できる例であった。

以上の知見に基づいて、意図に基づいて DS を定義する立場からは、むしろ判断文を DS の中心内容とする定義の基準としてとらえ直し、DS の先頭、もしくは末尾に判断文が位置する形式で、DS の戦略の基本構造を２類型に分けることを計画している。また、本稿の予備的な調査で確認をした形容詞は確実に書き手の判断を示すであろう５つに限定したものであったが、モノローグの典型的な主張点の１つである主観判断を表現する表現をリストアップし、本稿で用いた観点と知見からさらに詳細に分析することにより、主観判断に用いられる説明戦略をいくつかのパターンに分類できると考えている。

今後の課題

本稿では話し言葉の談話構造を分析する足がかりとして、大量の電子化データが存在する新聞記事を分析し、新聞記事中で行われている判断の主張を効果的に行うための説明構造の分析を試みた。この分析結果を基準に、話し言葉コーパスの談話構造ラベル付け作業に基準を与えてゆく予定である[3]。

また、新聞記事で行われている説明構造が、話し言葉でどの程度使われているかは検討する必要がある。その比較の基準を作るためにも、今回試みた手法を基本に、書き言葉の構造をパターン化してゆくことが重要である。

参考文献

J.Hirschberg and C.H.Nakatani. 1996. A prosodic analysis of discourse segments in direction-giving monologues. *In Proc. of the 34th Annual Meeting of ACL,* 286-293.

K.Maekawa, H.Koiso, S.Furui and H.Isahara. 2000. Spontaneous speech corpus of Japanese. *In Proc. of Inter National Conference of Language Resources and Evaluation 2000 (LREC 2000)*, 947-952.

C.H.Nakatani, B.J.Grosz and D. D. Ahn. 1995. Instructions for Annotating Discourses (Technical Report, 21- 95), Harvard University: Center for Research in Computing Technology.

高梨克也,小磯花絵,渡邊（宇野）良子. 2002. 話し言葉コーパスへの談話構造タグの付与に基づく理論的問題の検討, 日本認知科学会第 19 回大会.

[3] 語用論研究における共有資源として、人手で分析しラベル付けをすることが有益であると考えられる情報があれば、ワークショップ会場、もしくは電子メールにてご意見を賜れれば幸いである。（竹内和広 e-mail: kazuh@crl.go.jp）

Linguistic Marketingの研究
～ファッション販売の対話分析～

坂本和子
横浜国立大学大学院 国際社会科学研究科

Ⅰ.はじめに

本研究は、マーケティングへの言語学的アプローチとして、販売現場で生起された事象を対話データの流れで捉え、顧客と販売員の相互作用や関係性が販売員のキャリアによってどう異なるのかを明らかにしていくものである。分析対象は販売員とのコミュニケーションが購買の決め手となるファッション販売とした。

Ⅱ.分析フレームの設定

1. 購買行動モデル

単純であるがゆえに汎用性も高いWalters and Paul と Engel,Kollat and Blackwell（EKB 1982）の意思決定モデルに準拠したものを用いて（図1）、実際の購買行動の流れを検証していく。

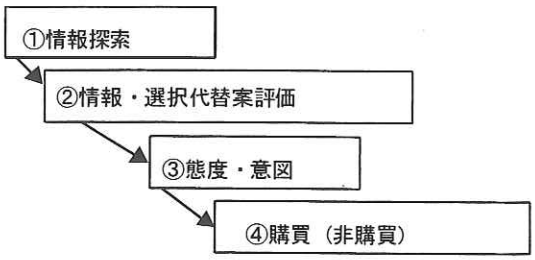


図1 .購買行動モデル

2. 情報のなわばり理論

次に販売員と顧客の関係をとらえる＜距離＞を想定する。＜距離＞とはPeng（1974,1975）が提起した心的距離（Communicative Distance）のことで、コミュニケーションを行っている人間の間に存在する心理的な距離を意味する。

情報のなわばり理論（神尾1990）では、話し手と聞き手の間に一次元的な心的距離が存在するとして、その尺度上の測度を、＜近＞と＜遠＞の2つの値から構成している。具体的には、縦2列に情報が話し手のなわ張りに属する場合と属さない場合とを、横2行に情報が聞き手のなわ張りに属さない場合と属する場合の計4カテゴリーを設定（図2）。本論文では、販売員、顧客が両者共通の、あるいは相手のなわ張りに踏み込む会話を行うことによって、距離を縮めるとの見解からBとCに着眼する。

図2 .情報のなわ張り理論　　神尾(1990)加筆修正

		話し手のなわ張り	
		内	外
聞き手のなわ張り	外	A 直接形 例:昨日は動物園に行って来ました。私、頭が痛い。	D 間接形 例:明日も暑いらしいよ。吉田君はもう退院したんじゃない。
	内	B 直接ね形 例:君はドイツ語が随分うまいね。お前、近頃少し太ったな。	C 間接ね形 例:君は退屈そうだね。お姉さん、結婚したそうだね。

Ⅲ. 分析方法

1. データの収集とコーディング

対象：ファッション販売のベテランとルーキー（ベテランはキャリア1年以上、ルーキーは同6ヶ月未満）各10件

期間：2000年5月~11月

方法：店頭にて入店からクロージングまでの対話データを収集

収集したデータの分析単位はBakhtin（1952-53）が対話理論の中で論じている発話とし、宇佐美（1999）の基本文字化原則に則った形で区切ることとする（沈黙、身振りといった副言語は明示変数として操作化しないものとする）。

2. 分析析項目の設定とルール化

①プロセスの定義

まず、ファッション購買場面において、仮説概

念モデルの「情報探索」、「代替案評価」、「態度・意図」、「購買決定」各プロセスを定義し、対応領域を特定する。次に発話単位ごとに適応するプロセスのコードを付記する（1~4）。

②言語機能

さらにプロセスごとに、販売員と顧客がいかなる言語を発してるかを調査する。ここでの分析フレームは林四郎が時枝誠記の機能 3 分類と Jakobson の６分類説を組み合わせて作成したものを援用し、一部を改訂して「内容伝達」、「働きかけ」、「接触・融和」、「儀礼」とした。以上の４項目にそれぞれａ、ｂ、ｃ、ｄのコードを付記し、対話データに割り当てていく。

③特定語彙

語彙項目を設定するにあたっては、ファッションショップと百貨店の衣料品売り場で活用されている販売マニュアルにおいて、<顧客のニーズ>として設定されている項目と、販売員数人に協力をお願いし、よく活用する語彙を列挙してもらった。結果、「品質・機能」、「サイズ・色」、「デザイン・感性」、「着こなし」、「流行」、「自己表示」、「付加価値」「サービス」「他商品のお勧め」の８つを語彙項目とした。

④心理的距離に関する項目

距離に関する概念は関係性を捉える上で極めて重要なものであるが、分析ツールなどは存在しないので、変数としてスタイルを設定し、なわばり理論の「ね」と合わせて、頻度を算出するものとする。

3. 信頼性の判断

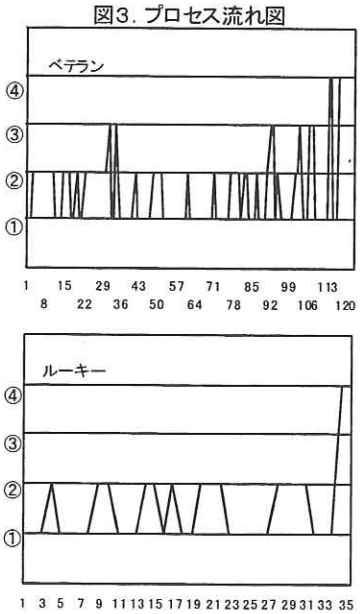
対話分析で議論の的となるのが社会に偏在する自然対話のデータに客観性や信頼性をどう求めていくかということである。阿部のプロトコル分析(1983)においては、複数の判定者が分析単位としてのステートメントをコード化し、その一致度をみることによって分析の客観性をおさえることができるとしている。同じように Bakem and Gottman（1997）は２人以上でコーディングを行い、コーダー間の一致率を算出することによって、信頼性を判断できるとしている。本分析をするに当たっては、Bakeman and Gottman 方式に従って、文字の数量化に際して第三者に確認をお願いした。一致率を計算したところ、Cohen'skappa＝0.81 という比較的高い数字を得ており、統計的基準に達していることを確認した。

Ⅳ.分析結果

1. 購買プロセスと言語機能

はじめに、発話の流れに沿って購買行動のプロセスがどう変化していくかを折れ線グラフで表記した。図３にあるグラフは、縦軸の１から４が情報探索から購買行動までの４つのプロセスを、横軸が発話番号で時間の経過を表している。大まかな流れを捉えると、ベテラン、ルーキー両者ともに情報探索と選択代替案評価を交互に何度も繰り返し、購買へ向かっている。しかし、評価移行のプロセスをみていくと、ベテランは後半部分で態度・意図を創出させ、購買へ到達しても戻る転回のケースが多い。ルーキーは情報探索と評価の繰り返しから購買でエンドとなる傾向がみられる。重要なのは、購買から先の動きで、ベテランは情報探索に戻り、次の購買への準備を行っていることである。

図3. プロセス流れ図



言語機能特性

表1.プロセス対応の言語機

	ベテラン	ルーキー
①-a	0.414	0.435
b	0.149	0.065
c	0.066	0.149
d	0.002	0.013
②-a	0.182	0.157
b	0.061	0.026
c	0.032	0.059
d	0	0.009
③-a	0.004	0.001
b	0.014	0.011
c	0.006	0.001
d	0	0
④-a	0.034	0.002
b	0.004	0.004
c	0.019	0.017
d	0.011	0.016

では各プロセスで使われている言語はいったいどのようなものか。言語機能の頻度の割合を集計し、平均値で表したのが表1である。

ベテランとルーキーの大きな違いは働きかけと接触であることがわかる。ベテランは働きかけが多く、特に情報探索、代替案評価に集中している。ルーキーは全体的に接触が多く、顧客の話に相槌を打ったり、返事をするなどの受身になっている。さらにベテランとルーキーの集計データを使って、言語機能に差があるかどうかを統計検定により確かめた（結果はｐ値＝0.000＜有意水準α＝0.05）。

特定語彙

また、特定の語彙頻度を調べると、８つのカテゴリーのうち、特に顕著な違いはベテランの「着こなし」にある。この「着こなし」において比率の差による両側検定を実施した結果は、ｐ 値＝0.000＜有意水準α＝0.05 で、差があることが証明された。

2. 心的距離の変容

心的距離についての結果は、情報のなわ張り理論の「ね」の生起率（疑問文含む）とスタイルの使用率を調べると、両者に差はみられなかった。

「ね」の想起率に関しては、ベテランで平均0.144（相手方の顧客は 0.349）、ルーキーは平均0.182（相手方の顧客は0.392）と若干ルーキーの方が高い傾向を示している。他業種においては、化粧品が 0.415 と高い数値を示しており、距離の接近に積極的であることがわかる。

心的距離の変数である敬語使用率、敬体使用率、常体使用率もベテランとルーキーでそれほど大きな差はみられず、統計的有意差もでなかった。ただ、わずかの差ではあるが、敬語使用率はベテラン 0.124 がルーキー0.096 を上回っており、常体使用率は反対にベテラン 0.097、ルーキー0.18 となっている。

Ⅴ.まとめと課題

本研究では対話分析によりファッション販売のベテランとルーキーの共通性や差異を見出し、購買行動研究における新しい知見を得た。

ファッション販売の場合は、顧客が販売員と会話をする段階で、見たり、手にとっていた商品に態度・意図を形成している場合が多く、販売員に購買の理由付け情報を求めている。情報探索と代替案の評価プロセスの転回を何度も繰り返すことにより、顧客の購買が促進されていくものと考えられる。その際、ベテランは態度・意図を組み込むことによって購買意思決定を確実なものとしていき、さらに購買後の情報探索へ回帰することで、次回の購買へのアプローチを行っている。これに対し、ルーキーは情報探索と代替案の評価の循環から次のステップがなかなか踏み出せない。こうした差異が生じる理由のひとつに言語機能が作用していることが、検定により確かめられた。ベテランは情報探索においても代替案評価においても働きかけを行って顧客を常に刺激しているが、ルーキーの場合は、受け答えや返事といった接触機能が多く析出され、顧客との距離を埋める手立てもないまま、顧客のペースで購買行動が進んでいってしまうと考えられる。

さらに空間の概念として心的距離を想定したが、ファッション販売についてはベテラン、ルーキー

であまり差は認められなかった。

最後に本研究における課題について述べる。購買行動プロセスに関しては販売員のキャリアによる差異を明確化し有意な結果を読み取ることができたが、キャリアそのものの基準があいまいであった。例えば営業成績等で比較すればさらに精度が高く、興味深い結果が導出できた可能性もあり、比較要件の検討が必要と思われる。

さらに分析フレームとしたなわ張り理論に内在する問題や心的距離を表す変数が今回の調査に適さなかった可能性もあり、まだまだ考慮の余地が残されているため、さらなる研究領域の拡張と精緻化を行っていくつもりである。

＜参考文献＞

Bakhtin Mikhail M.(1952-53)「ことばのジャンル」『言葉・対話・テキスト』新時代社、1988

Bakem and Gottmanj.(1997)Observing interaction:An introduction to sequential analysis(2ed edition), Cambridge University Press.

Gordon r foxall,Ronald e goidsmith and Stephen brown"consumer psychology for markrting"1998.

Jack Bilmes(1988),"The concept of preference in conversation analysis",*Language in Society* 17

Leech, G. N. (1983)Principles of Pragmatics, Longman.(邦訳:池上嘉彦・河上誓作、『語用論』、紀伊国屋書店、1987)

Peng.Fred C.C(1974)"Communicative Distance",*Language Sciences* Aug.No.31.

Peng.Fred C.C(1975)「日本人の心的距離」『言語』Vol.4,No.1、大修館書店

Robert.B.Cialdini(1991)「Influence」(邦訳:社会行動研究会『影響力の武器』, 誠信書房)

R.J.Lavidge&G.A.Steiner(1961)"A Model for Predictive Measurements of Advertising Effectiveness,"Journal of Mafketing,Vol.25,oct.

Sacs,H.(1984a),"Notes on Methodology"in Atkinson & Heritage (eds)

Thomas, J. Maronick and J.Craig Andrews(1999)"The Role of Qualifying Language on Consumer Perception of Envionmental Claims",*The Journal of Consumer Affairs*,Vol.33,No.2.

Yule, G. (1996)*Pragmatics*, Oxford Introductions to Language Study, Oxford University Press

明田芳久他(1994)『ベーシック現代心理学7　社会心理学』、有斐閣

阿部周造(1981)「消費者情報処理の経験的研究」、マーケティングジャーナル vol.3

阿部周造(1983)「消費者行動分析技法の新展開-プロトコール・データの分析方法-」、マーケティングジャーナル vol.3

泉子・K・メイナード(2000)『情意の言語学』、くろしお出版

浮田潤・賀集寛共編(1997)『現代心理学シリーズ5　言語と記憶』、培風館

海保博之・原田悦子(1993)『プロトコル分析入門』、新曜社

神尾昭雄(1996)『情報のなわ張り理論』第三版、大修館書店

小林正佳(1995)「発話行為としての依頼の理解と丁寧さにかかわるもの」、横浜経営研究第XVI巻第3号

近藤富英・F C パン(1984)「談話に基づく内在的機能としての「心的距離」の多様性」、『言語のダイナミックス』、文化評論出版

嶋口充輝(1997)「顧客関係性構築へのマーケティング」、DHB

大坊郁夫他編(1989)『社会心理学パースペクティブ1—個人から他者へ』、誠信書房

大坊郁夫他編(1990)『社会心理学パースペクティブ2－人と人とを結ぶとき』、誠信書房

高橋郁夫(1999)『消費者購買行動』、千倉書房

田窪行則他(1999)『岩波講座・言語の科学7　談話と文脈』、岩波書店

武井寿(1997)『解釈的マーケティング研究』、白桃書房

立川敬二監(1993)『コミュニケーションの構造』、NTT 出版

津田葵(1984)「説得型談話にみられる日米比較—セールスマンとお客の談話分析—」、『言語のダイナミックス』、文化評論出版

西原達也(1994)『消費者の価値意識とマーケティング・コミュニケーション』、日本評論社

仁田義雄・益岡隆志編(1989)『日本語のモダリティ』、くろしお出版

前田武彦(1988)「買物行動の会話分析」MathematicalLinguistics,Vol.16No.4

南不二男編(1979)『講座言語学・第3巻　言語と行動』、大修館書店

宗像恒次(1997)『SAT カウンセリング技法』、広英社

茂呂雄二編(1997)『対話と知』、新曜社

「アメリカ大統領就任演説のレトリックー文脈想定と文脈効果の観点からー」

龍谷大学大学院　研究生　　中村秩祥子

0．はじめに

"Rhetoric"という用語は、時代、分野など状況によって様々な定義で使用されるあいまいな語である。ここでは、古代ギリシャ時代の Aristotle の定義 "art or faculty of discovering the means of persuasion" に立ちかえることにする。これは、説得することを意味しているのではなく、説得へ導く方法を意味する。では、"persuasion"とは何かとなると、Aristotle は、説得を得る場合として、次の３種類に分類している。１論者の人柄の信によって　２言論に導かれて、聞き手の心にある感情を抱かせることによって　３納得のいく論によって。これらは、結局、言論によって、聞き手に話者の目指す方向へ感情、思考を起こさせることで、聞き手の心的変化を誘発することである。そこで、本発表の目的は、大統領の就任演説のレトリック、特に引用に関して、どのように聞き手の心的過程が働くのかを文脈想定と文脈効果の関係から分析することにある。

1．Persuasion, argument, literariness に対する心的過程の見解

Fodor (1993 in Pilkington 2000: 6)説

Rhetoric: Informative intention が主、それを促進する役割の communicative intention が存在する可能性はある[1]。

Artwork: Communicative intention が主。

聞き手の心的変化を誘発する点において、両方とも同じであるから、Rhetoric においても communicative intention が主の場合があるのではないか？

Brooks & Warren (1972: 177-178)説

Persuasion:　assent to the will of the persuader.
may be achieved in *a number of ways*, sometimes used singly, but more often in combination.

Argument:　truth as determined by the operation of reason.
is achieved in *only one way*, by the operation of reason.

Persuasion において、その複数の方法は、どのように生じているのであろうか。直線状に次々連なる過程なのか、同時に現れる過程なのか、その組み合わせなのか？

Pilkington (2000: 161)説

Literariness: to broaden context, and make both thoughts and feelings richer, more complex and more precise with regard to actual situations or states of affairs.

文脈を広げることと Brooks & Warren の複数の方法で達するということは、同じことを指すのか？また、Persuasion が結局は、話者の決めたひとつの意図へ向かうように進められるのに対し、Literariness は、話者の意図を超えた複数の感情を誘発することを容認する点で異なる。その違いを生じるのはどの点にあるのか？

---

[1] Informative intention: to make manifest more manifest to the audience a set of assumptions I.
Communicative intention: to make it mutually manifest to audience and communicator that the communicator has this informative intention.
(Sperber & Wilson 1995: 58-61)

2　引用における文脈想定と文脈効果の関係

ほとんどの Rhetoric の効果的表現技術は、詩の表現技術と重なるが、引用は、説得効果の技術に属する。そこで、引用の説得効果について調べる。

2．1　引用の出典を明言していないもの

(1) **"To the States, respectively, or to the people"** have been reserved **"the powers not delegated to the United States by the Constitution nor prohibited by it to the States."** Each State is a complete sovereignty within the sphere of its reserved powers.
(James Knox Polk)

(2) With unquestioning devotion to the Union, with a patience and gentleness not born of fear, they have **"followed the light as God gave them to see the light."**
(James A. Garfield)

(3) The Almighty has His own purposes. **"Woe unto the world because of offenses; for it must needs be that offenses come, but woe to that man by whom the offense cometh."** If we shall suppose that American slavery is one of those offenses which, in the providence of God, must needs come, but which, having continued through His appointed time, He now wills to remove, and that He gives to both North and South this terrible war as the woe due to those by whom the offense came, shall we discern therein any departure from those divine attributes which the believers in a living God always ascribe to Him? (A. Lincoln 2)

・Informative intention が主、弱い推意

2．2　引用の出典を明言しているもの

・強い推意を促す

2．2．1　有名な出典先

(4) **In the language of Constitution, "all the legislative powers"** which it grants **"are vested in the Congress of the United States."** It would be a solecism in language to say that any portion of these is not included in the whole.
(W. H. Harrison)

・出典は引用内容に対して Informative intention が主だが、次文に対しては、communicative intention が主（憲法の概念を根拠）として作用、引用内容は Informative intention が主。

(5) And so, my fellow Americans, as we stand at the edge of the 21st century, let us begin anew with energy and hope, with faith and discipline, and let us work until our work is done. **The Scripture says, "And let us not be weary in well-doing, for in due season, we shall reap, if we faint not."** (B. Clinton 1)

(6) **Thomas Jefferson** said **the people are the only sure reliance for the preservation of our liberty.** And down the years, **Abraham Lincoln** renewed this American article of faith, asking, **"Is there any better way or equal hope in the world?"** I intend, on Monday next, to request of the Speaker of the House of Representatives and the President pro tempore of the Senate the privilege of appearing before the Congress to share with my former colleagues and with you, the American people, my views on the priority business of the Nation and to solicit your views and their views. (Ford)

・出典は、引用内容に対し communicative intention が主（権威）、それによって、引用内容も、communicative intention が主（前文または後文に対する主張の根拠）

２．２．２　無名の出典先

(7) We shall strive for perfection. We shall not achieve it immediastely, but we still shall strive. We may make mistakes, but they must never be mistakes which result from faintness of heart or abandonment of moral principle. I remember that **my old schoolmaster, Dr. Peabody**, said, in days that seemed to us then to be secure and untroubled, he said, **"Things in life will not always run smoothly. Sometimes we will be rising toward the heights, then all will seem to reverse itself and start downward. The great fact to remember is that the trend of civilization itself is forever upward; that a line drawn through the middle of the peaks and the valleys of the centuries always has an upward trend."** (F. D. Roosevelt 4)

(8) In this outward and physical ceremony, we attest once again to the inner and spiritual strength of our Nation. As **my high school teacher, Miss Julia Coleman**, used to say **"We must adjust to changing times and still hold to unchanging principles."** (J. Carter)

(9) Under one such marker lies **a young man, Martin Treptow, who left his job in a small-town barber shop in 1917 to go to France with the famed Rainbow Division. There, on the Western front, he was killed trying to carry a message between battalions under heavy artillery fire.** We are told that on his body was found a diary. On the flyleaf, under the heading, **"My Pledge,"** he had written these words: **"America must win this war. Therefore I will work, I will save, I will sacrifice, I will endure, I will fight cheerfully and do my utmost, as if the issue of the whole struggle depended on me alone."** The crisis we are facing today does not require of us the kind of sacrifice that Martin Treptow and so many thousands of others were called upon to make. It does require, however, our best effort, and our willingness to believe in ourselves and to believe in our capacity to perform great deeds, to believe that together, with God's help, we can and will resolve the problems which now confront us.

(R. Reagan 1)

・出典は、引用内容に対し Informative intention が主。無名の出典を使用する行為そのものに対して communicative intention が作用（話者の人柄の印象に反映）。引用内容は、Informative intention が主（前後の主張内容に対する支持）。

２．２．３　出典の表現と文脈想定の関係

(10) We have learned the simple truth, as **Emerson said,** that "the only way to have a friend is to be one." (F. D. Roosevelt 4)

(11) It was **the beautiful remark of a distinguished English writer** that "in tyhe Roman senate Octavious had a party and Anthony a party, but the Commonwealth had none." (W. H. Harrison)

(12) In that moment, their view from the moon moved **poet Archibald MacLeish** to write: "To see the earth as it truly is, small and blue and beautiful in that eternal silence where it floats, is to see our selves as riders on the earth together, brothers in that bright loveliness in the eternal cold, brothers who know now they are truly brothers."

(Nixon 2)

(13) **The destiny of America was proclaimed in words of prophecy spoken by our first president in his first inaugural in 1789** - words almost directed, it would seem, to this year of 1941: "The preservation of sacred fire of liberty and the destiny of

the repiblican model of government are justly considered deeply, finally staked on the experiment entrusted to the hands of the American people.". (F. D. Roosevelt 3)
(14) We will urge no narrow policy but, **in the language of my predecessor**, I believe it to be the right "and duty of the United States to assert and maintain such supervision and authority over any interoceanic canal across the isthmus that connects North and South America as will protect our national interest." (J. A. Garfield)

・有名な出典に対して、典型的ひとつの想定が結びつく（権威）。その引用内容は、話者の主張の根拠として使用されている。あいまいな出典の表現は、文脈効果もあいまいとなる可能性がある。出典の表現に修飾語が付随すると、弱い推意が複数からむことが可能。無名とされる出典に対しては、必ず説明の修飾語がつき、その出典を使用する行為そのものに対して、複数の弱い推意がからむ。その引用内容は、話者の主張の支持として使用されている。出典の表現方法及び出典の使用行為が、話者の人柄に反映する印象の形成に関わる。

3. まとめ

以上から、引用内容が話者の意図に沿った効果をもたらすようにするためには、まず出典表現からの文脈効果を必要とすること。それを文脈想定として、引用内容は単一の文脈効果（根拠または支持）を生み出している。出典が引用内容の文脈効果を限定している。一方出典表現自体は、それを使用する行為とその引用内容への関わり方の両方向へ同時に文脈効果を生み出す場合がある。引用内容への関与に対しては、典型的唯一の文脈想定として作用するが、使用行為から生み出される文脈効果は様々な弱い推意で、それが話者の人柄の印象を作り出す働きとなっている。

これらは、Aristotle が述べた説得を得る３つの場合のうち２つの“論者の人柄の信によって”と“納得のいく論によって”に結びつく。しかし、引用内容が聞き手に感情を引き起こす点には結びつかない。このことから、受け手の感情を豊かに引き起こすことを目的とするには、引用が向かないことがわかる。

主要参考文献

Beale, H. W. 1987. A pragmatic theory of rhetoric. Carbondale, Edwardsvill: Southern illinois university press.
Brooks, C. & Warren, P. R. 1972. *Modern Rhetoric*. New York: Harcourt Brace jovanovich.
Dixon, P. 1971. *Rhetoric.* London: Methuen & Co.
Kallendorf, C. 1999. *Landmark Essays on rhetoric and literature.* ・New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates
Meyer, M. 1986. *From logic to rhetoric*. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
Nash, W. 1989. *Rhetoric*. Oxford: Blackwell.
Pilkington, A. 2000. *Poetic Effects*. Amsterdam, Philadelphia: John Benjamins.
Roberts, R. W. 1924. "Rhetoric" In W. D. Ross ed. *The Works of Aristotle* vol.11. Oxford: O. U. P.
Sperber, D. & Wilson, D. 1995. *Relevance: Communication and Cognition* Second edition. Oxford: Blackwell.
(内田聖二、中逵俊明、宋南先、田中圭子訳 「関連性理論：伝達と認知 第２版」研究社 １９９９）
戸塚七郎. 1992. 「アリストテレス 弁論術」 東京：岩波書店.

日本人の意見表明について
―新聞のインタビュー記事から―

井波真弓
拓殖大学

はじめに

日本人はものごとをはっきり言わない、言い方が曖昧であると言われる。また、意見を求められても時に沈黙する。コミュニケーションの際のこのような態度は欧米人にとって不可解なものとして受け取られる。異なった相手を理解するために言葉が必要であると考えれば当然であろう。しかし、コミュニケーションのあり方を日本社会という文脈で捉えた時、異なった意味合いを持つことになる。

本稿では原子力発電における地域住民の意見表明が地域社会の「しがらみ」によってどのような影響を受けるかを心理的側面にも焦点をあてて考えて見たい。言いにくいことがらをどのように表現するか、表現方法に注目する。

1．先行研究

グライス(1989)は会話的推意を particularized conversational implicature と generalized conversational implicature とに分け、会話的推移を生み出す基盤として Co-operative Principle を立てた。この原則は社会生活を営んでいく上で暗黙の了解として理解されるコミュニケーションの方法と考えることができる。しかし、社会におけるコミュニケーションの相互行為は十分検討されているとは言えない。

日本の場合、意思表明は明文化されずに守られている社会的な制約を強く受けており、その制約の中で、コミュニケーションの相互行為が行なわれている。

山室敦敦嗣(1998)は「しがらみ」の機能を共同性維持装置と抑圧装置の二面性として捉えている。共同生活を維持する装置であると同時に、国家が推進する計画においては「抑圧装置」として作用するとしている。巻原発計画においては推進派が強い状況があり、計画に違和感を持つ住民は自分の立場を明確にしないようにしながら、家や孫などの社会的単位に責任を一時的に帰属させながら意思表示をする「かこつけ」を行っていると述べている。

それでは、地元に密着しながらも、いわば「しがらみ」の外に位置する報道機関に対して意見表明はどのように行なわれるのだろうか。

2．インタビュー記事について

本稿では原子力発電所建設（新潟県西浦原郡巻町）をめぐる住民投票を 1996 年 8 月 4 日に控え「新潟日報」に掲載された同年 7 月 29 日から 8 月 2 日まで「一票への思い　町民 108 人インタビュー」と題した 5 日連続 5 回シリーズの記事を取り上げる。原子力発電所建設をめぐる住民投票を控え「住民投票をどう思う」「原発に対する思い」などを巻町町民にインタビューしたものである。156 人に申し込み 108 人が回答した。インタビューの手法は住宅地、海岸部、商店街周辺、農村部の 4 地域で各 25 人以上、合計 100 人以上を目標に 17 人の記者が 7 月 13、14、20、21 日の土、日曜日を中心に家々を訪ね歩き、「住民投票をどう思う」「原発に対する思い」など 10 項目の設問を元にインタビューしたものである。

シリーズの一回目は「流れ」と題して全体を総括した記事となっており、「住宅地で」「海辺で」「農村部で」［中心街で］の順となっている。以下それぞれの見出しと小見出しを挙げる。

	見出し	小見出し
流れ	しがらみ超え行動	「意思固めている」が８割
住宅地	母親たち高い関心	「考えるほど迷う」の声も
海辺	炉心に近い不安	微妙に影落とす漁業補償
農村部	自らの決意投じる	地縁社会に微妙な変化
中心街	本音とても言えぬ	「両派が客」板挟みに悩む

３．しがらみ

「しがらみ」は『日本国語大辞典』によると「①水流をせきとめるために、川の中の杭を打ち並べて、その両側から柴や竹などをからみつけたもの。しがら。②物事をせき止めるもの。引き止めるもの。まとわりついて身を拘束するもの。」という二つの意味がある。

「しがらみ」は人間関係のある、至る所に存在する。組織や家族、感情、道徳律などと列挙され、時間としては過去と結びつく。日常生活でも、世間、地域・近所・親類・家庭などの人間関係と捉えられている。現代ではあまりよいイメージはないと思われるが、完全に離れることは不可能であり、「しがらみ」がないことは孤独で、恐ろしいことと感じていると考えられる。日本では「しがらみ」があるところでは自由な言論や行動を慎むのはこのためであると考えられる。

インタビュー記事にみられる「しがらみ」は次の５箇所である。かぎ括弧内は住民の声である。

1）「地域のしがらみ」を口にする人…。
2）地域のしがらみが比較的少ない住宅地。
3）「町内ではいろんなしがらみがある」
4）「うちは本家にあたるから、しがらみが多い」
5）「投票なら、しがらみを捨てて、その場で自分の思いを書いてこれる」

住民にとって地域と家の「しがらみ」が意見表明の障害の理由となっている。住民は意見が言えないのだと記者に訴え、記者も住民の意を汲んでこれ以上詮索しないのではないかと考えられる。だからといって意見表明をする意志がないのではない。山室のいう共同性を維持しながら抑圧装置としての機能が取り除かれるなら、つまり、しがらみに配慮した方法あれば、それを捨てて自分の意志を表明したいと考えていることがわかる。

４．　意見表明

４．１　意見表明が容易な場合

インタビューの内容から行政側に任せるのが当然だとする伝統的な考えと自分達の意見を反映させようとする考えの二つに分けられる。

住民投票に関して伝統的な考え方では「議会というものがあるのに」「（原発建設は）決まってることだから、あらためて投票する必要はない」と従来の意思決定の方法を尊重している。一方、脱伝統的な考え方では「重大問題は直接、民意を問うべき」「正直な気持ちを気兼ねなくあらわせる」と住民参加を支持している。

伝統的な考え方は現状を維持することであり、住民自身は直接の決定に関わることがないので意見表明がしやすく、また、脱伝統的な考え方も学校教育などと相まって抵抗なく意見が表明できると考えられる。原子力発電に対する意見は客観的な判断によるもので、説得力があるものである。

意見表明に関して「知らん人ばかりだから人間関係が楽」、という住民の意見がある。知らない人の間では「しがらみ」がなく、人間関係に左右されない。

インタビューを「しがらみ」内部からの視点で捉えれば、「しがらみ」内部の伝統的な考え、「しがらみ」とは無関係な論理的客観性を持った考えに従えば意見表明がしやすい。あるいは、「しがらみ」のない人は意見表明しやすいと言える。

４．２　意見表明が困難な場合

４．２．１　「しがらみ」が強い場合

１）取材拒否

「しがらみ」が個人の意思に関係なく強制力を持つことを見たが、これは個人の存在が確立されていないということと関わりがあると考えられる。

> インタビューでは、個人が特定されることを心配する人が少なくなかった。氏名が紙面に載らないことを何度も年を押す人、「地域のしがらみ」を口にする人…。ある初老の男性は、記者が「紙上匿名ですので」とたのんでも「田舎だからすぐわかる。ならん。勘弁」と黙りこくってしまった。

記者が申し込んだ109人のうちの、約三分の一に当たる48人の住民はインタビューを断わった。文脈からはどのような会話がなされたのか不明であるが、記者は「インタビューを断った四十八人の心中はどうなのか。」と拒否の意味を日本社会という文脈で捉えている。

２）テーマと無関係な発言

率直な意見表明は不可能であるが、仕事柄人間関係を重視しなければならない場合、自らの生活に関することを語る。主に商売上円満な人間関係が求められる人々で、経済生活を維持するためである。

「うちは本家にあたるから、しがらみが多い。気持ちは反対だが発言しにくい。」

「商売人がどっちに入れるかなんて、口が裂けても言わんねて」

「推進派も反対派も見せのお得意さんだから」

「この間、反対派が店先にはってくれ、とシールをもってきたけど、とんでもない」

自己の現在の経済・生活に纏わる状況説明で、生活圏を重視している。ここ「しがらみ」は共同性を維持する働きをしていると考えられる。

４．２．２　「しがらみ」の弱い揺らぎ

インタビューのテーマそのものでなく、意見が言えない事情を説明する場合がある。この場合、自らの「しがらみ」について語ることが多い。上に立つ人、建前、人間関係（生活・仕事・身内）などについて語って意見表明できない場合を訴える。また、意見表明を間接的にする場合もある。

「この辺は、上にたつ人が賛成というとそれに従う雰囲気がある。…」

「職場では原発賛成ということになっている」

「原発には反対だけど、親族に東北電力の社員がいまして…」

「同居の両親は賛成だけれど、私は自分自身の考え方で投票する」

伝統的な考え、論理的考えを並べるときは意見表明しやすいが、本心を語るとき、言いにくそうにトーンを下げて話す住民もいる。

「議会制民主主義がないがしろにされてしまう」「排ガスは困るが車は必要、というのと同じ」「本心は反対なんだ。…」

５．建前と本音、意見表明への希求

記事では意見表明が困難な場合でも、本音を言いたい、自分の意見を反映させたいと言う欲求があり、「しがらみ」による躊躇いの後に本音を語ったものも掲載されている。また、「しがらみ」に考慮した、ここでは個人が特定されない住民投票の場合、積極的に賛成する旨を述べている。

「町内ではいろんなしがらみがある。…だから正直な気持ちを投票で表わせるのはいい。実は私ら夫婦も原発推進の人に頼まれて表向きは原発賛成。でも本心は反対」また、「しがらみ」がある中では意見を表面上は隠し建前を通さなければならない。「しがらみ」は個人

の意見表明の欲求を表面的に封じ込める力がある。しかし、本心を表明したい欲求は失われることはない。

6．まとめ

「しがらみ」が共同体維持と抑圧との両方の役割を果たすことで意見表明を困難にしていることがわかった。

生活が経済的基盤と関わっていること、客商売であることが「しがらみ」との係わり合いが大きい。逆に「しがらみ」の強くない人は意見表明がしやすい。また、伝統的な考え、建前、論理的客観的意見は意見表明がしやすいが、本音が隠されていることがある。

地域で生きていくことを重視し、強固な人間関係を維持し、経済基盤を確保するためには意見表明は難しく、三分の一の人は意見を沈黙した。沈黙の意味を、他のインタビュー記事から推察するに「しがらみ」の影響が考えられる。「しがらみ」は個人としての確立を阻むことで、意見表明を困難にしていると考えられる。

地方新聞は地元に密着しており、記者は地域の事情を理解し、住民も了解しているのではないだろうか。記者はインタビューを取捨選択し掲載することで自らのメッセージも織り込み、住民自身を映し出すと同時に記者の視点と住民に対する理解を表現している。今後は記者の視点と住民との関係からも意見表明について考えてみたい。

テキスト

新潟日報の 1996 年 7 月 29 日から 8 月 2 日に掲載された新潟県西浦原郡巻町の「一票への思い　町民 108 人インタビュー」と題する 5 日連続 5 回シリーズの記事

参考文献

文化庁編. 1989.『言葉の伝達―コミュニケーション―』東京: 大蔵省印刷局

津田早苗.1994.『談話分析とコミュニェーション』東京:リーベル出版

田中茂範・深谷昌弘.1998.『〈意味づけ論〉の展開』東京:紀伊國屋書店

山室敦嗣.1998.「原子力発電所建設問題における住民の意思表示―新潟県巻町を事例に―」『環境社会学研究』(第 4 号) 188-201. 環境社会学会　東京:新曜社

小泉保編. 2001.『入門　語用論研究―理論と応用―』東京:研究社

Blakemore, D. 1992 *Understanding Utterances: an introduction to pragmatics.* Oxford: Blackwell. (武内道子, 山崎英一訳. 『ひとは発話をどう理解するか－関連性理論入門』1994.東京:ひつじ書房)

May J.1993. *Pragmatics: An Introduction.* Oxford: Blackwell. (澤田治美・高司正夫訳.1996.『ことばは世界とどうかかわるか』東京:ひつじ書房)

Raider E. & Coleman S. W. 1999. *Conflict Resolution/Collaborative Negotiation.* Tokyo:ALC　(野沢聡子監修　鈴木有香・中野恵美訳. 1999.『国際紛争から家庭問題まで　協調的交渉術のすすめ』東京:アルク)

Leech G. N. 1983.*Principles of pragmatics.* Longman:London. (池上嘉彦・河上誓作訳. 1987.『語用論』東京:紀伊國屋書店)

Tanaka, N.2001. *The Pragmatics of Uncertainty: Its Realization and Interpretation in English and Japanese.* Yokohama :Shunpusha

研究発表

if 節中の should と must について

長友俊一郎
（関西外国語大学大学院）

0. はじめに

本発表では，should と must を含む if 節が帰結節での言語行為の十分条件となるような「言語行為条件文」(Sweetser 1990)を取り上げる．まずはじめに，if 節中に should が含まれる場合 if 節中の内容の実現性は低いが，must が含まれる場合はその実現性が高いことを例証する．次に，if 節中に must が含まれる場合，if 節中の内容を実現に向かわせるような「力」(force)が発話の背後に存在することを指摘し，このタイプの発話の特徴を考察する．

1. 条件文について

まず，Sweetser (1990)は，条件文を「内容条件文」，「認識条件文」，「言語行為条件文」に類別する．

1.1 内容条件文

(1) 内容条件文(content conditionals)：前件の事象もしくは事態が実現することが，後件で述べられている事象もしくは事態の実現することの十分条件となる条件文(Sweetser 1990: 114).

(2) If it rains tomorrow, they'll cancel the game. (Dancygier & Sweetser 1996: 85)

1.2 認識条件文

(3) 認識条件文(epistemic conditionals)：前件で表されている前提が真であることを知ることが，後件で表されている命題が真であると結論するための十分条件となる条件文(Sweetser 1990: 117).

(4) If he typed her thesis, he loves her. (Sweetser 1996: 327)

1.3 言語行為条件文

(5) 言語行為条件文(speech act conditionals)：言語行為(speech act)の好結果の言語運用を保証する条件文の前件が後件での言語行為の十分条件になり，「もし…[＝前件の内容]ならば，私はこの言語行為[＝後件の内容]を遂行す

る（と考えよう）」という公式によって適切に言い換えられる条件文 (Sweetser 1990: 118).

(6) If you are not too busy, what's Sue's phone number? (Sweetser 1996: 327)

2. if 節中の内容の実現性について

本節では，if 節中に should，must が含まれる場合の if 節中の内容の実現性の高さを比較する．

2.1 if 節中に should が含まれる場合

if 節中に should が含まれる場合の if 節中の内容の実現性は低いといえよう(cf. Swan 1995: 249, 澤田 1998: 167)．

(7) Before switching on the machine she gave Jim the customary warning. "*If you should feel any pain or undue heat during the treatment then tell me immediately.*" After a minute or two, …, Jim said, "I can't feel anything at all. How do I know anything's happening?" Fleur laughed. "Lots of patients say this. I'll prove the machine is working after the treatment." (Flob P12 118-125)（以下，斜字体筆者）

(8) "You mean you're all alone, Mr. Richards"?
"That's right". "Your wife isn't going to join you- later"? "I don't think so". … and *if you should be joined by anybody try to keep things quiet*, if you will. (Brown L02 1030-1130)

(7)の場合，次のような理由から斜字体部の if 節中の内容の実現は低いものであることがわかる．第一に，話し手は「多くの患者は何も感じない」ことを経験上知っている．これは，"Lots of patients say this. I'll prove the machine is working after the treatment."という発話から明らかになる．第二に，ここでの斜字体部の発話はあくまで「慣習上の警告」に過ぎない．これは，… she gave Jim the customary warning という文脈からわかる．第三に，ある内容の実現が「偶然」であることを示す happen to が(9)のように if 節中に挿入可能である．

(9) If you should *happen to* feel any pain or undue heat during the treatment then tell me immediately.

第四に，any を含むため if 節中の内容の実現は低くなる．

2.2 if 節中に must が含まれる場合

should とは対照的に，if 節中に must が含まれる場合の if 節中の内容の実現性は高いといえよう．

(10) Apart from endangering its health, overfeeding a dog takes the shine off a big part of the joy of ownership. …
"Because giving titbits is an easy and intense point of short term contact between dog and owner, many people begin to make a habit of it." *If you must do it, he says, make it something like a carrot stick.* (Flob E14 130-145)

(11) "A pack of dogs makes less noise"! He made the long whip sing and snap around their heads so that they ran screaming, some tripping over themselves in their flight. And Early Spring seized the whip and said: "*If you must flog someone, let it be her, your daughter*." (Brown P13 0610-0650)

(10)の斜字体部の実現性の高さは以下のことから支持されよう．第一に，飼い犬とコンタクトを取るために飼い主が餌を余分に与えることは飼い主の楽しみ(the joy of ownership)であり，多くの飼い主が実際に習慣になっていることを「彼」は知っている．第二に，内容の実現が「偶然」であることを示す happen to をここでの if 節中に入れた場合，容認されない発話になる．

(12) *If you must *happen to* do it, he says, make it something like a carrot stick.

3. if 節中の must を含む発話の特徴

以上，if 節中に should が含まれる場合は if 節中の内容の実現性が低いが，must が含まれる場合はその実現性が高いことを指摘した．以下では，if 節中に must が含まれる場合に議論を絞り，そのタイプの発話の特徴を提示していくこととする．

3.1 力について

ここではまず，力(force)の概念を素描する．

(13) 力のダイナミクス(force dymanics)(Talmy 1988, 2000)：力の行使，行使された力への抵抗，力に対する障害物，障害物の除去という関係

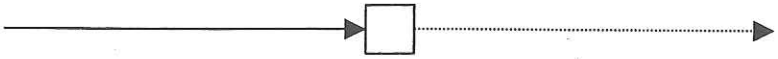
この関係において，antagonist と agonist という 2 つの個体(entity)が想定され，次のように特徴づけられる．

(14) a. antagonist は agonist に対立する力の個体(entity)
b. agonist と antagonist の 2 つの個体の本質的な傾向は，「活動」(action)へ向かうか，「休止」(rest)へ向かうかのどちらかである．
c. 2 つの個体のうち 1 つは相対的に力の強いものとして表すことができる．
(Talmy 1988 : 53-54)

(15) John must not leave the house. (*ibid.* : 79)

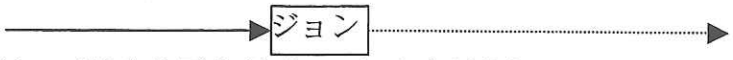
(15)の場合，agonist と antagonist はそれぞれ「ジョン」と「社会的圧力」[1]であり，antagonist の個体の相対的力の強さにより，前者の個体は「家を去らない」という活

動に向かわされているという力のダイナミクスが成立する(*ibid.*). また，この分析は(16) の「心的図式」(image schema)と合致する(Johnson 1987).

(16) F 

(Johnson 1987: 45)

(15)の分析を(16)を用いて分析すると(17)のようになる.

(17) 社会的圧力 

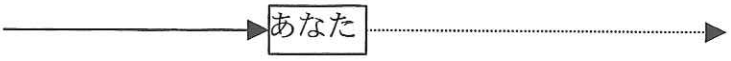
つまり，(15)の発話の背後には，「社会的圧力がジョンに力を行使し，ジョンによって家を去らないことが実現される」という力の図式が成立しているのである.

if 節中に must が含まれる場合も，(15)のような独立文中に must が含まれる発話と同様に，if 節中の背後には(16)の力が存在するととらえることができる. (18)の if 節は(19)のように言い換えることが可能であるという.

(18) If you must smoke, use an ash-tray. (Leech 1987: 78)

(19) If you are under compulsion to smoke … (*ibid.*)

(19)からわかることは，agonist の「あなた」がタバコを吸うことを強いられるような強い力を受けていることである. つまり，(18)は「ある F/antagonist があなたに力を行使し，あなたによってタバコを吸うことが実現される」という(20)の力の図式が背後に存在すると考えられる.

(20) 社会的圧力 

3.2 F/antagonist の特徴

3.2.1 F/antagonist に対する制限

前節では，if 節中に must が含まれる場合の if 節中にも，(15)のような独立文中に must が用いられる場合と同様，発話の背後に力の図式が存在すると考えることができることを指摘した. 本節では，独立文で must が用いられる場合と if 節中に must が含まれる場合とでは，F/antagonist の性質に相違点が見られることを指摘する. 前者の場合，(21)-(23)のように F/antagonist の種類は様々である[2].

(21) When you pay your fare, you must receive a ticket.
F/antagonist=バス会社の規則 (Tregidgo 1982: 79)

(22) All cars must have number-plates. F/antagonist=法律 (*ibid.*)

(23) The verb must agree with its subject. F/antagonist=文法 (*ibid.*)

しかし if 節中に must が含まれる場合の F/antagonist の性質には制限があるようである. (24)と(25)で見て取れるように，F/antagonist は内在的で抑えることのできないような「欲動」に限られるといえよう.

(24) "Don't eat anything," I was told. *"If you must eat, then only oranges or eggs because they're covered with peel or shell.* Take stomach pills, take antibiotics." I had been asked to Egypt for the Cairo Film Festival. (*Times* Feb95 4153289)

(25)(=(10))Apart from endangering its health, overfeeding a dog takes the shine off a big part of the joy of ownership. …
"Because giving titbits is an easy and intense point of short term contact between dog and owner, many people begin to make a habit of it." *If you must do it, he says, make it something like a carrot stick.* (Flob E14 130-145)

3.2.2 F/antagonist への話し手の賛同

独立文で must が用いられる場合と if 節中に must が含まれる場合とでは，F/antagonist に関してのもうひとつの相違点があると考えられる．前者の場合，話し手は F/antagonist に賛同するが，後者の場合，話し手は賛同しない．

Lakoff (1972)は，(26)のような発話で用いられる義務的 must と have to を対照し，前者の用法での話し手の F/antagonist への賛同を(27)のように指摘する．

(26) a. John says you must apologize.
b. John says you have to apologize. (Lakoff 1972: 240)

(27) In (a) … the speaker agrees with John that an apology is required. In (b), he may be merely reporting John's demand, without agreeing. … The speaker's participation in the obligation is one of *sympathy*, absent from the periphrastic equivalent. (*ibid.*)

これに対し，if 節中に must が含まれる場合，話し手の F/antagonist に対しての賛同は観察されない．

(28) *WHAT do you do nowadays if you must buy a house?* One major authority on the subject today declares: "It will be a hard winter for the home buyer." The authority is the Building Societies Gazette. And I agree with it. (Lob A16 193-197)

話し手（ここでは書き手）は斜字体部の if 節中の内容（「あなたが家を買う」）を実現へと向かわせている F/antagonist に同意していない．このことは，ここでの文脈から，「家をどうしても買う」という「あなたの欲動」ではなく，その欲動の制止を

促す「家を購入する人にとっては厳しい冬になる」という Building Societies Gazette に同意していることからわかる.

3.2.3 質の公理をわざと破る発話としての if 節中の must

前節では，話し手は if 節中に must を含む発話において if 節中で成立する力の図式の F/antagonist に同意しないことを述べた．換言すれば，話し手は，話し手にとっては「思ってもいないこと」/「真ではないこと」を if 節中で発話しているといえるであろう．したがって，(28)や以下の(31)のような発話は「質の公理」をわざと破る発話として特徴づけることができると考えられる.

(29)「協調の原則」(Co-operative Principle) (Grice 1967)：Make your contribution such as is required, at the stage at which it occurs, by the accepted purpose or direction of the talk exchange in which you are engaged.

(30) 質の公理(Maxim of Quality) (*ibid.*)：Try to make your contribution one that is true, specifically.

(i) do not say what you believe to be false.

(ii) do not say that for which you lack adequate evidence.

(31)(=(18)) If you must smoke, use an ash-tray. (Leech 1987: 78)

(32)(=(19)) If you are under compulsion to smoke (but of course you aren't-smoking is just a nasty habit if you wanted to) ...(*ibid.*)

この言い換えからわかることは，話し手は「思ってもいないこと」を言っているという点で質の公理をわざと破っているということである．このことは，F/angatonist への不賛同を表す，but of course you aren't-smoking is just a nasty habit if you wanted to からわかる.

4. 終わりに

－if 節中に should が含まれる場合，if 節中の内容の実現性は低いが，must が含まれる場合，その実現性が高い.

－must が if 節抜きで用いられる場合と同様，if 節中に must が用いられる場合においてもその if 節中の内容の背後に力の図式が成立する．しかし，前者の場合，F/antagonist はコンテクストに応じて様々であるが，後者の場合，F/antagonist の欲動に限られ，話し手は F/antagonist に同意しないという相違点がある.

－if 節中に must を含む発話の if 節中において話し手は F/antagonist に同意しない内容を発話している点（「真でないこと」/「思ってもいないこと」を発

話している点）で，質の公理を故意に破った発話をしていると考えることができる．

---

[1] 正確な antagonist は語用論的に決定されるため，ある特定の文脈が与えられればこの antagonist は変わる．
[2] ここでの antagonist は，Tregidgo (1982)で要請(DEMAND)の主体として挙げられているものである．

参考文献

Dancygier, B. & Sweetser, E. 1996. "Conditionals, Distancing, and Alternative Spaces." In A. E. Goldberg ed. *Conceptual Structure, Discourse, and Language*, 83-98. Stanford: CSLI.

Grice, H. P. 1975. "Logic and Conversation" In P. Cole and J. Morgan ed. *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 59-82. New York: Academic Press.

Johnson, M. 1987. *The Body in the Mind.* Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, R. 1972. "The Pragmatics of Modality." *CLS 8,* 229-246

Leech, G. 1987. *Meaning and the English Verb* (2nd ed.). Tokyo: Hituji Shobo.

澤田治美. 1998.「should（＝感情）の意味論－評価的な心的態度(evaluative modality)をめぐって－」『現代英語の語法と文法』160-168. 東京：大修館.

Swan, M. 1995. *Practical English Usage.* (2nd. ed.). Oxford: Oxford University Press.

Sweetser, E. 1990. *From Etymology to Pragmatics.* Cambridge: University of Cambridge Press.

Sweetser, E. 1996. "Mental Spaces and the Grammar of Conditional Constructions." In G. Fauconnier and E. Sweetser ed. *Spaces, Worlds, and Grammar*, 318-333. Chicago: University of Chicago Press.

Talmy, L. 1988. Force Dynamics in Language and Cognition. *Cognitive Science 12,* 49-100.

Talmy, L. 2000. *Toward a Cognitive Semantics: Concept Structuring Systems, vol.1.* Mass.: The MIT Press.

Tregidgo, P. S. 1982. "MUST and MAY: Demand and Permission." *Lingua 56,* 75-92

Missing complement に関する一考察

井上　徹
常磐大学

0．はじめに

本発表では、missing complement, null complement, complement ellipsis などと呼ばれる英語の補文省略現象を取り上げる。具体的には、以下の(1)と(2)の談話の応答文Ｂに見られるように、動詞または形容詞の音形を伴わない補文を指す（以下、missing complement を含む文を MC 構文と呼び、MC を"φ"の記号を使って記す)。

1) A: John is telling lies again.
   B: It's too bad φ/I agree φ/It can't be true φ.
2) A: Did John leave?
   B: I don't know φ.　(Grimshaw 1979:288, 289)

まず、MC を含む文を挿入節 MC 構文と談話依存の MC 構文の２種類に分け、後者の MC 構文に現れる MC の先行詞について考察する。

１．２種類の MC 構文

１．１．先行研究での MC の取り扱い

・ Hankamer and Sag(1976)：省略構文に現れる照応要素を統語的にコントロールされる surface anaphora と語用論的にコントロールされる deep anaphora に分類し、上の（１）や（２）で現れるような MC（＝音韻的・統語的に表層構造に現れないが意味的に述語の欠如項を満たす照応形）を NCA (Null Complement Anaphora)と呼ぶ。ただし、彼らは音形を伴わない to 不定詞補文を扱っている：

3) a. I asked Bill to leave, but he refused φ.
   b. We needed somebody to carry the oats down to the bin, but nobody volunteered φ.
   (Hankamer and Sag 1976:411)

・ Fillmore (1986)：主に（３）のような不定詞補文と空の目的語 NP を取り扱い、MC を"pragmatically controlled zero anaphoa"と呼ぶ。
cf. Napoli (1982):　（３）のような MC 構文は自動詞構文で、MC の位置には何もない。

1．2．談話依存の MC 構文

ここで扱う MC は、以下に示されるように先行する文の応答として機能する文に生じているもので、典型的には、質問文に対する応答文やある陳述に対しての応答分として生じる。この MC の意味解釈が談話に依存して点で、「談話依存の MC 構文」を呼ぶ。

4) a. Question: Who left?

Response: I don't know. (Grimshaw 1979: 288)

b. Statement: Guess what, John is telling lies again.

Response: Yeah, I've already found out.[1] (Grimshaw 1979: 292)

5) a'. Question: Who left?

Response: I don't know [$_{CP}$ ϕ]. [ϕ=who left]

b'. Statement: Guess what, John is telling lies again.

Response: Yeah, I've already found out [$_{CP}$ ϕ]. [ϕ=(that) John is telling lies again]

1．3．挿入節 MC 構文との相違点

6) John is telling lies again, I've found out.

6') John is telling lies again, I've found out [$_{CP}$ ϕ].

次に示されるように、一部の述語は両 MC 構文に使用される。

7) Question: Has the Mayor resigned?

Answer: I don't **know**/John wouldn't **tell** me/**Ask** Bill/I haven't **found out** yet/ **Guess**/I'**m** not **sure**/… (Grimshaw 1979: 290)

8) a. And it's a wonderful way to take something that they can move and exchange, I **agree.** (*CSPAE* COMR6A97)

b. There are two kinds of MC constructions, I **found out**.

c. …he was over thirty, I'**m sure**, and had gold teeth and a dark brown suit. (M. Drabble, *The Millstones*)

d. Well, there's couple of parts to that question, I **guess**. (*CSPAE,* WH97A)

---

[1] Grimshaw が過去完了を使っている例文"Yeah, I'd already found out."を現在完了に改変した。

9) a. *The Mayor has resigned, I don't know.

b. *There are tow kinds of MC constructions, I didn't find out.

c. *It will rain tomorrow, I don't hope.

談話依存の MC 構文に使用される述語の特徴

10) a. She promised ϕ./*She pledged ϕ./*She vowed ϕ.

b. I tried ϕ./*I attempted ϕ.

c. They approved ϕ./*They authorized ϕ.

d. She found out ϕ./*She discovered ϕ.

e. I protested ϕ./I object ϕ./*I oppose ϕ. (Fillmore 1986: 99)

挿入節 MC 構文で典型的に使用される述語が談話依存の MC 構文では使われない

11) Statement: John is telling lies again.

Response: *I don't believe/*They claim/*I think, (Grimshaw 1979: 292)

12) John is telling lies, I believe/They claim/I think.

２．談話依存の MC 構文における MC の先行詞について

MC で表わされる思考内容を統語表示のレベルで扱うか意味表示のレベルで扱うかといった理論内部の議論の是非はともかく、MC という音声的には具現化されてない補文が先行文のどの部分を指しているかという先行詞に関する問題が残る。

２．１．Feature-matching

13) Question: Did John leave?

Response: I don't know.

14) Question: Did John leave?

Response: I don't know [$_{CP}$ ø].

MC 位置にあるとされる照応要素の存在は述語の下位範疇化 (c-selection)により決定される。動詞 *know* は統語範疇として CP か NP を指定し、意味に関するフレームとして Q（疑問）か P（命題）をとる。（以下、Grimshow (1979)の補文選択の表記法を援用する）:

15) *know* [___ NP/CP], [___ P/Q]

（１４）の第一文が疑問文であり、疑問文の Q 素性と応答文の Q 素性が同じになっていることに注意。しかし、ここでは第一文の統語素性にかかわりなく-wh の補文の生起も可能である（１６b)。

16) a. I don't know whether John left.
b. I don't know that John left.

一方、次の応答文は、直前の疑問文の意味素性 Q が応答文の動詞 *agree* の下位範疇化フレームに現れないのでアウトになる。

17) Question: Did John leave?
Response: *I agree.

18) Question: Did John leave?
Response: *I agree whether John left. [2]

19) Question: Did John leave?
Response: It's possible.

（１９）の応答文はその疑問文に対しての可能な答えとなるが、ここで問題が生じる。疑問文が Q 素性を持っているのに、応答文の *possible* は *that* 補文しかとれない。

20) a. It's possible that John left.
b. *It's possible whether John left.

21) ?(leave (John))
22) possible (leave (John))

そこで Grimshaw は、先行する文から MC にコピーされるものはこの疑問文から疑問

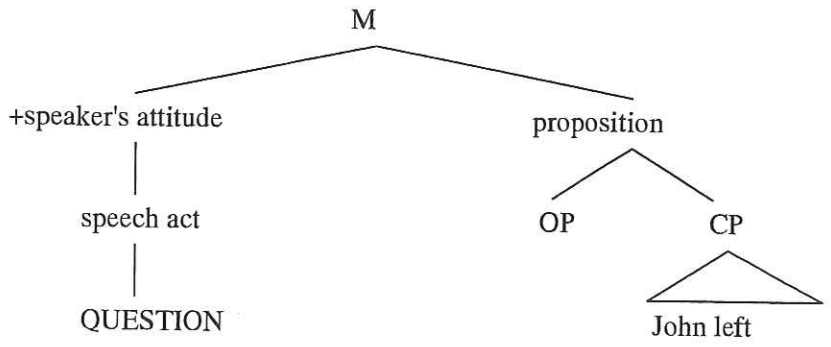
[2] *Agree* は意味選択のフレームとして P を取るので、*#I agree (that) John left.* と MC が復元されたとしても、ここでは容認されない。*agree* を含む肯定の応答は *yes-no* 質問文には不適切である。

そこで Grimshaw は、先行する文から MC にコピーされるものはこの疑問文から疑問の演算子？を除いた部分（＝対応する陳述文）がそれに対応するという。しかし、なぜ疑問演算子がここで除かれるのかの説明については触れていない。これに関しては直接、間接を問わず、発話行為理論の枠組みやそれを応用した理論（例えば Lyons 1977 や中右 1994）などで既に言われてきたことだが、MC を含む文に先行する文の中から疑問形式や法助動詞などの話し手の心的態度を表わす部分を差し引いた部分、つまり述語とその項からなる命題部分～に照応すると考えられている。

23) Question: Did John leave?

Response: It's possible [$_{CP}$ ø].

24) Question: Did John leave?



25) Response: It's possible [$_{CP}$ [-wh] John left].

２．２．間接平叙文と間接疑問文との間のあいまい性

26) Question: Did John leave?

Response: I don't know.

27) Response: I don't know [$_{CP}$ ø].

先行文の命題部分が MC にコピーされるが、（*I don't know* という表現が間接疑問を補部にとる傾向はあるものの）補文標識の素性の選択は言語文脈に依存する。

28) Response: I don't know [$_{CP}$ [+/-wh] [John left]].

29) a. I don't know [$_{CP}$ that John left].

b. I don't know [$_{CP}$ whether John left].

類例：

30) I think the cheque is still valid. The bank can tell them.　(Halliday and Hasan 1976: 220)

動詞 *tell* の下位範疇化フレームと意味選択のフレーム

31) *tell* [___ NP CP], [___ P/Q]

32) I think the cheque is still valid. The Bank can tell them [$_{CP}$ ø].

33) I think the cheque is still valid.

The Bank can tell them [$_{CP}$ [+/-wh] [the cheque is still valid]]

34) a. The Bank can tell them that the cheque is still valid.

b. The Bank can tell them whether the cheque is still valid or not.

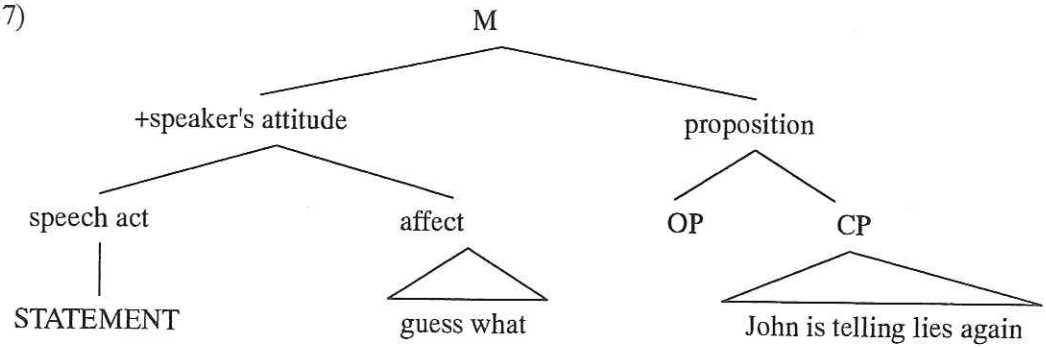
2．3．その他

35) Statement: Guess what, John is telling lies again.

Response: It's obvious.

36) It's obvious [$_{CP}$ ø].

37)



38) She might be better living away from home. I'm not sure.

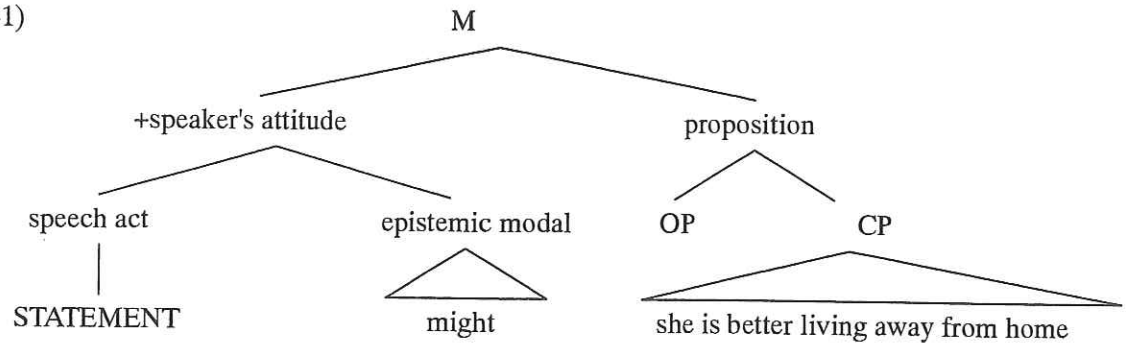
(Halliday and Hasan 1976: 219)

39) She might be better living away from. I'm not sure [$_{CP}$ ø].

(39)では I am not sureφの MC は先行する文全体を指すのでなく、先行する文から話し手の心的態度を表わす might を差し引いた部分(40)が対応すると考えられる。

40) She is better living away from home.

41)



42) *sure* [___ CP], [___ P/Q]

43) I'm not sure [$_{CP}$ whether/if [she is better living away from home]].

44) I'm not sure [$_{CP}$ [-wh] [that's a good idea]].

45) a. The cheque may still be valid. The Bank can tell them.

b. The cheque may still be valid. The Bank told me. (Halliday and Hasan 1976: 221)

見かけの反例

46) a. The cheque may still be valid.

The Bank can tell them [whether the cheque is (may)still be valid].

b. The cheque may still be valid.

The Bank told me that the cheque may still be valid].

2．4．実例

47) A: Did the President and Yeltsin talk about this?

B: I don't know. (*CSPAE,* WH94)

48) A: Is he going to Arkansas on the way to Houston?

B: It's possible. But I don't know yet. (*CSPAE,* WH94)

49) A: I think that might be appropriate.

B: Jay, I don't know. (*CSPAE*, COMR6B97)

50) A: Ann, was the President blindsided by this? Did he know that this possibility of recommendation was in the wind? And is he angry about this controversy?
B: I don't know. I'll try to find out. (*CSPAE,* WH97B)

4．まとめ

参考文献・引用文献

Barlow, M. 1998. *The Corpus of Spoken Professional American-English*. (*CSPAE*) Houston: Athelstan.

Bresnan, J. 1982. "The passive in lexical theory." In J. Bresnan ed. *The Mental Representation of Grammatical Relations*, 3-86. Cambridge, Mass.: The MIT Press.

Fillmore, C. 1986. "Pragmatically controlled zero anaphora." *BLS 12,* 95-107.

Ford, M., J. Bresnan, and R. Kaplan. 1982. "A competence-based theory of syntactic closure." In J. Bresnan ed. *The Mental Representation of Grammatical Relations,* 727-796. Cambridge, Mass.: The MIT Press.

Grimshaw, J. 1979. "Complement selection and the lexicon." *Linguistic Inquiry 10,* 279-326.

Halliday, M. A. K., and R. Hasan. 1976. *Cohesion in English.* London: Longman.

Hankamer, J. and I. A. Sag. 1976. "Deep and surface anaphora." *Linguistic Inquiry 7,* 391-428.

Lyons. J. 1977. *Semantics. Volume 2.* Cambridge: Cambridge University Press.

中右実．1994.『認知意味論の原理』東京：大修館書店.

Napoli, D. J. 1983. "Missing complement sentences in English: A base analysis of null complement anaphora." *Linguistic Analysis 12,* 1-28.

Williams, E. 1977. "Discourse and logical form." *Linguistic Inquiry 8,* 692-96.

If not 構文に関する一考察
ー多義性と文脈的既知性の関係をめぐってー

澤田　治

早稲田大学大学院

0.　はじめに

本稿では、if not 構文は「譲歩」タイプと「メタテクスト」タイプに分かれ、それぞれのタイプには、互いに異なった統語論的・意味論的・語用論的条件が課せられることを論証したい。これまでの先行研究(Kjellmer 1975, Dancygier 1998 など)では、これら２つの読みは文レベルでのみ分析されており、談話レベルも含めた研究は、管見したかぎりでは見られない。本稿では、分析領域を文レベルから談話レベルにまで拡大する中で語用論的観点を取り入れ、２つの読みの「あいまい性」が解消されるメカニズムを明らかにする。とりわけ、談話レベルにおいては「文脈的既知性」(contextual givenness) (Dancygier 1998) という概念が重要な意味をもつことを論証する。

1.　省略文としての if not 文と文法的構文としての if not 文

省略文と文法的構文の決定的な違いは、省略文の意味は、省略された要素を復元した意味と等価であるのに対し、文法的構文の意味は、省略された要素を復元した意味とは本質的に異なっているという点にある。すなわち、前者の意味での if not 文は省略文であり、後者の意味での if not 文は Construction Grammar (Fillmore et al.1988, Goldberg1995, Kay1997, Kay and Fillmore 1999)で言う「構文」に属する。Goldberg(1995)は「構文」という単位を以下のように定義している。

(1) C is a CONSTRUCTION iff $_{def}$ C is a form—meaning pair, <Fi,Si> such that some aspect of Fi or some aspect of Si is not strictly predictable from C's component parts or from other previously established constructions.　(Goldberg 1995:4)

すなわち、構文とは、「形式と意味と機能の統一体」であり、構文には構成要素の部分や既存の構文からは完全には予測できない形式的・意味的・機能的側面があるのである。

次の(2)-(3)と(4)-(5)を比較してみよう。

(2) a. I might see you tomorrow. If not, then it'll be Saturday.　(Swan 1995^{2}:251)

b. If I don't see you tomorrow, then it'll be Saturday. (=a)

(3) a. Get out of here at once. If not, I'll phone the police. (LDCE)

b. If you don't get out of here at once, I'll phone the police. (=a)

(4) a. The Queen of England is happy, *if not* ecstatic.

b. The Queen of England is happy, if she is not ecstatic.

(5) a. She ate many of the cakes, *if not* all.

b. She ate many of the cakes, if she didn't eat all. (Dancygier 1998:142)

(2)-(3)では、(2a),(3a)の意味内容と省略された要素を復元した文である(2b),(3b)の表す意味内容は同じである。それに対して、(4),(5)では必ずしもそうではない。なぜなら、(4a),(5a)には「譲歩的読み」(concessive reading)と「メタテクスト的読み」(metatextual reading)の２つの解釈があるからである。譲歩的読みの場合、省略された要素を復元した文である(4b),(5b)の表す意味内容と一致しているが、「メタテクスト的読み」の場合、省略された要素を復元した文である(4b),(5b)の表す意味内容とは一致しない。すなわち、(4a)や(5a)の「メタテクスト的読み」は構成的意味論からは完全には予測できない意味を有していると言えるのである。

(6)

if not 構文 ＜ 譲歩的読み（＝復元による意味の予測は可能）
　　 ＜ メタテクスト的読み（＝復元による意味の予測は不可能）

次節では、譲歩的読みとメタテクスト的読みの示す振る舞いの違いに焦点を当てて見たい。

2. 先行研究とその問題点

２．１　譲歩的タイプとメタテクスト的タイプ

Kjellmer(1975)や Dancygier(1998)は、if not 構文には２つの読みがあると主張している。

(7) He spoke ungraciously, *if not* rudely. (Dancygier 1998:142)

たとえば、Dancygier(1998:143)は、(7)には、"He spoke ungraciously, even if he didn't speak rudely."（彼の話し方は粗野ではなかったとしても、礼儀正しくはなかった）に書きかえられる「譲歩的読み」と、"He spoke ungraciously, perhaps even rudely."（彼の話し方は礼儀正しくはなかった。ひょっとしたら粗野と言えるほどであった）に書き換えられる「メタテクスト的読み」があると主張している。両者の意味の違いは歴然としている。なぜなら、前者では粗野な話し方はしなかったが、後者では、（もしかすると）そうしたかもしれないと述べられているからである。Kjellmer(1975:143)は、前者を「排他的(exclusive)読み」、後者を「包含的（inclusive）読み」と称した。

両者のタイプは、統語的振る舞いに関しても異なる。すなわち、メタテクスト的タイプは if 節中に否定

辞が不可欠であるのに対し、譲歩的タイプは、必ずしも否定辞を必要としない(König 1986:239)。

(8) This is an interesting, <u>if complicated</u> solution. (Dancygier 1998:144)

(8)は譲歩的タイプとは解釈できるが、メタテクスト的タイプとは解釈することはできない。このことは、メタテクスト的タイプの if not 文が文法的構文であることを裏付けている。したがって、if not 文が譲歩タイプとメタテクストタイプとにあいまいになるのは、否定辞 not を伴った場合である。

2．2　記述的否定とメタテキスト的否定

譲歩的タイプとメタテキスト的タイプを区別する上で重要な役割を果たすのは「否定」の種類である。すなわち、前者における「否定」は「記述的否定」(descriptive negation)であり、後者の読みにおける「否定」は「メタテクスト的否定」(metatextual negation)である(Dancygier 1998:143)。Dancygier (1998)が述べているように、記述的否定は、"not X"によってある予想(expectation)を作り出すと考えられる。

(9) The Queen of England is happy, *if not* ecstatic.

たとえば、(9)では、イギリスの女王が "not ecstatic"（至福ではない）と言う発話を聞くと、聞き手は女王は機嫌が悪いと予想するであろう。しかし、「その予想に反して、彼女は "happy"（幸福）である」と話し手は主張しているのである(Dancygier 1998:144)。このように分析すれば、譲歩的タイプは、"A if not B"という構造において、not B が生み出す予想と A とが衝突・対立する場合の読みに支えられていると考えられる。この点で、譲歩は接続詞 but の働きと似ている（接続詞 but の意味分析として、Lakoff 1971, Sweetser 1990 参照)。

それに対して、メタレベルでの否定は「これ以上ではない」という尺度推意(scalar implicature)を取り消す(cancel)働きをする（Levinson 1983,2000; Hirchberg 1991;田中 2000)。たとえば、(9)では、まずイギリスの女王は "happy"（幸福）であることが述べられている。この時点で、「"happy"以上ではない」という尺度推意が生まれるが、(9)の発話者は、ひょっとしたらそれ以上(= "ecstatic"(至福))かも知れないと考えたため、if not を用いてこの尺度推意を取り消し、さらに上のレベルをほのめかしたのである。したがって、メタテクスト的否定は、A if not B という構造において A のレベルから B のレベルへと尺度の目盛りが上昇する読みに支えられていると考えられる。

以上述べたように、if not 構文には２つのタイプがあり、それぞれのタイプによって「否定」の種類も異なっていることが明らかになった。しかし、これらの先行研究はあくまで文レベルの中での研究であり、談話レベルにまで拡大した研究は管見したかぎりでは見られない。次節では、研究領域を文レベルから談話レベルにまで拡大し、２つのタイプには、４つの互いに異なった意味論的・語用論的条件が課せられることを主張する。特に、「文脈的既知性の条件」は if not 文の読みのあいまい性を解消するための重要な条

件であることを論証してみたい。

３．２つのタイプに関する意味論的・語用論的条件

３．１　否定性の条件

第１に、次の条件を提出する。

(10)否定性の条件：　譲歩的タイプにおけるＢは記述的に否定されなければならないが、メタテクストタイプにおけるＢは記述的に否定されてはならない。

この条件は 2.1 節の議論から明らかである。(11)には「譲歩的」と「メタテクスト的」の２つの読みがあり、それぞれ、(12a),(12b)で表される。

(11) He speaks Russian, *if not* Bulgarian.

(12) a.He speaks Russian, even if he doesn't speak Bulgarian.

b.He speaks Russian, perhaps even Bulgarian.

「メタテクスト的読み」が記述的レベルではなく、メタレベルでの否定であることは、(12b)に否定辞 not がないことから一目瞭然である。

３・２　概念領域同一性の条件

第２に、次の条件を提出する。

(13)概念領域同一性の条件：

（ｉ）　メタテクスト的タイプでは、「A if not B」構文におけるＡとＢは同一尺度上の同じ概念領域に位置していなければならない。

（ii）譲歩的タイプでは、「A if not B」構文におけるＡとＢは同一の尺度に位置している必要はないが、位置している場合には、それらは同じ概念領域に位置しなければならない。

「譲歩的タイプ」の場合、ＡとＢは同一尺度上になくてもよいことは次の例から実証される。

(14) The salary was good, *if not* up to her expectations. (Dancygier 1998:143)

(15) This is undoubtedly the best, and least-alterd surviving part of the Abbey, an important mediaeval building, *if not* in itself particularly monastic.　(COBUILD on CD-ROM)

(14)では「期待通りであること」(up to her expectations)と「よいこと」(good)とは必ずしも同一の尺度にはない。また、(15)においても「重要な中世の建築であること」(an important mediaeval building)と「特に修道院的であること」(particularly monastic)は同一尺度上にはない。Kjellmer(1975)は、"homodimensional"と "heterodimensional"という用語を用いてこの現象を説明している。前者は同一尺度であることに、後者は同一尺度ではないことに対応している[1]。

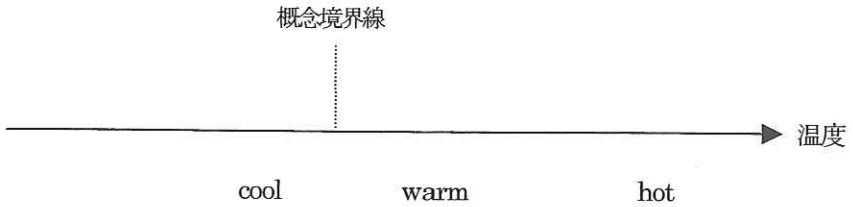
ここで注意すべきは、「概念領域」の意味内容である。

(16) a. The soup is warm *if not* hot.

b.*The soup is cool *if not* hot.

(16)における cool, warm, hot はいずれも温度に関する同一の尺度に位置している。しかしながら、(16a)は文法的であるが、(16b)は非文法的である。なぜこのような文法性の違いが見られるのであろうか？それはおそらく、warm と hot は同じ概念領域(conceptual domain)にあるが、cool はその領域からは外れているからであると思われる。「概念領域」とは、メンバー間に含意関係（entailment relationship）が成り立つ領域のことである。「暑い」は「暖かい」を含意するが、「暑い」は「寒い」を含意しない。

(17)



仮に cool は寒さの尺度であり、warm, hot は暑さの尺度であるので、両者は別々の尺度であるとみなすならば、これら２つの尺度を統一的に捉えることはできない。その結果、涼しくも暖かくもない温度（ふつうの温度）が捉えられなくなってしまう。「概念領域」を導入するのはそのためである（詳しくは澤田 2002 参照）。

３．３　先行性の条件

第３に、次の条件を提出する。

(18)　先行性の条件：メタテクスト的タイプでは、B は A に先行することはできない。

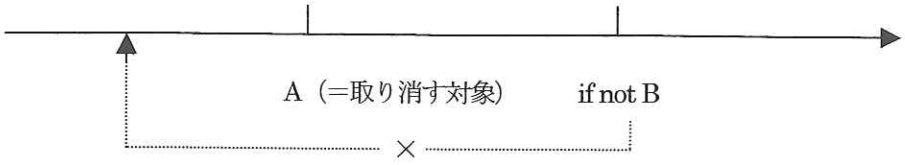
次の例(19)では、if not B が A に先行している。

(19) Her voice was, *if not* perfect, at least nearly so.　　(COBUILD[1])

(19)は譲歩的読み（彼の声は完璧とは言えないまでも、少なくともほとんどそれに近かった）は可能であるが、メタテクスト的読み（彼の声は少なくともほとんど完璧に近かった、ひょっとしたら完璧でさえあったかもしれない）は不可能である。if not B が前置されると、メタテクスト的に解釈できないことは、Kjellmer(1975:146)でも指摘されているが、なぜそうなるのかに関する説明はなされていない。筆者は、その理由は、このタイプに内在する語用論的機能と関連していると考える。すなわち、メタテクスト的タイプの if not は、「A 以上ではない」という尺度的推意を取り消す働きをするのであるが、(19)のように、"if not B"が A に先行してしまうと、取り消しの働きができなくなるのである。なぜなら、取り消すという

行為は取り消すための既存の対象があってはじめて成り立つ行為であるからである。それに対して、譲歩的タイプは取り消すという行為とは無関係であるので、たとえ if not B が先行しても文法的となる。下図はメタテクスト的タイプの場合、if not B を前置することができないことを表している。

(20)



3・4　文脈的既知性の条件

第4に、次の条件を提出する。この条件は文レベルでの制約ではなく、談話レベルでの制約である。この条件によって if not 文の曖昧性が解消される。

(21) 文脈的既知性の条件：

B が文脈的既知である場合は譲歩的タイプであり、一方、A が文脈的既知である場合はメタテクスト的タイプである。

この条件は以下の２つのコンテクストから論証される。

(22) A: Does he have <u>three cows</u>?

B: He has <u>three cows</u>, if not four.

(23) A: Does he have <u>four cows</u>?

B: He has three cows, if not <u>four</u>.

(22)における if not 文の読みは「メタテクスト的」であり、(23)における if not 文の読みは「譲歩的」である。その発話の意味がメタテクスト的であるのか、譲歩的であるのかは A と B のどちらが文脈的に既知であるかによって決定される。(24)と(25)の例を見られたい。「文脈的既知性の条件」によれば、(24B)の発話は「メタテクスト的」に、(25B)の発話は「譲歩的」に解釈される[2]。

(24) A: Why did the manager get so angry? Did the young employee speak to <u>him</u> <u>ungraciously</u>?

B: Yes. He spoke <u>ungraciously</u>, if not rudely.

(25) A: Why did the manager get so angry? Did the young employee speak to him <u>rudely</u>?

B: He spoke ungraciously, if not <u>rudely</u>.

4．おわりに

本稿では、if not 構文には「譲歩的読み」と「メタテクスト的読み」の２つの読みが存在し、それぞれの読みには、互いに異なった４つの統語論的・意味論的・語用論的条件が課せられることを論証した。そして、これらの条件が if not 文のあいまい性を解消する重要な役割を果たすことを主張した。ただし、あいまい性が解消されるためには、これら４つの条件のすべて当てはまる必要はない。次の例を見てみよう。

(26) He was a fair cop who took only clean graft and his rise in the police department was steady if not spectacular. (Mario Puzo. *The Godfather*)

(26)の読みには４つの条件がすべてがかわっているわけではない。まず、「文脈的既知性の条件」ではどちらの読みになるかは決まらない。なぜなら、先行談話には彼の昇進が“steady”（着実）であるのか“spectacular”（目覚しい）であるのかに関する情報はないからである。次に、「先行性の条件」もあいまい性を解消しない。なぜなら、if not B が前置されていないからである。さらに、「概念領域同一性の条件」もあいまい性を解消できない。なぜなら、“steady”も“spectacular”も同じ概念領域に位置しているからである。最後に、あいまい性を解消するのは、「否定性の条件」である。すなわち、両者の読みのどちらの読みとなるかは、彼の昇進が「目覚しくはなかった」と断定されているのか、それとも「もしかしたら目覚しくさえあったかもしれない」と推測されているのかによる。前者の読みならば「譲歩的」に、後者の読みならば「メタテクスト的」になる。(26)のすぐあとに、彼の昇進は１歩１歩着実であったことが述べられている。

(27) …Mark McCluskey was rising from sergeant to lieutenant and finally to captain.

(27)から、彼の昇進が着実であり、「目覚しいものではなかった」ということが分かる。ゆえに、(26)は「譲歩的読み」となるのである。

今後は、さらに広範なデータを分析し、if not 構文の多義性について考察を深めてゆきたい。

(注)

1．尺度には意味論的尺度(Horn 1972, 1989)と語用論的尺度(Fauconnier 1975; Hirschberg 1985)の２種類が存在する。

2．“A if not B”の情報構造の違いはイントネーションパターンの違いにも反映される。すなわち、譲歩的タイプにおける B は fall-rise（＝旧情報）のイントネーションになり、メタテクスト的タイプにおける B はフォーカス（＝新情報）が置かれる。この指摘はブレント・デ・シェン教授による。

3．次の例においても４つの制約がすべてかかわっているわけではない。

（i） It is difficult, for instance, if not impossible to draw a clear distinction between dynamic and deontic *must*. (F.R, Palmer, “Semantic explanations for the syntax of the English modals”)

参考文献

Dancygier, B.1998. *Conditionals and Predication: Time, Knowledge, and Causation in Conditional Constructions.* Cambridge: Cambridge University Press.

Fauconnier, G.1975. Pragmatic scales and logical structure. *Linguistic Inquiry* 4:353-75.

Goldberg, A.E.1995. *Constructions : A Construction Grammar Approach to Argument Structure.* Chicago: The University of Chicago Press.

Hirschberg, J.B.1985. "A Theory of Scalar Implicature". PhD dissertation, University of Pennsylvania.

Horn, L.1989. *A Natural History of Negation.* Chicago: Chicago University Press.

Kay, P. and C.J, Fillmore. 1999. "Grammatical Constructions and Linguistic Genaralizations: The What's X doing Y ? Construction." *Language* 75(1):1-33.

Kjellmer,G. 1975. " The Weather Was Fine, If Not Glorious :On the Ambiguity of Concessive *If Not.* " *English Studies* 56 :140-46.

König, E. 1986. "Conditionals, Concessive Conditionals and Concessives: Areas of Contrast, Overlap and Neutralization." In E.C.Traugott, A.ter Meulen, J.Snitzer Reilly, and C.A. Ferguson(eds.) *On Conditionals* . Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, R.1971. "If's, and's, but's about conjunction." In C.J.Fillmore and D.T.Langendoen(eds.) *Studies in Linguistic Semantics.* New York: Holt, Rinehart and Winston.

Lambrecht, K. 1994. *Information Structure and Sentence Form : Topic, Focus, and the Mental Representations of Discourse Referents.*Cambridge:Cambridge University Press.

Levinson, S.C. 1983. *Pragmatics.* Cambridge: Cambridge University Press.

_____.2000. *Presumptive Meanings* :The Theory of Generalized Conversational Implicature. Cambridge, MA.: MIT Press.

田中廣明.2001. 「語法研究」(小泉保 編)『入門語用論一理論と応用一』 pp.206-217. 東京： 研究社.

大堀壽夫.2001.「構文理論ーその背景と広がり」『英語青年』2001 年 12 月号 pp.1-6.

澤田治.2001.「Let alone 構文に関する一考察一肯定文に現れる場合を中心として一」日本語用論学会第 4 回大会予稿集.Program and Abstracts pp.15-18.

_____.2002.「「はおろかゞどころか」構文に関する一考察ー意味論的・語用論的尺度性のメカニズムを探る一」日本言語学会第 124 回大会予稿集.pp.36-41.

Sweetser, E.1990. *From Etymology to Pragmatics.* Cambridge: Cambridge University Press.

‘I don't believe/think’ に後続する補文標識 that の顕現と省略について

森　　貞
（福井工業高等専門学校）

1．はじめに

目的：討論およびインタビュー番組の談話分析を通して、‘I don't believe/think’ に後続する補文標識thatの顕現と省略がどのような要因によって決定されているかを明らかにする。

2．コーパス

the ***CNN transcripts*** corpus [365MB]

- Burden of Proof (bp)
- CNN & Company (cc)
- Crossfire (cf)
- Larry King Live (lk)
- Talkback Live (tl)
- other
  - Both Sides (bs)
  - Evans, Novak, Hunt & Shields (en)
  - Late Edition (le)
  - Saturday Edition (se)
  - The Point With Greta Van Susteren (tp)
  - Reliable Sources (rs)

3．先行研究

(1) Thatの省略は，よく，話し言葉，あるいは形式張らない表現に起ると言われ，実際にはさまざまな原因が絡んでくる（Bolinger 1972 が詳しい）が，その１つに談話上の要因もある。それは，thatの省略できる補文は断定されていなくてはならないということである。（福地, 1985:186）

(2) Underhill(1988) is also the first to demonstrate that the use of *that* is related to discourse structure; his research provided the inspiration for the study we are reporting here. He makes a strong case in favor of the following partially overlapping hypotheses for journalistic English:

(a) *That* is deleted when the subject of the lower sentence is the topic of the utterance; *that* is retained when the subject of

the higher sentence is the topic.

(b) *That* is deleted when the writer makes or endorses the assertion of the lower sentence; *that* is retained when the writer does not (necessarily) endorse the assertion, but attributes it to someone else. In such a case the speaker may deny the assertion, doubt it, evade responsibility, or simply be non-committal. (Tompson and Mulac, 1991:239)

(3) 照応性．これはthatの本来的な用法にかかわることであり，thatはそもそも直示的(deictic)，前方照応的(ANAPHORIC)な性質を備えているので，従属節が既出の事柄を述べているのであれば，それを受ける意味で that を用いるのは適切である．（中略）このようにthatを入れて言うと，それまでの時点ですでに 'that' 節の内容にかかわる事柄が話題に上っていたことを示唆する． (荒木・安井(編), 1992:1482)

(4) Erteschik(1973)はthatの省略を許す補文の種類が，要素の取り出しを許す補文の種類と極めて類似していることを指摘している。要素の取り出しの可能性について「意味的に優勢な(dominant)節または句のみから取り出しが可能である」と定めているので，that の省略も基本的に意味的に優勢な補文において可能であることになる。意味的に優勢であるというのは，前提になっておらず，また先行文脈で言及されていることがないような，文中の他の部分よりも際立っている箇所のことを指す。主張と密接に関係しているが，優勢の場合には文中の他の部分との相対的な勢力関係であるので，文構造では必ず主文または補文のいずれかが優勢になる。
（中島(編), 2001:300-301）

(5) *『従属節の内容を否認する表現では、that は省略されない可能性が高い』*

(6) 'it is not the case [...]':

+that	−that	Total
8(100%)	0(0%)	8(100%)

4．'I don't believe/think'の機能－《否定命題主張》と《否認》

(7) 河上(1984)は，Lyons(1977)の発話の論理構造（(I say 〈M[p]) : I say＝遂行動詞要素，M＝モダリティ要素，[p]＝命題要素）を援用して，I don't think (p).とI think (～p).の発話の論理構造を次のように表記して（↑印はqualificationを表わし，↓印は表層構造を指し示す），(1)はモダリティ内否定（命題外否定）の《否認》の構造を反映し，他方，(2)は命題内否定の《否定命題主張》の構造を反映していると主張している。

(1) [I say so]－it is *not* the case－(that) p

↑ ↓

〈I think〉 I don't think (that) p

(2)　[I say so]－it is so－(that) *not* p

↑　　↓

〈I think〉　I think (that) *not* p

（森, 1998:31）

(8) 中右(1994)は，I don't thinkは，この連鎖において，《否認判断》を表し，他方，I thinkは，《肯定的推定判断》を表わすモダリティ表現を形成しているとした上で，I don't think (p).とI think (～p).の意味構造を階層意味論モデル(Hierarchical Semantics Model)を用いてそれぞれ次のように図示している。

(3)　[SM I DON'T THINK][P4 POS [P3 p]]

(4)　[SM I THINK][P4 NOT [P3 p]]

(SM＝Sentence Modality，P4＝全体命題，P3＝中立命題，POS＝Positive)

（*ibid.*）

(9) With verbs taking transferred negation (*e.g.*:*think*, *suppose*; *cf.* 14.36), the use of *not* as a clause substitute is rather formal, and is often replaced by the use of *so* preceded by negation in the main clause:

I don't think so.　(～I think not.)

I don't suppose so.　(～I suppose not.)

I don't believe so.　(～I believe not.)

This construction with *so* is especially common when *I* is subject.

(Quirk *et al.*, 1985:881)

(10) think, supposeのような動詞の補文は、肯定文ならばso、否定文ならばnotによって代名詞化することができる。

(86) a. Has John failed?

b. I think so.　（そうだと思う。）　[=I think he has failed.]

c. I think not.　（そうではないと思う。）[=I think he hasn't failed.]

（中略）

これらの動詞の場合は、否定文を代用する場合は、否定語notを主文に上昇させてnot...soの形式にすることも可能である。

(87) I don't think so. [=I don't think he has failed.]

（安藤, 1985:223）

(11) YES-NO疑問文に対する応答

(i) I think not.《否定命題主張》　Unmarked

(ii) I don't think so.《否定命題主張》　Marked (NEG-Raising)

(12) UNIDENTIFIED FEMALE: That was really not my point, that it made it any less. I asked the question as to whether the change

in policy justifies consideration of the new circumstances...
WEINBERG: I'll answer that directly: I think not.

(bp. Feb. 8, 2001)

(13) NEVILLE: OK, but now we're dealing with hypothetically, and we have to deal with the issue at hand. And that is: I want to know what you think -- whether or not the lady should have been kicked out of the pool for breast-feeding in the pool or not.
RENEE: I don't think so. (tl. Aug. 2, 2002)

(14) 主張文に対する応答
(i) I think not.《否認（判断）》 Marked (NEG-Returning)*
(ii) I don't think so.《否認（判断）》 Unmarked

(15) MAY: I think it goes beyond that. I have to -- I want to agree -- in a way I want to disagree with Ron and with Susan as well. They're saying -- Oh -- or Susan's certainly saying -- All that happened is that the envelope got pushed a little. I think not. I think the envelope got ripped up, got destroyed.

(tl. Oct. 8, 1997)

(16) WESTHEIMER: First of all, the one thing we have to put on the table is that people who educate with humor, with proper respect for (UNINTELLIGIBLE) and values, we today are better off than we were ever.
RIOS: I don't think so. Dr. Ruth, we have more sexually transmitted diseases than we have ever had.

(cf. Apr. 23, 2002)

5．コーパスの分析

5.1 'I don't believe'

5.1.1 《否定命題主張》

(17) YES-NO疑問文に対する応答：

+that	−that	Total
12(16%)	64(84%)	76(100%)

(18) MCGEORGE: I believe that's pretty much specifically illegal to ship on a bus. So, is there a legitimate reason to have it in the wall locker in the bus station? No, I do not believe that there is. But there are legitimate reasons to possess C-4.

(tp. Oct.19, 2001)

(19) JONES: No, Roger, I think we are confusing two things here.

Certainly people may have conspiracy theories. I don't pretend to believe those are going to end. That's not the question. The question is whether there would have been an act of terrorist activity in Oklahoma City, and I do not believe there would have been. (bp. Sep. 10, 1999)

(20) (24) a. I don't think that Sam is coming until Friday.
b. I don't think Sam is coming until Friday.

主節が挿入的である時に，否定辞繰上げが起り得ることはすでに述べたが，Borkin(1974)によると，(24a)より(24b)の方が自然のようである。この場合も、thatの省略によって，補文がより主節らしくなり，主節での否定が実は補文の否定であることを理解しやすくなるのであろう。

(福地, 1985:187-188)

(21) LARRY: I'm a criminal defense attorney. And I have handled criminal cases in the past. And what I have learned from my experience is the fact that the death penalty does not deter this type of crime and this type of activity. I firmly believe that the people that commit these crimes normally are unbalanced, oftentimes have psychological problems that go deeply, deeply into their past. And I think the reason that the death penalty is still around is, basically, it's an eye-for-an-eye society and it's a form of retribution. But, in my experiences, I don't believe that it deters these types of horrible crimes. (tl. Jul. 22, 2002)

5.1.2 《否認》

(22)

+that	−that	Total
94(55%)	76(45%)	170(100%)

(23)

	+that	−that	Total
−h	65(**79%**)	17(21%)	82(100%)
+h	29(33%)	59(**67%**)	88(100%)

(−h＝眼前の話し相手以外の人物の発言，+h=眼前の話し相手の発言)

(24) [−h, +that] :

◎KING: In Richard Ben Cramer's brilliant book on Joe DiMaggio, he says, Richard Merryman, that they were going to remarry, Joe DiMaggio and Marilyn Monroe. Did you have any hint of that?

MERRYMAN: Well, I can tell you that during our second interview, after she had had quite a lot of champagne, the phone rang and

the press agent went and answered it. And Marilyn called out, "If it's an Italian, I'm not here." That's all I can contribute.
KING: James, what do you know about that story?
HASPIEL: I don't believe that they were going to remarry. Unfortunately, I probably know a little bit too much about it, and I really don't want to be indiscreet. Joe DiMaggio had a problem with -- violence, and that had obviously been gone for many years after their divorce, but it reemerged a month before Marilyn's death. And so there couldn't have been a marriage.

(lk. Jun. 1, 2001)

(25) [−h, −that] :

◎KING: By the way, that story about a stewardess is appearing in New York tabloids today and one national tabloid. It has not been confirmed by CNN. OK, Nancy, what do you make of what we heard, especially what Ann said -- it was on the record?
LUQUE: No, I don't believe it was on the record.

(lk. Mar. 27, 1998)

(26) [+h, +that] :

◎KING: James, were you shocked that she killed herself?
HASPIEL: Well, first of all, I don't believe that she killed herself.

(lk. Jun. 1, 2001)

(27) [+h, −that] :

◎OLSON: And frankly, Larry, that's not the Secret Service. That's the treasury department that's saying that.
MYERS: It's the Secret Service, Barbara.
OLSON: And I don't believe it's the Secret Service. We know Lewis Merletti has said that who is head of the Secret Service.

(lk. Jul. 15, 1998)

5.2. 'I don't think'（一部検索〔Jan. –Jun. 1998〕）

5.2.1 《否定命題主張》–YES-NO疑問文に対する応答

(28)

+that	−that	Total
2(3%)	66(97%)	68(100%)

5.2.2.《否認》

(29)

+that	−that	Total
30(20%)	117(80%)	147(100%)

(30)

	+that	−that	Total
−h	15(**68%**)	7(32%)	22(100%)
+h	15(12%)	110(**88%**)	125(100%)

(−h＝眼前の話し相手以外の人物の発言，+h=眼前の話し相手の発言)

(31) [−h, +that] :

◎BLITZER: Some people are suggesting, Mr. Witt, that there is an El Nino effect, global warming. Have you at FEMA come around to that conclusion?

WITT: Well, Wolf, I think that, really and truly. I don't think that the tornadoes that we've had this month have been El Nino tornadoes, but are effectively El Nino. (le. Apr. 19, 1998)

(32) [−h, −that] :

◎CALLER: Recent reports have indicated that it's been a failure, by and large. You feel that's a good -- do you still think that's a good policy? And would you do it differently today?

POWELL: One, I don't think it's been a failure.

(le. Apr. 26, 1998)

(33) [+h, +that] :

◎WATTERS: ...And I think this is a very dangerous position for Frank Carter to be in because he is also potentially a target of this investigation....

COSSACK: I don't think that Carter would be a target of this investigation. (bp. Jun. 18, 1998)

(34) [+h, −that] :

◎VAN SUSTEREN: No, no. That's ridiculous. It is ridiculous.

COSSACK: No, I don't think it's ridiculous. (bp. Jan. 12, 1998)

6．語用論的要因（円滑な人間関係の確立・維持の為の言語的方略）

(35) Acts threatening to the hearer's Positive Face: e.g., complaining, criticizing, disagreeing, raising taboo topics;

(Fraser, 1990:229)

(36) We must clarify the interpersonal function of assertion and also that of denial. The expression of denial is used to deny the assertion directly, while that of assertion can be used to do it indirectly. We, people, often think that our dignity is threatened when our assertion is denied directly. This can often produce a conflict between the speaker and the hearer. The average person

tends to escape the danger of conflict. (Mori, 1998:27)

(37)最も基本的にはthatはそれが導く節の内容を区切り出し，同時にいわゆる主節の導入部分の独立性をも高める結果を作り出す．(大江, 1984:125)

(38) ..., it is entirely fair to say that the speaker using a 'I don't think [...]' construction to deny the assertion deletes the complementizer *that*, with which the function of denial is reinforced, in order to convert it into a seemingly expression of assertion when he strongly wants to escape the danger of conflict. (Mori, 1998:27)

7．まとめ

主要参考文献

安藤貞雄(1985),『続・英語教師の文法研究』大修館書店.

荒木一雄・安井　稔（編）(1992),『現代英文法辞典』三省堂.

Bublitz, W. (1992) "Transferred negation and modality," *Journal of Pragmatics* 18: 551-578.

Fraser, G. (1990), "Perspectives on politeness," *Journal of Pragmatics* 14: 219-236.

福地　肇(1985),『談話の構造』（新英文法選書10）大修館書店.

Jordan, M. P. (1998), "The power of negation in English: Text, context and relevance," *Journal of Pragmatics* 29: 705-752.

河上誓作(1984),「文の意味に関する基礎的研究」『大阪大学文学部紀要』第24巻.

森　　貞(1995),「日英語の否定辞移動の関する認知語用論的考察」*KLS* 15, 133-143.

森　　貞(1998),「現代口語米語における否定辞移動現象に関するコーパス言語学的考察－否定辞繰り上げと否定辞返送」『英語表現研究』第15号，日本英語表現学会，30-38.

Mori, S. (1998), "The discourse conditions for the use of the complementizer *that* in 'I don't think ～' constructions,"『福井工業高等専門学校研究紀要（人文・社会科学）』第32号:21-28.

中島平三（編）(2001),『英語構文事典』大修館書店.

中右　実(1994),『認知意味論の原理』大修館書店.

大江三郎(1984),『英文構造の分析』弓書房.

太田　朗(1980),『否定の意味』大修館書店.

Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik (1985), *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.

Thompson, S. A. and A. Mulac (1991), "The discourse conditions for the use of the complementizer that in conversational English," *Journal of Pragmatics* 15: 237-251.

Turnbull, W. and K. L. Saxton (1997), "Modal expressions as facework in refusals to comply with requests: I think I should say 'no' right now," *Journal of Pragmatics* 27: 145-181.

宇佐美まゆみ(2002)「ポライトネス理論の展開」『月刊言語』１～10月号，大修館書店.

安井　稔・中村順良(1984),『代用表現』（現代の英文法10）研究社.

同時通訳における動詞表現をめぐる語順差
- 関連性の視点からの一考察 -

南津佳広
(大阪府立大学大学院)

1. はじめに

1－1. 同時通訳とは

・同時通訳　時間の経過に沿って原発言のメッセージ(what an original speaker communicates)を理解した順に、できる限り早い段階で起点言語(Source Language:SL)から目標言語(Target Language:TL)へと変換訳出する言語活動(Chernov1994, 水野 2000, Setton1999)。

・特徴　①原発言のメッセージに忠実に変換訳出(認知資源の主な要素は原発言)。
②極めて厳しい時間の制約。
③SL聴取とTL産出が殆どオーバーラップしているため、双方に対し、同時に注意を向けなくてはならない複数同時的(concurrent)作業。

・課題　①限定的な認知資源のもとでの資源管理(注意の分散)。
②やむを得ず減退する記憶の保持と、記憶の飽和を回避のバランスをいかにはかるか。

1－2. 本発表の主旨

同時通訳では SL・TL の組み合わせによっては語順差がやむを得ず生じる。最も明確に表れるのが動詞をめぐる語順である。英語・ロシア語では一般的に、動詞は主語に後続するに来るのに対し、日本語では文末に来るように、英日を比較すると語順差が存在する。ところが、英日・露日の同時通訳データを調べると、日本語での動詞の訳出にはかなりの程度ばらつきがあり、通訳者が即時訳出することもあれば遅延訳出することもある。

(1)

E 01　Good evening.　Just moments ago　I spoke with① George W. Bush
J 01　こんばんは。　少し前に　私は ジョージ・W・

E 02　and　congratulated② him on becoming the 43rd president of the United
J 02　ブッシュ氏と　話をしました①。　そして 43 代　アメリカ大統領

E 03　States.　And I promised③ him　that I wouldn't call him back this time.
J 03　になるということに対し お祝いのことばを述べました②。そして約束をしました③。

E 04　I offered to meet④ with him as soon as possible so that we can start
J 04　今回はもう一回電話をしないと。　そして私は　なるべく　早く　話を

E 05　to heal the divisions of the campaign and the contest through which
J 05　したいというふうに言いました④。　その　分裂　している　溝を

[資料1]

同時通訳における動詞表現をめぐる訳出のタイミングの差がなぜ生じるのか、そこには単に語順の制約だけではなく、on-line での言語変換時における、容量限定的な環境における言語情報処理の容易さと語用論的忠実性の維持するための何かしらの原理が関わっているのではないかと考えられる。本発表は、この2点を踏まえ、関連性理論の枠組みから、同時通訳における動詞表現の訳出のタイミングの差を分析、考察する。

2. 通翻訳時におけるSLとTLの語順差をめぐる先行研究

2－1. Чернов/ Chernov(1987, 1994)

同時通訳の同時性を可能にする本質的な要因は、情報構造に基づいた вероятностное прогнозирование(probability prediction) であり、予測のレベルはシラブル、語、句、発話、テキスト、状況的文脈までいくつかの層をなしている。この予測が可能となるのは処理の容易さがあることが前提となっている。

原発言のメッセージが展開するにつれて通訳者の心の中にメッセージ全体のアウトラインが形成される。メッセージの意味構造が展開するにつれ、アウトラインをもとに、後続部分展開の予測の範囲は限定される。また、probability prediction が促進されるのは発話プランが自動的操作として無意識に実行され、フィードバックプロセスのための注意が必要ないからである。

問題点:①情報構造の理論的根拠が曖昧。
②SLからTLへの変換は情報構造のみで乗り切れるのか
③記憶の制約(容量限定)が前提となっていない。

2－2. Baker(1992)・水野(1999)

(2) the ultimate aim of translator, in most cases, is to achieve a measure of **equivalence at text level**...To achieve this, the translator will need to adjust certain features of source **text organization** in line with preferred ways of organizing discourse in the target language. (Baker 1992＊太字発表者注)

このテクスト構成の等価を支える重要概念として①Linear Translation(Theme–Rheme progression)、②Cohesion、そして③Coherence の3つが主にあげられる(Baker1992 水野 1999)。機能的等価では

(3)「原文の流れや情報提示順序に沿った訳は原文の昨日を目標言語においても維持する上で重要な役割を果たす。しかし、実際にはすべての情報単位がそのままの順番で日本語に訳出できるはずはなく、文法形式の違いのためにどうしても逆転しなくてはならない箇所は残る」(水野 1999:)

問題点:①原文の流れにそった訳が処理の容易さとどのように関わるかの説明がない。
②この枠組みにおける coherence は discourse の well-formedness や evaluation、

appropriateness のように「いかに TL にて反映させるか」について説明可能にするものである。ところが、同時通訳においては、テクストがどのように展開するのか、その全体像が判明するのは通訳を終えた段階であり、通訳者がテクストの coherence を「どのように理解するか」についての説明を提供していない。

2－3. Setton(1999)

同時通訳においてＳＬとＴＬ間での語順の制約の克服は大した問題ではなく、それは語用論的に解決可能。

（4）...the surface structure of inputs is less constraining than is often assumed.

(Setton 1999: 22)

それよりも重要なことは、logical scope(quantification or negation), tense, aspect, modality, illocutionary force、そして意味が SL と TL とで語彙にパッケージされる仕方の違いにある。また、同時通訳における認知コンポーネントの中枢は記憶努力ではなく推論努力。

・問題点：処理の中間産物をＴＬへ変換するまで、やむをえず記憶に保持しなくてはならないような場合、記憶の容量が限定されている状況で、どのタイミングで訳出可能の判断を下すかについて考察が欠落。

3. 有意義性確保の原則

同時通訳における言語変換では語順は無視することのできない制約のひとつ。ただ、同時通訳における訳出は on-line の発話理解を表出したものと仮定すれば、以下のような提案ができるのではないか。

① SLの語順に沿ってどのようにオンラインで発話理解しているのか、その認知的な原則を探ることができる。

② 語順は、通訳者がSLの発話理解の際に行う推論にかけられる制約のひとつと捉えれば、語順差は語用論的に解決可能。

3－1. メタ表象 Metarepresentation としての同時通訳と interpretive resemblance

関連性理論の枠組みから、Gutt(2000)に倣い、同時通訳も翻訳と同様に発話者（書き手）からの言語的な刺激を聞き手（読み手）が metarepresent するものと捉えることができる。

(5) Metarepresentation

A metarepresentation is a representation of a representation: a higher-order representation with a lower-order representation embedded within it. (Wilson 2000, 411)

メタ表象は interpretive resemblance によって保証される。ところが、通翻訳ともに、SL からTLへ言語変換する際には原発言（原文）のメッセージに忠実 faithful でなくてはならないために、通翻訳者は semantic な faithfulness だけではなく pragmatic な faithfulness をも維持するものである。

3－2. 有意義性の確保

同時通訳時における SL とTLにおける faithfulness を維持するためには、①ＳＬの聞き手としての通訳者の解釈（およびＴＬの産出）と②通訳者がＳＬにかぶせる情報、伝達意図問題という2種類の領域について考えなくてはならない。それらを踏まえた上で、通訳者の姿勢に船山(2000)は一般的な原則が働いているという。

(6) 有意義性確保の原則(Principle of Securing Meaningfulness)

通訳者は自分の訳を構成する表現が全て有意義なものであるようにする。(船山 2000:5)

問題となるのはこの「有意義」である。この有意義性は semantic な側面だけではなく pragmatic にも働く。例えば、英日の同時通訳において通訳者が「わけだ」や「のだ」、「という」など、通訳者独自の解釈を表す表現を訳語に挿入するのも、この有意義性確保に基づいている。

また、記憶の制約の側面から、通訳者は記憶に負担になる要素を、まず文頭で訳出してしまい、残りの部分をどのような統語構造として訳出するかを判断する時間的余裕を得ている特徴もあるために、容量限定のもとにおける、処理の容易さをも含めると、「有意義性」は呼び出し可能度 accessibility と語用論的容認可能度 pragmatic acceptability の相互調整によって特徴付けられるのではないかと考えられる。

(7) the accessibility of securing meaningfulness

① 対訳候補への呼び出し可能度

② 訳出認知資源への呼び出し可能度

同時通訳の際、発話理解したものを言語変換すると考えられるので、言語変換の際に依存する「文脈」は、SL を聞いて通訳者が meatrepresent したものをメインに構成されているものと考えられる。

(8) the pragmatic acceptability of securing meaningfulness: **Relevance-based criterion**

(9) Principle of Relevance

a. Cognitive Principle of Relevance

Human cognition tends to be geared to the maximisation of relevance.

b. Communicative Principle of Relevance

Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.

(Sperber and Wilson 1995: 260)

(10) Relevance theoretic comprehension procedure

a. consider cognitive effects in their order of accessibility(i.e. follow a path of at least effort)

b. stop when the expected level of relevance is achieved.

(Wilson and Matsui 1998: 189)

(11)

E 0042 around the world, as president? **[B]:** Well, I think they ought to look at us
J 0042 どんな風な、あ、 見られるべきなのでしょうか？
J'0042 すか。世界はどのようにアメリカを見ているのでしょう。 **[B]:** 世界の人

E 0043 as a country that understands freedom, where it doesn't matter who
J 0043 **[B]:** 私は世界の人々に 自由を尊重するのが
J'0043 たちはアメリカに対しておそらく、 その 自由をわかっている国として見て

E 0044 you are or how you're raised or where you're from, that you can succeed. I don't
J 0044 アメリカだと考えてほしいと 思いますね、 どこで 生まれ どこで
J'0044 いると思いますね。どんな、あ、育ちか、どこからの 出身 に も 関わらず

[資料2]

(12)

E 0161 hard to tell. I think that, you know, I would hope to be able to convince people
J 0161 **[B]:** そうですね、私も違いは何かというのは、いいに、あの、よく
J'0161 ました。**[B]:** そうですね、言うのはなかなか難しいと思うんですけれども、私は、国民に納得

E 0162 I could handle the Iraqi situation better. I mean, we don't... **[L]:** Saddam
J 0162 わからないところがあると思います。ただ、 イラクの状況については、
J'0162 していただきたいと思います①。このイラク問題を もっと 上手く、

E 0163 Hussein, you mean? **[B]:** Yes . **[L]:** You could get him out of there? **[B]:** I'd like to,
J 0163 私の方が、 対応する ことができると 申し上げたいと 思います②。
J'0163 対話できる ということです。 [資料2]

この観点から、語順をめぐる問題も同時通訳者が有意義性を確保しようと意図したものとして統一的に説明可能なのではないか。

4. 分析

4－1. Linguistic underdeterminancy による訳出遅延

(13)

P 01 Мы, конечно, очень позитивно, позитивно к этому сближению
Я 01 わたくしども、 もちろん、この、

P 02 и сотрудничеству. а... Причины этого мы уже раскрыли
Я 02 接近、 協力については、え、前向きにみております。

P 03 немножко раньше, терроризм независимо от его религиозного
Я 03 その、 原因は、 先ほど あのお話にも ありまし たが、

Р 04 или этнического, или иной политической краски, представляет
Я 04 テロリズム というもの は、 宗教的、

Р 05 собой глобальное универсальное зло. И никакая одна страна,
Я 05 民族的な、 特色 に関係なく、グローバルな、

Р 06 какая она бы большая, и могучая не била, бредней сможет
Я 06 性格を 持っています。 ですから、大きな国で [資料３]

4－2. Inserting suspending reherence

(14)

E 10 same spirit, I say to President-elect Bush
J 10 同じ精神のもとに、私はブッシュ

E 11 that what remains of partisan rancor must now be put aside,
J 11 次期大統領にこういうふうに言いたいと思います。まだ、この党派的なものは横に置いて

E 12 and may God bless his stewardship of this country.
J 12 おかなくてはならないと。そして、神のご加護、 ぜひ この国を指導する能力

E 13 Neither he nor I anticipated this long and difficult road. Certainly neither
J 13 に与えられんことをと。 [資料１]

(15)

E 16 of our democracy. Over the library of one of our
J 16 ことで、 このアメリカの民主主義の機構制度 を通じて解決されました。
E 17 great law schools is inscribed the motto: "Not under man, but under God
J 17 私たちの 法律学 大学院の中でこんなふうに書いてあります。

E 18 and law." That's the ruling principle of American freedom, the source of our
J 18 神のもと、法律のもとで、 人のもとではなくてということです、それがアメリカ

E 19 democratic liberties. I've tried to make it my guide throughout
J 19 の自由の源泉であります。私たちの民主主義の源泉です。 私は それを自分の
[資料１]

4-3. paraphrasing addition

(16)

E 06 we've just passed. Almost a century and a half ago,

J 06 埋めたいと、私たちが終わった選挙戦において、その溝を　　修復したい

E 07　　Senator Stephen Douglas told　　Abraham Lincoln,　　who had just
J 07 からです。50年近く前にスティーブン・ダグラス上院議員がエイブラハム・リンカーン氏

E 08 defeated him for the presidency,　"Partisan feeling　must yield to patriotism
J 08 にこういうふうに言いました。大統領で負けたときにです。

E 09　I'm with you, Mr. President, and God bless you.　　" Well, in that
J 09 党派的な　やり方を超えて、　　愛国的にしなくてはならない。私は　あなたととも

E 10 same spirit,　　I say to President-elect Bush
J 10 にあります。神のご加護をというふうに言いました。同じ精神のもとに、私はブッシュ

[資料1]

(17)

E 38 we are one people　with a shared history　and a shared destiny.　　Indeed,
J 38 道を開いていけると思います。　私達は一致団結している国民、　　歴史を　わかち

E 39　　that history gives us many examples　of contests as hotly debated,
J 39 あっており、運命を分かち合っているのであると。そしてこの歴史の中には

E 40　as fiercely fought,　　with their own challenges to the popular will.　　Other
J 40 沢山の例があります。　今回のような 大変な　戦い、　そして　それぞれの課題

E 41 disputes have dragged on for weeks before reaching resolution,　　and
J 41 があったというものです。　他の騒乱もありました。　　何週間もかかりました。そして

E 42 each time, both the victor and the vanquished have accepted the result peacefully
J 42 ようやく　決着を見ました。　　[資料1]

5. まとめ

【参考文献】

Baker, M. (1992). *In Other Words: A Coursebook on Translation.* London: Routledge.

Чернов, Г. В. (1987). *Основы синхронного перевода.* Москва. Высшая школа.

Chernov, G. B. (1994)."Message Redundancy and Message Anticipation in Simultaneous Interpretation". Eds. Lambert, S and B. Moser-Mercer. *Bridging the Gap Empirical Research and Simultaneous Interpretation.* Amsterdam and Philadelphia: John

Benjamins, 139-153.
Chincotta, D and Underwood, G. (1998). "Simultaneous interpreters and the effect of concurrent articulation on immediate memory: bilingual digit span study". Interpreting 3(1), 1-20.
船山仲他（2000）「同時通訳の認知的側面を構成する要素について」宮畑一範（編）『同時通訳における情報フローの認知言語学的検証：平成10－11年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書』大阪府立大学総合科学部：３－26。
船山仲他（編）（2002）『同時通訳における対訳遅延の認知言語学的研究：平成12－13年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書』大阪府立大学総合科学部：３－19。
水野的（1999）「機能的翻訳論への序章」『通訳理論研究』15号 通訳理論研究会：50-77。
西村友美（1999）「時差通訳のストラテジーと言語認知」『京都橘女子大学　研究紀要』26号　京都橘女子大学：69 - 84。
西尾道子（2000）「日英同時通訳における情報構造の保持と通訳文の語順に関する一考察」『お茶の水女子大学　人文科学紀要』53巻　お茶ノ水女子大学：171-183。
Setton, R (1998). "Meaning Assembly in Simultaneous Interpretation". *Interpreting*: Vol. 3(1), 163-199.
Setton, R (1999). *Simultaneous Interpretation: from pragmatic and cognitive perspective.* Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing.
Sperber, D & Wilson, D. (1986/1995). *Relevance: Communication and Cognition.* Oxford: Blackwell.
Wilson, D. (1998). "Discourse, coherence and relevance: A reply to Rachel Giora". *Journal of Pragmatics* 29, 57-74.
Wilson, D. (2000) "Metarepresentation in Linguistic Communication". *Metarepresentations: a multidiscriplinary perspective.* Ed. D. Sperber. Oxford: Oxford University Press, 411-448.
Wilson, D. & T. Matsui. (1998). "Recent approaches to bridging: Truth, coherence, relevance". *UCL Working papers in Linguistics* 10, 173-200.
Wilson, D. & D. Sperber. (1993) "Linguistic form and relevance". *Lingua,* 90, 1-25.

【同時通訳資料】

資料１：ゴア敗北宣言：2000年12月13日：ＣＮＮ（英→日）
資料２：アメリカ合衆国大統領選討論会：2000：10月12日：J　ＮＨＫ：J' ＣＮＮ（英→日）
船山（他）（2002）『同時通訳における対訳地円の認知言語学的研究』資料編より引用
資料３：同時多発テロインタビュー：2001年11月14日：NHK　BS23
＊なお、これらはすべて、同時通訳者の on-line での理解を反映させるために、スクリプトなしのいわゆる「生同時通訳」で行われているものを採用した。

直喩における類似性の創造による彩

黒川　尚彦
（大阪大学大学院）

1. Introduction

(1)　I dare say that for surgeons, operations are *like buses at a bus depot.* (BNC)

(2)　Her forearms, huge and smooth, were *like two hams ready for hanging.* (BNC)

目的：関連性理論の立場から、直喩（*like* NP）の彩がどのように理解され、またその解釈過程で語（NP）の持つ mental image がどのように関わるかについて考察する。

問題①直喩の「彩」とは何か。
　②直喩によって比較される２つの類似性はどのように見い出されるか。

2. Previous Analyses

◆Chiappe and Kennedy (2001)

P is like Q：similarity claims

①P は Q の essential properties を少し持つ

（*Limes are like lemons.*　essential property: citrus fruits）

②P は Q の nonessential properties をいくらか持つ

（*That thing is like an apple.*　nonessential properties: red, round, small , firm）

◆佐藤(1978)

「類似性にもとづいて直喩が成立するのではなく、逆に、《直喩によって類似性が成立する》」

(3)　駒子の唇は<u>美しい蛭のやうに</u>滑らかであつた。　（川端康成『雪国』）

「この直喩は、「…のやうに」という結合表現によって、非常識的な類似性を読者に強制していることになる。それを受け入れるかどうかは読者の自由である。つまり、直喩によって類似性が設定されている」

◆Turner (1991: 187)

look like を用いた表現は２通りにあいまいだが、対応する隠喩表現ではあいまいさは生じない。

(4) She *looks like a witch.*

(5) a. From her looks, I guess that she will behave like a witch.

b. She resembles visually my image of a witch.

(6) She's a witch.

(7) a. She behaves in a witchy way.

b. She looks like a witch.

直喩の場合、どちらの解釈にも witch のイメージを用いて理解される。

◆Carston (2002: 357-8)

関連性理論の立場からの隠喩と直喩に関するコメント

(8) ... while a metaphor and its corresponding simile may communicate the same set of implicatures, the difference between them may be captured by the fact that an ad hoc concept is constructed as part of the explicit content of the metaphor, while the lexically encoded concept is preserved in the simile, ...

(Carston 2002: 358)

3. Relevance Theory

3.1 Outline of Relevance Theory

(9) Relevance

Extent condition 1: an assumption is relevant in a context to the extent that its contextual effects in this context are large.

Extent condition 2: an assumption is relevant in a context to the extent that the effort required to process it in this context is small. (Sperber and Wilson 1986/1995: 125)

(10) Cognitive effects (=contextual effects)

(a) contextual implication, (b) strengthening an existing assumption, (c) revising an existing assumption

(11) Principle of Relevance

(i) Cognitive Principle of Relevance

Human cognition tends to be geared to the maximisation of relevance.

(ii) Communicative Principle of Relevance

Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance.

(Sperber and Wilson 1995: 260)

(12) Presumption of optimal relevance (revised)

(i) The ostensive stimulus is relevant for it to be worth the addressee's effort to process it.

(ii) The ostensive stimulus is the most relevant one compatible with the communicator's abilities and preferences. (Sperber and Wilson 1995: 270)

(13) Relevance-theoretic comprehension procedure

Follow a path of least effort in computing cognitive effects.

(a) Consider interpretations in order of accessibility.

(b) Stop when your expectation of relevance is satisfied. (Wilson 2000: 420)

3.2 Relevance-theoretic View of Concepts

(14) Concepts, ..., are psychological objects considered at a fairly abstract level. (Sperber and Wilson 1986/1995: 86)

(15) The information that may be stored in memory at a certain conceptual address falls into three distinct types: logical, encyclopaedic and lexical. (ibid.)

(16) The *encyclopaedic entry* contains information about the extension and/or denotation of the concept: that is, about the objects, events and/or properties which instantiate it. (ibid.)

(17) The encyclopaedic entry comprises a wide array of different kinds of knowledge, including commonplace assumptions, scientific information, culture-specific beliefs and personal, idiosyncratic observations and experiences. Some of this information may be stored as discrete propositional representations, some of it may be in the form of integrated scripts or scenarios ..., and some may be represented in an analogue (as opposed to digital) format, perhaps as mental images of some sort.

(Carston 2002: 321)

百科事典的項目に含まれる mental image はアナログ的な表象と言える。そのような mental image を発話解釈における想定として用いることはできるのか？

(18) Perceptual processes have, as input, information provided by sensory receptors and, as output, a conceptual representation categorizing the object perceived. Conceptual processes have conceptual representations both as input and as output. (Sperber 1996: 120)

知覚処理と同様に、mental image は概念表象に変換されうる。

4. Proposal: Mental Image

☆何らかの類似性を表す直喩の理解において、mental image は類似性の創造に貢献し、さらに弱い推意の理解を助ける。

(19) ... perceptual symbols[1] explain linguistic vagary, namely, the problem that linguistic descriptions of concepts are unprincipled, haphazard, and incomplete. Linguistic vagary simply reflects the maxim that a picture is worth a thousand words, or in more technical terms, an experiential image can be described by an infinite number of linguistic descriptions. (Barsalou et al. 1993: 29)

☆mental image：physically and mentally perceptual information which is provided by perception
例　あるモノの映像的情報およびそれに対する態度（快・不快など）

◆mental image による類似性の創造

(20) Loss of his money is *like evisceration*. (BNC)

(21) Sometimes she thought that food was *like a gag*. (BNC)

喚起される mental image

(20)：内臓摘出の視覚的情報[2]、それに対する不快感・嫌悪感、苦しさなど

(21)：さるぐつわの視覚的情報、それに対する不快感、圧迫感、苦しさなど

導出される（弱い）推意

(20)：お金を失うことは、苦しく、堪え難く、身を裂かれる思いで、すべてを失うに等しい。
　　お金を工面してほしい。

(21)：食べ物が食べられないくらい、吐きそうなほどまずい。
　　食べ物がのどを通らない
　　彼女は食べ物を口にしたくない。食欲がない。

5. Analysis: Possible Questions and Simple Answers

Q1　mental image は視覚的情報に限られるのか

A1　視覚的情報とは限らない。多様な mental image は、典型的には知覚動詞によって喚起される。

---

[1] Barsalou et al. の考えるperceptual symbolsとは以下の通りである。

... perceptual symbols represent concepts; concepts are models for types of individuals in world models; concepts are contextualized and local in scope to situations; word meanings use concepts but are not concepts. (Barsalou et al. 1993: 23)

[2] 視覚的情報は語（ここでは、*evisceration, gag*）だけによるのではなく、コンテクストに左右される。

(22) Her footsteps and the faint noise of her limbs striking one another as she walked *sounded like the mechanism of a time bomb*. (BNC)

(23) His limbs *felt like lead*; his eyelids too heavy to lift ... he wanted to lie here, on this comfortable bed, for ever ... (HP)

(24) Their [goats'] cheese *smells like sewage*. (Fun)

(25) One former rival, incoming Foreign Minister Makiko Tanaka, joked that Koizumi's trademark silver hairdo made him "*look like the Lion King*." (*Newsweek*)

(26) The cigarette tasted *like engine grease filtered through sawdust*. (BNC)

(22)：時限爆弾のカチカチという音（小さいが非常に気になる音）、緊張感など

(23)：鉛の重たい感じ、疲労感、虚無感など

(24)：汚水のにおい、それに対する激しい不快感・嫌悪感など

(25)：ライオンキングの外見（特に髪型）、それに対する好意的印象、勇敢さなど

(26)：エンジングリスのにおい、不快感、粘り気など

Q2 mental image は１通りの知覚によるものか。

A2 １通りの知覚とは限らない。mental image は幾通りかの知覚による複合的情報を表しうる。

(27) His words were *like a slap across her face*. (BNC)

(28) Yo-Yo Ma, cellist, says the 1712 Stradivarius he plays is "*like a great Bordeaux*," while his 1733 Montagnana is "earthier, *like a Burgundy*." About a third instrument, his Rolex, he says, "I just love it. You can use it for any occasion." (*Newsweek*)

(27)：平手打ちの様子（視覚）・音（聴覚）・痛い感覚（触覚）、辛辣で侮辱的印象など

(28)：ボルドー・ブルゴーニュ（産ワイン）のにおい（嗅覚）、味（味覚）、それに対する好意的印象、上品さなど

Q3 直喩の解釈において mental image は必ず喚起されるのか。

A3 必ずしも mental image が解釈に貢献するとは限らない。

(29) My hands are *like pumice stones*! (BNC)

(30) Lifts are *like shared entrances*, you never know who is in them and you run the risk of being trapped in there with an attacker. (BNC)

mental image を発話解釈に用いるかどうかは関連性の原理に従う。しかし mental image を用いると、

話し手の伝達したい内容をよりいきいきと感じることができる。

(29)：mental image を用いれば、手あれのひどさを明確に理解でき、弱い推意として話し手は薬が欲しいが産出されるかもしれない。

(30)：*shared entrances* 自体には mental image がないかもしれない。

いずれの場合も、聞き手が関連性の期待を満たしていると考えたときに解釈は止まるので、聞き手が直喩によって伝達された類似性が十分であると見なす段階で解釈は止まる。

Q4 mental image を用いずに、語彙概念が持つ他の百科事典的知識で解釈できるのではないか。

A4 もちろんその場合もあるが、mental image を用いることで理解できる内容がある。

(31) At first she lay in the curve of Edward's body, so that they were *like two spoons in a drawer*. (BNC)

(31)：引き出しの中にある２本のスプーン → 整然としている、ぴったり合う

弱い推意：２人のとても仲がよい

Q5 mental image は１度に多くの情報にアクセスできる点は効率的だが、不必要な情報もあるのではないか。

A5-1 もちろんあるが、直喩では話し手の類似性の明示によって聞き手は mental image の創造およびそれから得られる想定が制限される（つまり不当な処理労力をかからない）。

(32) The pub is *like a five-star hotel lounge*: huge windows and modern chairs. (BNC)

(32)：五つ星ホテルのラウンジの視覚的情報、豪華さ、上品さなど

mental image には多くの想定が含まれるが、話し手は必要な想定のみを提供。よって、不必要な処理労力を聞き手に負わせない。

A5-2 あるいは、話し手の類似性の明示によって聞き手は mental image をより明確にする（つまり既存想定の強化という認知効果が産出される）。

(33) If Anne reminded me of a gazelle, then Mrs. Constantine was *like a snake*: <u>supple</u> and seemingly <u>without bones</u>, <u>smooth</u>, <u>lustrous</u>, with wicked black eyes like stones and shining black hair <u>twisted</u> up into a knot on top of her head and a wide, wide mouth with disturbingly red lips and a <u>flickering tongue</u> that darted out to <u>lick</u> the crimson lips when she was concentrating on the cards. (BNC)

(33)：ヘビの視覚的情報、それに対する不快感、嫌悪感など

下線で示された内容は、聞き手が持つ mental image から理解できるが、それが明示されることでより鮮明な image を描くことができ、既存想定を強化（部分的には訂正）する。同時に不快感も理解でき、話し手のコンスタンティンさんに対する態度が非明示的に伝達される。

A5-3 あるいは、話し手独自の類似性の明示によって聞き手は mental image を創造する（つまり文脈的含意（contextual implications）という認知効果が産出される）。

(34) I was glad to learn that you could make a house happy by hugging it. I had thought houses to be *like lovers*: hugs are all well and good but in the end they require a lot of money. (Fun)

(34)：恋人との幸せな様子

mental image から聞き手は家庭と恋人のさまざまな類似性を理解するが、話し手独自の類似性の明示によって新たな弱い推意（例えば、もっとたくさんのお金が必要だ）が産出されるかもしれない。

6. Conclusion

問題①直喩の「彩」とは何か。

答え：関連性理論の枠組みでは、弱い推意の集合（set of weak implicature）と考えられる。これらは聞き手が理解する類似性とその類似性から導出されるものである。

問題②直喩によって比較される２つの類似性はどのように理解されるか。

答え：類似性は語の概念（特に百科事典的情報）から理解されるが、とりわけ知覚的な類似性を理解するとき mental image が利用される。mental image は一度に複数の内容を伝達することができ、発話の処理の観点からも効率的である。ただしどのような情報を利用するかは関連性の原理に従う。

References

Barsalou, Lawrence W. (1983) "Ad hoc categories." *Memory and Cognition* 11: 211-227.

Barsalou, Lawrence W. et al. (1993) "Concepts and meaning." *Chicago Linguistics Society 29: Papers from the Parasession on Conceptual Representations*: 23-61.

Blakemore, Diane (1992) *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell.

Carston, Robyn (1996) "Enrichment and loosening: Complementary processes in deriving the proposition expressed." *UCL Working Papers in Linguistics* 8: 205-232.

Carston, Robyn (2002) *Thoughts and Utterances: The Pragmatics of Explicit Communication*. Oxford: Blackwell.

Chiappe, Dan L. and John M. Kennedy (2001) "Literal bases for metaphor and simile." *Metaphor and Symbol* 16(3&4): 249-276.

Miller, George A. (1993) "Images and models, similes and metaphors." In A. Ortony (ed.) *Metaphor and Thought* (2nd ed.), 357-400. New York: Cambridge University Press.

Pilkington, Adrian (2000) *Poetic Effects: A Relevance Theory Perspective*. Amsterdam: John Benjamins.

佐藤信夫 (1978) 『レトリック感覚』 東京：講談社. (『レトリック感覚』(1992) 講談社学術文庫 1029.)

Sperber, Dan (1996) *Explaining Culture: A Naturalistic Approach*. Oxford: Blackwell.

Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1986, 1995) *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

Sperber, Dan and Deirdre Wilson (1997) "The mapping between the mental and the public lexicon." *UCL Working Papers in Linguistics* 9: 107-125.

Turner, Mark (1991) *Reading Minds: The Study of English in the Age of Cognitive Science*. Princeton: Princeton University Press.

Wilson, Deirdre (2000) "Metarepresentation in linguistic communication." In D. Sperber. (ed.) *Metarepresentations*, 411-448. Oxford: Oxford University Press.

Wilson, Deirdre and Dan Sperber (1993) "Linguistic form and relevance." *Lingua* 90: 1-25.

Sources

Bennett, Joe (2000) *Fun run and other oxymorons*. London: Simon & Schuster. [Fun]

Rowling, J. K. (1999) *HARRY POTTER and the Prisoner of Azkaban*. London: Broomsbury. [HP]

Newsweek [*Newsweek*]

Corpus

British National Corpus (http://thetis.bl.uk/) [BNC]

Tautology の考察 --- ad hoc 概念を使って

西川眞由美
奈良女子大学大学院
(akbkt909@tcn.zaq.ne.jp)

1. はじめに

Tautology: 命題論理学(propositional logic)で、論理式の要素がいかなる値をとっても、全体が真である論理式を tautology という。 (現代英文法辞典 1992: 1469)

(1) *War is war.* ($\forall x(Wx) \rightarrow (Wx)$)
(2) *Either John will come or he won't.* ($p \vee \sim p$)
(3) *If he does it, he does it.* ($p \rightarrow p$) (Levinson 1983: 111)

無意味に見える tautology も談話の中では、大いに意味を伝達していることがわかる。(Levinson 1983, Wierzbicka 1987, Fraser 1988, Ward and Hirschberg 1991 等参照)。

(4) The US must take substantive military action against all known terrorist bases as well as governments that sponsor terrorism. *War is war.* Haboring terrorists is a criminal act of war.
(5) A: I'm wondering if John will really come to the meeting or not.
B: *Either John will come or he won't.*
(6) A: Does John want to study art in France?
B: Well, he doesn't seem to be interested in that now. But *if he does it, he does it* .

Pragmatic questions:
(a) 聞き手はどのように tautology を解釈するのか?
(b) 話し手は tautology を使用することによってなにを伝達しているのか?
(c) 話し手は tautology を使用することによってどのような効果をねらっているのか?

2. 先行研究

(a) Gricean approach (Grice 1975, Levinson 1983):
特定の文脈において伝達される tautology の意味は量の格率違反(the violation of the maxim of Quantity)と協調の原理(the Principle of Cooperation)からでてくる含意として解釈される。

(7) An account of how they come to have communicative significance, and different

communicative significances, can be given in terms of the flouting of the maxim of quantity. Since they requires that speakers be informative, the asserting of tautologies blatantly violates it. Therefore if the assumption that the speaker is actually cooperating is to be preserved, some informative inference must be made.

(Levinson 1983: 110-111)

(1') 'terrible things always happen in war, that's its nature and it's no good lamenting that particular disaster'

(2') 'calm down, there's no point in worrying about whether he's going to come because there's nothing we can do about it'

(3') 'it's no concern of ours' (ibid.)

Problems with Gricean approach:

(a) tautology の解釈のメカニズムを明確に説明していない。(文脈の働き等)。

(b) 量の格率違反と協調の原理から導出される含意は他にもあるが、それらと tautology の解釈がどのように区別されるのかその基準が示されていない(Grice 1989: 33 参照)[*1]。

(b) Wierzbicka's approach (1987 radical semantics):

tautology の解釈は、統語構造に依存し、言語によっても異なる。その意味は NSM (Natural Semantic Metalanguage) によって定義可能である[*2]。

(8) English has not one, but many, productive tautological patterns conforming to the formula *(ART) N^i be (ART) N^i*. If we want to state the meaning of these patterns accurately, we must recognize this plurality of types, and state the meaning of each one separately. [. . .] From a formal point of view, the following tautological constructions (among others) can be distinguished in English:

***N_{abstr} is $N_{abstr.}$* : 'sober attitude towards complex human activities'**

War is war. Business is business.

***$N_{hum.pl}$ is $N_{hum.pl}$.*: 'tolerance for human nature'**

Boys are boys. Women are women. Kids are kids.

***(ART) N is (ART) N.* :'obligation'**

A rule is a rule. A promise is a promise. A father is a father.

(Wierzbicka 1987: 104-110)

Problems with Wierzbicka's view:

---

*1 Grice は, 同様に量の格率違反によって特別会話含意 が引き出される例として次の例を挙げている。"Dear Sir, Mr. X's command of English is excellent, and his attendance at tutorials has been regular. Yours, etc." (Grice 1989: 33)

*2 NSM については、Wierzbicka (1987: 103) 参照。

(a) ある tautology 発話が文脈によってさまざまな意味を伝達するという事実を説明できない。

War is war.

(9) A: The US is going to attack Iraq, you know.
B: Yeh, it's reasonable in many ways, isn't it?
A: But *war is war*. (= 'sober attitude toward complex human activities')

(10) The president of the arms-manufacturing company is pleased when he hears the news that a war will start.
Employee: But I'm afraid this war will not last long.
President: *War is war*. (≠ 'sober attitude toward complex human activities' Any war is profitable for arms-manufacturing companies. Even if this war doesn't last long, that will be profitable to us.)

Kids are kids.

(11) A: Ben broke his glass again!
B: *Kids are kids*. (= 'tolerance for human nature')

(12) At Living Wisdom School, my son has learned to appreciate that people has different needs and different abilities but *kids are kids*, and it's possible to have fun without always having to win. (≠ 'tolerance for human nature')

A father is a father.

(13) (Bob says to Tom, who is always complaining about his naughty kids.)
A teacher can quit or be fired. But *a father is a father*, whether you like it or not. (= 'obligation')

(14) A: What did you do yesterday?
B: I went to the movie with my father.
A: Did you have a good time? He seems like a nice man.
B: *A father is a father*. (≠ 'obligation' All fathers are essentially the same.)

(b) tautology を使用することによって、NSM で定義された意味以外にさまざまな推意が伝達されるという事実を説明できない。

(14') a. 'I like to go to the movie with my boy friend'
b. 'Being with a father is boring'

(c) Ward & Hirschberg's approach (1991):

A is A という tautology は、発話者によって意図的に避けられた *A is B* という発話を文脈から想定し、「*A is B* は関連がない」という一般会話含意(generalized conversational implicature、以後 GCI と称す)を伝達する[*3]。

*3 GCI に関しては、Grice (1989: 37-38)参照。

(12) The defense claimed White had asked him to kill her. The prosecution countered with the claim '*Murder is murder*'. (Ward & Hirschberg 1991: 512)

(12') 'Murder is sometimes justifiable' (*A is B*) is not relevant.

Problems with Ward & Hirschberg's approach:

(a) tautology を使用することによって、GCI 以外にさまざまな推意が伝達されるという事実を説明できない ((14')参照)。

(b) tautology を使用することによる効果を説明していない(辻本 1996 参照)。

(d) Tujimoto's approach (1996):

名詞句 tautology は、二人以上の人間の間に、ある事柄に関して意見の不一致が見られる状況で使用され、文脈に潜在する否定を再度強く主張するための表現形式である[*4]。(12)の例では、誰かが犯した殺人(*X*)は私利私欲のために邪魔になる人物を殺す殺人(*A*)とは違う、つまり *X is not A* という否定が文脈に存在することを認識した検察が、その人が犯した殺人(*X*)は私利私欲のために邪魔になる人物を殺す殺人(*A*)である、つまり *X is A* だと主張していると解釈される。

Problems with Tujimoto's view:

(a) *X is A* を伝達したいと思っている話し手が、なぜ *A is A* という名詞句 tautology を使用するのかを説明していない。

(b) 名詞句 tautology は二人以上の人間の間に意見の不一致が見られない状況でも使用されるという事実を説明していない ((12)参照)。

(d) Bulhof & Gimbel's deep tautological approach (2001):

A is A で、*A* の持つ意味の曖昧さを語用論で限定し、その限定された意味を強調していると解釈される。

(13) A: Don't worry about oppressing those people, they are just poor Africans.
B: *People are people.* (Bulhof & Gimbel 2001: 287)

people に特定の意味を規定することによって、人は肌の色、社会的階級などによって差別されず、ひととして同じなのだということを強調している。さらに、B の A に対する非難などの推意が語用論的に解釈される。

Problems with deep tautological approach:

---

*4 辻本は、この種の否定には普通なら否定のスコープに入ってこないようなさまざまな要素(ある語の発音の仕方、使用域など)が入ってくるとし、Horn(1985)のいう metalinguistic negation に近いものではないかと述べている (1996:132)。

(a) *A is A* における二つの *A* は同じものを指すのだろうか。
(b) *A* の限定された意味や、他の推意がどのような語用論的メカニズムによって導出されるのかについて説明していない。

3. Ad hoc 概念と語彙的語用論

Ad hoc concept:

a concept that is constructed pragmatically by a hearer in the process of utterance comprehension. Speakers can use a lexically encoded concept to communicate a distinct non-lexicalized (atomic) concept, which resembles the encoded one in that it shares elements of its logical and encyclopadiac entries, and hearers can pragmatically infer the intended concept on the basis of the encoded one. (Carston 2002: 322)

Lexical pragmatics:

Investigates how linguistically-specified 'literal' meanings are modified in context.

(a) **Lexical narrowing:** use of a word to convey a more specific sense than the lexical one.
(b) **Lexical broadening:** widening of the lexically-specified denotation.
(c) **Metaphorical extension:** radical widening of the lexically-specified denotation.

(Wilson 2002)

Relevance theory and lexical pragmatics:

Claim 1: The encoded concept is merely a starting point for inferential comprehension.
Claim 2: Inferential comprehension involves the construction of an **ad hoc concept** based on information made accessible by the lexically-encoded concept, and by previous discourse.
Claim 3: Ad hoc concept construction is triggered by the search for relevance, and stops when the hearer's expectations of relevance are satisfied. (ibid.)

(14) Bob: The New Age Psychic Synergy movement promises to reveal the secret of lasting peace and happiness. Will you come with me to their meeting?
Ann: No, thanks. I'm already happy. (Carston 2002: 327)

(15) Explicature: Ann is HAPPY*.
Implicated premise: If a person already HAPPY* she/he doesn't need advice from the Psychic Synergy Movement.
Implicated conclusions: Ann is not interested in going to a Psychic Synergy meeting because she is already HAPPY*. (ibid.)

4. Tautology の考察

Tautology 発話は、聞き手の知識として存在しながら、当該文脈では見のがされている

明白な事実（obvious truths）を想起させるもの（reminder）として関連性を持つ[*5]。その解釈過程は、ad hoc 概念構築のプロセスを含む語彙的語用論で妥当な説明が可能である。つまり、tautology 発話 *A is A* から表意 *A is A**.（明白は事実）を復元し、さらに文脈情報と相関してさまざまな推意を復元する。

The interpretation procedure of tautologies:

(a) Utterance: ***A is A.***

(b) Explicature: ***A is A****.（*A* は文脈に応じて指示的（referential）に、*A** は *A* に語彙的にコード化された概念と文脈情報から語用論的に導出された叙述的（predicative）な ad hoc 概念）

(c) Implicatures: 強い推意、弱いさまざまな推意群が復元される。

Illustration:

(16) (Mary finds a penny on the street and picks it up.)
Tom: Why did you pick it up? It's just a penny.
Mary: *Money is money.*

(16') Explicature: Money is MONEY*.
Implicated premise: All money, regardless of the amount, has value.
Implicated conclusions: Even a penny has value.
We should not undervalue a penny.

(17) (Mary won a lot of money in a public lottery. Her friend Jane is envious.)
Jane: You are the happiest girl in the world, aren't you?
Mary: *Money is money.*

(17') Explicature: Money is MONEY**.
Implicated premise: There are many things we cannot buy with money.
Implicated conclusion: Money is not all that important

Advantages of my proposal:

(a) tautology 発話の解釈に関わる語用論的メカニズムを説明することが出来る。tautology 発話も、他の意図明示的刺激と同様、関連性理論における解釈手続きを経て、聞き手に理解される。

Relevance-theoretic comprehension procedure:

(i) Follow a path of least effort in computing cognitive effects: Test interpretive hypotheses (disambiguations, reference resolutions, implicatures, etc.) in order of accessibility.

(ii) Stop when you expectations of relevance are satisfied. (Wilson 2000)

(b) ある tautology 発話が文脈によってさまざまな情報を伝達するという事実を説明することができる（(16')、(17') 参照）。ひとつのコード化された概念から文脈に応

---

*5 Higashimori, I. & D. Wilson は、関連性理論における tautology 解釈に関して、以下のように述べている。"One possibility would be to treat these cases as reminders, implicating that an obvious truth has been overlooked (1996: 120).

じてさまざまな ad hoc 概念が構築されるからである。また、それぞれの表意は、さらに文脈情報と相関し合ってさまざまな推意群を復元するからである。

(c) なぜ *A is A* という名詞句 tautology によって、*X is A* を伝達できるのかを説明することができる。tautology 発話は、*A is A**と解釈される既存想定（明白な事実）の reminder として関連性を持ち、tautology によって伝達される表意 *A is A**.において、最初の *A* は文脈に応じて referential に解釈され、それには必ず当該文脈で話題になっている *X* を含むからである。

(d) 辻本(1996) で述べられたように、なぜ *X is not A* の *'not'* によって否定されるものには、普通なら否定のスコープに入ってこないさまざまな要素が入ってくるのかを説明できる。ad hoc 概念はコード化された意味とその語に関するさまざまな百科辞典的知識から構築されるからである。

(d) 英語の名詞句 tautology になぜさまざまな統語的な形式が存在するのかを説明できる。*A is A* の最初の *A* は特定の指示物を指すというより、一般的な指示、あるいは総称的な指示として解釈されることが多いので、(叙述部の属性に応じて) 一般性を高める不定冠詞や複数形の総称表現が使用されるのである。

5. Tautology の考察の拡張

Ad hoc 概念を使用した tautology 発話の解釈に関するこの考察は、他の tautology 発話の解釈も説明することが出来る。

(a) Disjunctive tautological utterances

Either John will come or he won't. (Ward & Hirschberg 1991: 515)

(b) Conditional tautological utterances

If I miss, I miss. (Ward & Hirschberg 1991: 517)

If it's crowded, it's crowded. (ibid.)

(c) 他のタイプの tautology 発話

But *when they're gone, they're gone.* (Ward & Hirschberg 1991: 518)

It means what it means. (Ward & Hirschberg 1991: 519)

It says what it says (ibid.)

6. おわりに

(a) 聞き手はどのように tautology を解釈するのか？

Answer: 通常の意図明示的伝達の解釈と同様、関連性理論の解釈手続きによって解釈される。tautology 発話の表意の復元には、ad hoc 概念の構築が重要な役割を果たしている。

(b) 話し手は tautology を使用することによって何を伝達しようとしているのか？

Answer: tautology 発話から復元される表意と、さまざまな推意を伝達している。

(c) tautology を使用することによってどのような効果が意図されているのか？

Answer: 一見無意味な文を使用しながらも、その解釈を全て聞き手の語用論的推論に任せることによって、また明白な事実想定の reminder として関連性を持つという事実によって、字義通りの伝達にはないさまざまな効果を達成する。

(i) 文脈情報の共有などから来る微妙な連帯感 (ad hoc 概念の構築にはその語のコード化された概念に百科辞典的知識から、話し手によって意図された概念を呼び出さねばならない。)

(ii) 議論をうち切るような語調の強さ (辻本 1996: 130)、有無を言わさぬ説得力 (構築された ad hoc 概念を含む表意は、誰にとっても既存の、明白な事実であるから、議論の余地がない。)

(iii) 伝達されていることを真に理解したときの辛辣さ (復元した表意は明白な事実であり、それを見のがしていた聞き手に対する話し手の非難等の態度が伝達されるから。)

REFERENCE

Allwood, J.*et al*. 1977. *Logic in Linguistics*. Cambridge: CUP.

荒木一雄・安井稔 (eds.) (1992).『現代英文法辞典』 東京：三省堂

Bulhof, J. & Gimbel, S. 2001. Deep tautologies. *Pragmatics & Cognition 9:2*, 279-291.

Carston, R. 1996. 'Enrichment and loosening: Complementary processes in deriving the proposition expressed. *UCL Working Papers in Linguistics* 8: 61-88.

Carston, R. 2002. *Thoughts and utterances*. Oxford: Blackwell.

Fraser, B. 1988. 'Motor oil is motor oil: An account of English nominal tautologies'. *Journal of Pragmatics* 12: 215-220.

Grice, H. Paul, (1975). Logic and conversation. In: Steven Davis (ed.) *Pragmatics Reader*, 305-315. New York: Oxford University Press.

Grice, P. 1989. *Studies in the Way of Words*. Harvard UP, Cambridge MA.

Higashimori, I. & D. Wilson. 1996. Questions on Relevance. *UCL Working Papers in Linguistics* 8: 111-124.

Levinson, S. 1983. *Pragmatics*. Cambridge: CUP.

三木悦三. 1995. 「トートロジーと呼び起こし」.『英語語法文法研究』2: 19-33.

瀬戸賢一. 1988.『レトリックの知』新曜社.

Sperber, D. & D. Wilson. 1995. *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Blackwell.

Sperber, D. & D. Wilson. 1998. The mapping between the Mental and Public Lexicon. In Carruther, P. & J. Bouchers (eds.) *Language and Thought: Interdisciplinary Themes*. 184-200. Cambridge: CUP.

辻本智子. 1996. 'Tautology in Discourse'. 『尾崎寄春・大沼雅彦両教授退官記念論文集』同刊行委員会 (編). 京都: あぽろん社.

Ward, G. & J. Hirschberg. 1991. 'A pragmatic analysis of tautological utterances'. *Journal of Pragmatics* 15: 507-20.

Wierzbicka, A. 1987. 'Boys will be boys: "Radical semantics" vs. "radical pragmatics"'. *Language*, 63: 95-114.

Wilson, D. 2002. "*Relevance Theory: From the Basics to the Cutting Edge*". Given at International Christian University.

やはり・やっぱりと関連性

武 内 道 子
神奈川大学外国語学部
ytakeu@attglobal.net

1. イントロダクション

伝統的な意味論への挑戦：言語形式の二種の意味

先行研究：意味論：森本(1994)
談話分析：高見(1985)、Maynard(1993)
語用論：西原(1988)
認知語用論：Tanaka(1998)
(i) adverbial
(ii) encoding procedural information
(iii) non-truth conditional
(iv) constraining implicatures

2. コンテクスト

(1) P。 やはり Q。 R: P と関係付けられる想定

(2) やはり節の関連性
(ｉ) 問いへの答えとして関連性がある(認知効果)。
(ii) その答えの証拠を提供する想定（R）が呼び出され、これをコンテクストに取り入れる。
(iii) R は問いへの答えと同様の/似た/整合する/矛盾しない想定である。

(3) お年寄りの場合、特にそういう相談の窓口をご存知ないで悩んでいらっしゃる方が、多いんで、一度もよりのですね、福祉事務所というところございますから、そこであの老人の相談すべて受けることになってますから、まあそういう所をお気軽にね、ご利用なさると、あのう、結構こ

んないい制度があったのかと、知らないと損をするとかっての、たくさんあるんですね。やっぱりあのう、利用できるものはご利用なさったほうがよろしいかと思いますですね。

(4) なんといっても日本の場合は、企業規模の格差ですね、労働時間が非常に違う。つまり小さい企業はとても長く働く。これは今おっしゃったように、収入の問題と密接に関連していますから、なかなかむつかしいですけれどもね。あのう、やっぱりねえ、国際比較を考えてみた場合にはね、今一番問題になっている二千時間を越える国ってのが先進諸国で日本だけなんですよね。だからこれはねえ、やっぱり経済的とかの意味でなく、やっぱり政治的に考えてね、二千時間を切ったほうがいいと私は思っているんです。

(5) 「あのう、お年寄りの一人暮らしというのも、ずいぶん多くなっていますけれども、やっぱりそういったものは多いんですか。」
「えーと、実数としてはやはり増えていますけれどもねえ。」
「ただやっぱりまだまだ日本の場合は、七割近くが三世代同居ですから。」
((3) – (5)は西原(1988))

(6) 映画に行こうかと思ったけど、やはり行かなかった。

(7) A：お客さん、大勢よ。
B：やっぱりピザ作るわ。

(8) (アジア大会の対韓国戦の野球の試合について)
向こうはプロチームだから、やっぱりこてんぱに打たれて負けたよ。

(9) (ワールドシリーズへのプレイオフのことで)
A：やっぱりダイアモンドバックスとヤンキース両方とも負けたね。
B：やっぱりって？
A：宏樹が去年の覇者が両方とも負けるって言ったんだ。僕はヤンキースは勝ち方を知っているからわからないよって言ったんだけどね。

(10) (コマーシャル：一人の女性が窓辺に立ち、外のグラウンドで元気に走り回る子供達を眺めながら、グラスに入った牛乳を飲む)
女性：やっぱ、牛乳でしょ。

(11) A：あの人結婚するんだって。
B：やっぱり！

(12) (遅刻の常習犯であるAが約束の時間に遅れて現れたのを見て)
B：やっぱりね。

3. 手続き的意味：encoded constraints on pragmatic inference

(13) コーヒー。

(14) a. コーヒーを飲みたい。
b. コーヒー切れちゃった。
c. コーヒー買ってきて。
d. コーヒー豆ひいてるの。

(15) やっぱり。

(16) 彼は論文を出さないんじゃないかと危惧していた。

(17) やっぱり彼は論文を出さなかった。

(18) a. 去年も書けないで出すのをあきらめた。
b. あまり大學へ来ていなかった。
c. 聞いても論文のこと話すのを避けていた。

(19) <u>But</u> – constrains the inferential rout which ends up in the denial of an assumption derived from P (the cognitive effects achieved)

(20) a. It was raining, but he went out.
b. It is raining, but I need some fresh air. (Iten 2000)

(21) <u>Nevertheless</u> The inferential rout between P and Q involves deriving a contextual assumption "If P, then not Q." (context selection)

(22) A : She's quite intelligent.
B : Nevertheless she's not really what the department needs at the moment.

(23) (The speaker has just found the hearer eating the last slice of pizza.)
But I told you to leave some for tomorrow.

?Nevertheless, I told you to leave some for tomorrow.

(Blakemore 2000)

(24) This account of the differences between *but*, *however* and *nevertheless* is ...that a discourse connectives may have a cluster of functions some of which may be shared by other connectives. Thus while the function of contradiction and elimination is shared by all these expressions, *however* and *nevertheless* have additional functions which are not encoded by *but*. The point is that these additional functions which must be defined in terms of restrictions on the contexts in which the cognitive effect of contradiction and elimination is achieved, and hence that the notion of a semantic constraint on relevance is more complex than the one proposed in my earlier work (Blakemore 1987). (Blakemore 2002, 128)

(25) やはり：Suspend an inference from P which would result in some accordance with *yahari* clause.

(26) A：あの人自殺したんだって。
B：やっぱり。
A：何がやっぱりなの？ (Tanaka 1997)

参照文献

Blakemore, D..

1987 *Semantic constraints on relevance*. Oxford: Blackwell.

1992 *Understanding utterances: introduction to pragmatics*. Oxford: Blackwell. 武内道子・山崎英一(訳)『ひとは発話をどう理解するか：関連性理論入門』1994. ひつじ書房。

1997 On non-truth conditional meaning. *Linguistishe Berichte. Sonderheft* 8, 92-102.

2000 Procedures and indicators: 'nevertheless' and 'but'. *Journal of Linguistics* 36. 3, 463-86.

2002 *Relevance and linguistic meaning: Semantics and pragmatics of discourse markers*. Cambridge: CUP.

Iten, C.
2000 *'Non-truth-conditional' meaning, relevance and concessives.* University of London Ph D thesis.

Maynard, S.
1993 *Discourse modality: subjectivity, emotion and voice in the Japanese language.* Amsterdam: John Benjamins.

森本順子
1993 『話し手の主観を表す副詞について』東京：くろしお出版。

西原鈴子
1988 「話者の前提：やはり(やっぱり)の場合」『日本語学』89-99。

Sperber, D. and Wilson, D.
1986/95 *Relevance: communication and cognition.* Oxford: Blackwell. 内田聖二他（訳）『関連性理論：伝達と認知』研究者出版。

高見健一
1985 「日英語の文照応と副詞・副詞句」『言語研究』87. 68-94。

Takeuchi, M.
1997 Conceptual and procedural encoding: Cause-consequence conjunctive particles in Japanese. In Rouchota, V. and A. Jucker (eds.), *Current issues in relevance theory.* Amsterdam: John Benjamins. 81-103.
1998 The Japanese adverbial DOOSE. *Kanagawa University Studies in Language: festchrift for the retirement of Prof. Tetsuya Kunihiro.* No. 22. 13-30.

武内道子
1999 「「どうも」と関連性」 『ふじみ』第２１号 富士見言語文化研究会 31-40.
2000 「「どうぞ」と「どうか」：命令発話への制約」 『神奈川大学言語研究』No. 24. 75-89.
2001 「関連性理論の意味論」『英語青年』2003 年１月号

Tanaka, K.
1997 The Japanese adverbial *Yahari* or *Yappari.* In Carston, R. and S. Uchida (eds.) *Relevance theory: applications and implications.* Amsterdam: John Benjamins. 23-46.

Wilson, D. and Sperber, D.
1993. Linguistic form and relevance. *Lingua* 90 (1/2), 1-26.

一貫性と談話の適格性

海寶康臣
立命館大学文学研究科研究生

1．はじめに

複数の文が積み重なって談話は構成されるが、各文は談話内に無秩序に生起する訳ではない。適格な談話は一定のまとまりをもっている。談話にまとまりをもたせるための道具には、指示・代用・省略・語彙等に基づく結束性（cohesion）と意味的つながりである一貫性（coherence)の２種類があるが、談話の適格性に関与するのは後者であることがこれまでに指摘されている（須賀 1992, Green 1996[2]: 105-106, 児玉 2002: 116-117, 143-144）。

Mann & Thompson (1986, 1988)等による一貫性に基づく従来の研究では、文と文の間に一貫性が認められない場合には談話として不適格になるという見解が示されているが、一貫性と談話の適格性に関して、それ以上のことは発表者の知る限り明らかにされていない。本発表では、従来、文と文の間に成立する関係とみなされてきた一貫性が、文と文が発話された場面の間にも成立することを、主にMann & Thompson (1986)において提案されている一貫性に関して例証した上で、一貫性と談話の適格性に関わる原則を２つ提案する。

2．文と文が発話された場面との一貫性

Mann & Thompson (1986)は談話・テクストを意味的に一貫性のあるものにする関係として、以下の（A）－（O）に示す１５の関係を提示している。本節では、１５の関係のほとんどが、文間のみならず文と文が発話された場面の間にも成立することを示す。また、他の文もしくは文が発話された場面のいずれとも一貫性を築いていない文を含む談話は不適格であることも示す。

（A）solutionhood：(1) のテクストのように、先行部分が提示する問題に対する解決案が、後続部分で提供される場合に成立する関係をいう。

(1) I'm hungry. Let's go to the Fuji Gardens.

話し手のお腹がグーとなった直後にLet's go to the Fuji Gardens. という文が発話された場合、この文と「話し手のお腹がグーとなったところ」というこの文が発話された場面の間には、solutionhood relation が成立することになる。

（B）evidence：(2) のテクストのように、先行部分でなされた主張に対する証拠が、後続部分で提供される場合に成立する関係をいう。

(2) They're having a party again next door. I couldn't find a parking space.

以下の(3) では、「悪くなかったよ」という子供の発言と子供が母親に見せている満点の答案の間には evidence relationが成立している。

(3) 母親：テスト悪かったんでしょう。
子供：悪くなかったよ。（満点の答案を見せながら）

（C）justification ：テクストのある箇所で遂行される発話行為の適切性や容認可能性を、同じテクストの別の箇所で明示的に確立することを試みる場合に成立する関係をいう。次の(4) が例としてあげられている。

(4) I'm Officer Krupke. You're under arrest.

以下の(5) の文と「発話者は警察手帳を見せている」という状況との間には、justification relationが成立する。

(5) You're under arrest. (警察手帳を見せながら)

なお発話者が警察官の制服を着用している場合にも、この文と「発話者は警察官の制服を着用している」という状況との間にjustification relationが成立する。一方、この文の発話者が例えば消防士のかっこうをしている場合には、この文は他の文およびこの文が発話された場面のいずれとも一貫性を構築させることができず不適格になる。
(D) motivation : テクストのある箇所で聞き手(読み手)に対して何らかの指示が提示され、同じテクストの別の箇所でその指示に従う動機づけがなされている場合に成立する関係をいう。この関係は(6) のような広告に頻繁に見られるという。

(6) Take Bufferin. The buffering component prevents excess stomach acid.

以下の(7) の文と「聞き手は拳銃を突きつけられている」という状況の間には motivation relation が成立する。

(7) Freeze! (拳銃を突きつけながら)

(E) reason : テクストのある箇所が同じテクストの別の箇所で表現されている意志的な行為を行う論理的根拠を提供する場合に成立する関係をいう。次の(8) が例としてあげられている。

(8) I'm going to the corner. The walk will do me good.

以下の(9) では、「サラダ以外は口にしない」というAの意志的な行為と、「今ダイエットしてるんだ」というAの発言の間には reason relationが成立する。この発言はAがサラダしか口にしない理由を説明している。

(9) ———Aは食堂で昼食をとっているが、サラダ以外は口にしていない。Aは一緒に昼食をとっている友人に言う。
A: 今ダイエットしてるんだ。

(F) sequence : テクストを構成する2つの箇所が出来事であり、2番目に提示される出来事が最初に提示される出来事に続く場合に成立する関係をいう。次の(10) が例としてあげられている。

(10) The huge rod was released at an altitude of about 6 miles. It struck with such force that it burried itself deep into the ground.

以下の(11)では、「教室に教師が入ってくる」という出来事に続いて、学級委員の号令が発せられており、「教室に教師が入ってくる」という出来事と学級委員の号令の間にはsequence relation が成立している。

(11) ———場面は中学校。教室に教師が入ってくる。
学級委員: 起立。気をつけ。礼。着席。

（G）enablement：テクストのある箇所が、同じテクストの別の箇所でだされている指示に聞き手が従うことを可能にするような情報を提供する場合に成立する関係をいう。次の(12) が例としてあげられている。

(12) Could you open the door? Here is the key.

話し手が聞き手にドアの鍵を差し出しながら Could you open the door? と発話した場合、この発言と「話し手が聞き手にドアの鍵を差し出している」場面との間には enablement relation が成立する。
（H）elaboration：テクストのある箇所が、同じテクストの別の箇所で伝達される概念を明細に述べる場合に成立する関係をいう。この関係には、少なくとも(13a)-(13e)が示すような５種類の関係があるという。

(13) a. I love to collect classic automobiles. My favorite car is my 1899 Duryea. （集合－成員）
b. Your performance distresses me. You come in drunk and you insult the busboy. （一般－具体）
c. Karen is so photogenic. Her smile is perfect. （全体－部分）
d. It's time to make our cake. I'm going to take out the milk and eggs. （プロセス－ステップ）
e. I'm Officer Jordan. I was born in 1952 and I joined the police force in 1970. （物体－特性）

以下の(14)の文はこの文が発話された場面に存在する指輪の特性を詳述しており、(15)の文はこの文が発話された場面である夜１１時の新宿駅周辺の状況を一般化している。また、写りのよい写真と(16)の文の関係は全体－部分の関係であり、(17)の文中の classic automobiles とこの文が発話された場面に存在する1899年モデルのドゥリエーとの関係は集合－成員の関係である。

(14) 高かったんだあ。（自分の指にしている指輪を見せながら）
(15) ———夜１１時の新宿駅周辺。駅周辺には沢山の人がいる。
この辺りはいつもこの時間でも人が多いんですよ。
(16) Her smile is perfect. （写りのよい写真を見ながら）
(17) I love to collect classic automobiles. （1899年モデルのドゥリエーを磨きながら）

（I）restatement：テクストのある箇所が同じテクストの別の箇所を言い換えている場合に成立する関係をいう。(18)では２番目の文が最初の文を言い換えている。

(18) He sure beat me up. I really took a thrashing from him.

例えば、料理番組での映像と以下の(19)のような解説との間にはrestatement relation と類似の関係が成立する。

(19) ———料理人が鍋に牛乳を注ぐ映像
ここで、牛乳（１００cc）を注ぎます。

（J）condition ：ある命題が別の命題が成り立つ条件を提供する場合に成立する関係をいう。(20)では最初の文が２番目の文が成り立つための条件を提供している。

(20) Slowly stir the powder into the fluid. The mixture will be very thick.

次の(21)の文とこの文が発話された場面の間にはcondition relationが成立している。

(21) ——— 子供がショーウインドーの中のグローブを欲しそうに眺めている。
テストで１００点とったらね。

（K）circumstance：テクストのある箇所が状況を確立し、かつ同じテクストの別の箇所がその状況内、あるいはその状況との関係で解釈される場合に成立する関係をいう。次の(22)が例としてあげられている。

(22) I went hitchhiking in Norway. Nobody would pick me up.

以下の(23)がエスカレーターの昇降口に書かれた注意書きだとすると、その読み手はエスカレーターに乗る際にこれをを目にすることになる。つまり、この注意書きは読み手がエスカレーターに乗ろうとしているという状況との関係で解釈されるので、注意書きと状況との間にはcircumstance relation が成立する。

(23) Dogs must be carried. (Blakemore 2001)

（L）cause：テクストのある箇所が、同じテクストの別の箇所で伝えられている状態の原因を示す場合に成立する関係をいう。この関係はsequence relation と同時に成立することが多い。(24)では最初の文が２番目の文の原因を示している。

(24) There were landslides in Malibu last week. Four neighborhoods lost their electricity.

台風の接近を知らせる以下の(25)の文と、海が荒れ狂っている状況の間にはcause relationが成立している。台風の接近のために海が荒れ狂っていると解釈されるからである。

(25) ———荒れ狂う海を見ながら
台風がこっちに向かってるらしいよ。

（M）concession：テクストのある箇所が、同じテクストの別の箇所でなされている主張を弱めてしまう可能性がある事柄が真実であることを、話し手が認めている場合に成立する関係をいう。この関係は典型的にはalthoughで合図される。次の(26)が例としてあげられている。

(26) I know you have great credentials. You don't fit the job description because this job requires someone with extensive experience.

（N）：thesis-antithesis ：２つの考えが対比されていて、話し手が一方の考えを支持し、もう一方の考えを支持しない場合に成立する関係をいう。この関係は想定し得る読み手からの反対意見に対して同意を示さないという点でconcession relation とは異なる。次の(27)が例としてあげられている。

(27) Players want the referee to balance a bad call benefitting one team with a bad call benefitting the other. As a referee, I just want to

call each play as I see it.

concessionとthesis-antithesis は、聞き手の予想を覆すという点では共通しており、Hobbs (1993: 100) のviolated expectation relation に相当する。

(28) Violated Expectation:
Infer P from the assertion of S_0 and $\neg P$ from the assertion of S_1.

以下の(29)では、「火災報知機が鳴った」ことから、火災が発生したと聞き手は想定するが、この想定は「ただいまの警報音は誤りです」という文によって破棄させられる。

(29) ———火災報知機が鳴った。
ただいまの警報音は誤りです。避難する必要はありません。

(O) background：テクストのある箇所なしには、同じテクストの別の箇所を適切に理解することができない場合に成立する関係をいう。次の(30)では、2番目の文で示されている情報が最初の文を適切に理解するのに不可欠である。

(30) Hayes just resigned. He's our chancellor.

何人かで釣りをしている場面でなければ、以下の(31)の「おまつりしないようにしような」という発言は意味不明である。

(31) ———何人かで釣りをしている。
おまつりしないようにしような。

適格な(32a)(33a)では、文と文が発話された場面の間にbackground relation が成立している。一方不適格な(32b)(33b)では、文と文が発話された場面の間にいかなる一貫性も成立していない。この事実は、談話の冒頭では、文と文が発話された場面の間になんらかの一貫性が成立していなければならないことを示している。

(32) ———学校で歴史の授業が開始される場面
a. 教師：今日はフランス革命について勉強します。
b. 教師：*検温の時間ですよ。
(33) ———看護師が病室に入ってくる。
a. 看護師：検温の時間ですよ。
b. 看護師：*今日はフランス革命について勉強します。

3．直前の文を無視することが許される場合

以下の(34)のBの文には「彼女の発言内容」という解釈と「Bがこの文を発話した場面で目にしたこと」という2つの解釈がある。

(34) A： What did she say?
B： That man has a gun. (Blakemore 2001)

Blakemore (2001)は、後者の解釈がなされる場合、Bの文は一貫性に欠けるとみなしている。文間の一貫性が欠如しているにもかかわらず、(34)が対話として適格なのはなぜなのだろうか。Blakemore (2001)はその理由には言及していないが、それは、Bの文とこの文が発話された場面との間に一貫性が成立するためと考えられる。例えば、Bの文が銃をもった人物がAとBに近づいてきた際に発話されたとすると、この文とこの文が

発話された場面の間にはsolutionhood relation が成立している。Ｂがこの文を発話することで、Ａに警戒を促し、危険な状況にいるにもかかわらずＡが無防備であるという問題を解決することになる。

このように、Ｓ１→Ｓ２という文連鎖において、話し手はＳ２とＳ２が発話された場面との間に一貫性を成立させるためにＳ１を無視することがあるが、このようなことは無制限に許される訳ではない。このようなことが許されるのは、次の(35)の場合に限られると主張したい。

(35)　直前の文との一貫性を築くよりも、当該の文が発話された場面との一貫性を築く方が、聞き手にとっての利益がより大きいと考えられる。

この条件の中で用いた「利益」という語は、物質的な利益と精神的な利益の双方を意味している。聞き手に利益をもたらす発言には、少なくとも次の(36a-c) がある。

(36)　a.　聞き手を危険から守るための発言
　　b.　発話時にのみ聞き手が獲得可能な利益をもたらす発言
　　c.　聞き手が発話の場面で果たそうとしている目的の達成を助ける発言

(35)の条件を満たさずに、話し手が直前の文とのつながりよりも場面とのつながりを優先させてしまうと、Grice (1975)の協調の原理に違反することになる。

(37)　協調の原理　(邦訳 p.37)
　　会話の中で発言をするときには、それがどの段階で行われるものであるかを踏まえ、また自分の携わっている言葉のやりとりにおいて受け入れられている目的あるいは方向性を踏まえた上で、当を得た発言を行うようにすべきである。

(35)の条件を満たしているか否かという基準に基づいて、例えば、なぜ(34B) は「Ｂが当該の文を発話した場面で目にしたこと」と解釈しても適格なのかを説明することができる。この解釈が可能なのは、質問に答えるよりも、生命を脅かすような事態から聞き手を守る方が、聞き手にとっての利益がより大きいと考えられるためである。同様に、この基準に基づいて、以下の(38)-(40) の適格性も説明することができる。

(38)　――ＡとＢはバス停で２０５番のバスを待っている。Ａはバスの到着に気づいていない。
　　Ａ：先週の学会はどうでした。
　　Ｂ：（あっ）２０５番／??１０番のバスが来ましたよ。
(39)　Ａ：雨が降りだしそうですねえ。
　　Ｂ：お財布／１００円／お金／?１円落ちましたよ。
(40)　――ＡとＢはハイキングをしている。
　　Ａ：今何時？
　　Ｂ：見て、綺麗な蝶々／?アリ。

(38)のＢの発言の２０５番を１０番に変えると適格性が下がるのは、この発言が自分たちの乗る予定にないバスの到着を知らせる発言であり、聞き手に何の利益ももたらさないためである。また、(39)の「１円落ちましたよ」という発言と(40)の「見て、アリ」という発言がやや不自然なのは、これらの発言によって聞き手が得ることのできる利益が極めて小さく、直前の文を無視してまでするに値する発言とはみなされにくいためである。

なお以下の(41)のＢが発話した文のように、直前の文との一貫性を築くことで得られる以上の利益を聞き手にもたらす文であっても、その文が発話された場面との間に一貫

性を構築しない場合には、不適格な談話を作りだしてしまう。

(41) A： お前のお父さんパティシエだったよな。
B：*今日は午後から雨だから洗濯物干さない方がいいよ。／*A病院は誤診が多いから行かない方がいいよ。／*B先生の新しい本がもうすぐでるらしいよ。

4．自らが構築した一貫性を自らが破棄する場合

一貫性と談話の適格性の関係を探ると、次の(42)に示すことがいえることもわかる。

(42) 談話内で自らが構築した一貫性を自らが破棄するとその談話は不適格になる。ただし、構築した一貫性が誤りであることを自ら認めている場合は不適格にはならない。

(43) *I'm hungry. Let's go to the Fuji Gardens. The restaurant is closed today.

(43)では、第１文で提示した「お腹がすいている」という問題に対する解決案を「フジガーデンズに行こう」という第２文で提供しており、話し手は第１文と第２文の間にsolutionhood relation を成立させている。しかしながら、第３文で「そのレストランは今日は休みだ」と言うことで、この話し手は自らが構築したsolutionhood relationを破棄している。このように、自らが構築した一貫性を自らが破棄すると、通常談話として不適格になる。ただし、次の(44)のように、自らが構築した一貫性が誤りであることを自ら認めている場合には談話として不適格にならない。

(44) I'm hungry. Let's go to the Fuji Gardens. Oh, the restaurant is closed today. I've forgot it. Let's go to Yoshinoya.

自らが成立させた一貫性を自らが破棄し、かつそれを成立させたことが誤りであることを自ら認めていない場合には談話として不適格になることは、以下の(45a)、(46a)、(47)、(48a)、(49a)、(50a) からも例証される。(45a)、(46a)、(47)、(48a)、(49a)では第１文と第２文の間に成立させた一貫性を破棄しており、(50a)では「ただいまの警報音は誤りです」という文とこの文が発話された場面である「火災報知機が鳴った」という状況との間に成立させた一貫性を破棄している。(45b)および(46b) が適格なのは、第１文と第２文の間に成立させた一貫性が誤りであることを話し手自らが認めているためである。(48b)、(49b)、(50b)では、自らが成立させた一貫性を自らが破棄するということは行われていない。以下では、破棄されている一貫性を角括弧内に示している。

(45) a. *あいつ試合にまた負けたな。がっくり肩を落としてたもんな。そりゃ３回も連続でお見合い断られたら落ち込むよな。[evidence relation]
b. あいつ試合にまた負けたな。がっくり肩を落としてたもんな。でも待てよ、あいつお見合いするって言ってから、それが駄目だったのかもしれないな。

(46) a. *ドアを開けてもらえませんか。ここに鍵置きますね。バイクの鍵なんですよ。 [enablement relation]
b. ドアを開けてもらえませんか。ここに鍵置きますね。あっ、すいません。それバイクの鍵でした。

(47) ?Sue walked into the room. The chandelier was magnificient. It was in the cupboard. [elaboration relation] (Levinson 2000: 61)

(48) a. *この場所に駐輪しないでください。廃棄処分にします。○○駅にある保管

所までとりに来てもらうことになります。 [condition relation]

b. この場所に駐輪しないでください。撤去します。〇〇駅にある保管所までとりに来てもらうことになります。

(49) a. *警察だ。逮捕する。俺は昨日で警察を免職になってるんだ。
[justification relation]

b. 警察官：警察だ。逮捕する。
犯人：お前昨日で警察を免職になってるじゃねえか。

(50) ——火災報知機が鳴った。

a. *ただいまの警報音は誤りです。すぐに避難してください。
[violated expectation relation]

b. ただいまの警報音は誤りです。避難する必要はありません。(=29)

5．おわりに

本発表では、他の文もしくは文が発話された場面のいずれとも一貫性を築いていない文を含む談話は不適格であることを示した。また、文が発話された場面との一貫性を成立させるために、直前の文を無視することが許されるのは、直前の文との一貫性を築くよりも、当該の文が発話された場面との一貫性を築く方が、聞き手にとっての利益がより大きいとみなしうる場合に限られるという見解を示した。さらに、どのような場合に一貫性が破棄されるのかをみた。

参考文献

Blakemore, D. 2001. "Discourse and Relevance Theory." In Schiffrin, D., D. Tannen and H. E. Hamilton eds. *The Handbook of Discourse Analysis*. Oxford: Blackwell.

Green, G.M. 1996. *Pragmatics and Natural Language Understanding* (2nd edition). Mahwah, NJ; London: Lawrence Erlbaum Associates.

Grice, H.P. 1975. "Logic and Conversation." In Cole, P. and Morgan, J. eds. *Syntax and Semantics 3: Speech Acts*, 41-58. New York: Academic Press. (清塚邦彦訳 1998. 『論理と会話』東京：勁草書房に所収)

Hobbs, J.R. 1990. *Literature and Cognition*. CSLI Lecture Notes no. 21

Hovy, E. and Maier, E. 1993. "Parsimonious or Profligate: How Many and Which Discourse Structure Relations?" Unpublished.

児玉徳美. 2002. 『意味論の対象と方法』東京：くろしお出版

Levinson, S.C. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Massachusetts: MIT Press.

Mann, W.C. 1999. "An Introduction to Rhetorical Structure Theory (RST)." Unpublished.

Mann, W.C. and Thompson, S. 1986. "Relational Propositions in Discourse." *Discourse Processes* 9: 57-90.

Mann, W. C. and Thompson, S. 1988. "Rhetorical Structure Theory: Towards a Functional Theory of Text Organization." *Text* 8: 243-81.

白井英俊. 1980. 「文章理解と意味結合関係」『計量国語学』12.7: 308-20.

須賀あゆみ. 1992. 「コヒージョンとコヒアランス」『グラマー・テクスト・レトリック』 161-83. 東京：くろしお出版.

描写構文についての一考察

松本 知子 (noriko-mtmt@pop02.odn.ne.jp)
同志社女子大学非常勤講師

0. Introduction

(1) Cognition is strongly influenced and restricted by the specific nature of the environment to which we happen to belong, and not only language but also cognition always happens to in an actual situation, in which human beings are always present.
(2) Meaning is equated with conceptualization.
(3) It would be hard to deny that human beings share a great deal of prelinguistic and extralinguistic experience which is likely to shape language rather than to be shared by it.
(4) I would like to argue that our understanding of language use, and our understanding of cognition itself, are inherent underpinnings to all our use of language.

1. "Subject-Verb-Object-Adjective" Construction (See Green 1973)

What is crucial to present consideration is the semantic relationship between the verb, the noun, and the adjective. I would like to demonstrate that such sentences involves very different relations between the adjective and the noun that it modifies, and that these relations are apparently "not predictable" from the meaning of the adjective or the verb, or both, as in (5)-(12). Especially, I would like to explicate two depictive constructions, the object-oriented depictive and the subject-oriented depictive.

(5) They burned her alive. (object-oriented depictive)
[When Subject Verbed Object, Object was Adjective.]

(6) He ate the meat naked. (subject-oriented depictive)
[While Subject Verbed Object, Subject was Adjective.]

(7) He prefers his coffee black. (conditional)
[If Object is Adjective, Subject Verbs Object.]
(8) He shot him dead. (object-oriented resultative)
[Subject caused Object to become Adjective, by Verbing Object.]

(9) He drank himself silly. (subject-oriented resultative)
[Subject caused Object[=Subject] to become Adjective by Verbing.]
(10) The gas made him sick. (causation)
[Subject caused Object to become Adjective.]
(11) We saw him angry. / I found the drawer open.
[Subject Verbed Object, and Object was Adjective then.]
(12) I consider him honest. / He found this chair comfortable.

2. Previous Accounts

Maruta(1995) and Rapoport(1999) demonstrate that the solution to the semantic analysis of secondary predication lies in the meaning of the main verb of the structure, that is, in its lexical semantic representation. Verbs are classified according to the configuration of the lexical semantic representations. They discuss these specific configurations that restrict the possibilities of secondary predication. Given the semantic class of a verb and its lexical configuration, its relation to the secondary predicate is predictable.

2.1. Maruta (1995)

Maruta emphasizes that depictive predicates are not of adjectival status, but of advervial status.

(13) a. She cooked the meat dry.
b. The meat was dry. (Maruta 1995:126)
(14) a. Jane returned home safe/safely.
b. Jane bought the car cheap/cheaply. (Maruta 1995:127)
(15) a. Our economic prospects are fair.
b. What/*How are your economic prospect?
(16) a. John ate the meat raw/nude.
b. How/*What did John eat the meat? (Maruta 1995:132)

Maruta's analysis does not grant adjectival status to depictive predicates.

(17) a. Jim left his house angrily.
b. Jim left his house angry. (Aarts 1995:90)
(18) a. I bought the table broken.
b. I sold the table broken. (McNulty 1987:208)

Maruta assumes that a main verb in the depictive construction has a complex event structure, as in (19). Namely, the verb in this construction consists of two eventualities.

(19) [EVENT *x* cause [EVENT *y* undergo a change of location/possession]]
(where *y* projects onto the verb's object) (Maruta 1995:137)

(20) a.?*I kicked John depressed.
b.?*The policeman punched John drunk. (McNulty 1987:208)
(21) John kicked the soccer ball uninflated. (Maruta 1995:138)

Though Maruta's arguments are apparently ingenious, there are some counterexamples.

(22) a. She hammered the metal flat.
b. First they weighed the trunk empty. (Nicholas 1978:326)

2.2. Rapoport (1999)

Rapoport examines the constraints on depictive predicates and their interpretation within the Aspectual Structure theory of the structural representation of aspect. Aspect structure type and aspectual focus account for the interpretations of the various types of secondary predicates. She accepts the Vendler's(1967) aspectual classification: activity, accomplishment, achievement.

(23) Aspectual focus
a. activity structure - only on the initial point
b. achievement structure - only on the endpoint
c. accomplishment structure
- both on the initial point and on the endpoint

The subject-oriented depictive, where aspectual focus is possible only on the initial point, takes both the activity verb and the accomplishment verb, whereas the object-oriented one, which allows aspectual focus both on the initial point and on the endpoint, takes only the accomplishment verb.

(24) a. I kicked John depressed. (activity)
b. John fried the potatoes naked. (accomplishment)
(25) a. John fried the potatoes raw. (activity)
b. *I kicked John depressed. (achievement)

Though her arguments are also apparently ingenious, there are some counterexamples.

(26) a. *John broke the door wet.
b. John broke the door (in/*for an hour). (Miyata 2001:146)
(27) a. John hammered the metal hot.
b. John hammered the metal (for/*in an hour).

3. Content Requirement (Langacker 1987:53-54)

In cognitive grammar, a language is described as a structured inventory of conventional linguistic units. The units comprising a speaker's linguistic knowledge are limited to semantic, phonological, and symbolic structures. Therefore, cognitive grammar completely rules out arbitrary formal devices.

4. Usage-Based Model

(28) "usage-based model" (Langacker 1987:494)

Substantial importance is given to the actual use of the linguistic system and a speaker's knowledge of this use; the grammar is held responsible for a speaker's knowledge of the full range of linguistic conventions, regardless of whether these conventions can be subsumed under more general statements. [It is a]nonreductive approach to linguistic structure that employs fully articulated schematic networks and emphasized the importance of low-level schemas.

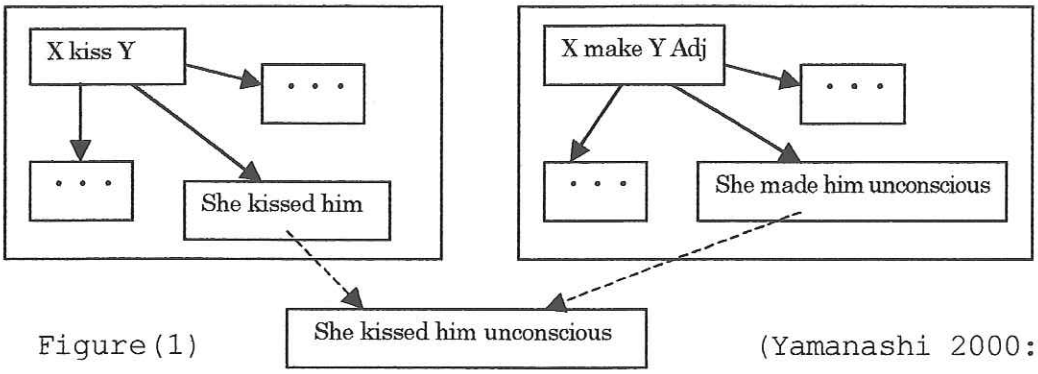
(29) The hearer has to interpret the event as the intended realization of particular linguistic structures.
(30) The speaker has to select linguistic structures capable of evoking the desired contextual understanding, and has to then ensure that the event can indeed be so interpreted.
(31) In both comprehension and production, facets of a usage event must somehow be assessed in relation to linguistic units.

5. My Account

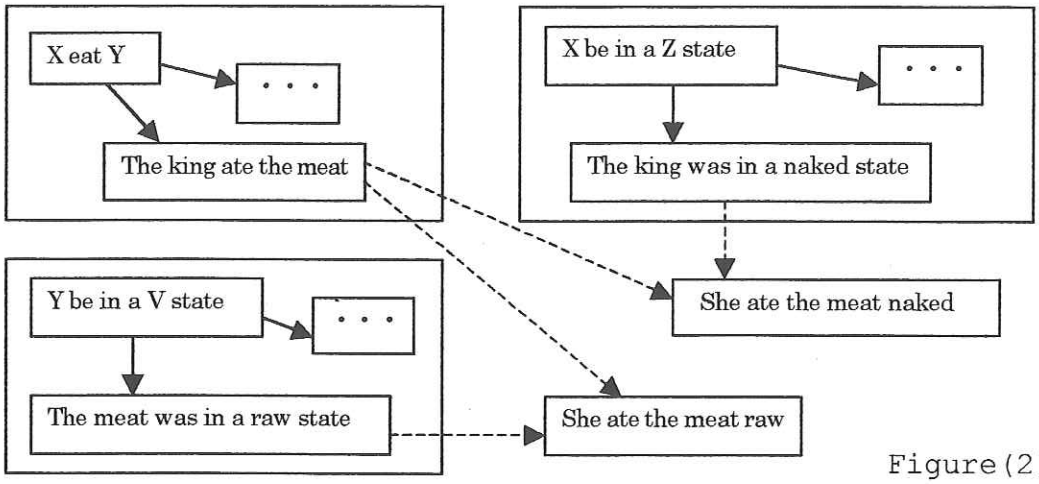
Even when various kinds of phenomena can be subsumed with effort under a highly limited number of rules, cognitive linguists cannot accept that such phenomena have thus been explicated.

5.1. Amalgams

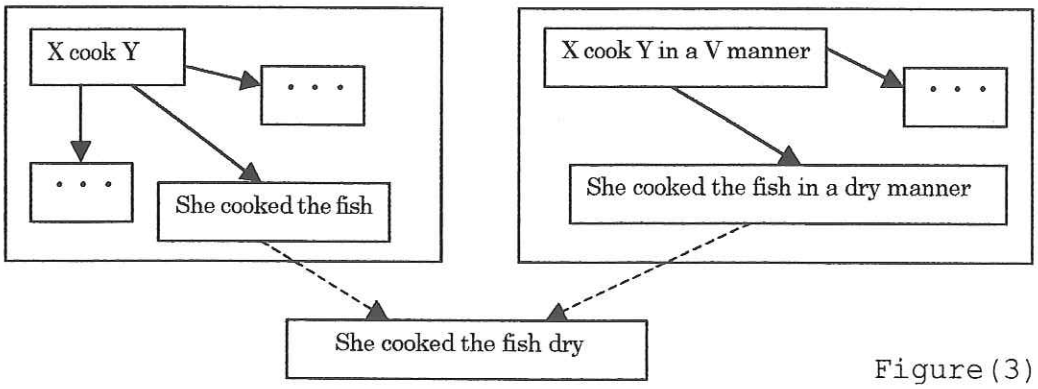
Lakoff(1974) shows that there are some clear cases of constructions that require treatment in terms of "amalgams" under semantic and pragmatic conditions and that amalgams are a real phenomenon in English. The term "amalgam" means a mixture or combination of different things or substances.



Figure(1) (Yamanashi 2000:223)



Figure(2)



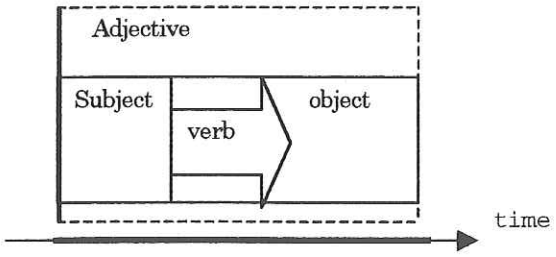
Figure(3)

5.2. Gestalt and Image-schema

"Gestalt" means that "the whole is different from the sum of its parts." A "Subject-Verb-Object-Adjective" construction can be construed as a Gestalt. A "Subject-Verb-Object-Adjective" construction is a single syntactic clause, which is amenable to conceptualization as a single unit entity.

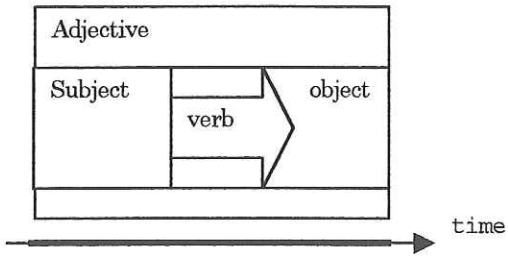
Subject–Verb–Object–Adjective

Figure(4)



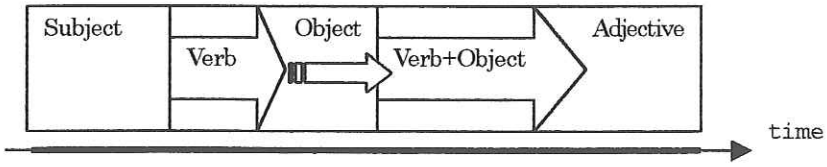
object-oriented

Figure(5)



subject-oriented

Figure(6)



Figure(7)-resultative

(32) Beth: Is Harry there, Norman?
Norman: Why don't we just talk when you bet back? Meet me in the galley. We'll have a cup of coffee. We still have coffee, don't we?
Beth: Very funny. *I'll take mine black,* like my mood.
Norman: All right. See you soon. (From *Sphere*)

(33) Inigo: You don't know any way you'll trust me.
Man in black: Nothing comes to mind.
Inigo: I swear on the soul of my father, Domingo Montoya, *you will reach the top alive.* (from *The Princess Bride*)

(34) Frollo: Find her, Captain! *I want her alive.*
Phoebus: Yes, sir. Seal off the area, men. Find the gypsy girl, and do not harm her. (from *Hunk Back of Notre Dame*)

Despite the considerable difference in meaning, depictives and resultatives are identical on the surface. Actually, a single surface structure can be ambiguous. Each sentence has both a resultative and a depictive reading.

(35) I cooked the meat dry.
  a. I cooked the meat in a dry state.
  b. I cooked the meat until it became dry.
(36) I bought the shop empty.
  a. I bought so many things that the shop became empty.
  b. I bought the shop when it was empty.

I will further claim that both depictives and resultatives have three types of interpretations: a literal interpretation, an exaggeration / an overstatement, and a figurative interpretation. The image-schemas that emerge from these are the same.

(37) A: Last month I won the lottery and I got 100 billion yen.
  B: Unbelievable! Will you use such a huge amount of money?
  A: I have a dream of running a jewelry shop, so yesterday *I bought a jewelry shop empty* and I bought a lot of jewelry. Tomorrow my shop will open.
(38) A: Last month I won the lottery and I got 100 billion yen.
  B: Unbelievable! How will you use such a huge amount of money?
  A: Yesterday *I bought the jewelry shop empty.*
  B: Would you mind giving me a few rings?
  A: Sure! Help yourself!

(39) You can't tell him that - he'll eat you alive! (Longman 1995:438)
(40) Bert: Hey, wait. What are you gonna do about the money?
  Eddie: There are places. I'll scuffle around.
  Bert: Word's out on you, Eddie. You walk in the wrong kind of place and *they'll eat you alive.*
  Eddie: Now, when did you adopt me?
  Bert: I don't know when it was. (from *Hustler*)

(41) Jaxx: Pete's got guinea pigs here that are immune to Ebola, a Supermonkey who's beat it. *I'll bleed these animals dry* and spin off some immuno plasma. (from *Hot Zone*)

(42) The war has bled the once-strong Armenian economy dry. (Collins Cobuild)
(43) Vance: It's up to ten and a quarter.
  Edward: Offer nine and a half. Bring them back down to earth.
  Stuckey: Goddamit!! Where is he getting the money to fight?

Edward: Someone's loaning it to him. Got on it right away.
Stuckey: Our contract guys are working on the Kross pension funds. There's another forty million there. *We can bleed'm dry.*
(from *Pretty Woman*)

7. Conclusion

Language can be represented only in the liner order; however, linguistic meaning is equated with multifaceted, multilayered conceptualization on the basis of our embodiment, drawing on numerous cognitive domains which correspond in various ways. As a result, quite diverse semantic representations converge on the same syntactic structure, for instance, the "Subject-Verb-Object-Adjective" construction, which has several kinds of grammatical structures.

References

Aarts, B. 1995. "Secondary Predicates in English." In B.Aarts & C.F.Meyer eds. *The Verb in Contemporary English: Theory and Description*, 75-101. Cambridge: Cambridge University Press.

Green, G.M. 1973. "A Syntactic Syncretism in English and French." In B.B.Kachru, R.B.Lees, Y.Malkiel, A.Pietrangeli & S.Saporta eds. Issues in Linguistics: Papers in Honor of Henry and Renee Kahane, 257-278. Urbana: University of Illinois Press.

Lakoff, G. 1974. "Syntactic Amalgams." *CLS* 10:321-334.

Langacker, R.W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar, Vol.I: Theoretical Prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.

Maruta, T. 1995. "The Semantics of Depictives." *English Linguistics* 12:125-146.

McNulty, E.M. 1988. *The Syntax of Adjunct Predicates*. Ph.D.Diss., University of Conneticut.

Miyata, A. 2001. "Constraints on the Depictive Construction - From a Cognitive Point of View -." *Proceedings of the First Annual Meeting of the Japanese Cognitive Linguistics Association* 1:143-153.

Nicholas, J. 1978. "Double Dependecy." *CLS* 14:326-399.

Rapoport, T.R. 1999. "Structure, Aspect, and the Predicate." *Language* 75:653-677.

Vendler, Z. 1967. *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.

Yamanashi, M. 2000. *Ninchi Gengogaku no Genri*. Tokyo:Hitsuji Shobo.

Corpus

Longman Dictionary of Contemporary English, Third Edition. 1995.

Collins Cobuild on CD-ROM. 2001.

http://simplyscripts.com (movie scripts)

アイロニーの暗黙的提示理論とその優位性について

内海 彰
電気通信大学 電気通信学部 システム工学科
utsumi@se.uec.ac.jp

1 はじめに

近年，語用論や心理学の分野でアイロニーの研究がさかんに行われている．たとえばこの3年間（2000〜2002）を見ると，少なくともアイロニーに関する論文が雑誌 "Metaphor and Symbol" に11件（1回のアイロニー特集号を含む），"Journal of Pragmatics" に5件，"Discource Processes" と "Journal of Psycholinguistic Research" に各2件掲載されている，といった具合いである．しかしながら，このように多くの注目を集めているにもかかわらず，アイロニーとはどのような言語現象なのかという問いに対して包括的な答えを与えるアイロニー論は，依然として得られていない．

筆者は，包括的なアイロニー論を目指して，アイロニーの暗黙的提示理論 (内海, 1997; Utsumi, 2000; 内海, 2001) を提案している．本発表では，最新の（特に内海 (1997) や Utsumi (2000) で論じていない）アイロニー研究を概観・検討しながら，暗黙的提示理論が他のアイロニー論よりも優れていることを示す．さらに，暗黙的提示理論のアイロニーに関する心理学的知見との整合性について論じる．

2 暗黙的提示理論

暗黙的提示理論の要点は以下の3点である (内海, 1997; Utsumi, 2000)．以下ではこれらを順に詳述する．

1. アイロニーは，**アイロニー環境**（ironic environment）というある種の状況設定を必要とする．
2. アイロニーは，アイロニー環境を**暗黙的提示**（implicit display）する表現である．
3. アイロニーは，暗黙的提示の諸条件によって特徴づけられる**プロトタイプ・カテゴリー**である．

2.1 アイロニー環境

アイロニー環境はアイロニーの成立に必要不可欠な状況設定であり，以下の3つの事象から構成される．発話状況がこれらの3事象を含むとき，その状況はアイロニー環境である．

話し手の期待 話し手があることを期待している．
期待と現実の不一致 話し手の期待が現実には満たされていない．
否定的態度 期待と現実の不一致に対して，話し手が否定的な態度（e.g., 非難）を持っている．

したがって，これらの事象のうちの一つでも欠けている状況での発話はアイロニーとなり得ない．たとえば，以下の2つの状況における発話 (1) を考えてみると，状況1での発話は典型的なアイロニーであるのに対し，状況2での発話はアイロニーとはならない．

状況1 部屋を散らかしたままにしている息子に対して母親が，

状況2 部屋をいつもきれいにしている息子に対して母親が，

(1) まあ，本当にきれいな部屋ね．

これは，話し手である母親は息子が部屋をきれいにすることを望んでいるが（話し手の期待），それは現実には満たされておらず（期待と現実の不一致），母親はそれに対して不満を抱いている（否定的態度）ことから状況1がアイロニー環境であるのに対し，状況2ではアイロニーを動機づける母親の期待や否定的態度が存在せずアイロニー環境ではないためであると説明できる．

アイロニー環境の3要素の中で特に重要なのが話し手の期待である．話し手が何かを期待していなければ，そもそも期待と現実の不一致や否定的態度は存在しない．しかし，今までに「アイロニーの話し手がある期待を必ず持っていなければいけない」と主張したアイロニー論は存在しない．話し手の期待を必要十分条件と考えることの利点については，本理論の優位性を論じる4章で詳述する．

なお，アイロニー環境は皮肉な状況を表す状況アイロニー（situational irony）とは異なる概念であることに注意されたい．たとえば，状況1は発話(1)をアイロニーにするために必要な状況設定であるが，状況1自体に皮肉なところは全くない．しかし，残念ながら一部の論文(e.g., Gibbs & Colston, 2001)における本理論への言及はアイロニー環境と状況アイロニーを混同しているように思える．

2.2 暗黙的提示

アイロニー環境である状況下での発話がアイロニーとなる／解釈されるためには，発話がアイロニー環境を暗黙的に提示していなければいけない．言い換えると，**アイロニーとは現在の発話状況がアイロニー環境であることを聞き手に暗黙的に提示する発話である**．アイロニー環境の3事象は，言語表現を用いてそれぞれ以下のように暗黙的に提示される．

婉曲的言及 言語表現は，話し手の期待内容と連接（coherence）関係（たとえば可能化や意志的な原因など）が成立する内容を含むことによって，期待に婉曲的言及／ほのめかし（allude）する．ただし，話し手が何かを期待しているということを直接的に表現する場合は，婉曲的言及ではない．

語用論的不誠実性 言語表現は，語用論的原則（たとえば，質や量の公準(Grice, 1989)，言語行為の適切性条件(Searle, 1979)，丁寧さの原理(Brown & Levinson, 1987)など）に表面上違反することによって，語用論的不誠実性を含む．

否定的態度の暗示 言語表現は，さまざまな言語的・非言語的手がかり（たとえば，形容詞や副詞による誇張表現，特定のイントネーション・音調・アクセントなどのいわゆるアイロニー標識(Kreuz & Roberts, 1995)）を伴って，話し手の否定的態度を暗示する．

たとえば，状況1でのアイロニー発話(1)は母親の期待に言及し，事実に反することを述べることによって質の公準に違反し，「本当に」という誇張を伴っているので，アイロニー環境を暗黙的に提示している．一方，状況1での発話であっても，以下の表現(2)は字義的に解釈して適切であるとともに，話し手の期待を婉曲的言及していない（期待していることを直接表現している）ので，暗黙的提示が成立しない．

(2)　きれいにしてくれると期待していたのに，相変わらず散らかった部屋ね．

2.3 アイロニーのプロトタイプ性

ある発話がアイロニー環境を暗黙的に提示しているかどうかの判断は，実はそれほど単純ではない．というのは，すべてのアイロニーが必ずしも暗黙的提示の3要素を満たしているわけではないからである．たとえば，発話(1)から「まあ」,「本当に」という強調語句を取り除き，非言語的な手がかりを一切与えないとしても，依然としてアイロニーと解釈できる．さらに言うと，発話の解釈以前に話し手である母親の期待を知らない，つまり婉曲的言及の判断ができない場合でも，アイロニー標識を伴っていれば発話(1)をアイロニーと解釈できる(Barbe, 1995)．要するに，暗黙的提示の3要素をすべて満たしている（と判断できる）ことは，アイロニーの必要条件でもないし十分条件でもない．

これらの事実は，アイロニーという概念は境界が明確に定義できるものではなく，一種のプロトタイプ概念であることを示している．つまり，暗黙的提示の3要素を多く満たしているほど，その発話は典型的なアイロニーと判断される．このようなプロトタイプ性は，暗黙的提示の2要素以上の成立／不成立間で皮肉度評定に統計的な有意差が見られるが，3要素すべての成立／不成立間では有意差がないという内海(1999)の実験結果からも支持される．

2.4 アイロニーの解釈過程

アイロニー環境を暗黙的に提示する発話がアイロニーであるので，アイロニーの解釈とは発話が暗黙的提示を満たしていると認識することで，アイロニー環境の成立を知ることである．つまりアイロニーであるとの認識＝アイロニー解釈であり，解釈結果はアイロニー環境の3事象の（再）認識となって現れる．

暗黙的提示理論のこのような考え方に基づき，筆者は図1に示すアイロニーの解釈過程の認知モデルを提案している(内海, 2000)．このモデルの特徴は，話し手の期待が既知の場合と未知の場合で解釈過程が異なる点である．(図1には示されていないが，話し手の期待を事前に知らない場合には，Step 1の暗黙的提示成立

の判断において，婉曲的言及の代わりに発話内容の評価値を用いている.）この認知モデルはアイロニーに関する多くの経験的知見と整合するように構築されており，さらに，この認知モデルを関連性に基づく言語解釈の計算モデルと統合することによって，アイロニー解釈の計算機シミュレーションも行っている．これらの詳細については文献 (内海, 2000) を参照されたい．

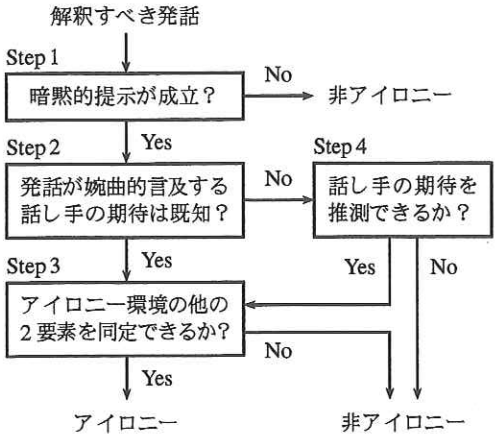


図 1: アイロニー解釈の認知・計算モデル

3 既存のアイロニー論とその問題点

今までに提案されてきたアイロニー論は，違反・不適切性に基づくアプローチ，エコーに基づくアプローチ，ふりに基づくアプローチ，意味反転・否定に基づくアプローチの 4 つに大別できる．ただしこれらの分類は必ずしも排他的ではなく，複数のアプローチを統合したアイロニー論も少なくない．以下ではそれぞれのアプローチについて詳述するとともに，その問題点・欠点を指摘していく．

3.1 違反・不適切性に基づくアプローチ

このアプローチでは，何らかの原則や満たすべき条件の違反，またはそれによって生じる不適切さがアイロニーの本質であるとする．このアプローチに属するアイロニー論には以下のものがある．

- 伝統的な語用論による説明：質の公準違反 (Grice, 1989)，言語行為の適切性条件違反 (Searle, 1979)，Grice のアイロニー論の明確化 (安井, 1978)
- 発語内行為に対する不誠実さの意図的な表現 (Haverkate, 1990)
- 情況と発話内容の不整合性 (深谷 & 田中, 1996)
  「皮肉は，情況と発話内容の辻褄が合うように《態度把握》の調整を行った結果として現出する (*ibid.*, p.249)」
- 意図された不適切（intended infelicitous）言語行為 (辻, 1997)
  「アイロニーとは，意図的にその不適切性が示され，最終的に発話人称 X が発話主体 I と一致していない <I am not X> ことが示されるような言語行為である」
- 関連のある不適切性（relevant inappropriateness）(Attardo, 2000)

これらのアイロニー論の問題点として，これらの概念・条件を満たさないアイロニーの存在（十分条件でない），これらの概念・条件を満たす非アイロニーの存在（必要条件でない）を指摘することができる．例えば状況 1 での以下の発話 (3) は，母親がまさにそのように思っている，つまり質の公準や発語内行為の適切性条件を違反していないのに，アイロニーとなる．

(3) 部屋をきれいにする子は，お母さん大好き．(I love children who keep their rooms clean.)

より包括的な概念である不整合性 (深谷 & 田中, 1996) や不適切性 (辻, 1997; Attardo, 2000) を用いて発話 (3) を説明することは可能であるが，前述したように，不適切性を認識できない発話でもアイロニーと解釈される場合があることは指摘しておきたい．たとえばその日はじめて同僚に会ったときに同僚が「今日は最高の日だよ」と言った場合，同僚が実際に今日が最高の日だと思っているかどうかを知らなくても，場合によってはアイロニーと解釈することができる (Barbe, 1995).

さらに，同じような不適切さが存在していてもアイロニーと解釈されない場合がある．たとえば，

(4) （どしゃ降りの中で）これは素晴らしい天気だ．
(5) （雲一つない晴天で）これはひどい天気だ．

のいずれの発話も不適切であるが，(4) は典型的なアイロニーと解釈されるのに対し，(5) はアイロニーとは解釈されない．不適切性という概念だけではこの非対称性を説明できないのである．

辻 (1997) のアイロニー論では，話し手の関与・意図の有無によって，アイロニーと単なる不適切な発話との区別を行っている．しかし意図的かどうかの判断基準は非常に曖昧である．つまり，発話 (4) には話し手の意図が関与しているが，発話 (5) には関与していないという違いを説明することが困難である．さらに，発話 (5) はある状況設定のもとでは明確にアイロニーと解釈されること（3.2 節を参照）を，意図の有無だけでは説明できない．

Attardo (2000) のアイロニー論では，不適切性と話し手の意図の他に，文脈との関連性という概念を考えている．しかし，依然として発話 (5) がアイロニーと解釈されないことを説明できない（天気の話題という点では関連性も満たしている）．さらに彼が不適切性と関連性の違いを説明するために用いた以下の発話例は，そのまま彼のアイロニー論の反例になっている．

(6) a. Father: "Did you eat the chocolate?"
b. Daughter: "No." (her mouth is covered with chocolate) (*ibid.*, p.819)

3.2 エコーに基づくアプローチ

このアプローチでは，アイロニーはある表象（期待，信念，発話または社会的通念）の間接的なメタ表象（metarepresentation）であると考える．たとえば，パソコン通信の電子会議室でのやりとりにおける以下の反唱型（provoked）アイロニー (7b) は，エコーを伴ったアイロニーの典型例である．

(7) a. ABC12345 山田花子 村上春樹について
私は村上春樹は一流の作家だと思うのですが，みなさんはどう思いますか？
b. XYZ98765 川本太郎 RE:村上春樹について
村上春樹ですか？まさに超一流の作家でしょう！（爆笑） (辻, 1997)

エコーに基づくアプローチに属する理論としては，以下のものが提唱されている．

- エコー的解釈理論（echoic interpretation theory）(Wilson & Sperber, 1992; Sperber & Wilson, 1995)
アイロニーとは，誰かの考え，発話，期待や社会的通念に解釈的に類似した表象をエコーすることによって，それらに対する話し手の否定的な態度を表明する表現である．
- エコー的想起理論（echoic reminder theory）(Kreuz & Glucksberg, 1989)
アイロニーとは，ある出来事，ある人の発話や期待などをほのめかす（allude）ことによって，それらを聞き手に思い出させる表現である．
- ほのめかし理論（allusional pretense theory）(Kumon-Nakamura, Glucksberg, & Brown, 1995)
アイロニーは，成立しなかった（failed）期待や通念をほのめかしつつ，言語行為の適切性条件を違反しているという語用論的な不誠実さ（pragmatic insincerity）を含む表現である．

エコーに基づくアプローチの優れている点は，違反・不適切性に基づくアプローチでは説明できない非アイロニー発話 (5) や (6b) を適切に説明できる点にある．つまりこれらの発話は何かをエコーした表現ではないのである．逆に，適切なエコーの対象を想定できれば，これらの発話もアイロニーと解釈され得る．（たとえば，大雨を予想した天気予報士への非難として (5) を発話した場合が考えられる．）

しかしながら，違反・不適切性に基づくアプローチと同様の問題点を指摘することができる．まず，解釈的エコーを伴わないアイロニーが存在する．たとえば，(3) のアイロニーが何をエコーしている／ほのめかしているかは自明ではない．このような批判への回答として，Sperber & Wilson (1998) では「当該発話がその状況において適切（relevant）である」という高次命題をエコーするものだと反論しているが，この説明は混乱を増すだけである (Utsumi, 2000)．なぜならば，この説明が正しいとすると，今まで説明がついていた他のアイロニー（例えば，発話 (1)）でも同様の説明が可能であり，今までの説明の必要がなくなるからである．さらに，否定的な態度を伴った解釈的エコーを含む非アイロニーも存在することが指摘されている (Giora, 1995)．以下の発話 (8b) はその例である．

(8) a. さっき山田さんは BBS で何て言ってた？
b. 村上春樹が超一流の作家だって．（爆笑）

Kumon-Nakamura et al. (1995) のほのめかし理論は不適切性に基づくアプローチとエコーに基づくアプローチを統合した理論であり，今まで述べてきた問題点のうちの多くを解決することができるため，現在では有力なアイロニー論と考えられている (岡本, 2001: p.133). しかし依然として，不適切性を認識できない発話がアイロニーと解釈され得ることや，何をほのめかしているかが明らかでないアイロニーの存在を説明することができないなどの問題点が残っている.

3.3 ふりに基づくアプローチ

このアプローチでは，アイロニーの話し手・聞き手や発話状況などに多層性（現実と仮想）を措定して，アイロニーとは仮想世界での誠実な発話のふりをする（または仮想世界へ視点を移す）表現と考える.

- ふり（pretense）／共同ふり（joint pretense）理論 (Clark & Gerrig, 1984; Clark, 1996)
  アイロニーとは，発話が誠実であると信じている仮想の人間が発話を真に受ける仮想の人間に向かって話しているふりをすることによって聞き手に自分の心的態度を伝える表現である.
- 仮人称発話理論 (橋元, 1989)
  「アイロニーの正体とは，結局，字義通りの発話が可能な立場の人間に視点を移し，結果的に『言及』とみなしうる陳述行為を行なうという一種の『仮人称発話』なのだ (*ibid.*, p.87)」

これらのアイロニー論の問題点として，他人の発話のふりをすることと他人の発話をエコーするのと本質的に同じであり (Williams, 1984)，わざわざ「ふり」という概念で説明する必要性が見い出せないという点である.（橋元 (1989) は結果としてエコーとなることを認めている.）さらに，パロディとの区別ができない，仮想世界におけるふりを想定するのが困難な／不適切なアイロニーが存在するなどの問題点も挙げることができる. なお，話し手の多層性（発話主体と発話人称）という点では，辻 (1997) の理論はふりに基づくアプローチと不適切性に基づくアプローチを統合したものと考えることができる.

3.4 意味反転・否定に基づくアプローチ

このアプローチでは，アイロニーは字義的な意味の反対・否定の意味を伝達する表現と考える. 伝統的な語用論に基づくアイロニー論 (Grice, 1989; Searle, 1979; 安井, 1978) をはじめ，古典的なアイロニー論 (e.g., Roy, 1977) に共通する考え方であるが，このような素朴な意味反転論の問題点は多くのアイロニー研究で指摘されてきた. 反対の意味が伝達されるとは考えられない多くのアイロニー（例えば発話 (3)）が存在するのである.

最近では，この問題点を修正すべく，素朴な意味反転論を改良した以下の理論が提案されている.

- 間接的否定（indirect negation）理論 (Giora, 1995)
  アイロニーとは，明確な否定標識を用いない否定表現であり，否定された字義的な意味と否定により得られる推意が同時に処理されることによって，それらの違いを明確にする表現である.
- エコーと意味反転の統合 (瀬戸, 1997)
  「アイロニーとは，エコーおよび／または意味反転の手段によって暗示的な批判を狙う方法である. (*ibid.*, p.146)」

Giora (1995) は，間接的否定という概念によって字義どおりの反対の意味という限定された概念をアイロニーに適合するように拡張したと考えることができる. しかし，すべてのアイロニーが文字通りの意味を否定した意味を伝達するとは考えられないという問題点は依然として残る. さらに Curcó (2000) が指摘するように，メタ表象や多層性を考えないアイロニー論では (7b) などのアイロニーの説明には無力である.

瀬戸 (1997) は，解釈的エコーを含まないアイロニーは意味反転が生じると主張する. しかし，前述した意味反転論の問題点は解消されていない上に，エコー的解釈理論の欠点もそのままである. たとえば，(3) のアイロニーは解釈的エコーを伴っていないし，反対の意味を表現しているとも考えられない. さらに，エコーを伴わない意味反転によるアイロニーの例として以下の発話 (9b) を挙げているが，本当に反対の意味を伝達しているのだろうか. また，メタ表象という概念を用いて説明できないのであろうか.

(9) a. A: Bob has just borrowed your car.
b. B: Well, I like that! (*ibid.*, pp.128–129)

4 暗黙的提示理論の優位性

本章では，暗黙的提示理論が従来のアイロニー論の問題点をどのように解決するかを述べるとともに，実験的研究を通じて得られた経験的知見との整合性について論じることによって，アイロニー論としての暗黙的提示理論の優位性を示す．

4.1 アイロニーはプロトタイプ・カテゴリーである

プロトタイプ的視点によって，前述した問題点のいくつか，特に違反・不適切性に基づくアプローチの問題点を解決することができる．つまり不適切性を認識できない発話がアイロニーと解釈されるのは，暗黙的提示の他の 2 要素が認識されるからであり，不適切性を含む非アイロニーでは話し手の期待やそれへの婉曲的言及が認識できないからである．

暗黙的提示理論は，上述のアプローチのうち不適切性に基づくアプローチとエコーに基づくアプローチを修正・統合した理論とみなすことができる．その意味では，Kumon-Nakamura et al. (1995) のほのめかし理論を拡張した理論と言える (岡本, 2001: p.134)．しかしほのめかし理論と異なる点は，このプロトタイプ的視点である．これと婉曲的言及（4.2 節を参照）によってほのめかし理論の問題点を解決することができる．ほのめかし理論よりも暗黙的提示理論のほうが妥当であることは，前述した内海 (1999) の他に Colston (2000) の行った実験結果からも示唆される．この実験では，ほのめかしがアイロニー理解の必要条件であるが，語用論的不誠実性は必ずしも必要条件ではないという結果が得られている．

プロトタイプ的視点は，アイロニー標識に関する経験的知見とも整合性がある．心理言語学の研究においてさまざまなアイロニー標識— e.g., 誇張表現 (Kreuz & Roberts, 1995)，プロソディ・韻律 (Rockwell, 2000; Bryant & Tree, 2002)，敬語 (Okamoto, 2002) —がアイロニー解釈を促進することが示されている一方，アイロニー標識がなくてもアイロニーを解釈することも可能である (Gibbs & O'Brien, 1991)．これは，暗黙的提示の要素の一つであるアイロニー標識が存在したほうがアイロニー度は高くなるが，この要因がなくても他の 2 要素を認識することによりアイロニー解釈が可能である，と説明できる．

4.2 婉曲的言及は解釈的エコーよりもアイロニーのメタ表象性を適切に表す概念である

エコーに基づくアプローチの問題点が生じる原因として，(a) アイロニーがエコーする対象が広すぎる（誰かの意見や期待から個人に帰すことのできない社会的通念まで），(b) エコー対象と発話内容の関係の捉え方が不十分である（エコー的解釈は含意の共有に基づく関係である），という 2 点を指摘してきた (Utsumi, 2000)．これに対し暗黙的提示理論では，(a) 婉曲的言及の対象は話し手の期待だけであり，(b) 言及対象と発話内容（の一部）とが連接関係の連鎖によって関係づけられると考えることにより，エコー的解釈の問題点を解決している．(同様に Curcó (2000) も発話の推意もエコー対象とするように拡張すべきだと指摘している．) たとえば発話 (3) では，その内容の一部が「息子が部屋をきれいにする」という母親の期待を表現・表象しているので，期待への婉曲的言及が成立する．

また，暗黙的提示理論では，(7b) のような反唱型アイロニーは直前の発話をエコーしているのではなく，「その発話・意見が間違っている／不適切であることをその人が知る」という話し手の期待（この例では，村上春樹が一流の作家だという意見が間違っていることを発話者が認識するという期待）に婉曲的言及していると考える．(このような期待は，通常，直前の発話を解釈することによって生じる期待である．) こう考えることによって，発話 (8b) がアイロニーと認識されないのは，(8b) からアイロニーを動機づける話し手の期待を想定するのが困難だからである，と説明することができる．

4.3 話し手の期待はアイロニーに不可欠である

アイロニーに話し手の期待（つまりアイロニー環境）が不可欠であると考えることによって，前節で述べたメタ表象性の適切な説明の他に，暗黙的提示理論を優位にするいくつもの利点を挙げることができる．

その一つが，話し手の意図・関与とアイロニー表現の関係が明確になるという点である．つまり，アイロニーには必ず話し手の期待が必要であるので，話し手がその発話に意図的に関与しているのは明白である．逆に，適切な話し手の期待を推測できれば，その発話は話し手が関与していると想定することは妥当だと考えられる．

さらに，最近のホットトピックである心の理論とアイロニー解釈の関係を適切に扱うことも可能である．心の理論とは他人の心の状態を認識／推測する能力のことであり，人間に特有の能力と考えられている．しかし自閉症者や右半球の脳障害者では，このような他人の心を読む能力が健常者に比べて劣っている (Baron-Cohen, 1995)．Happé (1993) は自閉症者が比喩は正しく理解できるがアイロニーの理解は困難であることを示し，McDonald (2000) は右半球の脳障害者が健常者に比べてアイロニー（実際には sarcasm）解釈の能力が劣ることを示している（ただしアイロニーが不誠実さを含むということは認識できる）．これらの知見はアイロニー解釈に他人の心を読む能力が不可欠であることを示しており，すなわちそれは話し手の期待を推測するということである．つまりアイロニー解釈にとって話し手の期待は不可欠なのである．なお，エコーに基づく他のアイロニー論では単なる表象の表象（発話や社会的通念へのエコー）を伴うアイロニーも許しているため，心の理論の欠如によるアイロニー解釈の困難さを説明するには理論的に弱いといえる．

4.4 アイロニーは意味を伝達しない，状況を提示するだけである

従来の多くのアイロニー論，特に意味反転・否定に基づくアプローチでは，アイロニーは何らかの意味を伝達する，つまり話し手はアイロニーによって何かを語る（tell）と考える．しかしこの見方の問題点は 3.4 節で述べた通りである．

暗黙的提示理論では，アイロニー環境を暗黙的に「提示」するという言い方を用いている．この「提示」という言葉は，語る（tell）のではなく，話し手はアイロニーを用いてアイロニー環境を単に示す（show）表現であるとの主張を明示している．これによって，反転・否定された意味などというものを考える必要がなくなる．アイロニーは「示す」言語行為だとするこの考え方は辻 (1997) のアイロニー論でも主張されており，これに関する彼の議論には筆者も同意する．

なお，瀬戸 (1997) のエコーを伴わないアイロニーの例 (9b) についても，暗黙的提示理論では話し手の期待に婉曲的に言及したアイロニーであると考える．つまり,「物を借りるには所有者に許可を求めてほしい」という話し手 B の期待を想定することが可能であり，その期待と現実の不一致を引き起こした「許可無しに車を借りる」という行為を 'that' によって発話内に含むことによって話し手の期待に婉曲的に言及している．よって意味反転を持ち出す必要性はなくなる．

5 おわりに

本発表では，さまざまなアイロニー論を批判的に検討することによって，暗黙的提示理論の有効性・妥当性を論じてきた．これらの議論によって，以下のようなアイロニーの特徴が明らかになり，暗黙的提示理論はこれらのいずれの特徴にも妥当な説明を与えられることが示された．

- メタ表象，または多層性：話し手の期待内容を含む発話によって，間接的に表象（婉曲的言及）する．
- 不適切性：文字通りの意味やその推意の伝達を考えると，何らかの不適切さがある．
- 話し手の意図：話し手の期待へ婉曲的言及することによって，話し手の意図の存在が明確になる．
- 状況の提示：アイロニーはアイロニー環境（の 3 事象）の成立を聞き手に提示する．
- アイロニー標識：プロトタイプ的視点により，アイロニー標識に関する知見を矛盾なく説明できる．

しかしながら，暗黙的提示理論がアイロニーに関して得られた経験的知見のすべてを整合的に説明するまでには至っていない．たとえば，アイロニー環境の 3 事象の程度がアイロニー度の評定に影響を及ぼす可能性がある (e.g., Gerrig & Goldvarg, 2000)．暗黙的提示理論のさらなる精緻化が必要であろう．

謝辞　本研究の一部は（財）日産科学振興財団から助成（第 28 回日産学術研究助成金）を受けた．ここに記して感謝の意を表する．

参考文献

Attardo, S. (2000). Irony as relevant inappropriateness. *Journal of Pragmatics*, *32*(6), 793–826.

Barbe, K. (1995). *Irony in Context*. John Benjamins Publishing Company.

Baron-Cohen, S. (1995). *Mindblindness: An Essay on Autism and Theory of Mind*. MIT Press.

Brown, P. & Levinson, S. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.

Bryant, G. & Tree, J. (2002). Recognizing verbal irony in spontaneous speech. *Metaphor and Symbol*, *17*(2), 99–117.

Clark, H. (1996). *Using Language*. Cambridge University Press.

Clark, H. & Gerrig, R. (1984). On the pretense theory of irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, *113*(1), 121–126.

Colston, H. (2000). On necessary conditions for verbal irony comprehension. *Pragmatics & Cognition*, *8*(2), 277–324.

Curcó, C. (2000). Irony: Negation, echo and metarepresentation. *Lingua*, *110*(4), 257–280.

深谷 昌弘, 田中 茂範（編）(1996). コトバの意味づけ論 —日常言語の生の営み—. 紀伊國屋書店.

Gerrig, R. & Goldvarg, Y. (2000). Additive effects in the perception of sarcasm: Situational disparity and echoic mention. *Metaphor and Symbol*, *15*(4), 197–208.

Gibbs, R. & Colston, H. (2001). The risks and rewards of ironic communication. In Anolli, L., Ciceri, R., & Riva, G. (Eds.), *Say Not to Say: New Perspectives on Miscommunication*, pp. 187–200. IOS Press.

Gibbs, R. & O'Brien, J. (1991). Psychological aspects of irony understanding. *Journal of Pragmatics*, *16*, 523–530.

Giora, R. (1995). On irony and negation. *Discourse Processes*, *19*(2), 239–264.

Grice, H. (1989). *Studies in the Way of Words*. Harvard University Press.

Happé, F. (1993). Communicative competence and theory of mind in autism: A test of relevance theory. *Cognition*, *48*, 101–119.

橋元 良明 (1989). 背理のコミュニケーション：アイロニー，メタファー，インプリケーチャー. 勁草書房.

Haverkate, H. (1990). A speech act analysis of irony. *Journal of Pragmatics*, *14*, 77–109.

Kreuz, R. & Glucksberg, S. (1989). How to be sarcastic: The echoic reminder theory of verbal irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, *118*(4), 374–386.

Kreuz, R. & Roberts, R. (1995). Two cues for verbal irony: Hyperbole and the ironic tone of voice. *Metaphor and Symbolic Activity*, *10*(1), 21–31.

Kumon-Nakamura, S., Glucksberg, S., & Brown, M. (1995). How about another piece of pie: The allusional pretense theory of discourse irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, *124*(1), 3–21.

McDonald, S. (2000). Neuropsychological studies of sarcasm. *Metaphor and Symbol*, *15*(1&2), 85–98.

岡本 真一郎 (2001). ことばの社会心理学 第 2 版. ナカニシヤ出版.

Okamoto, S. (2002). Politeness and the perception of irony: Honorifics in Japanese. *Metaphor and Symbol*, *17*(2), 119–139.

Rockwell, P. (2000). Lower, slower, louder: Vocal clues of sarcasm. *Journal of Psycholinguistic Research*, *29*(5), 483–495.

Roy, A. (1977). Toward a definition of irony. In Fasold, R. & Shuy, R. (Eds.), *Studies in Language Variation*, pp. 171–183. Georgetown University Press.

Searle, J. (1979). *Expression and Meaning*. Cambridge University Press.

瀬戸 賢一 (1997). 認識のレトリック. 海鳴社.

Sperber, D. & Wilson, D. (1995). *Relevance: Communication and Cognition, Second Edition*. Oxford, Basil Blackwell.

Sperber, D. & Wilson, D. (1998). Irony and relevance: A reply to Seto, Hamamoto and Yamanashi. In Carston, R. & Uchida, S. (Eds.), *Relevance Theory: Applications and Implications*, pp. 283–293. John Benjamins Publishing Company.

辻 大介 (1997). アイロニーのコミュニケーション論. 東京大学社会情報研究所紀要, *55*, 91–127.

内海 彰 (1997). アイロニーとは何か？ — アイロニーの暗黙的提示理論. 認知科学, *4*(4), 99–112.

内海 彰 (1999). アイロニーはどのように識別されるか —暗黙的提示に基づくアイロニーの識別モデル —. 人工知能学会誌, *14*(4), 700–708.

Utsumi, A. (2000). Verbal irony as implicit display of ironic environment: Distinguishing ironic utterances from nonirony. *Journal of Pragmatics*, *32*(12), 1777–1806.

内海 彰 (2000). アイロニー解釈の認知・計算モデル. 情報処理学会論文誌, *41*(9), 2498–2509.

内海 彰 (2001). レトリックの認知・計算モデル：隠喩とアイロニー. 認知科学, *8*(4), 352–359.

Williams, J. (1984). Does mention (or pretense) exhaust the concept of irony?. *Journal of Experimental Psychology: General*, *113*(1), 127–129.

Wilson, D. & Sperber, D. (1992). On verbal irony. *Lingua*, *87*, 53–76.

安井 稔 (1978). 言外の意味. 研究社出版.

尺度の推意をめぐって
― 推論におけるデフォールトとアブダクションの役割―

山本英一（関西大学）

1 Introduction

(1) 僕に外車が当たってな。

(2) Assume that the car is a real one unless otherwise specified. (Cf. Assume the car will start unless one knows that it is broken. Levinson 2000:275)

(3) A: 外車がそんな簡単に潰れるか？
B: プラモデルやで。

- ◆ On scalar phenomena (& default inference)
- ◆ Negation of nonmonotonic inference
- ◆ Common-sense reasoning in terms of abduction (in contrast to deduction)
  Cf. Relevance fallacy

2 Scalar phenomena

Number

(4) a. John has <u>three</u> cows.
b. John has only three cows and <u>no more</u>.
c. John has three cows, in fact ten. (Levinson 1983:115)

(5) Scale: 〈10, 9, 8, 7, 6, 5, 4, 3, 2, 1〉

(6) Scalar Implicature : 〈A, B〉 (A > B)
If B, then <u>～A</u>

Lexical Items

(7) a. <u>Some</u> people believe in God.
b. <u>Not all</u> people believe in God.
c. Some people believe in God, in fact everyone does.

(8) a. You can get them in <u>either</u> Harrods <u>or</u> Selfridges.
b. You can<u>not</u> get them <u>both</u> in Harrods and Selfridges.
c. You can get them in Harrods or Selfridges --- whichever is more convenient.
Grundy (1995:45-6)

(9) Scale: 〈all, some〉
Scalar Implicature: If "some", then ～ "all".

(10) Scale: 〈both, either〉
Scalar Implicature: If "either" , then ～ "both".

Grammatical Items

(11) Steven: Wilfrid is meeting <u>a woman</u> for dinner tonight.
Susan: Does his wife know about it?

Steven: Of course she does. The woman he is meeting is his wife.

(12) Scale: ⟨the, a⟩ = ⟨definite, indefinite⟩
Scalar Implicature: If "indefinite", then ～"definite".

3 "In fact" and scalar implicature

3. 1 Definitions and its use

(13) You use *in fact*, *in actual fact*, or *in point of fact* to indicate that you are giving more detailed information about what you have just said. (*COBUILD*)

(14) used when you are adding something, especially something surprising, to emphasize what you have just said. (*LDOCE*)

(15) Mr Major didn't go to university. In fact he left school at 16. (*COBUILD*)

(16) We live very closely to Lesley's parents, in the same road in actual fact. (*LDOCE*)

(17) Mr. Major didn't go to university. ?In fact he became the successor to Margaret Thatcher when she stood down in the 1990 party elections.

(18) We live very closely to Lesley's parents, and ?in fact both of our houses are full of bugs.

3. 2 Scales

(19) The mist was thicker at Washington Harbor; fog, *in fact*, spreading an eerie charm along the waterfront. — M. Truman, *Murder in the House*

(20) a. fog: very thick mist
b. mist: cloudy air near the ground, made up of very small floating drops of water; thin fog
c. haze: a light mist or smoke (*LDOCE*)

(21) Scale: ⟨fog, mist, haze⟩
Scalar Implicature: If "mist", then ～ "fog".

(22) She knew from that moment that she didn't love him. *In fact* she hated him.— R. Cook, *Contagion*

(23) Scale: ⟨hate, not love (like)⟩
Scalar Implicature: If "not love", then ～ "hate".

(24) "You're a wonderful cook," Leslie told him. She snuggled up to him. "*In fact*, you're a wonderful everything, sweetheart." — S. Sheldon, *The Best Laid Plans*

(25) Scale: ⟨(S-C), C⟩ ＊集合S があるとき，その構成素C を取り出して話題化したとき，それ以外の構成素群（S－C）が対立項となり，情報量の多少に基づき次の尺度が得られる。i.e. C=「料理」； S - C = 「料理以外のすべて」
Scalar Implicature: If "C", then ～(S-C)".

3. 3 Default inference & scalar implicature

(26) The noise of the gun frightened off the birds. --- The birds flew away (Levinson 2000:45)

Default Inference

(If x is true, and β is consistent with what is known, then assume β)

$$\frac{\alpha : M\beta}{\beta}$$

bird (a): M flies (a)
flies (a) → (26) + (…in fact, they swam away.)

Scalar Implicature

α (some): M(α (not all))
α (not all) → (7) b. + (… in fact all…)

◆ Default inference is defeasible.

3. 4 "In fact" and procedural meaning

(27) He is a good detective, a very fine one. — P. Cornwell, *Post-mortem*

(28) Warren Brazier is a major player in American business development in Russia — the major player. — M. Truman, *Murder in the House*

(29) ⟨very good / fine, good / fine⟩
⟨the, a⟩

(30) He is a good detective, *in fact* a very fine one.

(31) Warren Brazier is a major player in American business development in Russia, *in fact* the major player.

(32) Mary likes skiing. Anne plays chess. (Blakemore 1987: 132)

(33) Bill insulted Mary. She left. (Blakemore 1988:190)

(34) Mary likes skiing, *but* Anne plays chess. ［対照］

(35) Bill insulted Mary, *so* she left. ［原因／結果］

(36) (Procedural encoding) … expressions such as *after all*, *but* or *so* do not encode a constituent of a conceptual representation (or even indicate a concept), but guide the comprehension process so that the hearer ends up with a conceptual representation. (like pointing to a sky, providing a signal which guides the audience towards an inferential route that will result in the conceptual representation 'It's going to rain.') (Blakemore 2002:90-91; underline added)

4 "But" and inference (Relevance-theoretic approach)

4. 1 Elimination of "implicature"

(37) This is Paul. He's a syntactician, but he's quite intelligent. (Blakemore 2002:114)

(38) a. If X is a syntactician, he is not intelligent. (IF A, then B)
b. Paul is a syntactician. (A)
c. ∴ Paul is not intelligent. (∴B).

(39) In this way, the speaker's use of but encourages the hearer to make an inference that would be made by a person (or the sort of person) who did hold the assumptions (11) and (13) [(38) a. and (38) c. above], or in other words, to derive the cognitive effects that would be derived by this sort of person. … An input achieves a cognitive effect if: (i) it allows the derivation of contextual implications; (ii) it strengthens an existing assumption; (iii) it leads to the contradiction and elimination of an existing assumption. Blakemore (2002: 94-5)

4. 2 Cancellation of various kinds

(40) a. It's a flower, but it's made of plastic.
b. A: Now you know all the facts.
B: Yes, but I am not convinced of his guilt.
c. A: Open the door.
B: As you wish, but it won't open.

(Dascal and Katriel 1977: 154-160)

(41) a. You would expect the flower to be a natural one, but … (default inference)
b. You would have expected me to convinced, but … (deductive? inference)
c. You would expect that the door will open, but … (presupposition)

5. Negation of nonmonotonic inference

5. 1 Relevance fallacy

(42) A: Is there any shopping to do?
B: We'll be away for most of the weekend. (+> We've got to do some shopping)

(Blakemore 1992:6)

(43) a. If we are not at home for most of the weekend, there'll be little food when we return. (If A, then B)
b. We'll be away for most of the weekend. (A)
c. ∴ There'll be little food when we return +> We've got to do some shopping. (∴B)

(44) A: Is there any shopping to do?
B: We'll be away for most of the weekend (*implying that we've got to do some shopping*). ?? In fact, we don't have to do any shopping before we leave.

(山本2002:75-6)

(45) a. If X is a human, X dies. (IF A, then B)
b. Paul is a human. (A)
c. Paul dies. (∴B)
d. × Paul dies, but he doesn't die.

(46) It seems most unlikely that implicatures are derived as deductive inferences (contrary to Sperber and Wilson 1986) because implicatures are clearly defeasible.
(Levinson 2000:42)

5. 2 Deduction vs. Abduction

(47) a. *Deduction*

A(x)(P(x) → Q(x) (major premise)
P(a) (minor premise)
---------- D
Q(a) (conclusion)

b. *Abduction*

A(x)(P(x) → Q (x) (known law)
Q(a) (observed fact)
---------- A
P(a) (hypothesized explanation)
Levinson (2000:43)

Deduction

(38) a. If X is a syntactician, he is not intelligent. (IF A, then B)
b. Paul is a syntactician. (A)
c. ∴ Paul is not intelligent. (∴B)
d. × Paul is intelligent. Cf. (45)

Abduction

(48) a. If he is not intelligent, he is a syntactician. (IF A, then B)
b. Paul is a syntactician. (B)
c. ∴ Paul is not intelligent. (∴A)
d. ○ Paul is intelligent.

(49) "Is it also true," continued the distinguished QC (=Toby), "that when your thesis was presented to the examining board, it created such interest that it was published by the Harvard University Press, and is now prescribed reading for anyone specializing in forensic science?"
"It's kind of you to say so," said Harry, giving Toby the cue for his next line.
"But *I* didn't say so," said Toby, rising to his full height and staring at the jury.
"Those were the words of none other than Judge Daniel Webster, a member of the Supreme Court of the United States." — J. Archer, *To Cut a Long Story Short*

Deduction

(50) a. A ? → B (I said so. = Those were my own words.)

b. A ?

c. ∴ I said so. (Those were my own words.)

d. × But those were not my own words. Cf. (45)

"But" contradicting "implicature" (50) c. (But this is no implicature!)

Abduction

(51) a. If someone believes that something is the case, then he says so. (If A, then B)

b. The speaker says so. (B)

c. ∴ The speaker believes that something is the case. (∴A)

d. ○ But this is not my own belief..

◆ "But" , at least in some cases, would lead you to an abductive (or default) inference route, not to a deductive one.

6 Default inference and common-sense reasoning

(52) Default inference

α (some): M(α (not all))

α (not all) Cf. (7)

(53) Common-sense reasoning (fallacious in deductive reasoning)

α (P [my belief] →Q [my words] & Q [my words]: M(α (P [my belief]))

α (P [my belief]) Cf. (51)

◆ Both are defeasible --- which is a defining feature of implicature

References

Blakemore, D. (1987). *Semantic Constraints on Relevance*. Oxford: Basil Blackwell.

Blakemore, D. (1988). "So" as a constraint on relevance. In R. M. Kempson (ed.) *Mental Representations: The Interface between Language and Reality*, 183-195, Cambridge: Cambridge University Press.

Blakemore, D. (1992). *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*. Oxford: Blackwell.

Blakemore, D. (2002). *Relevance and Linguistic Meaning: The Semantics and Pragmatics of Discourse Markers*. Cambridge: Cambridge University Press.

Dascal, M. and T. Katriel. (1977). "Between semantics and pragmatics: the two types of 'but' — Hebrew 'aval' and 'ela'." in *Theoretical Linguistics, vol. 4*. 143-172.

Grundy, P. (1995). *Doing Pragmatics*. London: Edward Arnold.

Levinson, S. C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.

Levinson, S. C. (2000). *Presumptive Meanings — The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, Mass: The MIT Press.

Sperber, D. and D. Wilson. (1986). *Relevance: Communication and Cognition.* Oxford: Basil Blackwell.

山本英一 (2002). 『「順序づけ」と「なぞり」の意味論・語用論』. 大阪：関西大学出版部.

コミュニケーションギャップの実証的研究
—謙遜表現を中心として—

寺田　千恵
神戸大学大学院総合人間研究科博士後期課程

1. 研究の目的

「謙遜」という言葉は、我々日本人にとっては馴染みが深く、普段あまり意識せず使用していることが多い。なぜなら「和」を重んじると同時に、他者との関係を上下関係でとらえる傾向のある日本文化において、自己を控えめに表現する謙遜表現は、他者とのコミュニケーションの潤滑油的働きをするからである。しかし、我々の意識や先行研究の多くが「発話者の謙遜表現は、受け手に常に正しく解釈される」との大前提に成り立っていることに注意したい。果たして本当にそうであろうか。発話者の「謙遜表現」が受け手に正しく伝わらないことによって誤解を招くことがあるのではないだろうか。
自らの経験や予備調査の結果からは、他者に対して謙遜したことにより返って誤解を招き、コミュニケーションギャップを生じさせたケースが数多く見うけられた。よって本研究は、「発話者の謙遜表現は、常に正しく受け手に解釈されるわけではない」との仮説を立て、謙遜表現の使用がコミュニケーションギャップをもたらす危険性について言語学的、社会学的、心理学的に分析することを目的としている。

2. 謙遜表現の定義

謙遜表現：他をうやまい自分を卑下する目的で、自分が自分のことについて一段低い価値判断を述べる言語表現のこと（河上誓作　1984）

明示的謙遜表現：単語自体が明らかな謙遜を意味し、受け手にもほぼ誤解無く伝わると考えられる儀礼的表現。例）愚妻、豚児、粗茶、拙著
暗示的謙遜表現：明示的謙遜表現を含まず、文脈や発話内容により謙遜を表す表現。
例）「（本当はよくできたと思っているのに）今日のテストはまぁまぁだった」と発言する場合など

本研究の目的は、発話者が「謙遜表現」を使用した際に、受け手がそれを「謙遜表現」であると正しく解釈しない場合、そこにコミュニケーションギャップが生じるのではないかについて考察するものである。よって、単語自体が明らかに謙遜を意味し、受けてにもほぼ誤解無く解釈される「明示的謙遜表現」ではなく、受け手によっては様々に解釈され

る可能性のある「暗示的謙遜表現」を研究の対象としたい。またこれ以降、特に明示的と表記していない場合の「謙遜表現」はすべて、「暗示的謙遜表現」を指すものとする。

3. 謙遜表現の使用されうる状況とその機能

①挨拶における明示的謙遜表現

例）初対面時の自己紹介の席などで「若輩者ですが、よろしくお願いします」

明示的謙遜表現を使用したということが重要

②誉められた際の暗示的謙遜表現

例）A:「絵を描くのが、ほんとに上手ですね」B:「いやー大したことないですよ」

誉められたことを否定することにより自分を下げ、相手と同じ位置を保とうとする

③相手を誉める際に伴う暗示的謙遜表現

例）A:「素敵なお家ね。お宅に比べたら、うちなんてお恥ずかしいわ」

自分を一段下に表現することで、相手を上げようとする

④ある種の能力を問われた際の暗示的謙遜表現

例）A:「試験はどうだった？」B:「（よくできたと思っているが）できなかったよ」

控えめな答えをすることで、相手に尊大な印象を与えない

4. なぜ謙遜表現を用いるのか

①謙遜と日本文化

②謙遜とポライトネス理論

謙遜表現は、本当に思っていることを相手に直接表現しないという意味で、間接表現の一種であると考えられる。よって、人がなぜ間接表現を用いるのかを説明する言語使用の理論であるﾌﾞﾗｳﾝとﾚﾋﾞﾝｿﾝ（1987）のポライトネス理論に基づいて、日本人がなぜ謙遜表現を用いるのかを考えたい

・ネガティブポライトネスとポジティブポライトネス

日本における謙遜表現は、お互いに自分のことを下において相手を上に置こうとすることで、相手との距離を置こうとしているのである。これは、ネガティブポライトネスの手段であるといえるのではないか。

↓

日本人は、他者へのネガティブフェイスを傷つけないように配慮しようとする結果謙遜表現を用いると考えられる。

・ポライトネスの原則（ﾘｰﾁ）

控えめの公理：自分を誉める表現は小さくせよ。自分をけなす表現は大きくせよ。

→文化によって適応が異なる。日本では例えば誉められた誰かがそれを否定するという結果になって現れる（ﾘｰﾁ　1983）

4. 謙遜表現とコミュニケーションギャップ

これから問題としたいのは、発話者の「謙遜表現」が受け手に「謙遜表現である」と理解されなかったとしたら、コミュニケーションを円滑にするどころか、かえってコミュニケーションギャップを生じさせるのではないか、という点である。なぜなら、発話者の「謙遜表現」が受け手に「嫌遜表現」であると正しく伝わってはじめて、謙遜表現は機能するからである。送り手が謙遜表現を用いた場合の、受け手の取りうる解釈を４つに分類してみたい。

① 謙遜と解釈し、発話内容は事実ではないと受け止める
② 謙遜とは解釈せず、発話内容を言葉通りの事実と受け止める
③ 謙遜とは解釈するが、発話内容の趣旨は事実と受け止める
④ 謙遜と解釈するが、自慢と受け止める

今回問題としたいのは、②の場合である。

例）親同士の井戸端会議で

A:（特別そう思っているわけではないが）うちの子は、できが悪くて困るわ。
B: あら、それは大変やねぇ。うちの子はよくできるんよ。
A: ……

・フレーミングとリフレーミング

フレーミング：どのような意図で発話しているのかを示したり、他者の発言の意図を推測する方法である。

リフレーミング：相手の設定したフレームをわざと自分のフレームに置き直して会話する方法。しばしば聞き手が話し手を低い立場におこうとする際に使われる手法。（タネン 1986）

5. コミュニケーションギャップを招く要因

①文化的要因：「謙遜の構え」の崩落
②会話の協調の原則（ｸﾞﾗｲｽ）
質の公理の違反こそ、発話者の謙遜表現を、受け手が解釈する上での重要な手がかりとなる。

↓

発話者の謙遜表現を受け手が謙遜表現であると推測する際の過程で不可欠となるのは、受け手が発話者、または謙遜されている内容に対してもっている情報量である。

６. 実験Ｉ　謙遜表現と情報量

仮説１：謙遜が通じるか通じないかは謙遜者に対する情報量の有無に依存する
仮説２：世代が上の人ほど謙遜が通じやすい

これらの仮説を検証するため、質問紙法を用いた実験および統計的な分析を行う。

以下で質問紙法による実験方法について述べる。基本的な手続きは、謙遜表現を含む３つの会話文を被験者に読んでもらい、それぞれの会話に関する質問紙に回答してもらうというものである。

（実験）個人の謙遜

（１）実験の目的

被験者に謙遜表現を含む会話文を読んでもらい、どの程度の人がその会話を謙遜と受け取るか、また謙遜が伝わるかどうかを左右する要因を統計的に調べる。

（２）実験対象

10 代から 70 代までの男女。

（３）手続き

・謙遜表現を含む３つの会話文を被験者に読んでもらい、それぞれの会話に関する質問紙に回答してもらう。
・３つの会話文の話題はそれぞれ「卒業論文について」「クラブ活動について」「大学院入試について」と異なるが、会話の流れは共通しており、「ある人物 A が別の人物 B を誉め、誉められた B は誉められた内容を否定する」といった会話である。
・被験者に与える予備知識により２種類の質問紙を用意する。１つの質問紙では、B が誉められる内容に関して被験者に予備知識を与えておく。具体的には、「B が実は誉められた事を得意としている」という内容である。もう一つの質問紙ではこのような予備知識を与えない。
・被験者の半分には予備知識を与えた質問紙に回答してもらい、残りの半分には予備知識を与えない質問紙に回答してもらった。
・質問する項目は、被験者の情報として以下の２つを質問した。

１）被験者の性別
２）被験者の年代

会話内容に関する質問としては以下の３つを質問した。

３）会話内容を本当だと思うか
４）会話内容を謙遜ととらえたか
５）被験者自身なら謙遜するかどうか

■質問紙概要

＜予備知識＞

・ＡさんとＢさんが○○（３つのテーマ）について会話しています。

・Ｂさんは実は○○が得意ですが、Ａさんはそのことを知りません。（＊註）

・以上のことをふまえ、あなたは第三者として以下の会話を読み、質問に答えて下さい。

（＊註）この情報を与える質問紙と与えない質問紙の二種類の質問紙を用意した。

＜会話文の流れ＞

例）・大学の友人、明と徹が徹のテニスの試合について会話しています。

・（徹はテニスの試合で何度も優勝していますが、明はそれを知りません）

明：「徹って昔からテニスやってたんやっけ」

徹：「そう。一応高校のときから続けているんやけど」

明：「どうりで。噂ではかなり上手いって聞いてるわ」

徹：「そんなことないよ。いつまでも上達しなくてな」

＜質問の内容＞

①徹の発言「そんなことないよ。いつまでも上達しなくてな」を本当だと思いますか？

１．いいえ　２．どちらかというといいえ　３．わからない

４．どちらかというとはい　５．はい

②徹の発言「そんなことないよ。いつまでも上達しなくてな」をどのように受け止めましたか？

１．事実を述べた　２．謙遜した　３．その他（　　）

③あなたが徹なら、どう答えますか？

１．テニスの実力によらず、誉められたことを否定する

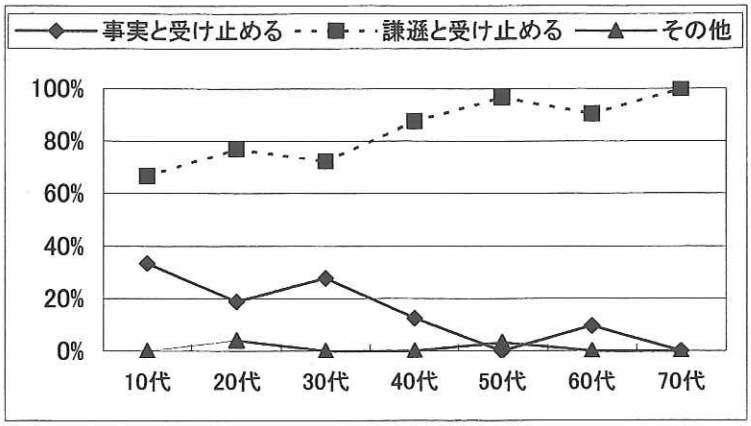
２．テニスの実力よらず、誉められたことを肯定する

３．誉められたことが事実なら肯定し、事実出なければ否定する。

４．その他（　　）

（４）結果

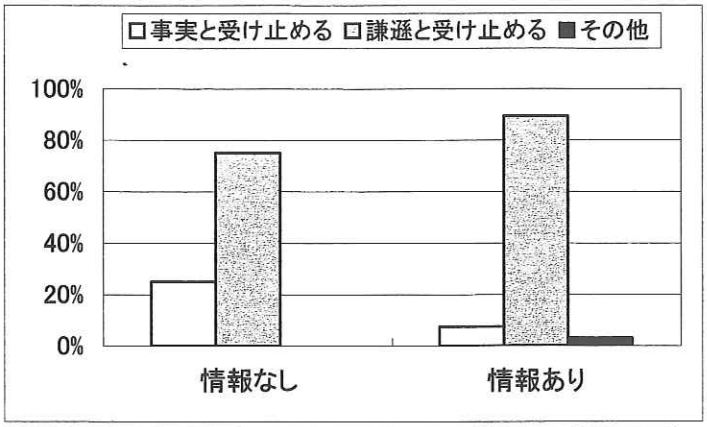
■仮説１　年代の上の人ほど謙遜が通じやすい



1%有意

	１０代	２０代	３０代	４０代	５０代	６０代	７０代	全体
事実	1 (33.3%)	9 (18.8%)	10 (27.8%)	3 (12.5%)	0 (0.0%)	2 (9.5%)	0 (0.0%)	25 (14.4%)
謙遜	2 (66.7%)	37 (77.1%)	26 (72.2%)	21 (87.5%)	29 (96.7%)	19 (90.5%)	12 (100.0%)	146 (83.9%)
その他	0 (0.0%)	2 (4.2%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (3.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	3 (1.7%)
全体	3 (100.0%)	48 (100.0%)	36 (100.0%)	24 (100.0%)	30 (100.0%)	21 (100.0%)	12 (100.0%)	174 (100.0%)

■仮説２　謙遜が通じるか通じないかは謙遜者に対する情報量に依存する

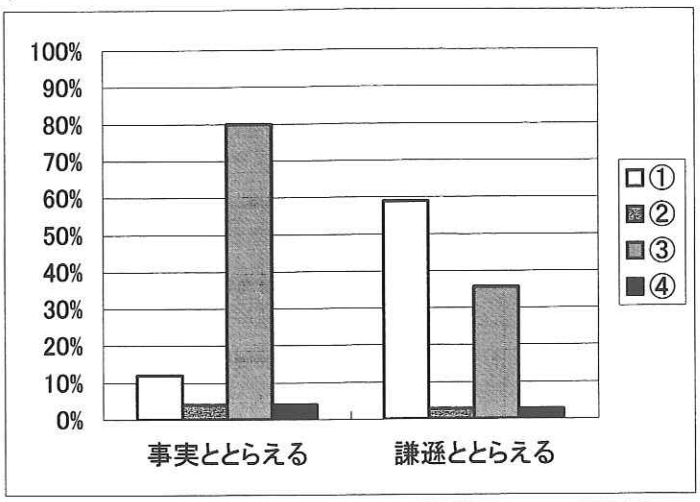


1%有意

	情報なし	情報あり	全体
事実	15 (25.0%)	5 (7.6%)	20 (15.9%)
謙遜	45 (75.0%)	59 (89.4%)	104 (82.5%)
その他	0 (0.0%)	2 (3.0%)	2 (1.6%)
全体	60 (100.0%)	66 (100.0%)	126 (100.0%)

■「謙遜ととらえるか」と「被験者自信なら誉められたとき否定するか肯定するか」との相関関係

①誉められた内容の真偽によらず、誉められたことを否定する
②誉められた内容の真偽によらず、誉められたことを肯定する
③誉められた内容が事実なら肯定し、事実でなければ否定する
④その他



	事実	謙遜	その他	全体
①	3 (12.0%)	86 (58.9%)	3 (100.0%)	92 (52.9%)
②	1 (4.0%)	4 (2.7%)	0 (0.0%)	5 (2.9%)
③	20 (80.0%)	52 (35.6%)	0 (0.0%)	72 (41.4%)
その他	1 (4.0%)	4 (2.7%)	0 (0.0%)	5 (2.9%)
全体	25 (100.0%)	146 (100.0%)	3 (100.0%)	174 (100.0%)

7．結論

発話者の嫌遜表現が受け手に正しく解釈されるか否かは、受け手が発話者、または謙遜されている内容に対して持っている情報量に依存するのではないかとの仮説の検証を試みた。その結果、年代が上がるにつれて謙遜と受け止める割合が高くなることが明らかとなった。また、謙遜されている内容に対して情報を持っている集団の方が、情報を与えられていない集団よりも謙遜と受け止める割合が高いことが、有意に検証された。一方で、情報を与えられていた、いないに関わらず、６６％の人が実験で使用した発話を謙遜表現と受け止めている。また、１０代から２０代の若い世代であっても５割以上の人が謙遜表現と受け止めていることは、依然として謙遜文化が生きていることを示しているといえる。しかし、被験者が実験で想定した状況と同様に、「他者に誉められた場合なんと返答するか」の質問に対し、実験発話を謙遜と解釈したひとも含め全体として５割の人が「誉められた内容が事実であると思うなら肯定する」と答えた。また、５０代から７０代では、「ど

のような相手にも謙遜する」と答えた割合が高かったのに対し、１０代から４０代では、「どのような相手にも謙遜しない」と答えた割合の方が高かった。これらの結果は、全体としてどの世代であっても「発話者の否定的な発話を、謙遜表現であると受け止める」という傾向は示しているが、一方で、若い世代になるに従って、自らは謙遜表現を用いない傾向があることを示している。他者に誉められた際、形式的にその発言を否定する日本人特有の「誉められた際の謙遜表現」は次第に薄れてゆき、誉められた際の返答の基準は「個人の判断」に委ねられてゆくことを示唆している。

参考文献

会田雄次　1972　『日本人の意識構造』　講談社

安藤清志　1994　『見せる自分/見せない自分』サイエンス社

河上誓作　1984　『文意味に関する基礎的研究』

岡本真一郎　2000　『ことばの社会心理学』　ナカニシヤ出版

津田早苗　1999『談話分析とコミュニケーション』リーベル社

村本由紀子・山口勧「もうひとつの Self-serving bias:日本人の帰属における自己卑下・集団奉仕傾向の共存とその意味について」The Japanese Journal of Experimental Social Psychology. 1997,Vol 37,No.1,65-75

吉田寿夫・古城和敬・加来秀俊「児童の自己呈示の発達に関する研究」教育心理研究 1982　30、120-127

Brown&Levinson,S.C. 1987 “Politeness:Some Universals in language usage” Cambridege University Press

Deborah Tannen 1986 “That’s Not What I Meant!” , Internationl Creative Management

Deborah Tannen 1990 “YOU JUST DON’T UNDERSTAND”, International Creative Management

Leech,Geoffery 1983. “Principales of pragmatics” London, Longman

痛覚表現の日英比較：類似と差異

堀　素子
関西外国語大学

1．はじめに

「痛みはごく日常的なしかも人間にとって重要な事柄で、人間の経験のなかでも特に問題となる領域である。しかしながら痛みの表現方法は現実を構築する文法の一般的方策にそぐわない。自然言語の文法は人間の経験の論理であり、現実的空想的双方のあらゆる経験を表現する強力な論理である。それにもかかわらず、痛みは文法が備えている現象論理学的モデル(phenomenological model)のなかに自然にしっくりとは納まらない。

そのゆえにこそ痛みの表現全体を語彙･文法(lexicogrammar)の中に位置づけ、経験を構築する言語的方策の１つとして観察する必要がある。どれほど複雑な状況であろうとも、それについて文法的に思索することは無駄ではない。意味の領域と現実の世界とはかならずしも相互に行き来できないような間柄ではない。」(Halliday, 1998: 2)（訳は筆者）

2．英語の痛覚表現

2．1．「物」としての痛覚 (Pain as Thing)

(A) I've got a headache.　関係過程(Relational Process)

(1) I've got aches and pains. (BNC)

(2) You get the hot aches. (BNC)

(3) He's got no pain just there.

(4) He's got toothache and tummy ache from eating too many sweets. (BNC)

(B) That gives me a headache.　関係過程(Relational Process)

(5) Her head gave a warning thump. (BNC)

(6) At least I'm sure I can relieve the pain. (BNC)

(C) Do you feel any pain?　心理過程(Mental Process)

(7) If I suddenly start feeling pains anywhere in my body, ... (BNC)

(D) My pain is bad (today).　関係過程(Relational Process)

(8) The pain—it must have been awful. (BNC)

(E) Are you in (great) pain?　関係過程(Relational Process)

(9) I am in some pain. (BNC)

(10) I had been in constant pain. (BNC)

(F) The pain suggests (that) . . . .　発言過程(Verbal Process)

(11) His blistered back screamed pain at him. (BNC)

２．２．「質」としての痛覚 **(Pain as Quality)**

(A) My throat feels sore.　関係過程(Relational Process)

(12) My throat's feeling sore.

(13) God, his head felt fuzzy, and sore. (BNC)

(14) Her feet were sore. (BNC)

(B) I feel sore (here)/I'm feeling sore (here).　関係過程(Relational Process)

(15) He's sore there. (BNC)

(C) It's sore (here).　存在過程(Existential Process)

(16) It's tender there.

(D) The wound is painful.　関係過程(Relational Process)

(17) . . . when the pin in her hipbone was especially painful. (BNC)

(18) The ankle was already swollen and painful to the touch. (BNC)

２．３．「過程」としての痛覚 **(Pain as Process)**

(A) My knee hurts/aches.　関係過程(Relational Process)

(19) My head hurts real bad—right inside my eyes. (BNC)

(20) My earholes ache. (BNC)

(21) All your joints ache. (BNC)

(22) Her muscles began aching after just a short time. (BNC)

(B) My knee's hurting/aching.物質過程/存在過程(Material Process/ Existential Process)

(23) My back was hurting more than ever. (BNC)

(24) Is your arm hurting? (BNC)

(25) His arm must be hurting terribly. (BNC)

(26) She couldn't move and her back was aching. (BNC)

(C) I hurt/ache (here).関係過程/行動過程(Relational Process/Behavioural Process)

(27) I hurt everywhere. (BNC)

(D) I'm hurting/aching (here). 物質/存在/行動過程(Material /Existential /Behavioural Process)

(28) And so he was, once dry and clean; aching, but fine. (BNC)

(E) It hurts/aches (here). 存在過程(Existential Process)

(29) It hurts on the top of my arm. (BNC)

(30) Mum it hurts! (BNC)

(31) Well it bloody hurts now! (BNC)

(32) It must be rheumatic this in here ooh god it hurts. (BNC)

(F) It's hurting/aching (here). 存在過程(Existential Process)

(33) Is that hurting there? (BNC)

(G) My knee's hurting me. 心理過程(Mental Process)

(34) It's hurting him dreadfully. (BNC)

(H) You're hurting me. 物質過程(Material Process)

(35) He was hurt in the fighting near Rokha. (BNC)

(36) There has been a small electoral earthquake in Europe, but not many people have been hurt.

(37) You're hurting me, Havvie. (BNC)

(38) Am I hurting you? (BNC)

(39) I don't want it. You're hurting me. (BNC)

(40) Yes, I know I'm hurting you—but you're creating it! (BNC)

(41) I keep hurting her. (BNC)

(42) All I need do was agree to a list of people who had already been named, so I wouldn't be hurting anyone. (BNC)

(I) I've hurt my knee. 物質過程(Material Process)

(43) He crashes down a flight of stairs and hurts his back. (BNC)

(44) Good heavens, how did you hurt your arm? (BNC)

(J) I've hurt myself (on the knee). 物質過程(Material Process)

(45) I didn't hurt myself and I was very lucky I didn't hit the cars . . . (BNC)

(46) He falls off a lot and hurts himself. (BNC)

(47) How she had worked at it, . . . learning to ride, learning to jump, falling off, hurting herself, ... (BNC)

(K) That hurts.　関係過程(Relational Process)

(48) Ooh, ooh this hurts and that hurts, ... (BNC)

3．英語の痛覚表現：使用される語彙の文法機能

3．1．痛覚語彙の文法的機能

表1．文中における感覚者・痛覚・身体部位の文法機能

	Subj.	Pred.	Obj.	Comp.	PP.
I-A. I've got a headache.	S'er		pain		
B. That gives me a headache.			S'er/pain		
C. Do you feel any pain?	S'er		pain		
D. My pain is bad (today).	pain			bad	
E. Are you in (great) pain?	S'er				pain
F. The pain suggests (that)	pain				
II-A. My throat feels sore.	Bdy part			pain	
B. I feel sore (here).	S'er			pain	(Bdy part)
C. It's sore (here).				pain	(Bdy part)
D. The wound is painful.	Bdy part			pain	
III-A. My knee hurts.	Bdy part	pain			
B. My knee's hurting.	Bdy part	pain			
C. I hurt (here).	S'er	pain			(Bdy part)
D. I'm hurting (here).	S'er	pain			(Bdy part)
E. It hurts (here).		pain			(Bdy part)
F. It's hurting (here).		pain			(Bdy part)
G. My knee's hurting me.	Bdy part	pain		S'er	
H. You're hurting me.		pain		S'er	
I. I've hurt my knee.	S'er	pain		Bdy part	

J. I've hurt myself (on the knee).	S'er	pain	S'er	(Bdy part)
K. That hurts.		pain		

注１．I, II, III は本文中の２．１、２．２、２．３の各節に対応する。A, B, C, . . . は各節内の代表的例文に付した記号に対応し、その例文を併記する。

注２．S'er＝Senser 感覚者、pain＝痛覚、Bdy part＝Body part 身体部位をあらわす。

３．２．感覚者の文法的機能

表２．感覚者の文法的機能

I-A. I've got a headache.	Subj.		
C. Do you feel any pain?	Subj.		
E. Are you in (great) pain?	Subj.		
II-B. I feel sore (here).	Subj.		
III-C.D. I hurt/am hurting (here).	Subj.		
I. I've hurt my knee.	Subj.		
J. I've hurt myself (on the knee.)	Subj.		
I-B. That gives me a headache.		Obj.	
III-G. My knee's hurting me.		Obj.	
H. You're hurting me.		Obj.	
J. I've hurt myself (on the knee).		Obj.	
I-D. My pain is bad (today).			Poss.
II-A. My throat feels sore.			Poss.
III-A.B. My knee hurts/is hurting.			Poss.
I-F. The pain suggests (that)	No S'er		
II-C. It's sore (here).	No S'er		
D. The wound is painful.	No S'er		
III-E.F. It hurts/is hurting (here).	No S'er		
K. That hurts.	No S'er		

注１．Subj., Obj., Poss.は感覚者を指す語がそれぞれ主語、目的語、代名詞の所有格にあらわれていることを示す。

注２．No S'er は、文のどこにも感覚者を指す語が無いことを示す。

３．３．痛覚を感じる身体部位の文法的役割

表３．痛覚を感じる身体部位の文法的役割

II-A. My throat feels sore.	Subj.	
D. The wound is painful.	Subj.	
III-A.B. My knee hurts/is hurting.	Subj.	
G. My knee's hurting me.	Subj.	
I. I've hurt my knee.		Obj.
II-B. I feel sore (here).		(PP.)
C. It's sore (here).		(PP.)
III-C.D. I hurt/am hurting (here).		(PP.)
E.F. It hurts/is hurting (here).		(PP.)
J. I've hurt myself (on the knee).		(PP.)

注１．Subj., Obj.は痛覚を感じる身体部位がそれぞれ主語、目的語の位置にあらわれることを示す。

注２．(PP.)は痛覚を感じる身体部位が前置詞句の中にあらわれるが、それは文構成上、必須のものではないことを示す。

４．英語話者の好む痛覚表現

４．１．Aching +身体部位

(49) Paige dropped her aching arms. (BNC)

(50) For aching, tired feet, mix a few drops of peppermint oil . . . . (BNC)

(51) . . . the heat unknotted tense and aching muscles. (BNC)

(52) For aching joints you can't beat swimming as an exercise. (BNC)

(53) She stretched her aching back. (BNC)

(54) It was the cause of her sore toes and blistered heel and empty, aching stomach. (BNC)

４．２．痛みの程度・種類の言い方

(A)　通常の形容詞を付加する。

(55) Oh, a bad, bad ache. (BNC)

(56) It's like sharp pains [sic] that's going round about it. (BNC)

(57) The pain in her lower back subsided leaving a dull ache. (BNC)

(58) You get the hot aches.

(59) He was dipping his heavy aching head into a basin of cold water.

(B) 痛覚専用の現在分詞を使う。

(60) We are all too familiar with the throbbing ache of a boil or carbuncle on the neck. (BNC)

(61) Dot knew, despite her throbbing head, her painful neck and throat, that . . . .(BNC)

(62) Cough with tearing pains in the larynx . . . .

(63) There may be numbness of affected parts, stitching, tearing pains.

(C) 痛覚専用の形容詞を使う。

(64) I've got a sore stomach.

(65) He nudged a sore spot on Willie's arm.

(66) Perhaps the babies don't get sore bottoms now.

(67) I mean she's complaining of a sore tummy.

(68) Ice and snow and killing damp, sore chests and feet and hands, ...

(69) Michael Thomas is battling to overcome a sore Achilles tendon.

(70) So La Laura now thinks [sic] got a sore stomach because she's hungry.

(71) The term RSI covers a wide variety of painful hand and arm conditions.

(72) He had obtained some painful sores on his feet while sightseeing around London.

４．３．定型表現

(A) It hurts.

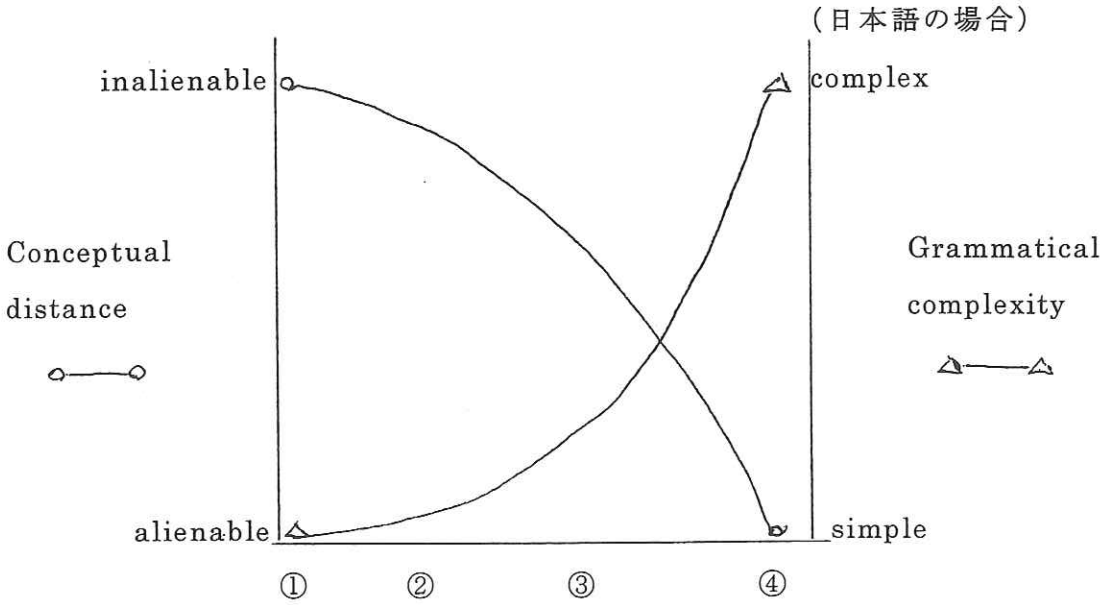
(B) I have a headache.

(C) My knee hurts/aches.

(D) I've hurt myself (on the knee).

(E) 名詞の用法

図１．痛覚と所有者の観念的距離と、痛覚表現における文法的複雑さの関係



	「痛い」	「Xが痛い」	「私はXが痛い」	「YはXが痛いらしい」など
Process:	Exist-entail	Relatio-nal	Mental	[Mental]' 1 [Mental]2
Participants:	Process alone	Carrier & Attribute	Senser & Phenomenon	[Senser & Phenomenon]'1

①「痛い」（話者＝患者、表出されない。痛む箇所Xも表出されない。）

②「Xが痛い」（話者＝患者、表出されない。痛む箇所Xは表出される。）

③「私はXが痛い」（話者＝患者、表出される。痛む箇所Xも表出される。）

④「YはXが痛いらしい」（話者は、患者YのXが痛いらしい、と思っている。）

参考文献

Croft, William. 2001. Typology. In Aronoff, Mark and Janie Rees-Miller (eds.) *The Handbook of Linguistics*. Malden, Mass.: Blackwell. 337-368.

Halliday, M. A. K. 1994. *An Introduction to Functional Grammar*. Second Edition. London: Edward Arnold.

Halliday, M. A. K. 1998. On the grammar of pain. *Functions of Language* 5, 1-32.

使役受身文の一考察

趙　順文
台湾大学日本語文学系

1．序

「させられる」[1]によって表される構文は一般に使役受身文と呼ばれている。使役受身文は動作主が自分の意志に反し、ある動作を行うことによって、迷惑の影響をこうむる意味を表すもの（(1)）であるが、「させられる」の用法はそれだけにとどまらず、さらに動作主がある行為に強い印象を受ける場合（(2)）にも用いられる。

(1) 役人のむごい拷問にあって、男は身に覚えのないことを白状させられた。

(2) 山ほどたまっている家事を、速やかに処理していく母には、いつも感心させられる。

本稿ではこういう一般論に基づいて、最近の研究を中心に YAHOO ホームページー（略称「YA」）と佐賀新聞記事データベース（略称「佐賀」）の実例を対照しながら、語用論的に使役受身文の形式と意味用法に注目して考察する。

2．先行研究とその問題点

従来の学説では使役文と受身文との形式と意味用法について豊富な用例に基づいて、分類・記述がなされているが、ここでまず使役受身文の形式にかかわる一点を検討する。

仁田（1992：63）は日本語の受身を①「まともの受身」（直接受身）②「第三者の受身」（間接受身）③「持ち主の受身」に分けたうえで、次の例を「まともの受身」とし、「もとのガ格が非情物であり、非ガ格が有情者である」と説明している。

---

1 なお五段活用動詞の使役受身文には「せられる」と「される」のように二種類の形式がある。特に話し言葉では後者を取るのが一般的である。

(3) 母は父の放蕩に悩まされつづけた。

しかしこれはむしろ「父の放蕩が母を悩ましつづけた」から派生したものといより、「母が父の放蕩に悩みつづけた」を原形としたものと考えてよかろう。実際このクラスに属する実例は次のようである。

(4) ゴルフ雑誌見ては、メーカーの宣伝に踊らされ、ゴルフショップ行っては、店員さんの甘い言葉に酔わされる……（YA369 件）

(5) そういえば一昨日東京に行ったときも、電車内いつもの情景が自動的沸いて出てきて消えないのに困らされた……（YA124 件）

(6) 私は相手の口車に乗せられて、金をだまし取られた。（YA1730 件）

(7) 私達が生きている中で、沢山の煩悩に迷わされ続けている。（YA271 件）

用例（4）では「に踊らされ」・「に酔わされ」、（5）では「に困らされ」、（6）では「に乗せられ」、（7）では「に迷わされ」というように、いずれも「に踊る」「に酔う」「に困る」「に乗る」「に迷う」などを基本文型とした使役受身文の形式と考えられよう。つまり「…が…に悩む」をはじめ、「不快」の感情を表すこの類の自動詞が、その派生形式である他動詞あるいは使役動詞「…が…を悩ませる／悩ます」と対をなす場合には、往々にして使役受身文が多用されるのである。これは次に述べる第一点の解釈に合致している。

次に使役受身文の意味に関する研究はほぼ次の二点に収斂するにとどまり、比較的に少ない[2]。

第一に、例えば白川（2001：133）次のような用例を上げて、使役受身文に意味的に動作主の自発的意志によってではなく他者の意志によってその動作を行うものと、何かが原因となってある出来事を引き起こすものがあるとし、前者は「歌う、行く、食べる」などの意志動詞に用いられるのに対し、後者は「悩む、驚く、びっくりする、落胆する、がっかりする」などの感情を表す無意志動詞と、「考える、反省する、思案する」などの思考を表す動詞に使われると敷衍している。

---

[2] 実際『言語学大辞典』の和文索引には「使役動詞」と「受身動詞」の項目があるが、「使役受身動詞」の項目は載っていない。もっとも森田（1995：168）は、「させる」は二者の人間関係で相手に何かをやらせる本格的な「使役」もあれば、単に相手をそそのしたり、仕向けたりする消極的な誘発行為もあるということを指摘している。

(8) みんなの前で歌を歌わされた。恥ずかしかった。

(9) 彼は腰の持病に悩まされている。

(10) ブランド品ばかり買いあさる観光客の姿に、真の豊かさとは何かを考えさせられた。

第二に、次の用例で示したように、「喜ぶ、楽しむ、うきうきする」など積極的に喜びを表す「感情」自動詞の使役受身文は非文であると主張している。

(11) 春樹は何気ない妻の一言にとても｛○喜んだ自／×喜ばされた自役受｝。

(12) すばらしい音楽に一時に｛○楽しんだ自／×楽しまされた自役受｝。

3．分析

第一点には特に異論もないが、第二点に関しては本稿は YAHOO での実例を通して語用論的に修正を加える必要があると主張する。

ここでは大野・浜西（1985）の語彙分類体系表を参考に、「快」を表す感情を a)喜び、b)楽しみ、c)安心、d)満足、e)感動などの五項目に分類し、さらに各項目に属する典型的動詞を検討することによって第二点の主張の適否を明らかにする。

a) 喜び：

① マキノ監督のドラマは、美しい、自由奔放な喜怒哀楽のつづれ織り。悲しくて泣かされ、そのまま笑わされ、途切れず喜ばされ…（YA140 件：佐賀 0 件）

②無邪気な子に、時にいらいらさせられ、時にホットさせられ、時に喜ばされ、時に笑わされ…１日として同じ日はなかった、目まぐるしい日々の記録です…（同上）

③『いっちり』は、誕生日の唄を作ってくれていて、かなり感激しました。『いっちり』にはいつも驚かされ、そして喜ばされ…（同上）

④「バレンタインなのに、あたしが喜ばせたかったのに、あたしが喜ばされちゃったよ…（同上）

⑤だから、今は何もしないで、ただ、祈りと聖書で恵みに満たされ、喜びに満たされ…（YA256 件：佐賀 1 件）

⑤'4ヵ月前、スリランカの環境保護活動家は喜びに満ちていた…（YA3500件：佐賀10件）

⑥…何気なく、当たり前のように暮らしている平和な毎日に、喜びを感じさせられ…（YA2件：佐賀0件）

上述のように①～④では「喜ばされ」、⑤では「喜びに満たされ」というように、いずれも「喜び」の感情を表す実例が多用されている。もっとも「喜びに満たされる」は「喜びに満ちる」から派生したものと考えられるので、佐賀では実例の数が1件しかない。注意すべきは、こうした使役受身文は1）頻度の副詞と共起できる、2）同じ「させられる」の形式が繰り返される、3）若者用の話し言葉的表現が多いという三点であろう。なお僅かな二例だが、「喜びを感じさせられる」のような表現もなされる。

b）楽しみ：

⑦普段はジュエリークリエーターをしていて、「色」についてはいつも楽しまされ、悩まされています…（YA116件：佐賀0件）

⑧いつもコルコバードの音楽に癒され、励まされ、楽しまされています…（同上）

⑨もうこれほど、考えさせられ、怖がらされ、楽しまされ、感動させられたのは初めてです…（同上）

⑩とは言うものの、場内が暗くなってから明るくなるまで、ずっと楽しまされ…（同上）

⑪最初は土産物屋さんや、中華風の建物に目を楽しまされながらふらふらしていたが、だんだん日も暮れて…（同上）

⑫本提案のコンセプトを「アクティビティで街を彩る PLAZA GARDEN 03—」とし、活気に溢れ、うきうきさせられ…（YA1件：佐賀0件）

⑬一人で笑って（怖！）通常文もニヤついて。（キモ！）あんまり面白がらされ…（YA1件：佐賀0件）

上述のように実例⑦～⑩から分かるように、「楽しみ」の感情に関する使役受身文がいかに多いかが窺える。なお⑪では「目を楽しまされる」は前述の「悩まされる」と同様、「目を楽しませる／目を楽します」と対をなす「目を楽しむ」

から派生したものと考えてよかろう。もっとも「目を楽しむ」と「目を楽しませる／目を楽します」との実例の比率に関してはYAHOOでは151件：1420件：30件、佐賀では5件：10件：0件というように、いずれも「目を楽しませる」は一位、「目を楽しむ」は二位の実例を占めている。「うきうきさせられる」「面白がらされる」を除いて、使役受身文「楽しまされる」はほぼ「喜ばされる」と同じ特徴を備えていると言える。

c) 安心：

⑭先頭のリーダーが後ろの下級生達を気づかいながら歩いてくる姿は、とても頼もしく安心させられました…（YA248件：佐賀6件）

⑮アメリカ映画の単純明快さに馴らされた私には、少々疲れながらも何か安心させられた。…（同上）

⑯貴方がたは、太陽が著しく変更され、そして今首尾よくフォトンベルトに入ることが可能であるという事実によって一安心させられ…（YA2件：佐賀0件）

⑰そんなシリアスな状況での封ちゃんとまわりの人々の温かさにほっとさせられ…（YA186件：佐賀10件）

⑱だが一人の子にアンケートをとっていると、一人、また一人とどこからともなく出てきて興味を示す子供どもらしさにほっとさせられ…（同上）

「安心」の感情を代表する⑭と⑮のような「安心させられる」は多くの実例を有するのに対し、⑯の「一安心させられる」はわずか二例に過ぎないであることに注目されたい。「安心させられる」の類語である⑰と⑱のような「ほっとさせられる」も常用される。

d) 満足：

⑲このような状況で、広東語を学習している人たちは非常に低レベルの学習環境に満足させられ…（YA428件：佐賀10件）

⑳とりあえず目的を達成した我々は充実感に心を満たされ、今日の宿泊地の川湯温泉へレンタカーを借りて向かった…（YA66件：佐賀3件）

⑳' オミナスも同い年ぐらいの同性とそうした経験がないので、なんとなく嬉しいような、楽しいような、そんな感情に心が満ちていた…（YA112

件：佐賀 0 件）

㉑いずれにせよ、第一党でありながら理不尽にも、小沢工作で野党の地位に甘んじさせられた…（YA11 件：佐賀 0 件）

「満足」の感情を代表する⑲の「満足させられる」は多用される。意味的に⑳の「心を満たされる」は「心を満たせる／心を満たす」と対をなす⑳'「心が満ちる」から派生したものと考えられる。ちなみに YA では「心を満たせる」は 88 件、「心を満たす」は 4730 件に達している。㉑「甘んじさせられる」が後述の「甘える」から派生したものかどうかは疑問である。

e) 感動：

㉒いくつものシーンに本当に感動させられ、自分でも勇気付けられます…（YA902 件：佐賀 10 件）

㉓私の目で見、心で感じる箱根は、当然私だけのものです。静寂の一景に心を動かされ、残照の輝きの中に…（YA 2740 件：佐賀 49 件）

㉓'緑の木陰の向こうにぽっと光が当たっている。こんな風景に心が動くのはなぜだろう…（YA4600 件：佐賀 20 件）

㉔そしてブナの原生林や、厳冬期の氷雪の八丁池に心をときめかされ…（YA32 件：佐賀 0 件）

㉔'昔の彼とも似ている人なのですが、つきあっている間も、テレビの彼の方に心がときめいて…（YA 439 件：佐賀 5 件）

㉕…彼女が身につけているのであろう香りに、胸をときめかされた事はありませんか。（YA13 件：佐賀 1 件）

㉕'この方式が日本語のまま世界の論文やテキストに頻繁に登場するようになったときには、限りない未来を予感して胸がときめいた。（YA2586 件：佐賀 9 件）

㉖…満身創痍でぶつかり悔いは無いと思っています。それにもまして選手、団員の直向さに心を打たされ…（YA2 件：佐賀 0 件）

㉖'その時、バス代の 200 円をお年寄りにいただいた。辛いときだったので、人の優しさに心を打たれた。（YA6240 件：佐賀 59 件）

㉗…あたらしい生命を精一杯尊重する人間のしたたかさに胸を打たされる

ドラマが、時に、演出される…（YA5 件：佐賀 0 件）

㉗'…立ち見も出たほどの会場の人たちも、スライドを使った彼らの報告に胸を打たれた。（YA4870 件：佐賀 50 件）

「感動」の感情を代表する㉒の「感動させられる」は多用される。「心を満たされる」と同様、㉓の「心を動かされる」は「心を動かせる／心を動かす」と対をなす㉓'「心が動く」から派生したものと取れる。形式的に類似した㉔の「心をときめかされる」は実例数が少ないが、同じ解釈がなされよう。㉕の「胸をときめかされる」も同じ解釈に当てはまっている。注意すべきは形式的に「心／胸が動く／ときめく」に似た「心／胸が打つ」が形式的に不可能なので、㉖㉗のような「心／胸を打たされる」を派生させる余地はない。とすればこの種の表現は㉖' ㉗'の「心／胸を打たれる」の一種の誤用と考えていい。なおこのクラスに属する主な動詞は「落ち着かされる（YA10 件：佐賀 0 件）」、「エキサイトさせられる（YA2 件：佐賀 0 件）」、「感激させられる（YA57 件：佐賀 0 件）」、「感謝させられる（YA57 件：佐賀 1 件）」、「感心させられる（YA1350 件：佐賀 79 件）」、「感嘆させられる（YA45 件：佐賀 7 件）」、「感銘させられる（YA6 件：佐賀 0 件）」、「驚嘆させられる（YA46 件：佐賀 6 件）」、「興奮させられる（YA198 件：佐賀 2 件）」、「そわそわさせられる（YA5 件：佐賀 0 件）」、「陶酔させられる（YA6 件：佐賀 0 件）」、「慣れ親しまされる（YA14 件：佐賀 0 件）」、「慣れさせられる（YA20 件：佐賀 1 件）」、「馴染まされる（YA63 件：佐賀 1 件）」、「熱狂させられる（YA3 件：佐賀 1 件）」、「にこにこさせられる（YA2 件：佐賀 0 件）」、「微笑まされる（YA40 件：佐賀 0 件）」、「わくわくさせられる（YA61 件：佐賀 3 件）」、「笑わされる（YA1180 件：佐賀 7 件）」、「同情させられる（YA5 件：佐賀 3 件）」、「甘えさせられる（YA11 件：佐賀 0 件）」とあげられよう。

4．結語

本稿では大野・浜西（1985）の語彙分類体系表を参考に、「快」を表す感情を a)喜び、b)楽しみ、c)安心、d)満足、e)感動などの五項目に分類し、YA の実例を通して、使役受身文の形式と意味用法を考察した。

興味深いのは 1）形式的に自動詞と他動詞あるいは使役動詞との対をなす「悩

む・悩ませる／悩ます」が成立したときに、「悩まされる」は「悩ます」から派生した直接受身というよりも、「悩む」を原形とした使役受身と考えていい、2)「不快」の感情を表す「悩む・悩ませる／悩ます」と同様、「快」の感情を表す「喜ぶ・喜ばせる／喜ばす」、「楽しむ・楽しませる／楽します」、「動く・動かせる／動かす」のような同じ形式の使役受身文が多用されるという特徴である。

意味的に特に a)喜びの項目では「喜ばされる」「喜びに満たされる」、b)楽しみ項目では「楽しまされる」というように、いずれも「快」の感情を表す豊富な実例を有している。特に構文上の制限を理由に、例えば「悲しくて泣かされ、そのまま笑わされ、途切れず喜ばされ／？喜び」のようにいくつかの類似表現が一緒に並ぶとき、喜びや楽しみの感情にかかわりなく、むしろ使役受身文が好んで使われる。こうした繰り返しの使役受身文は若者の心情の機微をいきいきと表現するのに適しているかもしれない。もっとも「佐賀新聞記事データベース」ないし「新潮社文庫の 100 冊」には「喜ばされる」「楽しまされる」などのような表現は 1 件も出ていない。これは年齢層にかかわる文体の差によるだろう。

結論としては構文上の制限は勿論のこと、語用論的に何らの原因をきっかけに、「快と不快」の感情を問わずある強い情念ないし思考活動が引き起こされる場合に、使役受身文の表現が多用される。

参考文献（abc 順に）

・亀井孝・河野六郎・千野栄一編著（1996）『言語学大辞典第 6 巻【術語編】』三省堂

・森田良行（1995）『日本語の視点―ことばを創る日本人の発想―』創拓社

・仁田義雄（1992）「ヴォイス・アスペクト・テンス」玉村文郎編『日本語学を学ぶために』世界思想社

・大野晋・浜西正人（1985）『類語国語辞典』角川書店

・ 白川博之監修、庵功雄・高梨信志乃・中西久美子・山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』株式会社スリーエーネットワーク

日本語の主題文について

——その形成原理と情報構造を中心に——

広東外語外貿大学　　陳　訪澤

1．はじめに

本稿の目的は日本語の主題文の形成を統一的に扱う原理を明らかにし、それに基づいて主題文の情報構造を分析することである。主な論点は次のとおりである。

（一）　日本語には「～は」という主題を持つ主題文が多く見られ、例えば一項目主題文、二項目主題文、一項目分裂文、二項目分裂文などがある。これら主題文はすべて同じ原理によって形成されたものであると提案する。

（二）　いわゆる「ウナギ文」の形成も主題文形成の原理によるものであるということを論証する。

（三）　日本語の主題文に見られる六つの情報構造を分析する。

2．日本語の主題文のいろいろ

日本語の主題文はまず、どんな成分が主題になっているかという点から見て、大きく次のように分けられる。

（一）直接格成分が主題になっているもの

(01)　父はこの本を買ってくれた。（父が）

(02)　日本語の会話は鈴木先生が教える。（日本語の会話を）

（二）間接格成分が主題になっているもの

(03)　彼は書いた小説がよく売れる。（彼が書いた）

(04)　この薬は塗った後が楽だ。（この薬を塗った）

（三）連体修飾の「～の」が主題になっているもの

(05)　象は鼻が長い。（象の鼻が）

(06)　カキ料理は広島が本場だ。（カキ料理の本場だ）

（四）被修飾名詞が主題になっているもの

(07)　ねぎは生を食べる。（生のねぎを）

(08)　魚は鯛がいい。（いい魚だ）

（五）述語が主題になっているもの

(09)　それを決めるのは君の母親である。（君の母親がそれを決める）

(10)　ここに来るのは初めてだ。（初めてここに来る）

以上はすべて一項目主題文であるが、また、次のような二項目主題文もある。

（六）主題を二つ持つもの

(11)　象は鼻は長い。（象の鼻が長い）

(12)　かれは英語は分からない。（かれが英語が分からない）

一項目主題文のうち、（五）の「述語が主題になっているもの」は分裂文とも呼ばれるが、述部の要素が一項目しかなく、一項目分裂文である。さらに、次のような二項目分裂文もある。

（七）述部に「～が～」という二項目の要素を持つもの。

(13)　声をかけたのは、男のほうが先である。（男のほうが先に声をかけた）

(14)　どこへ行くのも、自転車が便利だ。（便利な自転車でどこへも行く）

一項目主題文の中で、述語になるはずの動詞が省略されていると考えられる次のような文もある。

（八）動詞が省略されたもので、いわゆる「ウナギ文」。

(15)　ぼくはうなぎだ。（ぼくはうなぎを注文する）

(16)　帰りは船だ。（帰りは船に乗る）

3．主題文の形成に関する従来の解釈とその問題点

3．1　従来の解釈

（一）「削除による形成」

野田（1994）では、主題文について「削除による形成」を提案している。

(17) a 父がこの本を買ってくれた
　　主題
　b この本は［父がこの本を買ってくれた］
　　削除
　c この本は［父が買ってくれた］

(18) a 広島がカキ料理の本場だ
　　主題
　b カキ料理は［広島がカキ料理の本場だ］
　　削除
　c カキ料理は［広島が本場だ］

(19) a 父がこの本を買ってくれた
　　主題
　b この本を買ってくれたのは［父がこの本を買ってくれた］
　　削除
　c この本を買ってくれたのは［父が］
　d この本を買ってくれたのは［父］だ

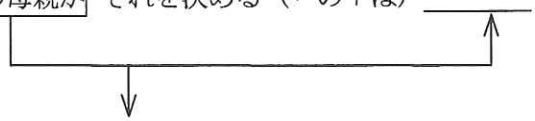
分裂文については、井上（1978:99-102）と渡部（1979）で早くも「削除による形成」を提案している。

(20) a きみの母親がそれを決める
　　主題
　b それを決める（のは）きみの母親がそれを決める（だ）
　　削除
　c それを決めるのはきみの母親だ。

（二）「後方移動による形成」

この解釈は分裂文の形成にのみ関するもので、Muraki（1974:41-59）と井上（1978:21-24）で「後方移動による形成」を提案している。

(21) a きみの母親が　それを決める（←の＋は）＿＿＿＿（＋だ）



　b それを決めるのはきみの母親だ

3．2　従来の解釈の問題点

二つの解釈はいずれも一項目主題文や一項目分裂文を対象にしたもので、二項目主題文や二項目分裂文については説明できない。

「削除による形成」の解釈は二項目主題文の二つの主題の違いを説明してくれないし、二項目分裂文における総記性の「が」の由来も説明できない。

(22) a 象の鼻が長い
　　主題
　b 象は鼻は［象の鼻が長い］
　　削除
　c 象は鼻は［長い］

(23) a 男のほうが先に声をかけた
　b 声をかけたのは［男のほうが先に声をかけた］
　c 声をかけたのは［男のほうが先に］
　d 声をかけたのは［男のほうが先］である

「後方移動による形成」の解釈は一項目分裂文しか対象としないので、二項目分裂文の形成については説明できない。

(24) a 今日 初めて駅から歩いて行く（←の＋は）＿＿＿＿（＋だ）

b 初めて 駅から歩いて行くのは今日だ（←の＋は）＿＿＿＿（＋だ）

c *駅から歩いて行くのが今日なのは初めてだ

4．主題文の形成についての新しい提案

4．1　「前方移動による形成」

主題文形成の基本的な原理（つまり、主題化）として、主題に指定された文の要素が文の前部に移動し、その後に「は」という主題のマーカーがつけられるという操作を提案する。主題になる要素が用言などの活用語である場合、「は」の前に形式名詞「の」の挿入が必要である。

(一) 一項目主題文の形成

「日本語の会話は鈴木先生が教える」という文の形成

(25) a ＿＿＿＿（＋は）鈴木先生が 日本語の会話を 教える

b 日本語の会話は鈴木先生が教える

「カキ料理は広島が本場だ」という文の形成

(26) a ＿＿＿＿（＋は）広島が カキ料理の 本場だ

b カキ料理は広島が本場だ

「魚は鯛がいい」という文の形成

(27) a _____ (＋は) 鯛がいい 魚 だ

b 魚は鯛がいい

「ここに来るのは初めてだ」という文の形成

(28) a _____ (←の＋は) 初めて ここに来る (＋だ)

b ここに来るのは初めてだ

(二) 二項目主題文の形成

「象は鼻は長い」という文の形成

(29) a _____ (＋は) 象の 鼻が長い

b 象は_____ (＋は) 鼻が 長い

c 象は鼻は長い

(三) 二項目分裂文の形成

「声をかけたのは、男のほうが先である」という文の形成

(30) a _____ (←の＋は) 男のほうが 先に声をかけた (＋だ)

b _____ (←の＋は) 先に声をかけたのは、男のほうである

c 声をかけたのは、先なのは 男のほうである

d 声をかけたのは、男のほうが先である

4．2　新しい提案の適用

主に二項目主題文と二項目分裂文について見てみよう。二項目主題文の場合、「前方移動による形成」の主題化解釈は二つの主題の違いを構造的に捉えることができる。(例(29)参照)

(31) a 象の 鼻が長い→

b 象は 鼻が 長い→ (述部からの主題化)

c 象は鼻は長い。(*鼻は象は長い)

(32) a 象の鼻が 長い→
b 象の 鼻は長い→（主題の中からの主題化）
c 象は鼻は長い。（*鼻は象は長い）

二項目分裂文の場合、述部の「が」に総記性があるため、「指定文」の原理に基づいて「声をかけたのは男のほうが先である」という文を次のように変換することができる。

(33) a 声をかけたのは、男のほうが先である→
b 声をかけたのは、先なのは、男のほうである

(33b) は二項目主題文なので、次のように変換していくと、一項目主題文（一項目分裂文）、普通の文（非分裂文）へと還元される。

(33) c 先に声をかけたのは、男のほうである→
d 男のほうが先に声をかけた

逆に考えると、二項目分裂文次のように形成される。**(例(30)参照)**

(34) a 男のほうが 先に声をかけた →
b 先に 声をかけた のは、男のほうである→（一項目分裂文）
c 声をかけたのは、先なのは、男のほうである →
d 声をかけたのは、男のほうが先である。（二項目分裂文）

この形成のプロセスで、述部の総記性の「が」の説明がつく。

5．ウナギ文の形成について

5．1　ウナギ文の形成に関する従来の対立

（一）「述語代用説」

奥津（1981）では、「ぼくが食べるのはうなぎだ」から下線の部分が消されるのだから、消去される部分が極めてまとまりの悪い要素であるとして「分裂文説」を批判し、次のような「述語代用説」を主張している。

(35) a ぼくは　うなぎを　食べたーい　→
b ぼくは　うなぎ　　d －a

（二）「分裂文説」

一方、北原（1981:292）では、分裂文からウナギ文への形成においていくつかの段階を設定して、「分裂文説」の妥当性を主張している。

(36) a ぼくが　うなぎが　食べたい　→
b ぼくが食べたいのは　うなぎだ　→
c ぼくののは　うなぎだ　→
d ぼくのは　うなぎだ　→
e ぼくは　うなぎだ

（三）「第二主題省略説」

坂原（1990）では、「私が注文したのはうなぎだ」のような文を次のように変換していくと、ウナギ文が形成されると考えている。

(37) a 私が　注文したのは、うなぎだ。→
b 私は、注文したのは、うなぎだ。→（第二主題の省略）
c 私は、うなぎだ。

5．2　本稿の提案と説得性

「ぼくはうなぎだ」という文の形成は次のとおりである。

(38) a ＿＿＿＿ (←の＋は) うなぎを ぼくが注文する (＋だ)

b ＿＿＿＿ (←の＋は) ぼくが 注文する のはうなぎだ

c 注文するのは ぼくはうなぎだ (第一主題の省略)

d ぼくはうなぎだ。

つまり、「前方移動による形成」によって(38c)の二項目主題文を形成し、「第一主題の省略」によって(38d)のウナギ文が形成されるというわけである。

説得性一：消去される部分がまとまりの悪い要素であるという指摘はもう当たらない。第一主題の省略は極めて自然な操作である。

説得性二：主題文において、対比を表す第二主題より、話題を表す第一主題のほうが省略しやすい。

その他、ウナギ文において「だ」の前に来る要素は必ずしも焦点ではないという指摘、ウナギ文は三項目以上の要素を取ることも可能であるという指摘なども、本稿の提案によって説明できる。

6．主題文の情報構造

6．1　主題文の情報構造に関係する従来の見解

三上章（1959:104）では、文における主題の有無から有題文と無題文に分け、有題文を更に「顕題」、「陰題」、「略題」と分けている。

(39) a 問　偏理ハ、ドウシタ？
　　b ――到着シマシタ。　(略題)

(40)　――偏理ハ、到着シマシタ。　(顕題)

(41) a 問　ダレガ到着シタ（ンダ）？
　　b ――偏理ガ到着シタンデス。　(陰題)

(42) a 問　何カにゅうすハナイカ？
　　b ――偏理ガ到着シマシタ。　(無題)

顕題は「既知＋未知」、陰題は「未知＋既知」、無題は「未知＋未知」という情報構造である。

大野（1978:24）では、情報の組合せから文を「既知＋未知」、「既知＋既知」、「未知＋既知」、「未知＋未知」という四つの類型に区別している。

(43)　あなたは誰ですか。(既知＋未知)

(44)　どうせ日本人は日本人だ。(既知＋既知)

(45)　何が丸いか。地球が丸い。(未知＋既知)

(46)　花が咲いている。(未知＋未知)

6．2　形成原理から見た主題文の情報構造

以上の一項目主題文、二項目主題文、一項目分裂文、二項目分裂文などの形成から考えれば、

熊本千明（1989）指定と同定－「…のが…だ」の解釈をめぐってー，『英語学の視点』九州大学出版会
坂原　茂（1990）役割、ガ・ハ、ウナギ文，『認知科学の発展』（第3巻）講談社
陳　訪澤（1986）主題在成分関係中的位置，『科技日語』（総8号）湖南大学
陳　訪澤（1997）日本語の分裂文とウナギ文の形成について，『世界の日本語教育』（第7号）国際交流基金
陳　訪澤（2000）『現代日語主題句研究』大連理工大学出版社
陳　訪澤（2002）『日語句法研究』上海外語教育出版社
西山佑司（1985）措定文、指定文、同定文の区別をめぐって，『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』(第17号)慶応義塾大学
西山佑司（1990）コピュラ文における名詞句の解釈をめぐって，『文法と意味の間－国広哲弥教授還暦退官記念論文集』くろしお出版
野田尚史（1994）日本語とスペイン語の主題化，『言語研究』（105号）日本言語学会
三上　章（1959）『続・現代語法序説』（1972復刊）くろしお出版
渡部真一郎（1979）日本語の分裂文について，『英語と日本語と－林栄一教授還暦記念論文集』くろしお出版
Muraki, Masatake（1974）『Presupposition and Thematization』Kaitakusha
Nakau, Minoru（1973）『Sentential Complementation in Japanese』Kaitakusha

シンポジウム

《語用論からの提言》

「語用論から何が提言できるか」

高原　脩
関西外国語大学

言葉の研究は、人間の普遍的・動態的なコミュニケーションを可能にする原理を追求する経験科学である。今日、言葉の研究においては、生成文法が収束の傾向を一段と強めつつある反面、広範な学際的研究領域との連携により多様な言語研究のパラダイムが登場し、拡散の傾向がますます強まっている。そのような状況にあって、今なされるべき大切なことは、主要な言語研究のアプローチの current state of affairs を比較することを通じて、その発展段階を見極めることである（神尾１９９９）。すなわち、それら言語研究の動向・趨勢を眺め、従来の言語研究に見られる回帰的な発展や各アプローチ間のインターフェイスを認識することによって、今後の言語研究の展望を予測し、更なる進展を期待することができる。原理体系の言語理論として確立しつつある生成文法理論を除き、言語研究の様々なアプローチが近年著しい進展を見せている。たとえば、現在の言語研究の領域において共通に見られる「認知」の解明を目指したものなどはその典型といえよう。

本シンポジウムでは、その中で相互に作用しつつも興味深い独自の理論を構築し、多くの成果を挙げている認知言語学・概念意味論・関連性理論・新グライス学派の諸研究および意味論・語用論研究の多様な言語事象を取り上げる。まず、各アプローチの特性・類似、相違点について眺め、そこに見られる問題点を吟味し、語用論的

視点や知見がそれぞれのアプローチにどのような有意義な示唆を与え、貢献することができるのかを検討し、いくつかの提言を試みる。

最初に、小泉講師からは、概念と表現の内的表示を連結する特別な認知体系である言語の意味構造を概念と空間に区別するジャッケンドフの考え方についてお話をいただき、次いで人間のもつ基本的かつ認知能力にかかわる要因に基づき言語を分析するラネカーによる認知言語学に見られる認知の伝達を吟味し、意味論と認知言語学をめぐる問題について、批判的見解を述べていただく。

次に、児玉講師にはコミュニケーションと発話解釈に関わる人間の精神活動の原理を解明する認知理論である関連性理論とコミュニケーションにおいて好まれる解釈と好まれない解釈があることに注目し、通例想定される意味（presumptive meaning）を中心に一般的会話上の推意（GCI）の必要性を主張するレビンソンなどの新グライス学派のアプローチを比べ、そこに見られる問題点を提起し、統語論・意味論・語用論間の境界についての見解を披露していただく。

そして、澤田講師には仮定法の法助動詞 could の意味解釈に焦点を当てつつ、「認識的／根源的」という意味体系に関して、ラネカーやスイーツァーによる認知言語学の手法に準拠した多義的アプローチと関連性理論に基づくパパフラゴウによる単義的アプローチを比較し、前者のアプローチの妥当性を検証していただく。

最後に、まず、東森コメンテイターから各講師の発表についてコメントしていただき、次に、参加者を交えたディスカッションを行う。本シンポジウムは、「認知」をめぐる諸問題を扱う有力な言語研究のアプローチを比較検討し、語用論研究のあり方を究明するものである。

1. ジャッケンドフの概念意味論とラネカーの認知文法の伝達に関して

小泉　保

(1) ジャッケンドフの概念意味論　(*Semantics and Cognition*. 1983)

1) 現実世界と投射世界

(a) The real world: the source of environment input (p. 28)

(b) The projected world: the world as experienced

2) 存在論的カテゴリー (Seven ontological categories) (p. 53)

a) *What* did you buy?　A fish. [THING]

b) *Where* is my coat?　In the bathtub. [PLACE]

c) *Where* did you go?　Into the bathtub. [DIRECTION]

d) *What did you do?*　Go to the sore. [ACTION]

e) *What happened* next?　Bill fell out the window. [EVENT]

f) *How* did you cook the eggs?　Slowly. [MANNER]

g) *How* long was the fish?　Twelve feet. [AMOUNT]

3) 通路　The mouse ran into the room.

$[_{Path}$ TO $([_{Place}$ IN $([_{Thing}$ ROOM$])])]$ (p. 175)

4) 使役関数 (The cause function)

$[_{Event}$ CAUSE $([_{Thing}$ X$], [_{Event}$ y$])]$

Beth threw the ball out the window.

$[_{Enent}$ CAUSE $([_{thing}$ BETH$], [_{Event}$ GO $([_{Thing}$ BALL$], [_{Path}$ OUT WINDOW$])])]$

5) 空間的意味分野 (The spatial semantic field)

6) 時間分野 (The temporal field)

We moved the meeting from Tuesday to Thursday.

$[_{Event}$ CAUSE $([_{Thing}$ WE$], [_{Event}$ GO $_{Temp}([_{Event}$ MEETING$],$

$[_{Path}$ FROM $_{Temp}([_{Time}$ TUESDAY$]$, TO $_{Temp}$ $([_{Time}$ THURSDAY$])])])]$

7) 所有分野 (The possessive field)

a) Beth has the doll.

$[_{State}$ BE $_{Poss}$ ([DOLL], $[_{Place}$ AT $_{Poss}$ ([BETH])])]

b) Beth received the doll.

$[_{Event}$ GO $_{Poss}$ ([DOLL], $[_{Path}$ TO $_{Poss}$ ([BETH])])]

c) Beth lost the doll.

$[_{Event}$ GO $_{Poss}$ ([DOLL], $[_{Path}$ FROM $_{Poss}$ ([BETH])])]

d) Amy gave the doll to Beth.

[CAUSE ([AMY], [GO $_{Poss}$ ([DOLL], $[_{Path}$ FROM $_{Poss}$ ([AMY], TO $_{Poss}$ [BETH])])])]

8) 認定分野 (The identificational field)

Elise became into a mother.

[$_{Event}$ GO $_{Ident}$ ([$_{Token}$ ELISE], [$_{Path}$ TO $_{Idnet}$ ([$_{Type}$ MOTHER])])]

9) 状況分野 (The circumstnatial field)

a) Ludwig started composing quartets.

[GO $_{Circ}$ ([LUDWIG]i ,[$_{Path}$ TO $_{Circ}$ ([i COMPOSE QUARTETS])])]

= COMPOSE(LUDWIG, QUARTETS)

b) Ludwig stopped composing quartets.

[GO $_{Circ}$ ([LUDWIG]i ,[$_{Path}$ FROM $_{Circ}$ ([i COMPOSE QUARTETS])])]

c) Ludwig is composing quartets.

[$_{State}$ BE $_{Circ}$ ([LUDWIG]i ,[$_{Place}$ AT $_{Circ}$[i COMPOSE QUARTETS]))])]

d) Sue prevented Jim from singing.

[CAUSE ([SUE], [STAY $_{Circ}$ ([JIM] i, [NOT AT $_{Circ}$ ([i SING])])])]

NOt AT = FROM

10) 伝達の意味構造

I give my message to you.

[CAUSE ([I],[GO $_{Poss}$ [MESSAGE], [$_{Path}$ FROM $_{Poss}$ ([I] TO $_{Poss}$ [YOU])])])]

My message: my information, my request, my promise, my advice .....

Cf. J.R.Ross 'On Declarative Sentences'

(2) ラネカーの認知文法 (*Foundation of Cognitive Grammar. Vol. 1* 1987)

1) Fig.a indicates that the integration of the two predications depends on on a correspondence between the landmark of [UNDER] and the profile of [THE-TABLE]. p.279.

(a) Under the table

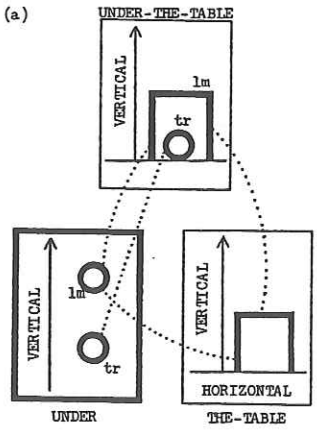


Fig. 8.1

2) Fig. 8.5 diagrams the integration of its composite structure [UNDER-THE-TABLE] with [FOOTBALL].

That football under the table.

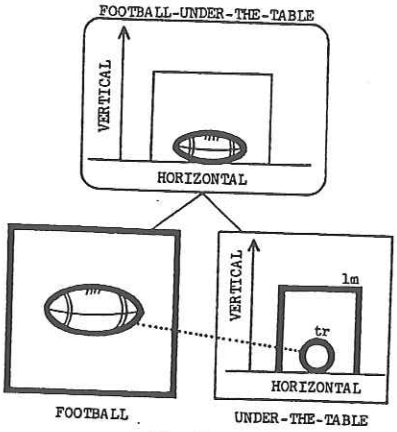


Fig. 8.5

That のような指示直示を規定するためには、垂直と水平の次元以外に奥行の次元を設定する必要がある。(Cf. Deixis 126-7)

3) There is a ball under the table.

In Fig 8.12, BE is analyzed as a maximally schematic imperfective process predication. p. 323

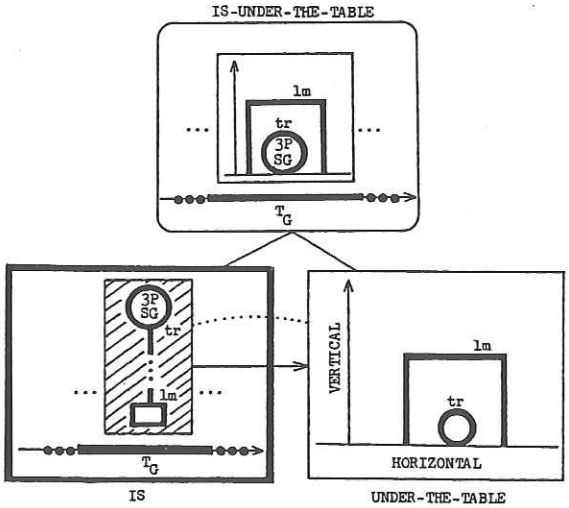


Fig. 8.12

聞き手について、聞き手が話し手の視野にあれば認知は容易であるが、聞き手と話し手と並んでいるとき、さらに聞き手が話し手から離れているとき、どのように聞き手を認知するか分析しておく必要がある。

(3) レビンソンの一般的会話の推意 (*Presumptive Meaning. The Theory of Generalized Conversational Implicature.* 2000)

1) Heuristic 1: What isn't said, isn't. 他に何かテーブルの上にあるか不明。

2) Heuristic 2: What is simply described is stereotypically examplified.
テーブルの大きさや形、それにボールの種類は聞き手が自分の経験から憶測する。

3) Heuristic 3:What's said in an abnormal way, isn't normal; or marked message indicates marked situation.
2) では、とくにフットボールであることが伝達されている。

話者が認知した事物を伝達する場合、聞き手は GCI によって聞き手なりに類似した事物を想定するが、両者の間に完全な一致はありえない。

参考文献

Jackendoff, R. (1983) *Semantics and Cognition.* Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.

" (1990) *Semantic Strucure.* Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.

Langacker, R. W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar. Vol. 1. Theoretical Prerequisites.* Stanford, California: Stanford University Press.

Levinson, S. C, (1983) *Pragmatics.* Cambridge: Cambridge University Press.

" (2000) *Presumptive Meanings. The Theory of Generalized Conversational Implicature.* Cambridge, Massachusetts: The MIT Press.

GCIをめぐって
——新Grice派と関連性理論の比較——

児玉徳美
立命館大學

I 目的

1. コードとしての一般的会話上の推意(Generalized Conversational Implicature=GCI)の位置づけとその必要性
2. 新Grice派と関連性理論の比較

II 分析の枠組み

A 意味論と語用論

(1) Gazdar(1979)

a. Pragmatics= MEANING — TRUTH CONDITIONS (Semantics)

b. The output of semantics is the input of pragmatics.

(2) a. Grice(1975,1989)：(1a,b)にほぼ同じ。

b. Levinson(2000:172)：(1b)を否定。

(3) Sperber-Wilson(1995:258)：(1a)を否定。

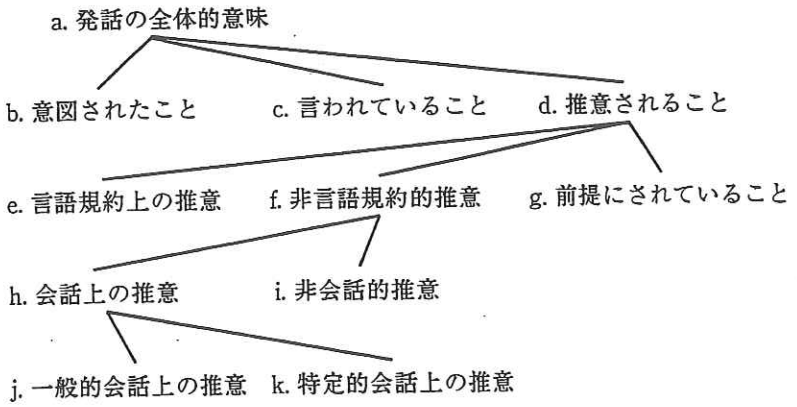
They [The pragmatic processes] act on the output of linguistic semantics, enriching incomplete logical forms into fully prepositional forms which are in turn the bearers of truth conditions.

B 言われていること(what is said)・表意(explicature)・推意(implicature)

(1)a. what is said = what is directly or literally conveyed

b. what is implicated = what is suggested, hinted or implied ---Hawley(2002)

(2)



---Grice(1989)

(3) 多様な解釈

<table>
<tr><th>Author</th><th>Semantic Representation</th><th>Deictic & reference resolution</th><th>Minimal proposition</th><th>Enriched proposition</th><th>Additional propositions</th></tr>
<tr><td>Grice 1989</td><td colspan="3">"What is said"</td><td colspan="2">"Implicature"</td></tr>
<tr><td>Sperber & Wilson 1986</td><td>"Semantics"</td><td colspan="3">"Explicature"</td><td>"Implicature"</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Carston 1988</td><td>"Semantics"</td><td colspan="3">"Explicature"</td><td rowspan="2">"Implicature"</td></tr>
<tr><td colspan="4">"What is said"</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Recanati 1989</td><td colspan="5">"What is said"</td></tr>
<tr><td>"Sentence meaning"</td><td colspan="4">"Explicature"</td></tr>
<tr><td rowspan="2">Levinson 1988</td><td colspan="3">"What is said"</td><td colspan="2"></td></tr>
<tr><td>"The coded"</td><td colspan="4">"Implicature"</td></tr>
<tr><td>Bach 1994</td><td colspan="2">"What is said"</td><td colspan="2">"Impliciture"</td><td>"Implicature"</td></tr>
</table>

---Levinson(2000:195)

(4)a. It's cold.

b. It will be cold tonight.

c.Can't you close the window?

(5)富化(enrichment)

a. He handed her the scalpel. [A SECOND OR TWO LATER] She made the incision [WITH THAT SCALPEL].

b. The car is too expensive [FOR ME TO BUY].

c. I have had lunch [TODAY]. ---Sequeriros(2002)

(6) What is implicated is what it is required that one assume a speaker to think in order to preserve the assumption that he is observing the Cooperative Principle (and perhaps some conversational maxims as well). ---Grice(1989:86)

(7) An implicature is a contextual assumption or implication which a speaker, intending her utterance to be manifestly relevant, manifestly intended to make manifest to the hearer. We will distinguish two kinds of implicatures: *implicated premises* and *implicated conclusions*....All implicatures, we claim, fall into one or the other of these egories. ---Sperber-Wilson(1986:194f)

(8)a. Peter: Would you drive a Mercedes?

Mary: I wouldn't drive ANY expensive car.

b. A Mercedes is an expensive car.

c. Mary wouldn't drive a Mercedes.

---Sperber-Wilson(1986:194)

C コードモデルか推論モデルか

(1)a. 文・発話[意味論・語用論]ともコードなし。

b. 文にコードあり、発話にコードなし。

c. 文・発話にコードあり。

(2)a. John likes *flying kites.* <kites which are flying / to fly kites

b. A1: She always cleans the refrigerator very well.

A2: Can I have milk for my coffee?

B: There's milk in the refrigerator.

<that should have been cleaned up. / that would be suitable for putting in your coffee. ---Berg(2002)

c. I'm 67 years old today.

(3) The two approaches [i.e. the code model and the inferential account of communication] starts from radically different assumptions about the nature of communication itself. ---Wilson-Sperber(1986)

(4) コード→会話の強調の原則＋４つの公理、GCI

(5) 関連性

程度条件１：想定は文脈中での文脈効果が大きいほど関連性が高い。

程度条件２：想定は文脈中でその処理に要する労力が小さいほど関連性が高い。

---Sperber-Wilson(1986:125)

D 分析対象とする意味：３レベルの意味か２レベルの意味か

(1)a. 記号がもつ語彙文法上の意味(encoded meaning)

b. 発話トークンとしての意味(PCI)

c. 発話タイプとしての意味(GCI) ---Levinson(1995)

(2) This third layer is a level of systematic pragmatic inference based *not* on direct computations about how language is normally used. These expectations give rise to presumptions, default inferences, about both content and force; and it is at this level (if not all) that we can sensibly talk about speech acts, ...and of special concern to us, generalized conversational implicatures. ---Levinson(2000:22f)

(3)a. The noise of the gun frightened off the birds.

b. The birds flew away. <デフォルト推論：If x is a bird, x can/will fly.

c. The birds swam away. In fact, they were swans.

d.The birds stumbled away. In fact, their wings were broken. ---Levinson(2000:45)

(4) Strawson(1950)の３値論理か Russell(1905)の２値論理か

a. The king of France is bald.

b. There is a king of France./There is only one king./This individual is bald.

E 具体的な分析例：GCI か富化か

(1)a. Q 推意（Q＋＞）＝量の公理(1)[必要なだけの情報を与えよ]と関連：言われていないことはわからない→尺度をもつ表現に適用され、下限を断定し意味の拡大を含めて上限の推意をうながす。

b.I 推意（または R 推意）（I＋＞）＝量の公理(2)[必要以上の情報を与えるな]・関係の公理（・様態の公理）と関連：簡単に言われていることはステレオタイプを通して具体化される→意味の特殊化に適用され、上限を断定し具体的な解釈を進めるため下限の推意をうながす。

c.M 推意（M＋＞）＝様態の公理と関連：普通でない形で表現されていることは普通でない。 ---Levinson(1987, 2000), Horn(1984)

d. Ziph's principle of least effort

If there are an *m* number of different distinctive meanings to be verbalized, there will be (1) a *speaker's economy* in possessing a vocabulary of one word which will refer to all the *m* distinctive meanings; and there will also be (2) an opposing *auditor's economy* in possessing a vocabulary of *m* different words with *one* distinctive meaning for each word. ---Ziph(1949:21)

(2) Q 推意

a. ＜A, B＞の尺度において A>B という尺度が想定される場合、もし B ならば A でない（～A）。

b. ＜４，３＞, ＜all, some＞, ＜hot, warm＞, ＜ecstatic, happy＞

(3)a. John ate three carrots.

b. Asserts: John ate at least three carrots.

c. Q＋＞John ate at most three carrots.

d. He ate three carrots---in fact he ate four/ *none.

e. He ate three carrots, if not four/ *two.

(4)a. This soup is warm---in fact hot/ *tepid.

b. I'm happy---indeed, I'm ecstatic/ *unhappy.

c. It's possible if not certain. vs *It's certain if not possible.

(5)a. Can you pass me the salt?

I＋＞ I ask you to pass me the salt.

b. John turned the key and the engine started.

I＋＞ John turned the key and then the engine started.

c. John unpacked the picnic. The beer was warm.

I＋＞ The beer was part of the picnic.

d. Sue walked into the room. The chandelier was magnificent. [I＋＞The room had a chandelier.] ?It was in the cupboard.---Horn(1984),Levinson(2000)

(6)a. It's possible the plane will be late.

I＋＞ 'likely to stereotypical probability *n*'

b. It's not impossible that the plane will be late.

M+> 'rather less likely than *n*'

(7)a. I met a woman at my office.

Q+>She wasn't the speaker's wife [my mother, sister, etc.].

b. I met a woman at my office, but she was my wife.

c. I went into a house./ I slept in a car yesterday./ Mort and David took a shower (separate showers). ---Horn(1984)

(8)a. I broke a finger yesterday.

I+>The finger was the speaker's.

b. I broke a finger yesterday, but it wasn't one of mine.

c. I lost a book yesterday./ I went out with a camera./ Mort and David bought a piano (together). ---Horn(1984)

(9) 富化（Carston(Forthcoming), 武内 2002 参照）

a. あいまい性の除去(disambiguation)＝文脈により特定化される概念：C の(2a)

b. 意味充足(saturation)＝文脈により指示関係の付与を施したり、省略されている語を復元：C の(2b,c)

c. 自由富化(free enrichment)＝文脈の指図がなく付加可能な概念：B の(5a,c)

d. アドホック概念構築(ad hoc concept construction)＝文脈によりアドホックに決まる概念：B の(5b)

F （不）適格性の判断は可能か否か

(1) Q 推意・I 推意一種のコード→E(2)-(5)の（不）適格性や E(7b)(8b)の取り消し可能性の説明可能

(2) 富化は関連性を基礎にしているが、関連性・文脈効果・処理労力は本来程度の問題→測定のコードではなく（不）適格性の説明不可能---山本(2002:42f), 児玉(2002a:160)

(3) A: Won't you come to my birthday party tonight?

B1: No, I won't.

B2: I have an examination tomorrow.

(4) Peter: Where does Gérard live?

Mary: Somewhere in the South of France.

(5)a. Q+>Mary does not know where in the South of France Gérard lives.

b. Mary is reluctant to say exactly where Gérard lives.

---Sperber-Wilson(1995:273f)

G 発話の推論過程：(演繹法・アブダクション・帰納法の)複線型か(演繹法の)単線型か

(1)a. 日常生活での推論過程

トタン屋根がパタパタと音を立てており、太郎は雨にちがいないと思った。実は次郎が棒で屋根をたたいていた。

b. 演繹法による推論→B の(8)

(2) 好まれる解釈やデフォルト解釈は複線型をとる GCI を仮定してはじめて説明可能→D の(3)(4)

(3) B の(8b,c)に類する文脈含意(contextual implication)

a. A Rolls Royce is an expensive car.

b. A Cadillac is an expensive car.

c. Mary wouldn't drive a Rolls Royce.

d. Mary wouldn't drive a Cadillac.

e. People who refuse to drive expensive cars disapprove displays of wealth.

f. Mary disapproves of displays of wealth. ---Sperber-Wilson(1986:197)

III 提言

1 コードの必要性

(1)a.*My grandmother wrote me a letter two days ago and six men can fit in the back of a Ford. ---Lakoff(1971)

b. We've been wondering how many people can get into the back seat of a Ford and my grandmother decided to try the experiment. She tried it two days ago and *she wrote me a letter yesterday and six men can fit in the back seat of a Ford.* ---Kempson(1975:58f), 児玉(1998:81)

(2)a.*I hope *the eighth of May.*

b. When is she coming?---I hope she is coming the eighth of May. ---Napoli(1996:300)

(3)a. (1a)(2a)は不適格性の通例の判断。(1b)(2b)は例外的・周辺的な文脈での意味。(a)と(b)は区別する必要あり。

b. (a)(b)を同じレベルで認めることは無標構造を対象とするコードを否定することになる。

(4)a. 発話にコードが働いていないとすれば、つまり PCI のみで解釈されるならば、言語表現を律するものは文（発話でなく）を対象とする文法だけとなる。これはことばによる伝達が齟齬なく行われている現実を説明できない。さらには

b. 発話の（不）適格性や取り消し可能性、あるいは好まれる解釈やデフォルト推論の判断に多くの一致があることを説明できない。

c.それを説明するためには推論過程で働く多様な要素の階層化や規則化を進める必要がある。→F、G(2)

(5) GCI に限らずコードをどのように設定するかが言語分析・伝達分析の課題。その際(1b)(2b)を考慮するにしても、周辺的・臨時的用法と一般的用法を区別すべき。

2 原則・規則のあり方：単純化や還元化への疑問

(1) 一貫性(coherence)を説明する原則

a. Blakemore(2001)は関連性という１つの原則

b. Sanders et al(1993)やMann-Thompson(1988)は４から15の原則

(2) Ｑ推意とＩ推意の範囲

a. John realized that the accountant had made a mistake.

Entails: The accountant had made a mistake.

b. John thought that the accountant had made a mistake.

Q+ >The accountant had made a mistake or he may not have.

○Levinson(2000:111)は叙述性（補文を含意するか否か）の認定にもＱ推意を拡大

(3) 認知原則との関連（児玉2002b参照）

a. E(7)<基本範疇優先の原則

a cow by the tree/ *?an animal by the tree/ *? a Holstein by the tree

b. E(8)<特質継承の原則

John enjoyed the book.

ジョン（人）は本を読んで楽しんだ。／ジョン（山羊）は本を食べて楽しんだ。

3 統語論中心から意味中心へ、文から談話の分析へ：意味や推論過程での未解決・未開発の領域は多様→前提と推移の関係、伝達に必要な情報量、一貫性、デフォルト推論や橋渡し推論の範囲など

(1)a.*?A house was built.

b.*?The book was read.

c.*?Napoleon was born.

(2)a. A house was built last year.

b. The book was read by many [last year].

c. Napoleon was born in 1769. ---Goldberg-Ackerman(2001), 児玉(2002a:151)

(3) 「発展途上」の意味分析→言語分析の未発達。統語論・意味論・語用論の境界は未解決の意味・推論過程を解明した段階で改めて設定。

引用文献

Bach, K. 1994. 'Conversational implicature.' *Mind and Language* 9:124-62.

Berg, J. 2002. 'Is semantics still possible?' *J. of Pragmatics* 34:349-59.

Blakemore, D. 2001. 'Discourse and relevance theory.' In Schiffrin et al (eds.) *The Handbook of Discourse Analysis*, 100-18. Blackwell.

Carston, R. 1988. 'Implicature, explicature, and truth-theoretic semantics.' In R.Kempson (ed.) *Mental Representations: The Interface between Language and Reality*, 155-81. Cambridge University Press.

-----. Forthcoming. 'Relevance theory and the saying/ implicating distinction.' In L. Horn and G.Ward (eds.) *Handbook of Pragmatics*. Blackwell.

Gazdar, G. 1979. *Pragmatics: Implicature, Presupposition, and Logical Form*. Academic Press.

Goldberg, A.E. and F. Ackerman. 2001. 'The pragmatics of obligatory adjuncts.' *Language* 77:798-814.

Grice, H.P. 1975. 'Logic and conversation.' In P.Cole and L.I.Morgan (eds.) *Syntax and Semantics Vol 3: Speech Act*, 41-58. Academic Press.

-----. 1989. *Studies of the Way of Words*. Harvard University Press.

Hawley, P. 2002. 'What is said.' *J. of Pragmatics* 34:969-91.

Horn, L.R. 1984. 'Toward a new taxonomy for pragmatic inference: q-based and r-based implicature.' In D.Schiffrin (ed.) *Meaning, Form, and Use in Context: Linguistic Application*, 11-42. Georgetown University Press.

Kempson, R.N. 1975. *Presupposition and the Delimitation of Semantics*. Cambridge University Press.

児玉徳美. 1998. 『言語理論と言語論——ことばに埋め込まれているもの』くろしお出版.

-----. 2002a. 『意味論の対象と方法』くろしお出版.

-----. 2002b. 「前提・推意の取り消し可能性について」『立命館言語文化研究』14 巻 3 号.

Lakoff, R. 1971. 'If's, and's, and but's about conjunction.' In C.J.Fillmore and D.T. Langendoen (eds.) *Studies in Linguistic Semantics*, 115-50. Holt, Rinehart & Winston.

Levinson, S.C. 1983. *Pragmatics*. Cambridge University Press.

-----. 1987. 'Minimalization and conversational inference.' In J.Verschueren and M. Bertuccelli-Papi (eds.) *The Pragmatic Perspective*, 61-129. John Benjamins.

-----. 1988. 'Generalized conversational implicature and the semantics/pragmatics inference.' Mimeo, Standford University.

-----. 1995. 'Three levels of meaning.' In F.Palmer (ed.) *Grammar and Meaning*, 90-115. Cambridge University Press.

-----. 2000. *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. MIT Press.

Mann, W.C. and S. Thompson. 1988. 'Rhetorical structure theory : toward a functional theory of text organization.' *Text* 8.3: 243-81.

Napoli, D.J. 1996. *Linguistics*. Oxford University Press.

Recanati, F. 1989. 'The pragmatics of what is said.' *Mind and Language* 4:295-329.

Russell, B. 1905. 'On denoting.' *Mind* 14:479-93. Also in Zabeeh et al(1974), 141-58.

Sanders,T., W.Spooren, and L.Noordman. 1993. 'Toward a taxonomy of coherence relations.' *Discourse Processes* 15.1: 1-36.

Sequeiros, X.R. 2002. 'Interlingual pragmatic enrichment in translation.' *J. of Pragmatics* 34:1069-89.

Sperber, D. and D.Wilson. 1986, 1995(2nd ed). *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.

Strawson, P.F. 1950. 'On referring.' Also in Zabeeh et al (1974), 320-44.

武内道子. 2002. 「言語形式の明示性と表意」『英語青年』146.4:240-1.

Wilson,D. and D.Sperber. 1986. 'An outline of relevance theory.' *Encontro de Linguistas* (University of Minho). Also in T.Konishi and K.Sugayama (eds.)(1992) *Current Approach to English Linguistics* 120-50. 英宝社.

山本英一. 2002. 『「順序づけ」と「なぞり」の意味論・語用論』関西大學出版部.

Zabeeh,F., E.D.Klenke, and A.Jacobson (eds.). 1974. *Readings in Semantics*. University of Illinois Press.

Ziph, G.K. 1949. *Human Behavior and the Principle of Last Effort: An Introduction to Human Ecology*. Hafner Publishing Company.

モダリティをめぐって
――多義性か単義性か――

澤田治美
関西外国語大学

0．はじめに

本稿では、次の三つの問題を考察してみたい。

(1)英語法助動詞の「認識的／根源的」、「主体的／客体的」という意味体系は、仮定法の法助動詞を解釈するさいに、どのような役割を果たしているのか。
(2)認知言語学的アプローチにおける「主体性/客体性」の概念は、仮定法の法助動詞の意味解釈をどう説明できるか。
(3)仮定法の法助動詞の意味解釈にとって、「認識的／根源的」という意味体系（すなわち、多義性）が重要な役割を果たすことが明らかになった場合、「単義性」分析は、このジレンマをどう解決できるか。「単義性」分析に内在する論理学的な意味規定は、法助動詞の多様な振る舞いをどう説明できるか。

本稿では、仮定的条件文の帰結節に現れる法助動詞couldに焦点を当てることによって、「モダリティは多義か単義か」という問いに対して、「モダリティは多義である」という解答を提出する。

(4) Philip Lombard said:
'Suicide, eh?'
'What do you say to that?'
Lombard said:
"It could have been --yes--if it hadn't been for Marston's death. Two suicides within twelve hours is a little too much to swallow...."
(A. Christie, And Then There Were None)（下線筆者）

(5) It is possible that it would have been suicide if it hadn't been for Marston's death.

(6)"...I think, though I can't be sure, it was on the little table near the window. The window was open. Somebody could have slipped a dose of the cyanide into the glass."
(A. Christie, And Then There Were None)（下線筆者）

(7) It would have been possible for somebody to slip a dose of the cyanide into the glass.

(8)あの時、誰か一人でも援護に回ってくれたなら、私は自信を持って花井と戦うことができたかもしれないのに。
（辻仁成『海峡の光』）（下線筆者）

(9)［［。あの時、誰か一人でも援護に回ってくれたなら、私は自信を持って花井と戦うことができた］かもしれない］のに。

1．仮定的条件文の帰結節における法助動詞の多義性

(10)a. If he worked hard, he could pass the exam.

b. If he had worked hard, he could have passed the exam.

(11)a. If he wanted to, he could pass the exam.

b. If he had wanted to, he could have passed the exam.

(Palmer 1990²:181)

(12)a. If he worked hard, he would be able to pass the exam.

b. If he had worked hard, he would have been able to pass the exam.

(13)a. It is posible that if he wanted to, he would pass the exam.

b. It is posible that if he had wanted to, he would have passed the exam.

(14) If the enemy attacked, the bridge could be blown up.

(Declerck and Reed 2001:235)

(15)If the enemy attacked, it would be possible for us to blow up the bridge.

(16)It is possbile that if the enemy attacked, the bridge would be blown up by them.

2．二つの「可能性」

(17)HYPO(POSSIBLE/ABLE)（=根源的可能性）

(18)POSSIBLE(HYPO)（=認識的可能性）

(19) The road can be blocked.（=理論的）

=It is possible for the road to be blocked.

=It is possible to block the road.

(20) The road may be blocked.（=現実的）

=It is possible that the road is blocked.

=Perhaps the road is blocked.

(21)The road can be blocked by police.（二人の警部の会話)(「その道路は封鎖可能だ。封鎖すれば犯人を捕まえることができる。」）

(22)The road may be blocked by police.（お客を待ち侘びている夫婦の会話）（「その道路は通れなくなっているのかもしれない。お客の到着が遅れているのはそのせいだ。」）

(Leech 1987²:81-82)

(23)

3．仮定的条件文の帰結節におけるモダリティの概念-統語構造

3．1．客体的な根源的モダリティ

(24) If you got a job in London, you could come to see us more often.

('it would be possible for...') (Leech 1987²:124)

(25) If you stepped aside, I could enter the lift.(='would be able to...')

(26) If you were a member of the board, you could attend these meetings.

(='would be allowed to ...')

(Declerck and Reed 2001:235)

(27)(i) 帰結節のAUX（＝助動詞）の中にはwillと抽象的な仮定法形態素SUBJが含まれている。

(ii) AUXの後のVPの中に根源的なCANが存在している。

(iii)このCANは、「主節のAUX（助動詞）の位置の外にある法助動詞をAUXの中に挿入せよ」という趣旨の「法助動詞挿入」(Modal Insertion)(MI)という操作によって、AUXの中のwillと置き換わる。

(iv)形態規則によって、can+SUBJ＝couldとなる。

(28)概念－統語構造:

[$_p$ [If the enemy attacked], [the bridge [[$_{AUX}$ will SUBJ] [CAN be blown up]]]]]

⇓ ↑

φ

(29) 客体的な根源的モダリティは仮想世界の状況を構成し得る。

3．2．主体的な認識的モダリティ

(30)(i) 帰結節のAUX（＝助動詞）の中にはwillと抽象的な仮定法形態素SUBJが含まれている。

(ii)認識的CANは命題内容ｐの前にある。

(iii)このCANはMIによってAUXの中に挿入され、willと置き換わる。

(iv) 形態規則によって、can+SUBJ＝couldとなる。

(31) 概念－統語構造:

CAN [$_p$ [If the enemy attacked], [the bridge [[$_{AUX}$ will SUBJ] [be blown up]]]]]

⇓ ↑

φ

(32) There's the doorbell. Who can it be? 'Well, it can't be your mother. She's in Edinburgh.' (Swan 1995^2:107)

(33) 'Where's Sarah?' 'She {could/may/might/*can} be at Joe's place.

(Swan 1995^2:107)

(34)認識的canは非確言的（non-assertive)なコンテクストでしか用いられない。

(35) 主体的な認識的モダリティは仮想世界の状況を構成し得ない。

(36)A: I wonder why Bill isn't here.

B: He could be still waiting for a bus.

(Thomson and Martinet 1986^4:132)

3．3．モダリティと仮想世界

(37)モダリティの仮想に関する一般化：

客体的な根源的モダリティは仮想世界の状況を構成し得るが、主体的な認識的モダリティは構成し得ない。

4．認知言語学的アプローチ

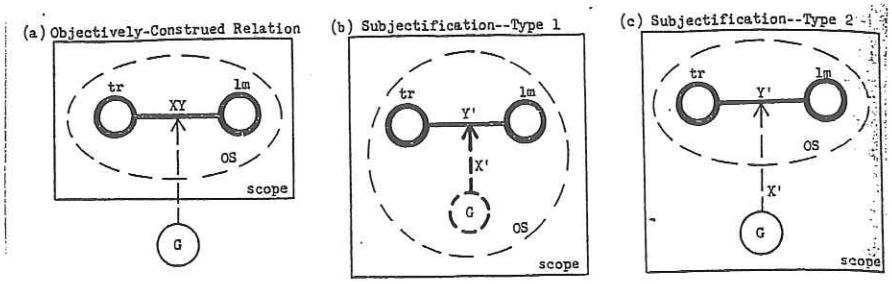
4．1．「グラウンド」(ground)とモダリティ

(38)(i) モダリティは「力」(force/potency)を表示している。

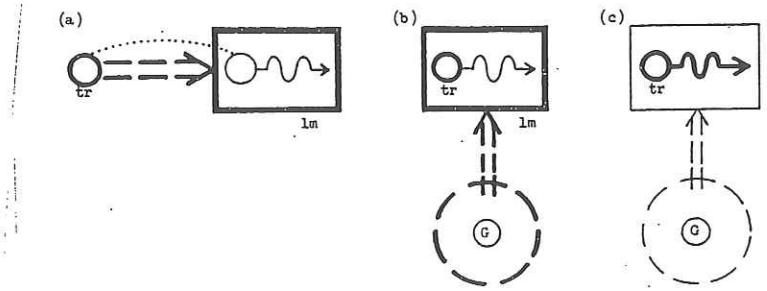
(ii) モダリティは主体的に（subjectively)にとらえられる(construed)。

(iii)モダリティは、客体的な状況（もしくは、事象）を「グラウンド」(G)に関係づける陳述、すなわち"grounding predication"である。

(39)



(40)



4．2．根源的モダリティ

(41)a. This noise must cease immediately!
b. You may leave the table now.
c. She really should phone her mother more often.
d. He absolutely will not agree to it.
e. Could you please pass the carrots?

(Langacker 1991a:272)

(42) a must b = X DEMAND Y - Y CAUSE - ab. (Tredidgo 1982:78)

(43)a. You must apologise at once! （＝話し手）
b. This door must be kept closed. （＝規則）
c. All cars must have a number-plates. （＝法律）
d. The verb must agree with its subject. （＝文法）
e. All men must die. （＝運命・神）

(Tredidgo 1982:79)

(44) 義務に関する視点の原理：
義務の表現において、mustの場合には、話し手の視点は義務を課す主体の側(=X)に置かれ、have toの場合には、義務を課される客体の側(=Y)に置かれている。（澤田 1999）

(45)a. (Office manager): Staff must be at their desks by 9:00.
b. In this office even the senior staff have to be at their desks by 9:00. (Thomson and Martinet 1986[4]:140)

(46)a. I can read Italian, but I can't speak it.
b. Anybody who wants to can join the club.

(47) She'll sit talking to herself for hours.

(Swan 1995[2])

(48)客体的モダリティは過去の意味になり得るが、主体的なモダリティは過去の意味になり得ない（澤田 1993:199)。

(49)

4．3．認識的モダリティ

(50)a. It must be lonely there at night.
b. There may be some snow by tomorrow evening.
c. That should be enough.
d. Umbrage will certainly be taken at those remarks.
e. Could she actually be older than my aunt?

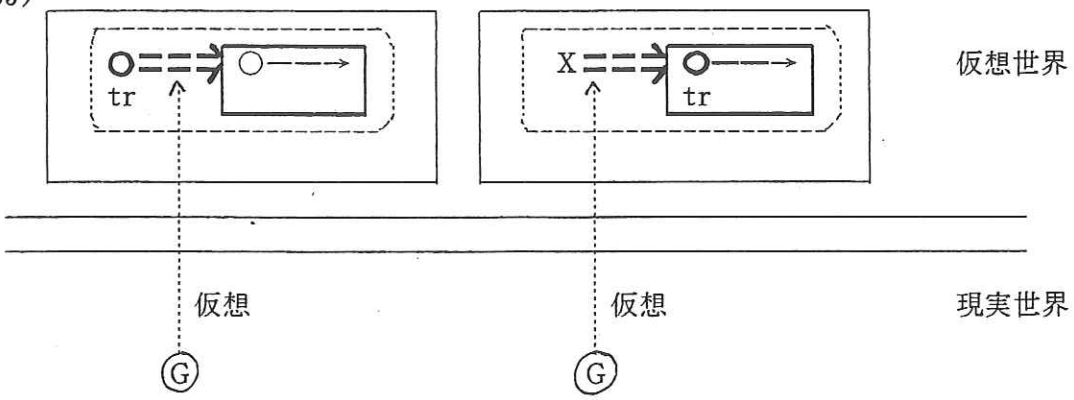
(Langacker 1991a:272)

4．4．認知言語学的一般化

(51)ある状況を仮想するということは、その状況を仮想世界に置き、"WILL+SUBJ"によって、その状況をグラウンド(G)と関係づけることである。

(52)客体的なモダリティはグラウンドと関係づけることができるが、主体的なモダリティはできない。それゆえ、客体的なモダリティを仮想することはできるが、主体的なモダリティを仮想することはできない。

(53)



(54)a. If he came to live with us, then she'd have to give up work.
(Coates 1983)
b. *If he came to live with us, then she'd have got to give up work.
c. *If he came to live with us, then she'd must give up work.

5．「単義性」分析によるアプローチ

5．1．Papafragou(2000)

(55)意味論的決定不十分性のテーゼ（The Semantic Underdeterminacy Thesis):
意味論的に符号化された法助動詞の意味内容（＝言われたこと）は、発話理解に

おいて法助動詞が受ける解釈（＝伝達されたこと）を大幅にしたまわっている
(Papafragou 2000:7)

(56) R(D, p)

(57) R
- 含意(entailment)
- 両立(compatibility)

(58) D
- 現実的(factual)
- 規制的(regulatory)
- 規範的(normative)
- 願望的(desirable)
- 信念(belief)

(59)can: p is compatible with $D_{factual}$.
may: p is compatible with $D_{unspecified}$.
must: p is entailed by $D_{unspecified}$.
should: p is entailed by $D_{normative}$.

(60) Mary <u>can</u> speak German.
(61) Mary <u>can</u> speak German at the meeting, because everybody will understand.

5．2．Papafragouによる「単義性」分析をめぐる幾つかの問題
(62)問題A:canにおける「能力」と「可能」の解釈の違いは、意味論のレベルで説明できるのではないか。
(63) can（＝能力）に関する時間的条件:
can（＝能力）の命題内容（＝事象／行為）は特定の時点を含んではならない。
(64)問題B:canに認識的意味は存在するのではないか。
(65)a. He {<u>may</u>/?<u>can</u>} have been joking when he said that.
b. Michael {<u>may</u>/?<u>can</u>} well get his degree next year.
(Papafragou 2000:77)
(66)The enemy that this Ratchet spoke of, he was then on the train after all? But where is he now? How <u>can</u> he have vanished into thin air?
(A. Christie, <u>Murder on the Orient Express</u>)(下線筆者)
(67)Vera dried:
'But that bee? It <u>can't</u> be coincidence?'
Lombard said grimly:
'Oh, no, it isn't coincidence!...'
(A. Christie, <u>And Then There Were None</u>)(下線筆者)
(68)(i) 認識的法助動詞は情報を求める類いの疑問文としては用いられない。
(ii)認識的法助動詞は否定の作用域に含まれない。
(69)A: He's a captain, so he must be in the Navy.
B: No, he <u>needn't</u> be in the Navy: he might be in the Army.
(Tregidgo 1982:83)
(70)a. If that's his name, he <u>can</u> only be Jewish.

b. He can hardly be happy if he's married to that bitch.
(Declerck 1991:408)

(71)You may not be given this opportunity again. (＝可能性)

(72)a. You may not enter. (＝許可) (Papafragou 2000:88)

b. You may [not go to the reception yet]. (許可) (Papafragou 2000:94)

(73)問題C:文否定の場合、根源的may (＝許可) と異なって、認識的may (＝可能性) は「モダリティ否定」とはなり得ないことをどのように説明できるか。

(74)認識的モダリティは、原則として、否定されることはない。

(75)問題D:二つの法助動詞 (たとえば、mustとshould) の領域 (たとえば、信念領域) が重なった場合、両者の意味の違いをどのように説明できるか。

(76) "It's just this, Miss Ackroyd. Parker here says you came out of your uncle's study at about a quarter to ten. Is that right?"

"Quite right. I had been to say good-night to him."

"And the time is correct?"

"Well, it must have been about then. I can't say exactly. It might have been later."

(A. Christie, The Murder of Roger Ackroyed)(下線筆者)

(77) Well, it {must/should} have been about then.

(78) Caroline pushed her spectacles up and looked at me.

"You seem very grumpy, James. It must be your liver. A blue pill, I think, tonight.

(A. Christie, The Murder of Roger Ackroyed)(下線筆者)

(79)It {must/*should/may/might} be your liver.

(80)夜が更けてきた。子供はもう寝てる{に違いない/はずだ}。

(81)あんなところで子供が泣いている。迷子になった{に違いない/*はずだ}。

(82)問題E:法助動詞における「力」、「視点」、「主体性／客体性」といった概念は「両立」や「含意」という論理的概念に還元できるのか。

(83) Armstrong said with a sudden cackle of laughter:

"A question of time -- time? We can't afford time! We shall all be dead..."

Mr Justice Wargrave said, and his small clear voice was heavy with passsionate determination:

"Not if we are careful. We must be careful..."

(A. Christie, And Then There Were None)(下線筆者)

6. 終わりに

(84)モダリティの仮想条件:

客体的なモダリティは仮想され得るが、主体的なモダリティは仮想され得ない。

(85)「主体的モダリティ不可侵性の原理」(Principle of the Inviolability of Sujective Modality):

主体的モダリティは、原則として、否定されず、仮想されず、過去の意味にもなり得ない。

(86)見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむのちぞ咲かまし

(『古今和歌集』68)

モダリティは、意味論 (とらえかたも含む) と語用論 (言語行為／ポライトネスなど) が統合されたものである。

引用文献

Coates, J. 1983. The Semantics of the Modal Auxiliaries. London:Croom Helm.

Declerck, R. 1991. A Comprehensive Descriptive Grammar of English. Tokyo: Kaitakucha.

Declerck, R. and S. Reed. 2001. Conditionals. Berlin: Mouton de Gruyter.

Halliday, M. 1970. "Functional Diversity in Language as Seen from a Consideration of Modality and Mood in English." Foundations of Language 6:322-361.

Langacker, R.W. 1987. Foundations of Cognitive Grammar, Vol.1, Theoretical Prerequites. Stanford University Press.

_____. 1991a. Foundations of Cognitive Grammar, Vol.2, Descriptive Application. Stanford University Press.

_____. 1991b. Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar. Berlin:Mouton de Gruyter.

_____. 1997. "Consciousness, Construal, and Subjectivity." In M.I. Stamenov ed., Language Strucutre, Discourse and the Access to Consciousness. Amsterdam:John Benjamins.

_____. 2000. Grammar and Conceptualization. Berlin:Mouton de Gruyter.

_____. 2002. "The Control Cycle:Why Grammar is a Marrer of Life and Death." 『日本認知言語学会論文集』第2巻、PP.193-220.

Leech, G.N. 19872. Meaning and the English Verb. London:Longman.

Leirbukt, O. 1997. "Dimensions of Epistemicity in English, German and Norwegian conditionals." In T.Swan and O.J.Westvik eds., Modality in Germanic Languages:Historical and Comparataive Perspectives. 49-73.Berlin:Mouton de Gruyter.

Palmer, F. 1990². Modality and the English Modals. London:Longman.

_____. 2001². Mood and Modality. Cambridge University Press.

Papafragou, A. 2000. Modality: Issues in the Semantics-Pragmatics Interface. Amsterdam:Elsevier.

澤田治美. 1993.『視点と主観性』. 東京: ひつじ書房

_____. 1999.「語用論と心的態度の接点」.『言語』28-6:58-63.

_____. 2001a.「法助動詞の意味を探る--認知意味論的・語用論的アプローチ」『言語』. Vol. 30, No. 2, (2001年2月号)65-72.

_____. 2001b.「認識のパタンと法助動詞の意味解釈(上/下)」『英語青年』. Vol.147, No. 3-4, 185-189, 225-229.

_____. 2002. 「時制と「仮定法」は別物ー仮定的条件文を中心としてー」. 『英語教育』第51巻第7号. PP.24-27.

Sawada, H. 1995. Studies in English and Japanese Auxiliaries: A Multi-stratal Approach. Hituji Shobo.

Swan, M. 1995². Practical English Usage. Oxford University Press.

Sweetser, E. 1990. From Etymology to Pragmatics. Cambridge: Cambridge University Press.

Talmy, L. 1988. "Force Dynamics in Language and Cognition." Cognitive Science 12:49-100.

Tredidgo, P.S. 1982. "MUST and MAY:Demand and Permission." Lingua 56:75-92.

Thomson, A.J. and A.V.Martinet. 1986⁴. A Practical English Grammar. Oxford University Press.

山梨正明. 2000.『認知言語学原理』. 東京:くろしろ出版.

研究発表・ワークショップ発表ハンドアウト(Program & Abstracts)執筆要項

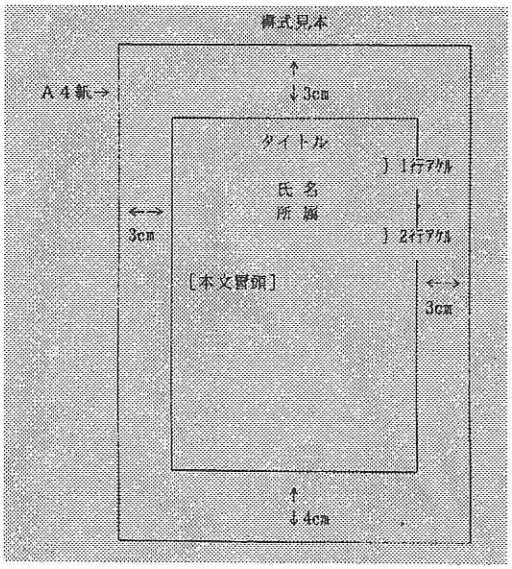
1. 原稿枚数：A4 横書き、研究発表の場合 8 枚以内（参考文献を含む）、ワークショップ発表の場合 4 枚以内（参考文献を含む）。
2. 書式：余白は上 30mm、下 40mm、左・右 30mm とする。原稿の 1 ページ目は、タイトル、氏名、所属を記し、それに本文を続ける。1 行字数、行数、段組などは自由。
3. 締め切り：毎年 10 月 31 日（水）必着。遅れますと掲載されないこともありますので、締め切り日を厳守して下さるようお願いいたします。
4. 送付先：〒573-1001 大阪府枚方市北片鉾町 16-1 関西外国語大学 澤田治美研究室「日本語用論学会事務局」宛（封筒の表に「研究発表（あるいはワークショップ発表）ハンドアウト在中」と朱書きのこと）℡ 072-856-1721（代表）
5. その他：原稿はそのまま写真印刷するので、鮮明に仕上がるように文字の大きさ、濃さには注意する。ページ番号は裏面に鉛筆で記す。ヘッダー、フッダーはつけない。
6. 参考文献は以下の様式に従うこと。

Grice, H.P. 1989. *Studies in the Way of Words.* Cambridge, Mass.: Harvard University Press.

Hopper, P.J. 1979. "Aspect and Foregrounding in Discourse." In T. Givón ed. *Syntax and Semantics 12: Discourse and Syntax*, 213-241. New York: Academic Press.

小泉　保. 1990. 『言外の言語学―日本語語用論―』東京：三省堂.

野崎　昭弘. 1995. 「言葉と言葉の間」『月刊言語』(2 月号) 62-69. 東京：大修館.



日本語用論学会規約

第１章　総則

第１条　本会は「日本語用論学会」(The Pragmatics Society of Japan)と称する。

第２条　本会は語用論ならびに関連分野の研究に寄与することを目的とする。

第３条　本会は次の事業を行う。

１．大会その他の研究集会の開催
２．機関誌の発行
３．その他必要な事業

第４条　本会は諸事業を推進するため運営委員会および事務局を置く。

第５条　運営委員会の承認を経て、支部を各地区に置くことができる。

第２章　会員

第６条　本会の会員は通常会員の１種類とする。

第７条　通常会員は、本会の趣旨に賛同し所定の手続きを経て本会に登録された個人および団体とする。

第８条　会員は諸種の会合および事業の通知を受け、事業に参加することができる。
また、所定の手続きを経て、研究集会で研究発表し、機関誌に投稿することができる。

第３章　役員

第９条　　本会に次の役員を置く。

会長	１名
事務局長	１名
運営委員	若干名
会計監査委員	１名

また、顧問を置くことがある。

第１０条　会長および事務局長は、運営委員の推薦によるものとする。

第１１条　運営委員は会員より選出するものとする。任期は２年とし、再選を妨げない。

第１２条　運営委員は会長、事務局長を加えて運営委員会を構成する。その任務・権限等は次の通りとする。

１．研究集会にかかわる事項の決定
２．予算および収支決算の承認
３．機関誌の編集・発行にかかわる事項の決定
４．会計、庶務、渉外の事務
５．その他運営委員が必要と認めたもの。

第１３条　本会の規約の変更は、運営委員会の発議により、会員総会で承認を得る。

第１４条　会計監査委員は会員の中から選出する。任期は２年とし、１期に限る。

第４章　会議

第１５条　定例会員総会は、年に１回会長がこれを招集する。また、必要な場合、臨時会員総会を招集することができる。

第１６条　定例運営委員会は、必要に応じて、年に１回以上招集される。

第５章　会計

第１７条　本会の運営経費は会費、寄付金等を以てこれに当てる。

第１８条　運営委員会は、予算案および収支決算書を作成する。予算案および収支決算書は会計監査委員の監査を経て、会員総会で承認を得る。

第１９条　本会の会計年度は、毎年４月１日に始まり、翌年３月３１日に終わる。

第６章　事務局

第２０条　事務局を事務局長もしくは運営委員の所属する大学に置く。

第２１条　事務局は会費の徴収、会場の手配、会員に対しての連絡などをとり行う。

日本語用論学会第５回(2002年度)大会
PROGRAM & ABSTRACTS

2002年12月７日発行
編集発行　日本語用論学会
代表者　　小泉保
発行者　　日本語用論学会
〒573-1001
大阪府枚方市中宮東之町16番1号
関西外国語大学外国語学部　澤田治美　研究室内
Tel:　０７２-８０５-２８０１
Fax:　０７２-８０５-２８９０
印刷　（株）河北印刷　(075－691－5121)